ベストプレープロ野球 データ作成講座

1999～2000

市丸博司＆レイヤード編著

BEST PLAY PROFESSIONAL BASEBALL

ベストプレープロ野球

データ作成講座

1999~2000

BEST PLAY PROFESSIONAL BASEBALL

ベストプレープロ野球 1999~2000

データ作成講座

CONTENTS

「ベストプレープロ野球」で徹底的に遊ぶ

ベスプレは、さまざまな遊び方ができるゲームである。
「弱い」ひいきの球団を、なんとか監督の腕一つで優勝まで導く。
スキップモードを多用して、わずか十数分でリーグ戦終盤まで持っていき、
そこから好きな球団の監督になって優勝を狙う。
COMモードで６試合を同時並行的に進めながら、ともかく観戦に徹する…、
などなど。１人で遊ぶやり方だけでも、無数の方法がある。

人数が増えれば、さらに遊び方は多彩になる。
２人ならインターネット対戦があるし、
３人以上集まったら架空チームを作ってリーグ戦をやるもよし、
本格的にドラフトを行って好きな選手を獲得し、
チームを補強して勝負するのもいい。

この本は、ベスプレで「遊ぶ」ことを主眼において作られている。
この際、あなたのベスプレを
「こんなことができるのか」というところまで、高めてほしいものである。

デフォルトデータを最近のデータに変えて遊ぼう

データをいじる。ベスプレにおいて、最も基本的な楽しみの一つである。ご存知のように、ベスプレにはデータ上の制約がない。極端なことをいえば、全選手のパラメータを極限まで上げたスーパーチームを作ることだってできる。全選手のパラメータを下げて、草野球みたいなチームを作ることも可能だ。

「面白ければ、何をやっても許される」

それがベスプレ道なのである。

ただし、極端なことをやって楽しいと思えるのは、せいぜい1、2度であろう。普通は、せっかく入っているプロ野球チームのデータを「いかに正しいデータにするか」を中心において考えるはずだ。いかんせん、ベスプレのデータは98年終了時のもの。最新のデータで遊びたいというのは、誰もが考えることだろう。

99年は、98年シーズンとはがらりと変わった。松坂、上原と新人選手が活躍したし、セ・リーグでは、もともと力は認められていたものの、中日が大躍進。パ・リーグでは、投手陣を一新したダイエーが、打線もかみ合って快進撃を見せている。やはり、時々刻々とデータは変動するものなのだ。ここで問題となるのが、「どうやってベスプレの新しいパラメータをつくるか」ということになる。最新データの作り方。簡単なようで、意外に難しいテーマである。

そこで、この本では、「最も新しく正しいデータの作り方」に多くのページ数を割いた。最新のデータを作成するためには、現実のプロ野球におけるどんなデータを参考にすればよいかをじっくり考えた。そして、「プロ野球クラシフィケーション」の考え方を導入。139ページ以降では、球団別に99年の最新パラメータを事実に基づいて忠実に再現した。

このパラメータは、パリティビット及びアスキーの公認も得ている。まずは、あなたがお持ちのベスプレのデータを、このデータに変更していただきたい。恐らくは、99年のプロ野球に非常に近いリーグ戦が楽しめることであろう。

ただし、99年に突然レギュラーになった野手や、先発ローテーション入りした投手については、さまざまな理由により実名を出していない。一応、「こんな選手がほしい」というコラムで対応したので、どの選手が誰なのか、類推してほしいと思う。

なお、この本に掲載したパラメータに納得がいかないところがあれば、パラメータを変更するもよし、最新のプロ野球データを入手して、イチからデータ作成し直すのもいい。やはり、最終的な遊び方は、あなた次第ということだろう。

ベストプレープロ野球

ファイル(F) リーグデータ(L) チームデータ(T) 成績(R) 日程(S) 試合(G) ウィンドウ(W) ヘルプ(H)

読売ジャイアンツ 投手データ

PITCHER DATA

		投法	タイプ	球速	切れ	制球	安定	球質	技術	スタミナ	回復	スタミナ指数
先	桑田	R	C	140	B	B	B	C	A	B	22	200
先	斎藤雅	Rs	A+	138	A	B	B	B	B	C	22	200
先	ガルベス	R	C	142	B	B	C	B	B	B	24	200
先	趙	R	B+	148	B	D	B	A	D	B	22	200
先	入来祐	R	B	144	A	C	C	C	C	C	26	200
先	岡島	L	A	140	C	D	D	C	D	C	24	200
中	小野	L	A	142	B	E	D	C	E	C	24	200
中	三沢	R	C	138	C	D	C	C	B	C	28	200
中	岡田	R	C	138	C	C	B	C	C	D	26	200
中	平松	L	A+	140	C	D	D	C	D	D	26	200
抑	西山	R	B+	146	B	C	C	B	D	D	26	200
抑	槙原	R	C	142	B	C	B	D	B	C	22	200

リザーブ 投手データ

PITCHER DATA

		投法	タイプ	球速	切れ	制球	安定	球質	技術	スタミナ	回復	スタミナ指数
控	バルデス	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
控	今中	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
控	岩瀬	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
控	上原	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
控	宇高	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
控	遠藤	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
控	岡林	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
控	小山田	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
控	川越	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
控	木村	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
控	河野	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
控	小林雅	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?

これは、リザーブ選手の上原を巨人の投手と替えようとしているところ。リザーブ選手との入れ替えは、デフォルトデータを変更する場合、最初にやる必要のある作業である。

阪神タイガース 野手データ

BATTER DATA

		打席	タイプ	守備力 捕	1	2	3	遊	外	肩	足	眼	実績	スタミナ	巧打	長打	信頼	対左	打撃指数
9	坪井	L	S	－	－	－	－	－	C	B	B	C	C	C	B	D	0	-1	330
6	今岡	R	S	－	－	C	D	C	－	B	B	C	D	C	B	D	0	0	290
5	ハンセン	L	P	－	D	－	C	－	－	C	D	D	B	C	D	C	0	-2	270
3	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	C	－	－	－	E	D	E	E	B	B	E	A	0	-2	250
7	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	－	－	－	－	C	C	D	E	C	B	D	B	+1	-1	240
4	和田	R	S	－	－	B	C	－	－	C	D	B	A	C	A	D	+1	0	280
8	新庄	R	P	－	－	－	－	－	A	S	C	D	C	A	E	B	-1	+1	240
2	矢野輝	R	P	C	－	－	－	－	－	C	C	C	C	C	C	D	0	0	250
控	平塚	R	S	－	D	－	－	－	D	D	D	C	C	C	D	C	0	+1	280
控	山田	R	P	C	－	－	－	－	－	D	D	D	D	C	C	D	0	0	240
控	風岡	R	S	－	－	B	C	C	－	C	D	D	E	C	C	E	0	0	230
控	星野	L	S	－	－	C	C	C	－	C	C	D	D	C	C	E	0	-2	240
控	平尾	R	P	－	－	C	C	C	－	B	B	D	E	C	C	D	0	0	230
控	本西	R	S	－	－	－	－	－	A	C	C	D	C	D	C	E	0	+1	240
控	濱中	R	P	－	－	－	－	－	C	B	C	D	E	D	D	C	0	0	260
控	八木	R	P	－	D	－	－	－	D	D	D	C	B	D	D	C	+1	+1	280

ハンセン

これは、デフォルトデータの選手名を変更しようとしているところ。ベスプレでは、さまざまな変更が自由自在にできる。それこそが魅力のひとつともなっている。

ルールを決めて6人でリーグ戦

6人(または12人)集まってベスプレ。これ、実は最も楽しい遊び方かもしれない。

遊び方にはいろいろあるが、基本は、一定のルールを決めて、6人がそれぞれ自分のチームを作成し、それを持ち寄ってCOMまたはSKPモードで対戦させる方法か。ギャラリーがいたほうが盛り上がるから、本来であれば6人全員が一ヶ所に集まって実際にゲームを見るのが楽しい。

しかし、特にそんなことをしなくても、メールでデータを交換して、6人全員がそれぞれこのデータでプレイしてみて、結果を持ち寄る方法もある。

誰か幹事を決めて、幹事が試合結果のテキストデータを全員にメール配付する方法も面白い(幹事は大変だけれど)。なお、試合結果をテキスト変換するツールは、パリティビットのホームページ(http://www.paritybit.co.jp)でダウンロードできるから、これを使うといい。

さて、このとき最大の問題になるのが、データ作成上でのルールである。できれば、ルールは全員が納得することが望ましい。一応、別表に「アスキー規定」と呼ばれるルールを掲載した。ただし、これは、ファミコン時代のものであり、まだまだ改良の余地もあろう。もっと簡単なルールにしたり、さらに踏み込んだルールにしたり、といった試行錯誤をやってみてほしい。

アスキー規定

【パラメータ】S、A～Eで設定されるパラメータは、S＝6点、A＝5点、B＝4点、C＝3点、D＝2点、E＝1点として、各能力値を割り振る。

【能力の振分規定】下表のとおり

項目	規定
打席	R、Lは自由。Bは3人まで。
投法	自由。
タイプ	打者、投手とも自由。
守備	S、Aは合計3個以下。*は67個以下。野手全員の守備力の合計は84点以下。
信頼度	チーム全体で合計±0。信頼度0が8人以上。信頼度−2の選手は、足、巧打、長打のいずれか1つ以上がB以上。
対左	左打者は−1以下。1人以上は−2。スイッチヒッターは必ず0。＋4を右打者に自由に振り分けることが出来る。
能力値	S、Aは合計で14個以下。Eは27個以下。
肩、選球、巧打、球質、技術	各項目の合計が210点以下。
足、長打、切れ、制球、安定	各項目の合計が195点以下。
実績、スタミナ(打者、投手とも)	各項目の合計が129点以下。
打撃指数	合計が4320点＋左打者の数×10点(例えば、左打者が6人のチームなら、合計が4380点以下)。230～340の範囲。300以上は3人以下。
球速、回復	合計が1800点。球速は128～152。回復は20～28の範囲。
監督	監督データは全て自由。

リーグデータ

LEAGUE DATA

リーグ		チーム	監督	モード
Jゴール リーグ	R	浦和レッド	市丸	MAN
	A	鹿嶋アント	浅田	MAN
	C	コンサ札幌	岡部	MAN
	V	ヴェルド川崎	蛯名	MAN
DH制 なし	M	横浜マリノ	谷川	MAN
延長回 18	S	サンフレ広島	生田	MAN

リーグ		チーム	監督	モード
Nシュート リーグ	M	マイアミ	後藤	MAN
	I	インディアナ	吉田	MAN
	Y	ユタ	堀	MAN
	C	シカゴ	藤田	MAN
DH制 あり	H	ヒューストン	河内	MAN
延長回 15	L	ロサンゼルス	松永	MAN

ルールを決めて6人（または12人）でリーグ戦、というときは、チーム名や監督名もどんどん替えよう。そのほうが楽しくなる。

公式戦 N vs W

GAME RESULT

1回戦　永田町　1敗　　横浜スタジアム

	計	1	2	3	4	5	6	7	8	9
ワシントン	3	1	0	1	0	0	0	0	1	0
永田町	2	1	0	0	0	0	1	0	0	0

ワシントン	打率	本	1	2	3	4	5	6	7	8	9
レーガン	.250		中2	……	遊失	……	三ゴ	……	……	一ゴ	……
クリントン	.250		遊ゴ	……	二ゴ	……	三ゴ	……	……	左2	……
ルーズベルト	1.000		中安	……	中安	……	……	中安	……	右安	……
ケネディ	.000		一併	……	遊ゴ	……	……	二併	……	二併	……
ニクソン	.000		……	中飛	……	三振	……	一ゴ	……	……	二ゴ
ワシントン	.250		……	右安	……	三ゴ	……	……	三ゴ	……	遊ゴ
ブッシュ	.000		……	三振	……	投ゴ	……	……	三振	……	三振
クリーブラン	.333		……	遊飛	……	……	三振	……	左2	……	……
カーター	.333		……	……	遊ゴ	……	左2	……	中飛	……	……

永田町	打率	本	1	2	3	4	5	6	7	8	9
小　渕	.667		右2	……	左安	……	……	四球	……	遊飛	……
中曽根	.000		一ゴ	……	二直	……	……	一ギ	……	二飛	……
竹　下	.500		右安	……	……	投ゴ	……	右安	……	……	三振
小　沢	.500		二ゴ	……	……	中安	……	遊併	……	……	左安
菅	.000		三振	……	……	三振	……	……	中飛	……	中飛
宮　沢	.000		……	三振	……	二ゴ	……	……	一ゴ	……	右飛
羽　田	.500		……	三振	……	……	左安	……	四球	……	……
土　井	.000		……	投ゴ	……	……	三振	……	遊飛	……	……
小　泉	.000		……	……	二ゴ	……	二直	……	……	……	……

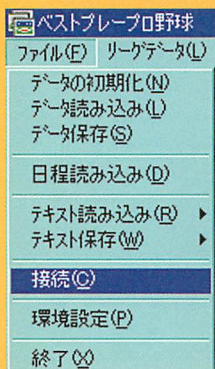
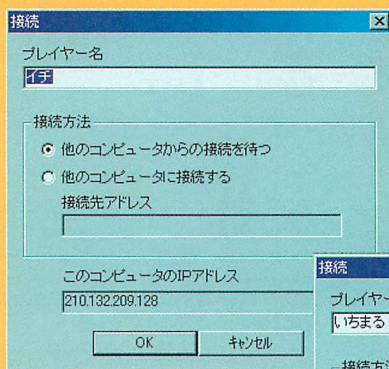
もちろん、選手名も実在の選手以外の名前を使うほうが面白い。いろいろ工夫すれば、普通では考えられないような試合もできる。

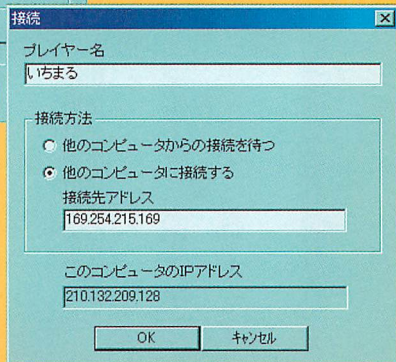
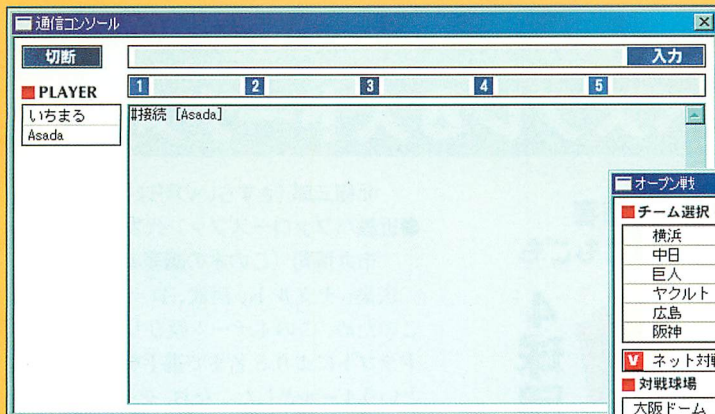
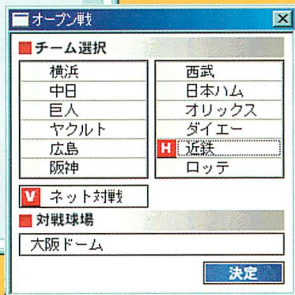
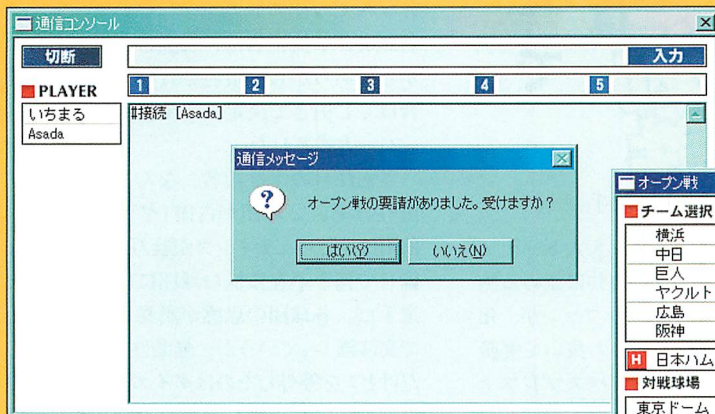
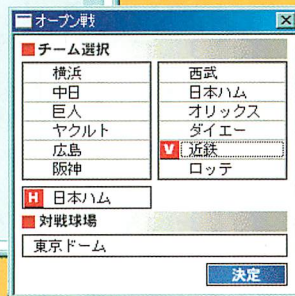
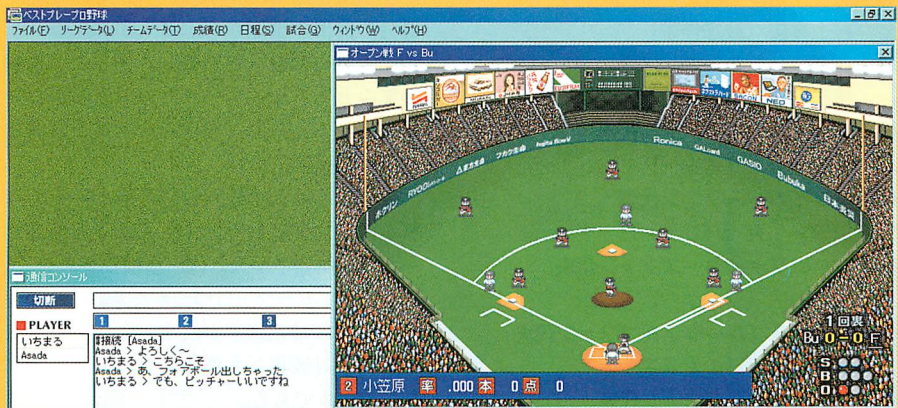
インターネットで対戦しよう

インターネット対戦は、すでに試されたであろうか。もし、まだやっていない、ということなら、ぜひやってみてほしい。相手がいない、などという場合だって、心配は要らない。インターネットのベスプレ関係のホームページを見つけて、掲示板・チャットなどで同じように対戦相手を探している人にメールすれば、すぐにでも対戦は可能である。

１人でやるのと２人でやるのでは、ベスプレの面白さは全く違うと言ってもいい。特に、ランナーが出たときの駆け引き。バント、盗塁、スクイズ、ウエスト（敬遠）、打者警戒、走者警戒、そして投手交代、代打などなど。対コンピュータとは臨場感が一味違うのである。

やり方も、そんなに難しくない。別表にまとめておいたので、この通りにやるだけだ。ただし、デフォルトデータでそのままやるのでは芸がない。前ページのように、あらかじめルールを決めてチームを作っておき、対戦したほうが白熱するだろう。

なお、同時にチャットもできるから、キーボードに慣れた人は、チャットをやるのもいいだろう。ゲームをしていない第３者もチャットに入れるが、試合観戦はできないことに注意。

インターネットに接続したあと、まず、このように「接続」を選ぶ。

このような画面になる。まずプレイヤーの名前を好きなように入れる。ここで、表示されたＩＰアドレスをメールで相手に伝え、そのまま待機する方法が「方法１」だ。

相手から聞いたＩＰアドレスを入力し、こちらから接続するのが、「方法２」である。

「試合」メニューから「オープン戦」を選ぶとこの画面になる。ここで、「ネット対戦」とチーム名をクリックする。先にクリックしたほうがホーム球場である。

方法１では、すぐにこの画面になる。「＃接続」と表示されたら接続完了。
方法２では、接続完了した段階でこの画面が出る。

「はい」を押すと、チーム名を選択する画面となる。チーム名を選択すると、試合が始まる。

相手側が先にホームを選ぶと、このように「オープン戦の要請がありました。
受けますか？」と表示される。

試合の模様。チャットしながらやると楽しい。

実録・ベスプレ８人トーナメント

やってきました、ベスプレ８人トーナメント大会。この大会は、自他共に認める熱狂的プロ野球ファン＆ベスプレファンが、死力を尽くして対戦プレイで勝ち抜いて優勝を狙うという、平たく言えばベスプレファンの遊び方の提案のひとつ。以下のメンバーにより開催された。

●横浜ベイスターズファン代表
　村上卓史（放送作家）
●中日ドラゴンズファン代表
　薗部博之（ベスプレ制作者）
●読売ジャイアンツファン代表
　谷川善久（ライター）
●阪神タイガースファン代表
　須田ＰＩＮ（パリティビット）
●日本ハムファイターズファン代表
　浅田知広（ライター）
●オリックスブルーウェーブファン代表
　美浦栗子（謎の女子高生）
●ダイエーホークスファン代表
　北極三郎（さすらいの野球ゲーム評論家）
●近鉄バファローズファン代表
　市丸博司（この本の編著者）

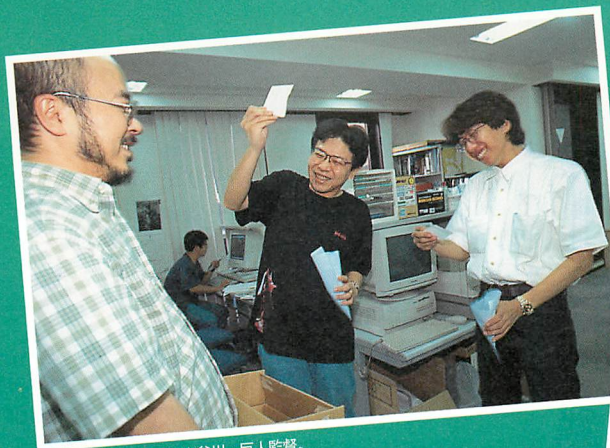
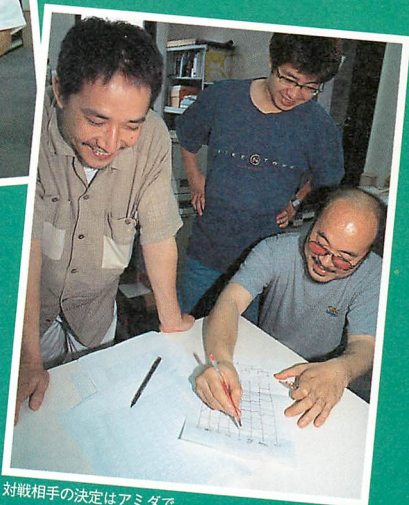
広島、ヤクルト、西武、ロッテは不参加。このため、この４チーム及びリザーブから、ドラフトにより５名まで選手を補強できる、というルールとした。なお、データはすべて、デフォルトのままいじらないものとする。

まず、参加者が自チームに不要な選手を各５人ずつリストアップ。その後、１位指名および２位指名は、現実のドラフトさながらにあらかじめ指名を行い、競合した場合はくじ引きで決定。３位指名以下はウェーバー方式とした。

さあ注目の１位指名。なんと３球団が前田（広）を、２球団が古田（ヤ）を指名する。前田は足とバッティングが魅力。古田は、守備Ｓで捕手不在に悩む球団にはぜひ必要な選手だ。各球団の思惑が渦巻く。競合なしで交渉権（っていうか、無条件トレードなんだけど）を獲得したのはダイエーが指名した松井（西）、横浜指名の江藤（広）、そして阪神指名の石井一（ヤ）である。

まずは、中日、オリックス、近鉄３球団競合の前田の抽選から。３人がダンボール箱に入れられたくじを引く。そして、満面の笑みとともに手を挙げたのは、なんと近鉄だった。うーん、やはりホンモノと同じで近鉄は抽選に強い。

続いて古田の抽選。「交渉権獲得」という紙を頭上に挙げたのは、巨人だ！　あのチームに古田選手が入れば…会場がざわめく。

こうしてドラフトはつつがなく終わり、別表のように補強選手が決まった。アミダくじにより対戦相手も決まって、いよいよプレーボールである。

見事、古田を引き当てた谷川・巨人監督。

対戦相手の決定はアミダで。

【全８チームのドラフト獲得選手】

横浜	
1位	江藤（広）
2位	川崎（ヤ）
3位	ミンチー（広）
4位	飯田（ヤ）
5位	池山（ヤ）

中日	
1位	緒方（広）
2位	西口（西）
3位	小林幹（広）
4位	初芝（ロ）
5位	藤田（ロ）

巨人	
1位	古田（ヤ）
2位	小坂（ロ）
3位	伊藤智（ヤ）
4位	今中（R）
5位	堀（ロ）

阪神	
1位	石井一（ヤ）
2位	伊東（西）
3位	土橋（ヤ）
4位	マルチネス（西）
5位	大友（西）

日本ハム	
1位	フランコ（ロ）
2位	橋本（西）
3位	河本（ロ）
4位	真中（ヤ）
5位	阿波野（横浜放出）

オリックス	
1位	黒木（ロ）
2位	金本（広）
3位	高津（ヤ）
4位	高木大（西）
5位	稲葉（ヤ）

ダイエー	
1位	松井（西）
2位	森（西）
3位	小関（西）
4位	平井（ロ）
5位	石井（西）

近鉄	
1位	前田（広）
2位	松坂（R）
3位	小宮山（広）
4位	清水（西）
5位	野村（広）

※Rはリザーブ選手

1回戦好カード

山崎、劇的な9回同点弾

中日×巨人は2戦して譲らず

山崎同点弾でニコニコの薗部・中日監督

1回戦第1試合は、近鉄－日本ハム。近鉄が3、4回に集中打で5点を奪い、先発小宮山（補強）の好投もあって6－3で快勝した。日本ハムは、ドラフト1位で取ったフランコが、外国人打者2人枠に引っかかって使えなかったのが響いてしまった。ブルックス、ウィルソンよりフランコ、という気もしたが…。

第2試合は、オリックスーダイエー。先発武田の不調でリードを奪われたダイエーは、7回裏にロペス、吉永のタイムリーで6－5と1点差とする。しかし、オリックスは高津（補強）の好リリーフで後続を抑え、9回ニールの本塁打も効いて7－5で逃げ切った。

そして第3試合の巨人－中日。これがもつれた。松井と古田（補強）のタイムリーで3点を奪った巨人は、先発ガルベスが好投。9回裏も2死無走者で、完封かと思われた。しかし、中日はゴメスと立浪が粘って連続安打。さらに次打者・山崎がなんとなんと、起死回生の同点3ラン。奇跡的に引き分け、再試合となる。薗部が再三つぶやいていた「このままじゃ終わらん」の声が本当になった。満面に笑みをたたえる薗部、「交替も考えたが」と渋い表情の谷川。好対照の幕切れだった。

再試合は、両軍控え選手をどんどんつぎ込む総力戦。巨人が古田のタイムリーと2ランで3点をリードするが、中日は山崎の犠飛、代打・初芝（補強）の2点タイムリーで同点に追いつく。その後は先発山本昌から川上、サムソン、藤田（補強）、宣とつないだ中日、先発斎藤雅から伊東智、今中とつないだ巨人が全く譲らず、またも引き分けた。

勝敗は、規定によりコイントスで決定。オモテを選択した薗部・中日の勝利となる。

第4試合は横浜－阪神戦。これは1点を争う好ゲームとなったが、阪神が2－1とリードして迎えた7回表・横浜の攻撃が明暗を分けた。阪神の先発・石井一（補強）は6回まで11三振を奪う力投を見せていたが、この回突然崩れ、3四球で1死満塁。ここで横浜が代打・畠山を告げると、阪神は葛西にスイッチ。横浜は代打の代打・駒田だ。満塁男・駒田は期待に応えて同点タイムリー。さらに替わった吉田豊から石井琢の内野安打で逆転し、最後は佐々木が締めて3－2で勝った。

オープン戦 D vs G

GAME RESULT

オープン戦　ナゴヤドーム

	計	1	2	3	4	5	6	7	8	9
巨人	3	0	0	2	0	0	0	0	1	0
中日	3	0	0	0	0	0	0	0	0	3

巨人	打率	本	1	2	3	4	5	6	7	8	9
小坂	----		三振		四球		中安		三振		ニゴ
元木	----		右飛		投ギ		左飛		遊ゴ		
松井	----		中飛		右安		ニゴ			遊ゴ	
石井	----			左2	遊ゴ			左飛		三ゴ	
高橋	----			ニゴ	ニゴ			ニゴ		中安	
古田	----			右飛		三振		四球		右2	
清水	----			四球		中飛		三振		一直	
仁志	----			三振		三振					
堀	----								遊安		遊ゴ
ガルベス	----				四球		三振		投ギ		三振

中日	打率	本	1	2	3	4	5	6	7	8	9
李	----		二飛		遊併			ニゴ		三ゴ	
緒方	----		左2		二飛			遊ゴ			ニゴ
関川	----		中飛			遊ゴ		三振			左飛
ゴメス	----		遊ゴ			中2			一ゴ		中安
立浪	----			三ゴ		ニゴ			三振		右安
山崎	----			中安		左飛			左飛		左本
井上	----			遊飛			ニゴ			三振	中飛
中村	----				左安		三ゴ			左飛	
愛甲	----				左安						
益田	----						三振				
初芝	----									中2	

投手成績		勝	敗	S	試	回数	球数	安	振	四	責	防御率
ガルベス	R	0	0	0	0	9	130	9	4	0	3	-----
サムソン	L	0	0	0	0	2	42	1	2	2	1	-----
前田	L	0	0	0	0	⅔	6	0	0	1	1	-----
小林幹	R	0	0	0	0	1	14	1	0	0	0	-----
落合	R	0	0	0	0	2	37	1	3	0	0	-----
西口	R	0	0	0	0	3	52	3	2	1	1	-----
藤田	L	0	0	0	0	1	7	0	1	0	0	-----

オープン戦 G vs D

GAME RESULT

オープン戦　東京ドーム

	計	1	2	3	4	5	6	7	8	9
中日	3	0	0	0	0	1	2	0	0	0
巨人	3	0	1	0	2	0	0	0	0	0

中日	打率	本	1	2	3	4	5	6	7	8	9
李	----		中飛			三振		三振		左飛	
緒方	----		遊直			三振		右2		三振	
関川	----		一ゴ			ニゴ		右飛		三ゴ	
ゴメス	----			遊ゴ			中安	敬遠			左飛
立浪	----			一ゴ			右安				
初芝	----							左安			
種田	----										遊ゴ
山崎	----			三振			左ギ	三振			三振
井上	----				三振		一ゴ		右飛		
中村	----				中飛		三ゴ		三振		
山本昌	----				一ゴ						
益田	----							遊安			
川上	----								三振		

巨人	打率	本	1	2	3	4	5	6	7	8	9
小坂	----		三振	ニゴ		ニゴ			遊ゴ		三振
仁志	----		中2		ニゴ		ニゴ		ニゴ		
石井	----										三ゴ
松井	----		遊ゴ		ニゴ		左飛		中飛		
清原	----		三振		投ゴ		死球			中安	
高橋	----			中安		中2	遊ゴ			三振	
古田	----			左2		左本		一ゴ		右安	
清水	----			四球		遊ゴ		ニゴ			
川相	----									敬遠	
元木	----			三振		四球		中2		三併	
斎藤雅	----			一ゴ		三振					
吉村禎	----							遊ゴ			
堀	----										中飛

投手成績		勝	敗	S	試	回数	球数	安	振	四	責	防御率
山本昌	L	0	0	0	0	5	71	5	4	3	3	-----
川上	R	0	0	0	0	2⅓	35	3	1	0	0	-----
サムソン	L	0	0	0	0	⅔	0	0	0	0	0	-----
藤田	L	0	0	0	0	1⅓	13	0	1	1	0	-----
宣	R	0	0	0	0	⅓	3	0	0	0	0	-----
斎藤雅	R	0	0	0	0	5⅔	99	5	5	1	3	-----
伊藤	R	0	0	0	0	⅓	4	0	1	0	0	-----
今中	L	0	0	0	0	3	36	0	4	0	0	-----

オープン戦 T vs YB

GAME RESULT

	計	1	2	3	4	5	6	7	8	9
横浜	3	0	1	0	0	0	0	2	0	0
阪神	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0

横浜	打率	本	1	2	3	4	5	6	7	8	9
飯田	----		三振		一ゴ		一ゴ		一ゴ		遊ゴ
石井琢	----		捕邪		中安			三振	遊安		
鈴木尚	----		三振		三振			三振	中飛		
ローズ	----			中本	三振			投ゴ		左安	
江藤	----			三振		三振			四球	三併	
池山	----			四球		投ゴ			四球		
野村	----									中安	
波留	----			左2		三振			投ギ	三振	
谷繁	----			敬遠			三振		四球		三振
川崎	----			三振							
中根	----						左安				
駒田	----								中安		三振

阪神	打率	本	1	2	3	4	5	6	7	8	9
坪井	----		遊ゴ	右2			ニゴ		中飛		
今岡	----		遊失	中飛			左飛			一ゴ	
土橋	----		右安		右安		中飛			投ゴ	
マルチネス	----		中安		中安			二直		三振	
和田	----		三振		遊併			一ゴ			左飛
大友	----		右飛		ニゴ			遊ゴ			ニゴ
伊東	----			左安		ニゴ			右安		
平塚	----										一直
新庄	----			三ゴ		中飛			一ギ		
石井一	----			一ギ		三振					
八木	----								三振		

投手成績		勝	敗	S	試	回数	球数	安	振	四	責	防御率
川崎	R	0	0	0	0	4	59	6	2	0	1	-----
○三浦	R	0	0	0	0	2	13	0	0	0	0	-----
斎藤隆	R	0	0	0	0	⅓	7	1	0	0	0	-----
野村	L	0	0	0	0	1⅔	23	0	2	0	0	-----
S佐々木	R	0	0	0	0	1	10	0	0	0	0	-----
●石井一	L	0	0	0	0	6⅓	122	4	11	5	3	-----
葛西	R	0	0	0	0	⅔	2	1	0	0	0	-----
吉田豊	L	0	0	0	0	⅔	15	1	0	0	0	-----
リベラ	R	0	0	0	0	2	24	2	3	0	0	-----

巨人ー中日は、２戦して全く互角。ついにはコイントスで勝者が決められた。

横浜ー阪神戦も好ゲーム。横浜の好継投で阪神打線が沈黙したのが、最後に響いた。

準決勝第1試合はオリックス－近鉄。オリックスの打線が爆発し、8回表までで6－1とリード。近鉄は小刻みな投手リレーで防戦一方となる。しかし、8回裏に4安打を集めて2点を取ると、9回裏に高津からクラークが2ラン。近鉄は1点差に詰め寄る。さらに、四球で出たローズが盗塁と内野ゴロで3塁に進んだところで、なんと吉岡がスクイズ！　「せこい！」「そこまでして引き分けたいか！」などの怒号が渦巻く中、首尾よく再試合にもつれ込んだ。

再試合は打撃戦となったが、5－5で迎えた7回裏、近鉄は2死満塁で替わった豊田からクラークが押し出しの四球を選び、さらに鈴木平からローズが内野安打。3イニングを無失点で抑えた松坂の好投もあり、7－5で競り勝った。なお、この試合でも近鉄は序盤にスクイズをして顰蹙を買っている。

準決勝第2試合は横浜－中日。これが好試合になった。3回裏に緒方（補強）の2ランで中日が先制すると、5回代打中根、7回谷繁のソロで横浜が追いつく。そして9回表、延長がないため中日は宣を投入するが、先頭のローズに痛恨の一発を浴びてしまう。こうなると、横浜はもちろん佐々木。簡単に2死を取り、もはやこれまでかと思われた。ところが、このシリーズの中日にはドラマがある。ゴメスがヒットを放つと、完全に「9回裏の男」となった山崎が右中間へ2塁打。ゴメスが1塁から長駆ホームを突く。クロスプレーだ。判定は？　アウト！　残念。惜しくも中日は敗れ去ったのだった。

そして、そのとき。「でもさー、ゴメスには普通代走じゃない？」という声が上がる。

中日・蘭部監督「あ、そうか」。

会場は笑いの渦に。そりゃそうだ。延長がないんだから、足の速いランナーに替えるに越したことはない。教訓。制作者といえども、セオリーを無視したら負ける。それがベスプレなのである。

これだけ白熱したトーナメントだったが、決勝は大差がついた。先発に連投の松坂という奇策を用いた近鉄。松坂は3回までは1失点と好投したが、4回裏、さすがに疲れが出て連打を浴びる。ここで早めの継投が必要だったが、引っ張りすぎて傷口を広げてしまい、この回大量6失点。7－1となったところで、ほぼ試合は決まってしまった。結果は8－3。横浜が記念すべきベスプレトーナメントの第1回優勝を遂げたのだった。

優勝した横浜の村上監督には、満寿泉特別限定大吟醸が贈られ、大会は幕を閉じた。

オープン戦 D vs YB

GAME RESULT

オープン戦　ナゴヤドーム

	計	1	2	3	4	5	6	7	8	9
横浜	3	0	0	0	0	1	0	1	0	1
中日	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0

横浜	打率	本	1	2	3	4	5	6	7	8	9
飯田	----		左飛	……	中飛	……	三ゴ	……	……	二ゴ	……
石井琢	----		遊ゴ	……	中安	……	……	右安	……	二ゴ	……
鈴木尚	----		中飛	……	左飛	……	……	遊ゴ	……	二ゴ	……
ローズ	----		……	中2	……	遊ゴ	……	遊ゴ	……	……	左本
江藤	----		……	三振	……	遊飛	……	左飛	……	……	三振
波留	----		……	一ゴ	……	三振	……	……	投ゴ	……	四球
池山	----		……	三振	……	……	三ゴ	……	……	……	……
駒田	----		……	……	……	……	……	……	右飛	……	二ゴ
谷繁	----		……	……	中飛	……	遊ゴ	……	右本	……	三ゴ
野村	----		……	……	左安	……	……	……	……	……	……
中根	----		……	……	……	……	中本	……	……	……	……
荒井	----		……	……	……	……	……	……	三振	……	……

中日	打率	本	1	2	3	4	5	6	7	8	9
緒方	----		遊ゴ	……	左本	……	……	遊直	……	三振	……
立浪	----		三ゴ	……	右安	……	……	右飛	……	……	……
大西	----		……	……	……	……	……	……	……	……	三ゴ
関川	----		三ゴ	……	遊飛	……	……	三振	……	……	遊ゴ
ゴメス	----		……	中安	……	三振	……	……	遊ゴ	……	中安
山崎	----		……	三振	……	左飛	……	……	二直	……	右2
李	----		……	遊ゴ	……	投ゴ	……	……	三振	……	……
井上	----		……	右飛	……	……	遊ゴ	……	……	中安	……
中村	----		……	……	中安	……	遊ゴ	……	……	投ギ	……
野口	----		……	……	三ギ	……	二ゴ	……	……	……	……
初芝	----		……	……	……	……	……	……	……	三振	……

投手成績		勝	敗	S	試	回数	球数	安	振	四	責	防御率
野村	L	0	0	0	0	4	49	4	2	0	2	-----
三浦	R	0	0	0	0	2	24	0	1	0	0	-----
○ミンチー	R	0	0	0	0	2	26	1	3	0	0	-----
S佐々木	R	0	0	0	0	1	15	2	0	0	0	-----
野口	L	0	0	0	0	6⅓	85	5	3	0	1	-----
落合	R	0	0	0	0	1⅔	26	1	1	0	1	-----
●宣	R	0	0	0	0	1	17	1	1	1	1	-----

準決勝の横浜ー中日戦は、結果的にホームラン3本で決着。決勝ホームランは、やはり頼れるローズだった。

決勝は、4回裏の横浜のビッグイニングがすべて。安打数は互角も、集中打が試合を決めてしまった。4回表、松坂にスクイズをさせておけば、という気もするが…。

左手前が、優勝した横浜の村上監督。

オープン戦 YB vs Bu

GAME RESULT

オープン戦　横浜スタジアム

	計	1	2	3	4	5	6	7	8	9
近鉄	3	0	0	1	0	1	0	1	0	0
横浜	8	1	0	0	6	1	0	0	0	×

近鉄	打率	本	1	2	3	4		5	6	7	8	9
大村	----		遊安	……	死球	四球	……	……	中飛	……	二直	……
野村	----		一ゴ	……	遊ゴ	三振	……	……	……	四球	三振	……
前田	----		三振	……	中2	……	……	中2	……	遊ゴ	……	遊飛
クラーク	----		四球	……	四球	……	……	右安	……	左飛	……	三振
ローズ	----		二ゴ	……	一ゴ	……		投ゴ	……	右安	……	三振
中村	----		……	遊ゴ	……	三失	……	三振	……	四球	……	……
武藤	----		……	三振	……	三ギ	……	一邪	……	遊ゴ	……	……
的山	----		……	一ゴ	……	左安	……	……	三ゴ	……	……	……
吉岡	----		……	……	……	……	……	……	……	……	左2	……
松坂	----		……	……	三振	三振	……	……	……	……	……	……
礒部	----		……	……	……	……	……	……	一ゴ	……	……	……
鈴木	----		……	……	……	……	……	……	……	……	左安	……

横浜	打率	本	1	2	3	4		5	6	7	8	9
飯田	----		三振	二飛	……	遊安	……	三振	……	……	三振	……
石井琢	----		四球	……	遊直	左2	……	……	三ゴ	……	右安	……
鈴木尚	----		四球	……	一ゴ	二選	……	……	右安	……	四球	……
ローズ	----		右安	……	四球	三ゴ	……	……	四球	……	遊併	……
江藤	----		三振	……	右飛	左安	……	……	右飛	……	……	……
駒田	----		四球	……	……	四球	二ゴ	……	投ゴ	……	……	……
波留	----		三振	……	……	左安	……	三振	……	右飛	……	……
谷繁	----		……	二ゴ	……	中安	……	右本	……	投ゴ	……	……
斎藤隆	----		……	二飛	……	……	……	……	……	……	……	……
佐伯	----		……	……	……	中ギ	……	……	……	……	……	……
三浦	----		……	……	……	……	……	遊ゴ	……	……	……	……
荒井	----		……	……	……	……	……	……	……	遊ゴ	……	……

投手成績		勝	敗	S	試	回数	球数	安	振	四	責	防御率
●松坂	R	0	0	0	0	3⅓	89	5	3	5	6	-----
真木	L	0	0	0	0	1⅔	28	2	2	0	2	-----
西川	L	0	0	0	0	⅓	4	1	0	0	0	-----
岡本	R	0	0	0	0	1⅔	23	0	0	1	0	-----
大塚	R	0	0	0	0	1	16	1	1	1	0	-----
斎藤隆	R	0	0	0	0	3⅔	76	3	4	4	1	-----
関口	L	0	0	0	0	⅓	3	0	1	0	0	-----
○三浦	R	0	0	0	0	2⅔	37	3	1	2	2	-----
島田	R	0	0	0	0	⅓	6	0	0	0	0	-----
ミンチー	R	0	0	0	0	1	19	2	1	0	0	-----
佐々木	R	0	0	0	0	1	13	0	2	0	0	-----

ベスプレの父
薗部博之 独占インタビュー

聞き手　市丸博司

「自分のためだけに作った」ファミコン版ベストプレープロ野球

個人的な話で恐縮だが、私が薗部さんのゲームと初めて出会ったのは、1988年に発売された、「ベストプレープロ野球」ファミコン版であった。そのとき、「いったいどうしてこんな面白いゲームが作れるのだろう」と思った。あまりに自分が「面白い」と感じるゲームに近く、もちろんゲーム自体にも深くのめり込んだが、それより作者の人に一度でいいから会ってみたい、と強く思ったものである。

ともかく、そのゲームは、あまりに斬新であった。従来の野球ゲームといえば、バッターやピッチャーを操作して、コンピュータ相手に勝つことが主眼。それはそれで楽しかったが、結局は反射神経や技術の問題が非常に大きな要素を占めた。ところが、ベスプレと来たら「選手は勝手に動く」のである。プレイヤーができることと言えば、指示を与えたり、代打を出したり投手を交代するぐらい。これは、従来の常識をまったく覆すものであり、あまりのことに言葉を失ったのを覚えている。

その後、薗部さんは「ダービースタリオン」で有名になっていくのだが、でまたダビスタはめちゃくちゃに面白いゲームだったわけだが、私個人の感覚で言えば、薗部さんは「ベスプレをつくった人」である。今回のインタビューも「ベスプレ制作者」薗

部さんと話ができるのが何より嬉しかったのだ。

——まずは、ベスプレをつくった動機から教えてください。

薗部　ご存知かもしれないけど、前身は「ベストナインプロ野球」というパソコン版のゲームで、このゲームは今のベスプレよりもう少し「コマンド」が多かったんですよ。１球１球、投手に「次はカーブを投げろ」と指示を出したりとか、打者には「狙い球はこれ」とか指示できた。ただ、どうもこれは自分が本来やりたいゲームとはちょっと違うな、と思ってました。

で、「ベストナインプロ野球をファミコン版に移植してくれ」というオーダーが会社から来たときに、「ここらでひとつ、自分のやりたかったゲームを作ってみようか」と思ったんです。ちょうどアスキーをやめて独立しようと考えてたときだったから、「いいや、最後に自分のためだけに作ってやれ」なんてね（笑）。

——それが、ほとんど指示を出せない見てるだけのゲーム…。

薗部　監督が出せる指示って、そんなに多くないでしょ？　指示を出すことよりもデータを作ることのほうが大切だと思ったんですよ。

——僕は20代後半だったんですけど、めちゃくちゃ面白かった。でも、なんか「大人の野球ファンのための野球ゲーム」って感じがしたんですが。ファミコンの主要プレイヤーだった子供を無視してるような。

薗部　うんうん、「子供のことなんかどうでもいいや」って思ったんです（笑）。自分が楽しければいい、って。そしたら、思いのほか子供にもウケちゃって。ま、僕の場合

は、子供の頃からこういうのが作りたかったわけで、そういう子供もいる、ってことなんでしょうね。

――それにしても、データは完全に自由に変えられるし、最初は違和感を持った人も多かったでしょうね。

薗部　つまんない人は徹底してつまんないみたいですよ。「これ、いったい何が面白いの？」と言われたこともあります（笑）。制約の中でどうやるのかがゲームだと思っている人には、まったく受け入れられないみたい。ま、ベスプレはゲームというより道具ですからね。道具をどう使うかは、個人の自由なんですよ。

ウインドウズ版誕生秘話。簡単にはバラせなかった7年前のプログラム

――で、今回のウインドウズ版なんですけど、久しぶり（前回の「ベストプレープロ野球」以来7年ぶり）のベスプレですよね。なぜいま出そうと思われたのでしょうか。

薗部　ともかく、ベスプレをやるためのプラットフォームがなくなっちゃいましたからね。ファミコンもＰＣ98も。まずは今あるマシンで遊べるようにしないと、というのが最大の理由です。

――同時6試合プレイができたり、ウインドウズの特徴がいろいろ生かされてますが、システム的な変更はあまりないと考えていいんでしょうか。

薗部　システムはほとんどいじってません。というより、いじれなかったんですよ。久々に7年前のソースを見てみたら、これが実によくできてる（笑）。本当は、ソースをばらしちゃってイチから作り直そうと思ったんですが、容易には壊せない堅固なシステムでした。ばらすといろんなところでバランスが取れなくなってしまうことがわかったんです。

——バランスですか。

薗部　うん。たとえば135試合消化するとして、本塁打王が80本打っても変だし、15本しか打てなくても変でしょう？　打率だって、5割打つバッターはいない。首位打者の打率は3割中盤であるのが望ましい。こういうバランスが、ベスプレでは一番難しいんですね。この点を考えると、7年前のプログラムは本当によくできてた。

——なるほど。そうなると、なかなかいじれませんね。

薗部　2塁打が多すぎるとか、改善すべき点があったんですが、ちょっとそのへんをいじると、たちまち全体のバランスが崩れちゃって、元に戻すためにドミノ的に直していかなくてはならないんです。ほんと、大変な作業でした。

——ところで、ベスプレをプレイしてると、「センター、すぐそこなんだから2塁に投げればアウトだろう！」なんて思っちゃうことがあります。

薗部　それもね、よく言われるんですが、わかってほしいのが「デフォルメしてる」ことなんです。よくゲーム画面を見てもらえばわかると思いますが、内野が広くて、外野が狭い。そして、選手が大きい（笑）。あの画面を実際に当てはめると、選手は3メートルぐらいの巨人になるし、ダイヤモンドがバカでかくて、外野が異常に狭い球場になるはずです。

　だから、外野から内野までは確かにすぐ近く見えるんだけど「実際は数十メートルあるんだ」と思ってほしい（笑）。まあ、実際と同じ縮尺にすれば問題ないのですが、それはそれで見ててつまらないですからね。

——なるほど。それはいいことを聞きました。とすると、外野が山なりのボールを返しているように見えても、ほんとはすごい速球をびゅっと投げているわけですね（笑）。ところで、ファミコン版とはグラフィックが大きく変わりましたね。

薗部　ええ。もちろん球場の背景や選手など、いろんなところをいじってます。あと、ファミコンはご存知のように横にモノを3つ以上並べられないという制約がありました。実は、ファミコン版ではこれを解消するために微妙に1塁と3塁の位置を上下にずらしてるんです。このへんの制約がなくなったんで、今回は自由にやらせてもらってます。

「中日が強すぎる？ いや、中日は強いんですよ（笑）」

——さて、では、いよいよ核心に触れます。ベスプレのコマンドの秘密を教えてもらいましょうか。
薗部　えー、そんなの、ないよ（笑）。プレイヤーの人のほうが詳しいでしょう。
——いやいや、そうおっしゃらず。たとえば、「気合」コマンドなんですけど、あれはなぜあるんでしょうか？　なんだか、あのコマンドだけ浮いているような気がするんですが。
薗部　うーん、あれは、結局「野球はメンタルなスポーツなんだ」ということなんですね。たとえばベスプレをＣＯＭモードやスキップモードでやってると、打点が150以上いく選手がいる。実際にはそんなことは難しいんだけど、作者としてはそれでいいと思ってるんです。
　なぜかというと、本当は、強打者に対しては投手も警戒して投げている。だから、甘い球は少ないし、打者も打てなくなる。つまり、「気合」モードで投げるのが普通の姿なんです。ところが、スキップモードだとそれをやらないから、強打者の打点が上がっちゃう。
——ふむふむ。とすると、ピンチでマウンドに上がる中継ぎや抑えの投手は、すべて「気合」モードでいいわけですか。
薗部　うん。それでいいんじゃないですか。特にワンポイントや２、３人に対してしか投げない投手は、実際にも常に気合を入れて投げるでしょう。ただ、３塁にランナーがいると前進守備になって、内野の間を抜けやすくなるとか、そういうことで得点圏打率は上がるわけでね。
——守備といえば、今回は守備が弱いチームは厳しい気がします。
薗部　それは絶対そうですね。特に捕手とか、二遊間の守備のパラメータが低いチームはキツいです。
——うんうん。捕手を守備Ａの選手からＤの選手に替えると、途端に打たれたりしますね。でも、二遊間はそんなに響きますか？
薗部　単純にエラーが多いとか、そういう問題じゃないんですよ。普通は取れるところを抜かれたり、盗塁もアウトのところがセーフになったり、いろいろ影響があるわけです。
——盗塁と言えば、前は敬遠してるときにＣＯＭチームが盗塁してきて、楽々アウト、というラッキーなことがありましたが、今回はありませんね。
薗部　実は、ＣＯＭチームは初球は盗塁してこないんです。それで、敬遠かそうでないかを見極めるようにしています。
——おお、それはいいことを聞いちゃった。となると、初球をウエストしておいて、２球目以降で勝負すれば盗塁されない？
薗部　そうなりますね。でも、そんな手を使って勝って楽しいかどうか、という問題はありますけど（笑）。
——ピッチャーを一時的に守備につかせて、もう一度マウンドに送り込む「三原魔術」もできるようになりました。
薗部　ええ。それはできます。ただ、野手はやっぱり投げられない。最近、野手で登録している選手が投手もこなす、というケースがありましたから、このあたりは今後改良の余地があるかもしれません。
——で、デフォルトデータですが、昨年のデータにしては、どうも中日が強くないです

か？（笑）
薗部　いやいや、（突然力をこめて）中日は本当に強いんですよ。今年を見てみなさい。あのくらいはできて当然のチームなんだから。
——ファンだから手心を加えている、ってことはない…ですよね。
薗部　当然です。（胸を張って）データは公平に、真面目に作ってますから。
——わかりました。では最後に、ベスプレの次回作という話はありませんか？
薗部　いまのところないですけど、このゲームは永遠に不滅ですから、そのうち必ずつくりますよ。
——楽しみです。今日はありがとうございました。

薗部博之（そのべひろゆき）
昭和36年７月３日生まれ。茨城県出身。
早稲田大学理工学部機械工学科卒。
大学在学中、「LOGIN」誌のコンテストに「TANK BATTLE」が入選したことをきっかけに、84年４月アスキー入社。89年5月退社後、フリーを経て96年10月に株式会社パリティビット設立。
代表作「ダービースタリオン」シリーズは、91年12月の第一作以来すでに10作、合計約400万本を出荷。

ベストプレープロ野球シリーズの系譜

●ファミコン版
88年７月　ベストプレープロ野球
90年３月　ベストプレープロ野球２
90年12月　ベストプレープロ野球90
92年10月　ベストプレープロ野球スペシャル

●パソコンＰＣ98版
91年４月　ベストプレーベースボール98版

●パソコンＤＯＳ／Ｖ版
92年３月　ベストプレーベースボール

●パソコンＦＭ－ＴＯＷＮＳ版
92年４月　ベストプレーベースボール

●パソコン ウインドウズ版
99年３月　ベストプレープロ野球

セ・リーグ編

初期データで10シーズンを戦うと？

敵を知り、己を知れば百三十五戦危うからず。ここではベスプレに登録されている初期(デフォルト)データのままSKIPモードでリーグ戦を10シーズン実施し、各球団・各選手の成績を検証する。実力ナンバーワンのチームは？　もっとも活躍する選手は誰なのか？

ドラゴンズ強し！ どうしたタイガース!?

中日が圧倒的だ。多くのプレイヤーがそのパワーを実感していると思うが、それにしても10シーズンで8回の優勝とは並の強さではない。確かに現実の野球でも今季は好調で、優勝できるだけの力も十分ある。そういう意味では驚く必要のない結果ではある。

残りの2シーズンで優勝した広島、優勝こそなかったが総合成績では2位につけた横浜の実力は互角だろう。またこの2チーム、打線の破壊力は中日以上のものを持っている。広島は小林幹、横浜は佐々木を軸にし、前半のリードを守り切るという戦いを徹底すればもっと勝ち星を増やせるはずだ。

ヤクルトは成績そのものは安定しているのだが、爆発力がない。特に打線が貧弱だ。せっかく投手陣が頑張っているのに点を取れず、僅差で敗れるというイメージか。巨人は豪華な打線を揃えているクセに、意外と得点力が低い。投手陣も踏ん張りがきいていない。この両チームは、安定して点を取れる態勢を整えてシーズンに臨む必要がありそうだ。

阪神の惨状には目を覆うばかりだ。勝率が打率並というのが情けないし、投手陣も打たれすぎ。パラメータの見直しだけでなく、ドラフトや外国人獲得による戦力の増強、チーム戦略の立て直しなど、抜本的改革が必要だ。

石井琢&金本が健闘 前田、鈴木尚、松井も本領発揮

驚いたのは石井琢が打率トップとなったことだ。首位打者にも3度輝いた。パラメータ的には優秀な選手なので納得の結果とはいえるが「意外と使える選手」の筆頭だろう。

ドラゴンズの力は圧倒的。打線に爆発力はないが、李、立浪、関川、ゴメスらが着実に加点し、6番に一発のある山崎、そして代打陣の成績もいい。こうして1点ずつ積み重ねたそれを層の厚い投手陣が守り抜く野球が徹底されている。特に守護神・宣に対する信頼感は絶大だ。

ただし総合能力という意味では、首位打者3回、うち三冠王1回で年間最高打率370をマークした前田や、二冠王2回の鈴木尚が上という見方もできる。

土橋も3割をマークする健闘を見せている。もともと四番を任されたことのある選手、力はあるわけだ。ヤクルトでは辻も3割を越え、渋太い働きをアピールした。

その他はほぼ実力通りという感じがするが、やや打率的に低いと感じるのが古田、清水、松井、高橋、緒方、飯田、坪井あたり。これは鈴木尚や前田あたりと比べて安定感に欠けることを示している。事実、古田は首位打者に2度なっているが、極端に成績の悪いシーズンもあって総合では3割を下回ったのだ。

本塁打合計は金本がトップ。本塁打王も2回獲得した。以下、前田、江藤、山崎、松井と続くが、広島勢は狭い広島市民球場をホームグラウンドとするぶん有利といえる。実際にはナゴヤドームを本拠としながら本塁打王となったゴメスや年間41本塁打を放った松井の方が上かも知れない。それに金本と江藤は三振の多さが気にかかる。

盗塁数は盗塁王6回の李がトップ。緒方も4回獲得しているが、安打が少ないぶん合計では水を開けられたようだ。石井啄はこの部門でも健闘しており、また四球も多くて出塁率が高い。理想的なトップバッターといえる。

守備では失策の少ない外野を別にすれば、古田や駒田の堅守ぶりが光る。

それにしても、阪神のバッターにはもっと頑張ってもらいたいものだ……。

抑えの切札が好成績
カギは投手交替のタイミングか

宣、佐々木、リベラという怪物級リリーフエースの成績が素晴らしい。このうちリベラは先発や中継ぎに恵まれれば、もっと成績を伸ばす余地があるはずだ。先発陣では石井一、野口、伊藤が好投を見せている。いずれも制球にやや難がある(特に石井一)が、ボールの切れや球質の重さなど、得意の要素を生かして何とかしてしまったという雰囲気だ。

ただ、ちょっと点を取られすぎかなと思わせる投手が多い。チーム防御率を見ても、もっとも優秀な中日でシーズン最高が3.52だ(現実の中日は昨季3.14でセ・リーグ1位)。SKIPモードでは投手交替が効率的ではなく、調子の悪い投手をローテーションから外すということができないからだろう。マニュアルプレイの際には、このあたりに『成績アップへのカギ』が隠されているかも知れない。

●10シーズン・チーム成績

球団	試合数	勝	敗	分	勝率	得点	失点	最高	最低
中日	1350	786	557	7	.585	5681	4757	優勝	4位
横浜	1350	716	627	7	.533	6011	5538	2位	5位
広島	1350	715	630	5	.532	6347	5788	優勝	5位
ヤクルト	1350	711	634	5	.529	5357	5005	2位	5位
巨人	1350	652	696	2	.484	5582	5747	2位	5位
阪神	1350	455	891	4	.338	4481	6624	6位	6位

●10シーズン打撃成績30傑(4000打席以上)

順位	選手名	打率	試合	本塁	打点	犠打	四球	三振	盗塁	失策	長打率
1	石井啄(横)	.323	1350	84	506	73	847	722	205	58	.447
2	前　田(広)	.322	1350	257	1057	37	795	712	66	11	.528
3	鈴木尚(横)	.316	1350	232	1044	25	715	700	66	16	.511
4	ローズ(横)	.306	1350	190	1062	40	649	777	1	157	.472
5	土　橋(ヤ)	.303	1199	84	564	212	518	490	45	54	424
6	辻　(ヤ)	.301	1128	17	400	253	529	461	45	44	.375
7	野　村(広)	.296	1350	162	732	67	667	813	158	128	.448
8	関　川(中)	.296	1245	48	426	154	586	759	138	7	.393
9	李　(中)	.294	1331	129	651	183	529	843	265	57	.440
10	立　浪(中)	.292	1350	112	783	101	589	798	42	65	.420
11	古　田(ヤ)	.288	1350	125	773	27	644	724	29	0	.429
12	ゴメス(中)	.284	1333	235	894	29	754	882	10	29	.481
13	清　水(巨)	.281	1178	124	496	130	411	724	100	19	.416
14	元　木(巨)	.279	1035	94	452	137	427	565	0	67	414
15	仁　志(巨)	.279	1083	94	401	122	357	620	66	120	.413
16	波　留(横)	.278	1350	77	569	218	539	787	155	3	.378
17	松　井(巨)	.275	1291	246	795	21	674	858	33	11	.485
18	高　橋(巨)	.275	1236	177	661	42	453	795	33	10	.440
19	緒　方(広)	.272	1350	167	609	127	551	997	250	3	.420
20	正　田(広)	.271	1350	26	472	294	717	791	13	113	.337
21	飯　田(ヤ)	.270	1096	21	317	133	362	642	117	4	.340
22	坪　井(神)	.268	1314	65	398	144	516	818	62	21	.366
23	川　相(巨)	.267	1117	15	325	240	457	530	0	53	.324
24	駒　田(横)	.266	1331	144	703	24	555	939	0	3	.404
25	金　本(広)	.266	1350	266	885	19	605	1107	119	26	.476
26	山　崎(中)	.264	1341	255	868	26	603	975	5	17	.452
27	和　田(神)	.263	1350	73	593	233	604	702	2	128	.354
28	江　藤(広)	.262	1350	256	949	25	617	1009	38	63	.459
29	稲　葉(ヤ)	.262	1158	116	441	155	362	674	39	16	.402
30	清　原(巨)	.260	1197	187	623	22	462	740	0	10	.450

●10シーズン投手成績(先発4人＋リリーフエース)

順位	選手名	防御率	試合	完投	勝利	敗戦	S	SP	投球回数	被本	四球	三振	自責	勝率	奪三振率
1	宣 (中)	1.61	497	0	28	24	393	421	531 2/3	21	135	657	95	.538	11.12
2	佐々木(横)	1.71	46	10	26	23	360	386	509 2/3	22	130	521	97	.531	9.20
3	リベラ(神)	2.39	369	0	30	33	252	282	550 2/3	30	218	692	146	.476	11.31
4	石井一(ヤ)	2.78	325	96	142	92	0	0	2165 1/3	144	1293	2393	670	.607	9.95
5	野 口(中)	2.88	333	75	151	83	1	1	2165 1/3	137	781	1399	692	.645	5.81
6	伊 藤(ヤ)	2.96	273	76	122	89	1	4	1890	140	802	1703	621	.578	8.11
7	槙 原(巨)	3.13	412	0	33	46	270	303	540	45	166	436	188	.418	7.27
8	斎藤隆(横)	3.15	300	75	148	71	0	0	2038 1/3	161	759	1727	714	.676	7.63
9	山本昌(中)	3.29	327	66	153	94	0	0	2167 2/3	152	814	1528	793	.619	6.34
10	ミンチー(広)	3.37	360	102	164	105	0	1	2414	215	711	1738	904	.610	6.48
11	川 崎(ヤ)	3.43	328	63	120	100	0	0	2122 2/3	203	599	1622	809	.545	6.88
12	小林幹(広)	3.46	494	0	37	60	323	360	678 2/3	47	234	567	261	.381	7.52
13	門 倉(中)	3.71	248	45	94	79	0	1	1555 2/3	105	831	1126	642	.543	6.51
14	廣 田(ヤ)	3.73	367	0	39	55	222	261	456 1/3	48	123	293	189	.415	5.78
15	桑 田(巨)	3.75	301	59	104	113	0	0	1936 2/3	160	719	1354	806	.479	6.29
16	趙 (巨)	3.85	236	40	88	81	0	3	1507 2/3	102	824	1469	645	.521	8.77
17	ガルベス(巨)	4.03	289	55	97	112	1	3	1818 2/3	151	752	1310	814	.464	6.48
18	野 村(横)	4.10	361	67	146	132	0	1	2289	236	780	1358	1042	.525	5.34
19	川 上(中)	4.25	285	53	109	109	0	0	1757	157	846	1097	830	.500	5.62
20	北 川(ヤ)	4.26	238	62	75	105	0	3	1555 2/3	188	636	886	736	.417	5.13
21	藪 (神)	4.27	330	30	74	164	1	1	1917 1/3	137	818	1435	910	.311	6.74
22	加 藤(広)	4.36	318	49	118	107	0	1	1925 2/3	216	681	1111	933	.524	5.19
23	斎藤雅(巨)	4.38	289	46	96	115	0	1	1805 2/3	139	798	1245	878	.455	6.21
24	三 浦(横)	4.57	290	43	95	121	0	1	1682 2/3	167	955	932	855	.440	4.98
25	川 尻(神)	4.71	372	28	94	192	0	2	2132 1/3	222	801	1434	1116	.329	6.05
26	佐々岡(広)	4.82	300	45	101	122	0	1	1799 1/3	252	749	1166	963	.453	5.83
27	中 込(神)	4.95	308	35	69	162	2	8	1669	184	701	1010	918	.299	5.45
28	紀 藤(広)	5.17	244	29	74	74	3	5	1352 1/3	212	660	928	777	.500	6.18
29	メ イ(神)	5.27	247	26	49	132	0	4	1315 2/3	142	759	880	771	.271	6.02
30	川 村(横)	5.35	246	35	66	117	1	2	1378 2/3	240	638	876	819	.361	5.72

10シーズンの戦いの果てに

セ・リーグでの検証と同様、パ・リーグに関しても初期(デフォルト)データのままSKIPモードでリーグ戦を10シーズン実施。各チームの実力、選手たちの隠された能力を解き明かしていく。リーグナンバーワンのチーム、野手、投手は、いったい……？

西武が磐石の構え 他球団は一長一短だ

西武が10連覇を達成。恐ろしいまでの強さを見せつけた。重量感はないが切れ目もない打線+安定した投手陣というバランスの良さが光る。ほとんどスキのないチームに出来上がっているといっていいだろう。

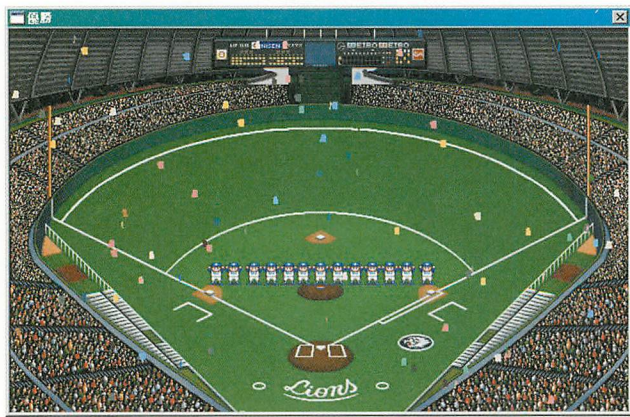
日本ハムには、西武をギリギリまで追い詰めながら（0.5～2ゲーム差）僅差の2位に甘んじたシーズンが多かったように、勝ち切れないもどかしさがある。投手陣が頑張っているのに打線が点を取れないのが敗因だ。

以下の4チームは勝率5割を切った。近鉄は日本ハムとは逆に、いてまえ打線が強力なのに比べて投手陣が脆弱。引き分けが少ないというのは、大勝か大敗かというチームカラーを反映しているように思える。

ダイエーは好不調の波が大きいチームだ。他球団にはすべて勝ち越したのに西武だけに大きく負け越したり、逆に西武をイジメたのに他球団にはカモにされたりなど、戦い方のバランスが悪かったのも成績に響いた。

オリックスは、打線はイチローひとり、投手は駒不足とチーム事情はかなり苦しいが、シーズンごとの成績のバラツキは少ない。他球団が好調なら下位に、不調なら上位に来る「相手なり」球団というイメージだ。

ロッテは小宮山と黒木を中心とする投手陣が踏ん張りをみせるシーズンもあるが、いかんせん得点が取れない。チームの顔といえる野手が不在で、相当に厳しい状況だ。

どのチームも打倒西武のためには、かなり思い切った補強を施さなければならない、というのが実感である。

12球団中もっとも戦力のバランスが取れているのが西武。得点力が高く、防御率も優秀だ。小関、松井稼、高木大らが並ぶ打線は一発の恐さはないが、足で得点を稼ぐことができる。西口、石井、デニーら安定感のある投手陣がこれをガッチリ守るという戦い方が完成している。

意外と混戦模様だが足の速さは圧倒的に有利!?

さすがはイチローである。最低でも.333、最高で.370をマークし、首位打者は5回。抜群の安定感を誇っている。が、これでも不満と思わせるのも確かだ。

小関の健闘は予想外。確かに素質のある選手だが、シーズン206安打など素晴らしい成績。盗塁王5回の同僚・松井とともに、足で稼いだヒットが多いのが原因と思われる。

大村も足の速い選手だ。イチローを差し置いてシーズン最高打率.384と最多安打206本も記録した。大村もバッティングセンスは非凡だが、どうもパ・リーグは足の速さが有利に働きすぎているように感じられる。

そんな中で健在ぶりを示したのが落合だ。純粋にバッティングの巧さだけで稼いだ数字であり、デフォルトデータで戦うならベンチに置いておくのはもったいない選手といえる。

大道と武藤も1回ずつ首位打者を獲得した。どうやらパは、セ以上に調子が成績を左右するという状況のようだ。

本塁打はタイトル4回のクラークが一歩リード。これに表外のニールや藤井、西武の鈴木、ロペス、ローズ、マルチネスあたりが続く。が、セに比べて本数は少なめだ。足の速さが有利なこと、犠打が妙に多いことなどを考え合わせると、広い球場が多数を占めるパでは一発よりも単打でつなぐ野球が主流となっているようである。

守備面では田口の失策数が気になるが、これはチーム事情から内野を守らされるケースが多かったせいだと考えられる。

打線に助けられる西武投手陣 他球団は何らかの手だてが必要だ

指名打者制度のあるパでは「打線有利」といわれ、投手の防御率はセに比べて悪化する傾向にある。その中でも頑張っているのは抑えの経験が長い河本、球に威力のあるシュールストロム、安定感ある西口だ。

また黒木、小宮山、工藤と潮崎の成績を比べてみると、いかに西武投手陣が打線に助けられているかがわかる。逆に近鉄は、打線がいくら点を取っても投手が踏ん張れない様子がありありと浮かぶ。ロッテは打線を、近鉄は投手陣を強化することで、もっと勝ち星を増やせるはず。日本ハムはいかに確実にシュールストロムにつなぐか、ダイエーはローテーションの組替え(中継ぎ陣の成績が意外といい)、オリックスは投手陣の整備が課題となるだろう。

●10シーズン・チーム成績

球団	試合数	勝	敗	分	勝率	得点	失点	最高	最低
西武	1350	826	508	16	.619	7058	5666	優勝	優勝
日ハム	1350	711	629	10	.531	6233	5859	2位	5位
近鉄	1350	660	681	9	.492	6579	6643	2位	5位
ダイエー	1350	646	680	24	.487	6146	6264	2位	6位
オリックス	1350	610	724	16	.457	6094	6638	2位	6位
ロッテ	1350	552	783	15	.413	5434	6474	3位	6位

●10シーズン打撃成績30傑(4000打席以上)

順位	選手名	打率	試合	本塁	打点	犠打	四球	三振	盗塁	失策	長打率
1	イチロー(オ)	.355	1350	124	757	35	1094	451	273	4	.520
2	小　関(西)	.332	1329	30	559	178	725	726	260	10	.430
3	大　村(近)	.331	1350	75	721	174	752	639	284	4	.450
4	松　井(西)	.328	1350	76	815	282	680	674	303	108	.442
5	落　合(日)	.320	1219	72	629	26	730	579	3	8	.433
6	高木大(西)	.306	1300	112	847	281	597	663	139	11	.440
7	大　道(ダ)	.306	1296	110	711	185	643	717	8	31	.438
8	井　出(日)	.301	1287	59	599	116	490	780	185	8	.398
9	柴　原(ダ)	.300	1254	17	422	112	525	781	217	10	.375
10	平　井(ロ)	.298	1307	80	672	184	757	656	42	24	.406
11	武　藤(近)	.297	1341	31	499	184	640	721	92	78	.373
12	小　坂(ロ)	.296	1350	18	396	163	524	699	249	60	.364
13	片　岡(日)	.296	1340	127	793	124	623	791	3	26	.430
14	クラーク(近)	.295	1350	254	1179	36	722	769	9	0	.501
15	礒　部(近)	.295	1261	55	540	185	554	681	44	8	.399
16	ロペス(ダ)	.293	1350	193	958	38	648	768	2	7	.462
17	奈良原(日)	.292	1328	26	557	132	822	700	210	89	.362
18	大　友(西)	.286	1115	19	443	212	400	571	116	8	.360
19	マルチネス(西)	.285	1328	231	1180	36	668	866	12	0	.469
20	浜　名(ダ)	.284	1310	59	624	271	524	770	151	98	.380
21	鈴　木(近)	.284	1082	104	496	139	378	532	23	36	.434
22	諸　積(ロ)	.283	1239	12	418	186	546	698	140	16	.341
23	鈴　木(西)	.281	1279	198	948	40	571	962	4	49	.451
24	ローズ(近)	.276	1295	155	763	32	447	42	119	17	.426
25	金　子(日)	.275	1350	78	650	266	527	755	123	100	.382
26	田　口(オ)	.272	1345	60	516	150	574	819	83	147	.363
27	大　島(オ)	.271	1344	57	589	175	506	866	76	102	.366
28	大　村(ロ)	.272	1133	85	495	40	392	640	0	12	.396
29	水　口(近)	.270	1350	35	577	410	649	658	47	99	.351
30	田　中(日)	.269	1130	155	689	29	310	679	0	14	.434

●10シーズン投手成績(先発4人+リリーフエース)

順位	選手名	防御率	試合	完投	勝利	敗戦	S	SP	投球回数	被本	四球	三振	自責	勝率	奪三振率
1	河　本(ロ)	2.54	256	0	27	26	178	205	336 2/3	19	99	338	95	.509	9.04
2	シュールストロム(日)	2.59	410	0	23	3	324	347	545	22	174	510	157	.500	8.42
3	デニー(西)	2.91	460	0	25	35	360	385	560 1/3	27	207	511	181	.417	8.21
4	大　塚(近)	2.94	450	0	34	47	334	368	658 2/3	25	272	675	215	.420	9.22
5	木　田(オ)	2.97	405	0	32	40	300	332	579 1/3	33	211	567	191	.444	8.81
6	西　口(西)	3.27	326	112	166	60	0	1	2275 1/3	163	725	1856	827	.735	7.34
7	岡　本(ダ)	3.33	434	0	32	53	299	331	576	23	204	497	213	.376	7.77
8	石　井(西)	3.73	299	86	153	75	0	2	2057 2/3	132	968	1478	853	.671	6.46
9	岩　本(日)	3.91	350	66	138	117	0	1	2232	175	730	1484	969	.541	5.98
10	黒　木(ロ)	4.01	323	69	109	126	0	4	2027	119	860	1472	904	.464	6.54
11	小宮山(ロ)	4.12	352	73	110	138	0	0	22471/3	172	644	1490	1030	.444	5.97
12	工　藤(ダ)	4.21	269	65	98	108	0	2	1751 1/3	109	732	1176	820	.476	6.04
13	潮　崎(西)	4.25	276	64	126	77	0	0	1756 2/3	140	873	1129	830	.621	5.78
14	星　野(オ)	4.41	333	53	110	128	0	1	2021 2/3	197	843	1445	990	.462	6.43
15	芝　草(日)	4.47	265	61	102	91	0	0	1784 1/3	160	709	1103	887	.528	5.56
16	横　田(西)	4.53	228	53	99	64	0	0	1445 2/3	150	647	915	728	.607	5.70
17	西　村(ダ)	4.55	312	45	105	100	0	0	1833 2/3	124	815	1240	927	.512	6.09
18	武　田(ダ)	4.66	325	61	106	119	0	1	2018	154	898	1163	1044	.471	5.19
19	小　林(オ)	4.94	307	49	105	130	0	1	1822	112	1050	1045	1000	.447	5.16
20	関　根(日)	4.97	298	79	105	130	0	0	1940 2/3	208	787	1061	1071	.447	4.92
21	今　関(日)	4.99	225	54	91	89	1	1	1480 1/3	155	752	809	820	.506	4.92
22	高　村(近)	5.11	333	41	115	130	0	0	1949	181	1043	1253	1107	.469	5.79
23	岡　本(近)	5.16	318	47	106	120	0	0	1845 1/3	153	782	1069	1059	.469	5.21
24	フレーザー(オ)	5.19	288	54	91	122	0	0	1655 2/3	159	725	781	955	.427	4.25
25	真　木(近)	5.19	233	32	71	89	0	0	1307	94	784	849	754	.444	5.85
26	伊　藤(オ)	5.74	236	31	68	103	0	4	1275 2/3	117	737	661	813	.398	4.66
27	ヒデカズ(ダ)	5.77	249	30	63	111	0	1	1330	114	723	672	853	.362	4.55
28	小　池(近)	6.05	292	44	80	124	0	0	1611 1/3	206	946	894	1083	.392	4.99
29	武　藤(ロ)	5.10	268	68	71	136	0	1	1728 1/3	162	764	967	979	.343	5.04
30	薮　田(ロ)	6.36	230	40	46	120	2	2	1374	179	673	638	971	.277	4.18

COLUMN

ベスプレでは打者有利。勝負のポイントは打者の充実だ。

デフォルトデータの対戦結果からは、ベスプレ内での投打のバランスは取れているように思える。イチローや鈴木尚の打率はこんなものだろうし、投手の防御率もまずまず納得できるものだ。

だが詳しく見ると、3割バッターが現実よりやや多いように感じられる。また各打者の打点もやや高めだ。これは投手と打者のパラメータ、そして監督の采配が影響しているようだ。

打者にはいわばチャンスでの強さを物語る「信頼」というパラメータがある。このため、得点圏に打者をおいた時の打率が上がる可能性が高まり、そのぶん得点も増える。いっぽう投手には、ピンチでの強さを設定するパラメータがない。マニュアルプレイなら「気合い」を連発するところだが、自動でシーズンを送ると投手は淡々と投げるばかりだ。

またCOM監督は、比較的投手を長く引っ張る。力のある先発投手ならまだしも、本来はワンポイント限定で使いたい投手にも1イニング以上投げさせてしまうのだ（106ページのコラムを参照していただきたい）。

さらに調子の悪い投手をローテーションから外すということはできないが、逆に打者は調子のいい者が優先的に使ってもらえるという傾向にある。調子が悪ければベンチに引っ込めておけばいいのだから、必要以上に打率を悪くすることも少ないと思われる。選球眼のいい打者や足の速い打者が有利というセオリーもあり、どうも全体的に打者有利、投手の成績（特に中継ぎ）は悪くなるのがベスプレの特徴のようなのだ。

ちなみに下の画面は、横浜の打者および中日の投手の全パラメータをSにして戦わせてみたもの。

セ・リーグ リーグ順位表

LEAGUE RANKING

	試合	勝利	敗戦	引分	勝率	ゲーム差	打率	防御率	本塁打	盗塁	得点	失点
優勝 横浜	135	131	4	0	.970	0.0	.369	2.15	316	323	1706	294
2 中日	135	88	47	0	.652	43.0	.239	2.67	115	35	480	369
3 巨人	135	52	83	0	.385	79.0	.234	5.19	118	19	450	739
3 広島	135	52	83	0	.385	79.0	.234	5.98	122	64	498	821
5 ヤクルト	135	47	88	0	.348	84.0	.232	5.46	101	51	446	766
6 阪神	135	35	100	0	.259	96.0	.203	6.76	75	13	343	934

	YB	D	G	C	S	T
横浜	※	24 − 3	26 − 1	27 − 0	27 − 0	27 − 0
中日	3 − 24	※	23 − 4	20 − 7	20 − 7	22 − 5
巨人	1 − 26	4 − 23	※	13 − 14	18 − 9	16 − 11
広島	0 − 27	7 − 20	14 − 13	※	13 − 14	18 − 9
ヤクルト	0 − 27	7 − 20	9 − 18	14 − 13	※	17 − 10
阪神	0 − 27	5 − 22	11 − 16	9 − 18	10 − 17	※

なんと横浜が131勝もあげ、もちろんリーディング1~8位には横浜選手がズラリ。いっぽう中日の投手は防御率上位を独占とはいかなかった。どうやら勝つためには、いかにいい野手を揃えられるかにかかっているようである。

ベストプレー プロ野球

デフォルトデータ攻略法

「ベストプレープロ野球」はパラメータが命。
パラメータがすべてを決めるといっても過言ではない。
では、そのパラメータの「意味」を考えてみようというのが
このページである。
じっくり、攻略方法を研究しておこう。

ベスプレの選手たちには実に数多くのパラメータが設定されている。それぞれのパラメータの意味についてはマニュアルに記載されているが「どれが本当に重要であり、パラメータが上がると成績はどう変化するのか」を把握することが大切だ。このページでは各パラメータの持つ意味を復習しつつ、それぞれの効果を検証していくことにしよう。

投法　ピッチャーの利き腕と投げ方を表わしている。

Rが右投げ、Lが左投げ。後ろに小さなsが付く(デニーのRsや下柳のLsなど)とサイドスローであることを表わしている。ちなみにuが付くとアンダースローだが、デフォルトデータには登録されていない。

●検証～サウスポーは有利か？
左投手に弱い打者は多く、左投手だと二塁へ盗塁しにくい。全投手を左投げにすると？

	盗塁数	総得点
初期データ	2416	33459
全部左投手	2140	33211

(セ・リーグ10シーズン合計)

ポイント：対左がマイナスの打者には左をぶつける。左投げは一塁走者の盗塁を防ぐのにも有効だ。

タイプ　各投手のピッチングの特色を表わす。内容は下記の通り。

A：球の切れと球威が自慢の、いわゆる本格派タイプ。ビシビシと投げ込んでくるダイエーの工藤あたりが思い浮かぶ。

A+：上のAタイプより豊富な球種を持っている。斎藤雅や佐々岡、黒木や小池など、最多勝級の投手はこのタイプに多い。

B：速球が最大の武器。組み立ても直球主体で打者を力でねじ伏せる。リベラ、宣、大塚などストッパー向きのタイプ。

B+：直球も速いが決め球はフォーク。打者をキリキリ舞させて三振の山を築く。ハマの大魔神・佐々木や森慎二が代表格。

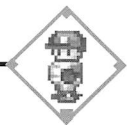
C：切れや球威は心細いがコントロールで勝負。山本昌や桑田、岩本や小宮山など、計算できるピッチャーが並ぶ。

D：多彩な変化球で打たせて取る軟投型。遅いボールで打者のタイミングを外すのが上手い。ミンチーや星野などがいる。

●検証～分不相応な投球はコワイ？
球速が136しかないので制球を重視している川尻。この投手が直球主体に勝負すると？

	防御率	勝	敗	奪三振率
タイプCの時	4.71	94	192	6.05
タイプBの時	4.78	82	216	5.48

(10シーズン合計)

ポイント：能力とタイプがアンバランスでは成績が落ちる。持ち味に応じた投球を心がけるのが肝心。

球速　ストレートの平均的なスピードを表わしている。

あくまで直球の「平均的な」スピードであり、これより速い球を投げることもあるし、バテてくると球速は落ちる。球威やキレで勝負するタイプならおおむね球も速く、技巧派だと遅い。エースを張るなら140キロ台の速球は欲しいところだ。

●検証～球が速いことは凄いことか？

セ・リーグ屈指の速球派であるヤクルトの石井一の球速を150から140に落として実験。

	奪三振	
150のとき	2393個	（10年連続奪三振王）
140のとき	1510個	

（10シーズン合計）

ポイント：奪三振タイトルを狙えるのは超速球派。コントロールもマトモなら抑えもやらせてみたい。

切れ　「ストレートが切れる」という言葉はあるが、ここでは変化球の切れを表わす。

変化球の切れの良さ。これが優れているとタイミングを外したり空振りをさせたり、あるいは芯に当てさせずにゴロを打たせることが出来る。変化球を投げることの多い軟投派投手には特に重要なパラメータだといえる。

●検証～変化球の威力は絶大か？

フォークの切れがSとして設定されているのが佐々木。これをCに落とすとどうなるか？

	防御率	被安打	奪三振率
切れSの時	1.71	333	9.20
切れCの時	2.07	399	9.03

（10シーズン合計）

ポイント：切れが鈍ると三振を取りにくくなり、安打にされるケースも増えて成績は悪くなる。

制球　ストレートおよび変化球のコントロールのレベルを表わす。

コントロールの良さを示す。Cタイプ以外の投手にとっても制球はかなり大切だ。制球が良くなれば打者に与える四死球も減少し、ピンチを防ぐことができる。スタミナ指数が下がると切れや球速だけでなく制球も衰える。

●検証

Cタイプのくせに制球がDとアンバランスな横浜の三浦を制球Aにして実験。

	防御率	勝	敗	四死球
制球Dの時	4.57	95	121	955
制球Aの時	3.49	131	87	580

（10シーズン合計）

ポイント：制球が良くなると与四死球の減少だけでなく成績全体がアップして防御率も良化する。

安定　常に自分の能力を出し切れるかどうかという「安定度」を表わす。

ピッチングの安定度を示す。これが低いと突然調子が乱れることがある。野口、佐々木、大塚あたりの安定感は抜群だが、星野や高村は好不調の波が激しく、急にボコボコ打ち込まれることが多い投手として知られる。

●検証
最多勝も防御率トップも狙える能力のある野口。もし彼の安定度が低かったらどうなる？

	防御率	勝	敗
安定Aの時	2.88	151	83
安定Cの時	3.04	132	99

（10シーズン合計）

ポイント：安定度が落ちると不調のままの登板が増え、そのぶんだけ数字が悪くなる。

球質　投手が投げる球の「質」を示しているパラメータ。

球の重い・軽いを表わす。といっても投げるボールは同じ。どういうわけか「打者にとって球が軽く感じられる投手」が存在し、こういう投手の球は長打になりやすい。川村や小池が代表格。逆に重いのは宣やデニーなど。

●検証～球が重いと成績も上がるか？
たびたび一発を浴びて沈む川村。彼に球質の重さがあったら成績はアップするだろうか？

	防御率	勝	敗	被本塁打
球質Eの時	5.35	66	117	240
球質Aの時	3.75	109	70	102

（10シーズン合計）

ポイント：球質が重くなると被本塁打が減る。そのぶん失点が減って防御率・勝ち星ともに良化。

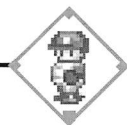
技術　三振を取るのではなく、凡打に仕留めるためのテクニックを表わす。

いわゆる投球技術。これが優れている投手は打たせて取るのが上手い。軟投派やコントロール型の投手には欠かせない要素だ。星野や桑田などの技術は定評がある。逆に、とにかく押せ押せというのがリベラやデニーあたり。

●検証～投球技術は身を助ける？
投球技術には定評のある山本昌。もし彼が打たせて取る技術を放棄したとしたら？

	防御率	完投	勝	敗	被安打
技術Aの時	3.29	66	153	94	1803
技術Cの時	3.54	53	120	109	1920

（10シーズン合計）

ポイント：投球技術があると球数が少なくなって完投できるようになる。被安打も減少する。

スタミナ　文字通り、登板した試合におけるスタミナの大小を表わす。

どれだけ長いイニングを投げられるかを表わす。この値が悪いと早くバテてしまうため、先発投手にとってはかなり大切。できれば完投できるスタミナが欲しい。野口、川崎、西口、岩本らはスタミナあって完投も多い。

●検証～スタミナアップで成績もアップ？

パラメータは優秀だがスタミナCと衰えの見える斎藤雅。彼がスタミナを取り戻したら？

	防御率	完投	勝	敗
スタミナCの時	4.38	46	96	115
スタミナAの時	3.33	56	109	77

（10シーズン合計）

ポイント：スタミナがあれば確実に完投数は増加。バテて打たれないぶん防御率も良化する。

回復　投球後、疲れた肩がどの程度の割合で回復するのかを表わす。

１日で回復するスタミナ指数。この能力が高ければ短い間隔で登板でき、低い投手は間を開けなければならない。小林幹や下柳はロングリリーフの連投で酷使も可能だが、澤崎や桑田を先発させるなら中６日以上は欲しい。

●検証～回復と登板数の関係を見る

回復能力の高い広島のエース、ミンチー。もし回復が落ちたら登板数にどう影響するか？

	防御率	試合	完投	勝	敗
回復28の時	3.37	360	102	164	105
回復20の時	3.59	284	64	112	87

（10シーズン合計）

ポイント：回復の値が低いと登板数・完投数が減り、回復不十分のまま投げて成績は悪化。

スタミナ指数　試合中およびベンチにいる時点での投手の疲労度を表わす。

投手の疲労度を確認するためのもので、投球および日程を進めることで変化する。１球投げると１減り、これが少なくなると球速、切れ、制球が悪くなる。できれば常に200の時にマウンドへ送りたい。「気合い」を使うと一時的に球速と切れがアップするが、スタミナ指数の減りは２倍に。

●検証～スタミナ指数が低いと？

この指数をゼロにしてシーズンを開始したらどうなるだろうか。巨人のエース桑田で実験。

	試合数
スタミナ指数 200の時	301
スタミナ指数　0 の時	290

（10シーズン合計）

ポイント：開幕時のスタミナ指数が低いとエースでも開幕投手になれず、回復するまで登板なし。

野手編

投手以上に多いパラメータが設定されている野手。守備から勝負強さまで、さまざまなファクターが成績に影響を及ぼすようになっている。またパラメータどうしが互いに影響しあい(長打力があってもバットに当てるのが下手だと本塁打は少ない)、さらに独自の理論「打撃指数」を採用することで調子の波も再現している。これは、かなり奥が深い。

打席　各バッターが入る打席を表わしている。

Rが右打者、Lが左打者、Bがスイッチヒッター（相手投手が左投げなら右打席に、右投げなら左打席に入る）を表わす。左打者には左投手を苦手とするバッターが多いことを意識しながら打順を組むようにしたい。

●検証～打席の違いで成績の差は出るか？

西武では清水と大塚とのレギュラー争いが熾烈。もし清水が左打ちだったら？

	打率	試合	安打	二塁打	三塁打
右打ちの時	.272	857	711	147	14
左打ちの時	.315	970	1049	173	30

（10シーズン合計）

ポイント：左打ちだと足の速い打者なら内野安打が期待できる。そのぶん打率もアップさせられる。

タイプ　各打者のバッティングの特色を表わしている。

Pは引っ張って打つバッター（右打者なら三遊間～レフト方向、左打者なら一二塁間～ライト方向への打球が増える）、Sはスプレーヒッター（左右に打ち分ける）。一般にスプレー型のほうが安打は多くなるといわれる。

●検証～引っ張ることで成績は変わるか？

近鉄の両外人は左右に打ち分けられるが、もしローズが引っ張りに徹したとしたら？

	打率	本塁打	三振
スプレー型	.276	155	942
プル型	.280	159	999

（10シーズン合計）

ポイント：SでもPでも成績に大差ないが、プルだと本塁打が増える可能性はあるかも。

守備　野手の守備力。複数の位置を守れる選手もいる。

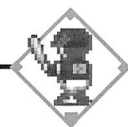
ポジションごとの守備の巧拙。捕手の守備は投手の成績にも影響するようだ。守備が「－」のポジションを守ることも可能だが失策は増大。どんな守備位置でもOKの五十嵐などはユーティリティープレイヤーとして重宝する。

●検証～守備力は打撃にも影響するか？

守備範囲の広い小坂。彼のショート守備力AをDに落として成績の変化を検証する。

	試合	打率	失策	1試合あたり失策
守備Aの時	1350	.296	60	0.04
守備Dの時	511	.283	29	0.06

（10シーズン合計）

ポイント：守備の悪い選手は使ってもらえないことがある。失策が増えるとチーム成績も悪化する。

肩　守備についた時の送球のスピードを表わしている。

肩の強さ。おもに一塁への送球とバックホームに影響する。一塁まで距離のあるサードとショート、矢のようなバックホームで走者生還を防ぐ外野手にとっては特に大切。球界屈指の強肩の持ち主はイチローや新庄だ。

●検証～外野手はチーム防御率に貢献する？
イチローをはじめオリックスの外野は強肩揃い。もし肩が弱いとチーム成績はどうなる？

	チーム総失点
初期データ	6638
外野手の肩C	6790

（10シーズン合計）

ポイント：肩の強い選手は貴重な戦力。三遊間と外野に配置して内野安打と本塁生還を防ごう。

足　文字通り、足の速さを表わしている。

足の速さを示すパラメータだが、あくまで走塁時の速さ。守備には関係しない。足が速いと盗塁の成功率は上がり、また内野安打の増加も期待できる。ダブルプレイになりにくい効果もあるはず。セでは石井琢、李、飯田、緒方、パでは松井、小坂、奈良原あたりが盗塁王候補だ。

●検証～足の速さは打撃成績にも影響する？
見るからに足の遅そうな吉永。足パラメータEをAに上げると成績は変化するか？

	打率	三塁打	本塁打	盗塁
Eの時	.269	3	150	1
Aの時	.316	53	208	282

（10シーズン合計）

ポイント：足が速くなれば確実に打撃成績アップ。盗塁増加＋長打増加で、かなり使える選手になる。

眼　打席に入った際の眼の良さ＝選球眼を表わしている。

選球眼のこと。これが良ければ四球が、悪ければ三振が増える。また選球眼の良化は四球増＋三振減＋好球必打となって打率アップも期待できる。三振が少ないといえばイチロー、多いのは清原や江藤、パの外人選手だ。

●検証～選球眼が打撃に与える影響
せっかく素質がありながらボール球に手を出すことが目立つ井口。選球眼が良くなれば？

	打率	四球	三振
眼がEの時	.241	327	1040
眼がAの時	.300	801	879

（10シーズン合計）

ポイント：眼を良くする効果は絶大。打率を稼ぎたければ巧打以上に選球眼を鍛えるのが吉。

実績　各野手のプロにおけるこれまでの働きぶりを表わしている。

過去の実績。各種タイトル獲得歴や一軍経験などが反映されているようだ。実績が高いと調子の波が少なくなる。三冠王の落合や５年連続首位打者のイチローは実績Ｓ。一軍経験の浅い中日の井上などは実績不足といえる。

●検証～実績は打撃成績も左右するか

落合から一塁の定位置を奪った西浦だが、ベスプレでは実績Ｅ。これを上げてやると？

	打率	試合
実績Ｅの時	.266	465
実績Ａの時	.273	1206

（10シーズン合計）

ポイント：実績不足だと使ってもらえないケースも。高ければレギュラー獲り＋成績安定の効果が。

スタミナ　投手と異なり、試合中のスタミナではなく、シーズン中のスタミナを示す。

シーズンを乗り切るための体力。これが低いと終盤に息切れを起こし、成績が落ちてしまう。フル出場経験の乏しい元木や的山は低く、５年連続フル出場の駒田、見るからに頑丈そうなゴジラ松井などはスタミナ豊富な選手。

●検証～スタミナ豊富なら成績も上がる？

西武の正捕手である伊東は、そろそろスタミナが心配な年齢。もしスタミナＡだったら？

	試合	打率
スタミナＥの時	1323	.248
スタミナＡの時	1343	.254

（10シーズン合計）

ポイント：スタミナがあればシーズン終盤の息切れがなくなり、成績も若干アップの可能性がある。

巧打　投じられた球にバットを当てる技術の巧拙を表わしている。

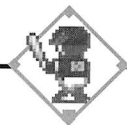
バッティングの巧さ。これが高い＝バットに当てる能力が高いということで、バントやエンドランの成功率も上がる。巧打者といえばイチロー、バントの名手といえば川相。セフティーバントの上手い大村という珍しい例も。

●検証～巧打と打率は密接に関係する

イチローのライバルに成り得るとしたら大村しかいない。しかし、もし巧打が下がると？

	打率	三振
巧打Ａの時	.331	639
巧打Ｃの時	.325	806

（10シーズン合計）

ポイント：巧打が下がると空振りが増え、三振が増大。結果として打率も下げてしまう。

長打　バッターのパワー、すなわち飛距離を表わしている。

長打力がある選手はホームランが出やすく、逆に長打力が低いとホームランが出にくい。

●検証～ホームランを増やしたい

松坂の初被本塁打といえば小笠原。ベスプレでは長打Eだが、本格化の兆しを見せる。

	試合	打率	本塁打	長打率
長打Ｅの時	193	.274	6	.377
長打Ａの時	1220	.294	228	.504

（一塁と外野も守れるようにして10シーズン合計）

ポイント：長打Ａなら試合に使ってもらえるようになる。年間25本以上なら本塁打王も狙える。

信頼　得点圏（二塁や三塁）に走者を置いた時の勝負強さを表わす。

信頼がプラスだと得点圏での打率が上がりやすく、マイナスだと好機に凡退しやすい。

●検証～信頼が落ちると打点も下がる？

１試合１打点ペースのウィルソン。だがチャンスに弱くなったら打点も下がるはず。

	打率	試合	打点	1試合あたり打点
信頼＋２の時	.243	1148	739	0.643
信頼－２の時	.251	877	413	0.471

（10シーズン合計）

ポイント：信頼できるバッターは優先的に使ってもらえる。信頼低いと打点は大幅マイナスだ。

対左　左投手に対する得意・苦手の度合を表わす。

プラスだと左投手得意、マイナスだと苦手。おおむね左打者は左投手を苦手とする。

●検証～左投手対策に取り組もう

オリックスには左投手に弱い打者が多い。たとえば藤井がもし左を苦にしないとしたら？

	打率	本塁打	三振
対左－2の時	.249	220	1074
対左＋2の時	.260	234	995

（10シーズン合計）

ポイント：対左がマイナスだと、そのぶん成績は少し落ちる。特に能力の低い打者なら代打を送ろう。

打撃指数　バッティングの調子を見極めるための変数。

ヒットを打つと上がり、凡退だと下がる変数。この数値が上がっていると好調だと判断できる。

●検証～打撃指数が低い時の起用は？

西武の野手は打撃指数が高い。もし低いままでシーズン入りしたら？　小関で実験。

	打率	試合
打撃指数 280の時	.332	1329
打撃指数 150の時	.292	1206

（10シーズン合計）

ポイント：調子の悪い選手はスタメン落ちもあり。また不調のまま開幕を迎えると成績は下がり気味。

監督編

ベスプレはプロ野球をシミュレーションするゲーム。当然、監督の考えや思考もインプットできるように作られている。年間数試合は監督の采配によって勝敗が決まるといわれるだけに、監督データはペナントを戦ううえで重要なファクターとなるはずだ。監督データが変わることでチームや選手の成績はどのように変化するかも検証してみよう。

タイプ　攻撃型は攻撃優先のスタメンで代打・代走も多い。守備型は守備固めが多くなる。

●検証～超攻撃型か超守備型か!?
強力な打線を持つダイエーだが、監督が守備型の人間だったらオーダーは変わるか？

	鈴木の出場試合数
初期データ	97
守備型監督	192

（10シーズン合計）

ポイント：監督が守備型になると、守備のいい選手の起用が増える傾向にある。

投手交代　先発投手に長いイニング投げさせるか、早めに継投策を取るかを設定。

●検証～投手の成績に影響するか？
投手を細かくつなぐのが横浜野球。だが監督が完投にこだわるとどうなるだろうか。

	完投数合計	五十嵐+佐々木登板数	チーム勝
初期データ	247	210＋179	716
完投型監督	551	254＋169	604

（10シーズン合計）

ポイント：完投型か継投型かは、先発、中継ぎ、抑えの実力を考慮したうえで決定したい。

選手起用　スタメンや代打決定の際、調子を重視するか実績を重視するかを設定。

●検証～実績を取るか、調子を取るか
実績を重んじるのが巨人の伝統。だが最近では調子のいい選手を起用することも多い。

	清原出場	清原打率	石井出場	石井打率
初期データ	1197	.260	1154	.284
調子重視型	1227	.282	1016	.294

（10シーズン合計）

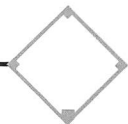
ポイント：調子のいい時に使われると成績はアップ。選手層が厚いなら調子重視でいくのも手だ。

打順の組替え　組替え「多い」だと、結果が出ない時の先発オーダーの組替えが増える。

●検証～打線を組み替えれば成績は上がる？
オーダーをいじれば打線に喝は入るのか？　日ハムを使って実験をしてみる。

	勝	得点	上田出場	上田打率
初期データ	711	6233	660	.263
組替え多い	677	6220	328	.218

（10シーズン合計）

ポイント：打順組替えはチーム成績より準レギュラー級の選手の個人成績に及ぼす影響が大きそうだ。

バント策　バントの作戦が多いか少ないかを設定。

●検証～バントで得点力はアップするか
意外とバントで走者を送ることが多い近鉄。もし強気の攻撃を試みたらどうなる？

	犠打(野手)	得点
初期データ	1352	6579
バント少ない	312	6583

(10シーズン合計)

ポイント：バントか強行か。得点力には差はないがチーム事情や試合展開によって使い分けるべし。

エンドラン策　エンドランが多いか少ないかを設定。

●検証～エンドランで得点力アップ？
機動力を生かした野球といえば広島。もし積極的にエンドランを仕掛けたら成績は？

	盗塁	得点
初期データ	705	6347
エンドラン多い	498	6684

(10シーズン合計)

ポイント：走力と巧打のある選手が揃っているなら積極的なエンドランで得点力はアップしそう。

盗塁策　盗塁のサインが多いか少ないかを設定。

●検証～盗塁は得点力アップに貢献する？
松井を筆頭に盗塁の多い西武。もし盗塁を控えたら得点力は下がるだろうか？

	盗塁	得点
初期データ	1076	7058
盗塁少ない	500	6950

(10シーズン合計)

ポイント：盗塁のメリットは大きい。特に俊足選手の揃ったチームでは積極的に盗塁サインを出そう。

エースの信頼度　エースをどのくらい長く投げさせるかを設定。

●検証～監督の志向が投手の成績も変える？
エース星野でもスパっと変えるオリックスの仰木監督。もっと星野を信頼してあげると？

星野の成績	防御率	完投	勝	敗
初期データ	4.41	3	110	128
信頼する	4.71	108	97	127

(10シーズン合計)

ポイント：投手の力量を見極めて、信頼するのか早めに継投するのかを考えたい。

抑えの信頼度　リリーフエースへの信頼度を設定。これが高いと登板機会が増える。

●検証～ストッパーが試合に果たす役割
中日には宣がいる。信頼は絶大だが、もし星野監督に使ってもらえないとしたら。

宣の成績	防御率	試合	勝	敗	S
初期データ	1.61	497	28	24	393
信頼度低い	1.94	365	41	35	246

(10シーズン合計)

ポイント：能力のあるストッパーがいるチームなら、どんどん登板させるほうがいい。

COLUMN

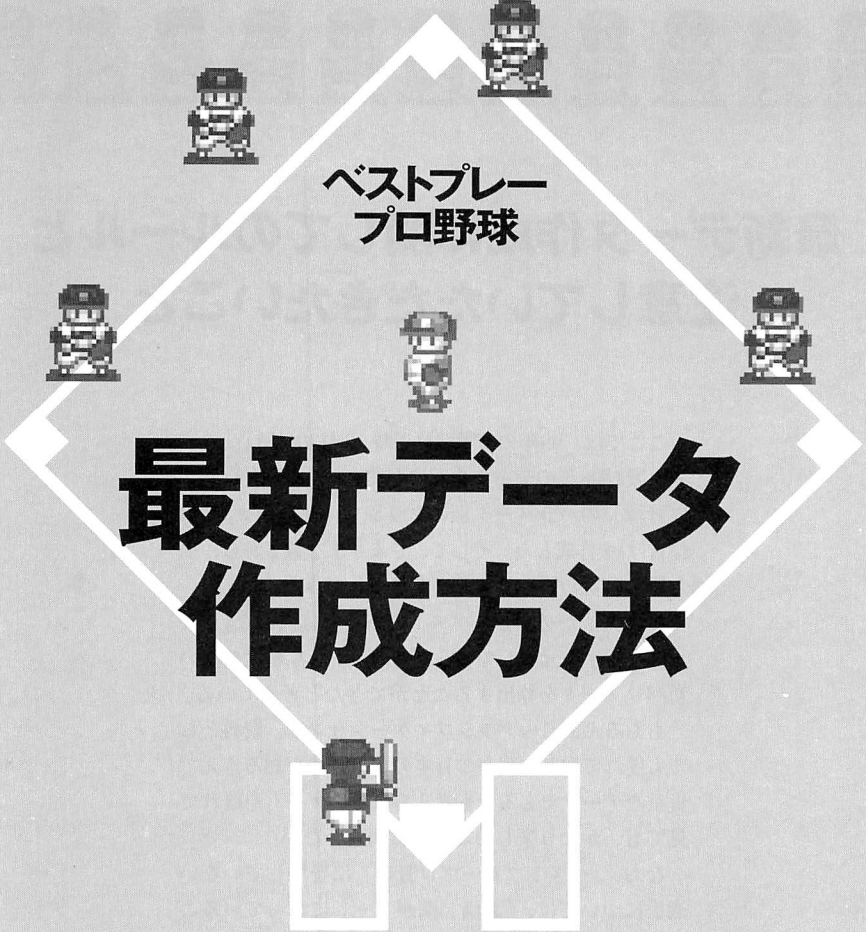
数あるパラメータの中から重要度の高いものに注目せよ

ベスプレ内に用意された数多くのパラメータ。本書では実際の成績に基づいて設定し直すという試みに取り組むわけだが、この方法だと当然、チーム間に戦力差が生じる。成績の悪いチームは所属選手の成績も悪いのが普通だからだ。

もちろん「弱いチームを俺の采配で優勝に導く」という遊び方も面白いのだが、友人が何人か集まって対戦する時にはチーム間の不公平が出ないようにしたいこともあるはず。そんな場合に一般に用いられているのが『ドラフト』と『オリジナルルール』である。

ドラフトは、参加者が自分のチームに欲しい選手を獲得していくというもの。本書冒頭のように空きチームから選択する方法もあれば、俺はイチロー、僕は佐々木と好きな選手を順番に取っていき、理想のチームを作り上げるという方法もある。パラメータをいじらなくてすむのでお手軽な方法だ。

オリジナルルールは、文字通りパラメータ調整のルールを策定してチーム間の戦力を拮抗させようとするもの。みんなが自分勝手にBをAに、AをSにと上げるのではなく、たとえば「Aの数は投打あわせて1チーム10個以内」とか「Sを6点、Aを5点……として、1チームのパラメータ合計が何点以内」など、細かな部分にまで及ぶルールを作ることになる。

ここでポイントとなるのが、どのパラメータを重視して選手を作るかということ。実はベスプレのパラメータには、1ランク上げると成績がグンとアップするものもあれば、あまり変わらないものもある。どうせなら効果の高いパラメータを重視して選手を作りたい。

まず野手では、捕手と二塁手とショートの守備、眼、足。初期データのヤクルト投手陣の防御率が意外なほど優秀なのは、捕手・古田の守備力がSと高いからだと推察される。捕手の守備力が高いと投手が安心して投げられるようだ。また二遊間は打球がよく飛ぶポジションなので、がっちり固めたい。眼が良くなると四球が増え、打率と出塁率が上がり、チームの得点力も上がると三重の効果が期待できる。足が速いと特に左打者では有利なのは、石井啄や松井稼などの活躍で立証済みだ。

投手では制球、球質、スタミナ。制球が悪くて球質が軽いと、走者をためてドカンという悪いパターンに陥ってしまう。またスタミナ不足の投手は急激に球速が鈍るので、メッタ打ちにあいやすい。

これらに気をつけていれば、かなり使えるオリジナルの選手を作ることができる。ドラフトを実施する際も、隠れた実力を持つ選手を獲得できるはずだ。

ベストプレー
プロ野球

最新データ作成方法

ご存知のように、「ベストプレープロ野球」に入っているデータは
1998年のシーズン終了時点でのものである。
99年に入り、野球界の地図も大幅に変わった。
ここでは、99年前半終了時の最新データを考えてみる。

最新データ作成に関してのルールと注意していただきたいこと

ここでは、99年の前半戦終了時（6月30日時点）のデータ及び98年のデータを元にして、「ベストプレープロ野球」のパラメータ別にクラシフィケーション（順位付け）を作成した。そして、さまざまな数字から、主力選手の新しいパラメータを算出してみた。

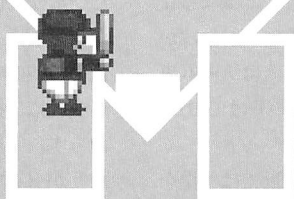
この方法が必ずしもベストであるとは言わないが、正確な数字を元にしているだけに、かなり精度の高い新パラメータを算出することができたと考えている。

もちろん、このクラシフィケーションは、資料としても優れており、現在の日本のプロ野球を知るうえで貴重なデータであるとも考えられる。ゲームを離れて見ても、かなり楽しめることは間違いない。

なお、「ベストプレープロ野球」に登場していない選手については、「評価」欄が「－」になっていることをご了承いただきたい。こうした選手のパラメータは、ご自身でお考えになるのも楽しいはずである。

ベストプレー
プロ野球

最新データ作成方法

セ・リーグ野手編

※各表の中の「DP」は初期パラメータを意味する。

最新データ作成方法
セ・リーグ野手編

防御力は確実に勝敗を左右する

投手の安定感に関わる捕手の守備と、ピンチを未然に防ぐための野手の守備力。どちらも長いペナントを戦い抜くうえで重要なポイントである。

捕手と内外野に分けて考えてみよう。

文句なしに球界ナンバーワンといえる古田だが捕逸は多い。ただしこれは投手に「思い切ったところへ投げさせる」ことの現われであり、また石井一のようにコントロールに難のある投手も多く、古田はそのとばっちりを受けていると考えられる。投手の力を安定して引き出すという意味では、やはり古田が一番だろう。中村にも同じようなことがいえそうだがリード全般の安定感では古田が上か。

健闘しているのは谷繁と矢野。昨季の横浜優勝にとって谷繁のリードはなくてはならないものだったし、矢野も野村監督のおかげか信頼感を増してきた。広島と巨人はチーム事情もあって捕手をあれこれと使い分けており、やや安定感に劣るようだ。

次に野手。広島勢は野村（最近では一塁を守ることも多い）や江藤、表外では木村など、かなり不満の残る数字だ。衰え、キャリア不足、故障など失策増の原因はそれぞれだが、それにしてもいただけない。

ポジション別では、一塁は清原、三塁は池山、ショートは宮本と二岡あたりが名手とはいえないまでも安心して見ていられる。二塁は各球団とも万全だ。一塁の守備を無難にこなすゴメスやマルティネスなど、外国人選手も大きな不安にはなっていないようだ。もっとも、上手いといえるのはローズだけだが。

外野手はエラーが出にくく判定は難しいが、たびたび美技も披露する波留の失策数の多さが少し不満。チーム的にはコンバートされた選手の多い中日や巨人に不安感が募る。リーグ全般に「抜群に上手い」という選手は見当たらず、守備範囲も加味すれば新庄と緒方あたりがトップというイメージか。外野についても助っ人外国人はマズマズのレベルだろう。

捕手

選手名	球団名	DP	試合	捕逸	評価
谷　繁	横　浜	B	63	2	B
中　村	中　日	B	61	7	B
村田真	巨　人	C	32	4	C
古　田	ヤクルト	S	64	8	A
西　山	広　島	B	45	4	B
矢　野	阪　神	C	65	4	B

野手

選手名	球団名	主守備	試合	失策	失策率	評価
駒田	横浜	一	66	7	0.106	B
ジョンソン	阪神	一	63	2	0.032	B
ローズ	横浜	二	65	2	0.031	B
仁志	巨人	二	56	4	0.071	B
和田	阪神	二	57	1	0.018	A
ゴメス	中日	三	66	9	0.136	C
池山	ヤクルト	三	38	2	0.053	B
江藤	広島	三	57	8	0.140	C
石井琢	横浜	遊	64	6	0.094	B
福留	中日	遊	66	9	0.136	C
二岡	巨人	遊	58	3	0.052	B
宮本	ヤクルト	遊	66	3	0.045	A
野村	広島	遊	52	14	0.269	D
今岡	阪神	遊	62	6	0.097	C
波留	横浜	外	63	6	0.095	C
鈴木尚	横浜	外	65	3	0.046	B
李	中日	外	63	3	0.048	C
関川	中日	外	66	2	0.030	B
井上	中日	外	64	1	0.016	B
高橋	巨人	外	64	1	0.016	B
清水	巨人	外	64	1	0.016	B
松井	巨人	外	64	1	0.016	B
ペタジーニ	ヤクルト	外	66	3	0.045	C
真中	ヤクルト	外	64	2	0.031	B
高橋智	ヤクルト	外	59	1	0.017	C
前田	広島	外	60	2	0.033	B
緒方	広島	外	60	0	―	A
金本	広島	外	63	3	0.048	C
新庄	阪神	外	55	2	0.036	A
坪井	阪神	外	65	2	0.031	B

最新データ作成方法

セ・リーグ野手編

走者を刺して失点を防ぐのは強肩

盗塁の刺殺やバックホームの阻止など、捕手＆外野手の『肩』は失点を防ぐための大きな要素。サードやショートにも強肩選手が欲しい。

野手で肩の強さが重視されるのは、主に捕手と外野。内野では一塁までの距離がある三塁手と遊撃手で重要になる。ここでは昨シーズンの盗塁阻止率と捕殺数を参考データとして各選手の「肩」を見ていこう。

まず捕手だが、古田の強肩ぶりは文句なし。数字的にはいい中村だが中日に左の先発が多いことに助けられている感があり、イメージとしては谷繁のほうが上だろう。瀬戸と矢野輝が続き、牽制の上手い投手が揃う巨人にいながら盗塁阻止率の低い村田真は、やや肩が不安といえるのではないだろうか。

右ページの表の「捕殺」というのは、その選手から他の塁へ送球した結果アウトになった数のこと。石井啄～和田までが内野手（三塁と遊撃）だ。守備機会に差があるうえ、守備が上手い選手は打球に追いつくケースも増え、それだけ捕殺数も多くなると考えられるため、単純に比較はできない。が、石井啄と宮本の守備＋肩は定評があり、今岡や久慈も安定しているのは確か。ゴメスと池山は「肩はいいが球に追いつけない」という感じで、野村と川相は衰えが見られる。

外野では新庄だろう。ゴロが高速になる人工芝と比べ、甲子園では「素早く打球に追いついて矢のような返球」が大切となる。その中での捕殺数12は胸を張れる数字だ。前田、松井、高橋も肩には定評があり、守備範囲の広さばかり目立つ飯田も意外と強肩だ。

こうして見ると、問題になりそうなのは中日、巨人、阪神。野手の守備位置を頻繁に入れ替えるこの3チームは、誰にどこを守らせるかが大きなポイントとなりそうだ。横浜、広島、ヤクルトは選手の層を考えるとそんな贅沢をいっている余裕はなく、守備や肩に目をつぶって選手を起用することになるだろう。

捕手

選手名	球団	盗塁企	盗塁刺	阻止率	DP	評価
古　田	ヤクルト	68	30	.441	A	A
中　村	中　日	81	33	.407	B	A
谷　繁	横　浜	92	37	.402	A	A
瀬　戸	広　島	53	19	.358	B	B
矢野輝	阪　神	80	26	.325	C	C
村田真	巨　人	63	20	.317	D	C

野手

選手名	球団	定位置	試合数	捕殺数	DP	評価
石井琢	横浜	遊	135	423	A	A
野村	広島	遊	130	374	B	B
今岡	阪神	遊	126	363	B	B
宮本	ヤクルト	遊	114	357	A	A
江藤	広島	三	132	243	C	C
川相	巨人	遊	89	214	C	C
進藤	横浜	三	119	184	B	C
久慈	中日	遊	72	181	B	B
ゴメス	中日	三	114	169	A	A
池山	ヤクルト	三	104	153	B	B
元木	巨人	三	60	64	C	C
和田	阪神	三	7	15	C	C
前田	広島	外	119	12	A	A
高橋	巨人	外	124	12	A	A
新庄	阪神	外	124	12	S	S
松井	巨人	外	135	12	A	A
金本	広島	外	131	11	B	B
飯田	ヤクルト	外	95	8	A	A
緒方	広島	外	103	8	B	B
波留	横浜	外	105	7	B	B
坪井	阪神	外	105	6	B	B
関川	中日	外	120	6	C	C
真中	ヤクルト	外	133	6	C	C
井上	中日	外	105	5	B	B
鈴木尚	横浜	外	130	5	C	C
立浪	中日	外	86	3	C	C
檜山	阪神	外	113	3	C	C
清水	巨人	外	126	3	C	C
佐伯	横浜	外	87	1	C	C
稲葉	ヤクルト	外	70	0	B	C

足 機動力が１点をもたらすこともある

積極果敢に次の塁を目指すのは野球の基本だ。特に足の速いランナーに単打や四球を許すことは、二塁打を相手に与えるのと同じ意味を持つ。

もともと機動力を売り物としている広島や、ベスト25に７人もランクインしているヤクルトに注目したい。

この２チームで特筆すべきは木村と飯田だ。広島の木村は当初、名前（キムタク）だけが先行している感があったが、今シーズンは一気に開花。打率も３割近く、レギュラーに定着すれば実に広島らしい「いやらしい」バッターに育ちそうだ。飯田は故障のため満足に試合に出られないが、それでも５位。24回出塁して８個の盗塁を決めているという率がスゴイ。飯田ともども注意が必要なのが緒方だ。長打が多くなって盗塁は減っているが、本来は盗塁王を争う力のある選手である。このほか、意外と盗塁の多い金本、江藤、古田、ペタジーニなど、広島とヤクルトの２球団はどこからでも走ってくると思っていい。

機動力を重視してチーム改造を実施しただけあって、中日からは李と関川が上位に顔を出し、それ以外の選手も頑張っている。ただし「李が出てクリーンナップが返す」というシーンをもっと作りたいところだが、その李にしても出塁率はギリギリ３割というところ。感覚としては「福留、李、関川の誰かが出て４～６番で返す」というイメージか。

それに対して横浜は１、２番コンビが足でかき回し、鈴木尚とローズで返すという特徴がよく出ている。鈴木尚自身も走れる選手であり、盗塁＋マシンガン打線でカサにかかって攻撃してきた時の得点力は他球団にとって脅威といえるだろう。

５人がランクインした阪神はプチ広島というイメージか。積極的に仕掛けていきたいのだが、それほど足の速い選手が多くないというイメージ。坪井は、二番にバント巧者の和田がいるとはいえ、トップバッターとしては不満の残る数字。坪井出塁→盗塁→和田が進塁打→主軸で返すという流れが生まれればチーム得点力ももっとアップするはずだ。

長年「走れる選手がいない」といわれているように、巨人からは２人のみ。クリーンナップに破壊力があり「下手に走るより一発で返す」という思想があって、そのおかげで本来はソコソコの足がある松井も走れないでいるなどというチーム事情はある。が、それにしても寂しいのは確かだ。

盗塁２つという選手は山のようにいる。実際に“走れる”というイメージで語られるのは右の表で５つ以上の選手となりそうだ。また足パラメータを設定する際には、各チームの監督の性格（盗塁策が多いか少ないか）にも注意したいところである。

野手

順位	選手名	球団名	盗塁	打席	DP	評価
1	李	中日	18	R	A	A
2	石井琢	横浜	15	L	A	A
3	波留	横浜	9	R	B	B
3	関川	中日	9	L	B	B
5	飯田	ヤクルト	8	R	A	A
6	緒方	広島	7	R	A	A
6	金本	広島	7	L	B	B
8	清水	巨人	7	L	B	B
9	江藤	広島	6	R	C	C
10	高波	阪神	5	R		—
10	仁志	巨人	5	R	B	B
10	古田	ヤクルト	5	R	C	C
10	ペタジーニ	ヤクルト	5	L		C
14	木村	広島	4	B	A	A
14	佐藤	ヤクルト	4	R		—
14	田中	阪神	4	L		—
14	新庄	阪神	4	R	C	B
14	坪井	阪神	4	L	B	B
19	種田	中日	3	R	C	C
19	岩村	ヤクルト	3	L		—
19	浅井	広島	3	L	C	C
19	真中	ヤクルト	3	L	B	B
19	矢野	阪神	3	R	C	C
19	鈴木尚	横浜	3	L	C	C
19	宮本	ヤクルト	3	R	B	B
26	ローズ(横浜)、久慈、立浪、中村、福留、ゴメス(以上中日)、二岡(巨人)、スミス(ヤクルト)、朝山、森笠、西山(広島)、檜山、星野、今岡(阪神)が各2個					

最新データ作成方法

セ・リーグ野手編

好球必打！
選球眼は打者の命

ボールを見極めることはバッティングの基本。ボール球には手を出さず、好球は見逃さずに打ちに行く姿勢が大切なのだ。

100打席以上の打者について1打席あたりの三振率を調べたのが右の表。ランクインした選手は3つのタイプに分けられそうだ。

まずはホームランバッター。ブロワーズやスミス、山崎、清原、池山、松井、江藤といったあたりがこのタイプ。特に外国人選手や山崎、池山あたりはどんな球でもブンブンと振りにいくという印象が強く、その大振りが三振数増加に結びついているように思える。もっとも選球眼に不安があるのが、このブンブンタイプだといえる。

続いて、まだキャリアが浅いバッター。福留、二岡、木村といった選手は、まだ一軍経験が浅く、プロの投手の球に戸惑っているという印象だ。ただしこれらの打者は打率的には3割前後をマークしており、まったく付いていけないというわけではない。恐らく“超一流の投手相手だと厳しいが、それ以外に対しては十分に対応できている”という感じではないだろうか。単純に選球眼が悪いと決めつけるのは早計だと思われる。

3つめがリーグを代表する巧打者。高橋と鈴木尚がこのタイプだ。リーディングを争うレベルにある両者だが、意外と三振が多い。これは投手が警戒して厳しいコースばかり攻めるというのが1つ、もう1つが積極的に振りにいく性格が原因だろう。単に選球眼が悪いわけではなく、落ちる球、ストライクからボールになる変化球を“振らされている”という印象だ。ブンブンタイプのうち、松井や駒田あたりも特に投手が警戒する対象で、膝元に落ちる球に苦しめられている。

以上のことから『眼』のパラメータを決定する際には次のようなことに注意しなければならないといえるだろう。

○三振が多いからといって、必ずしも選球眼が悪いわけではない。

○選球眼が多少悪くても、バットに当てるのは上手いというタイプがいる。

○選球眼が悪く、バットに当てるのも上手くはない（打率が低い）が、当たるとデカいという選手もいる。

○清原、松井、江藤のようにチームの主軸を担う選手は、三振も多いが四球も多い。単純に『眼』を悪くしただけでは三振増加＋四球減少となり、実状に合わない。よって「選球眼はいいがバットに当てるのは下手」というパターンの打者がいる可能性も高い。

いずれにせよ『眼』単独で考えるだけでは危険ということ。できれば他のパラメータ、特に『巧打』『長打』と合わせて選手の能力を考えることが重要だ。

野手

順位	選手名	球団名	打席数	三振	三振率	DP	評価
1	ブロワーズ	阪神	202	55	0.272	—	E
2	高橋智	ヤクルト	209	55	0.263	—	E
3	スミス	ヤクルト	204	53	0.260	—	E
4	山崎	中日	239	59	0.247	D	D
5	福留	中日	253	60	0.237	—	C
6	池山	ヤクルト	156	35	0.224	D	D
7	二岡	巨人	190	40	0.211	—	C
8	清原	巨人	205	42	0.205	D	D
9	西山	広島	147	28	0.190	C	D
10	高橋	巨人	271	51	0.188	C	C
11	矢野	阪神	239	44	0.184	C	C
12	木村	広島	117	21	0.179	D	D
13	ジョンソン	阪神	250	43	0.172	—	D
14	ペタジーニ	ヤクルト	283	48	0.170	—	D
15	江藤	広島	248	42	0.169	D	C
16	松井	巨人	290	49	0.169	C	C
17	檜山	阪神	126	21	0.167	E	D
18	金本	広島	267	43	0.161	D	C
19	佐伯	横浜	175	28	0.160	C	C
20	井上	中日	240	38	0.158	D	B
21	鈴木尚	横浜	297	47	0.158	B	B
22	駒田	横浜	286	45	0.157	C	C
23	中根	横浜	116	18	0.155	D	D
24	波留	横浜	295	45	0.153	C	C
25	仁志	巨人	234	35	0.150	C	C
26	元木	巨人	246	36	0.146	B	B
27	進藤	横浜	116	16	0.138	D	C
28	中村	中日	213	29	0.136	D	C
29	新庄	阪神	238	32	0.134	D	C
30	関川	中日	287	38	0.132	B	B

セ・リーグ野手編

実　績　ここ一番ではキャリアに頼れ

シーズンも終盤に差しかかると、ベテラン選手が意外な活躍を見せることがある。タイトルやペナントを争った経験が最後の最後に発揮されるのだ。

実績というのは実に抽象的なもので、正直どんな風にでも決めることができる。設定する際には「何を重視するか」を明確に決めてから臨むようにしたい。

各チームの主力を構成する選手5人、計30人についてのデフォルトパラメータを調べたのが右の表だ（福留はリザーブ扱いなので空欄とした）。ベスプレでの『実績』が単純に獲得タイトルと連動していないことがわかる。どうも個人的な成績だけでなく「チームの勝利にどれだけ貢献してきたか」「シーズンを通じて活躍した経験があるか」もポイントとなっているようだ。

実績に文句のつけようのないのは古田くらいのものだろう。自身、91年に首位打者を獲得しただけにとどまらず、好リードで投手の持ち味を十分に引き出し、4度の優勝に対する貢献度は群を抜いている。チーム同様シーズンごとの好不調の波が大きいが、全選手中でトップの実績を誇るといっていいはずだ。

鈴木尚とローズもタイトル獲得経験があり、間違いなくチームの主軸を担っている。98年の横浜の優勝にはなくてはならなかった存在でもある。駒田もチームを引っ張ったし、石井も盗塁王を獲得。この両者の実績も評価したいところだ。

近年の中日の野手で主要タイトルを獲得したのは山崎（96本塁打王）のみ。その他の選手についてはタイトルより「チームの勝利への貢献度」が重視されているように思える。そう考えれば福留は他の新人よりワンランク上に位置するのが妥当だろう。

ジャイアンツでは、昨年念願の本塁打王を獲得し、ついでに打点王ともなった松井がトップ。これは妥当だが問題は清原の扱い。確かに日本を代表する打者であり、西武時代にはチームの優勝に貢献してきた存在だが、タイトル獲得経験がない。また高橋も「まだ2年め」と考えるか「すでにチームの顔」と考えるかで評価が分かれるところだろう。

古田以外のヤクルトの選手は、やや印象が薄いという感が否めない。誰かがチームを引っ張るのではなく一丸となって勝ち星を連ねてきたからだろう（強いていえば野村監督が引っ張ってきたというところか）。

広島では野村、江藤がトップだろう。前田は確かにチームの中心で潜在能力は申し分ないが、清原と同様、故障などでチームへの貢献度が薄いのが気にかかる。また阪神で和田がトップなのは間違いないが、他球団の主力との比較も考えたいところ。坪井には高橋と同程度の評価を与えたいがどうだろう。

野手

選手名	球団名	DP	近年の実績	評価
鈴木尚	横浜	A	97、98首位打者	A
ローズ	横浜	A	93打点王	A
駒田	横浜	A	98ゴールデングラブ賞	A
立浪	中日	A	88新人王	A
ゴメス	中日	A		B
松井	巨人	A	98本塁打王、打点王	A
清原	巨人	A	96新人王	A
古田	ヤクルト	A	91首位打者／97MVP	A
野村	広島	A	90、91、94盗塁王	A
前田	広島	A	94ゴールデングラブ賞	A
江藤	広島	A	93、95本塁打王	A
和田	阪神	A	94ゴールデングラブ賞	A
石井琢	横浜	B	98盗塁王	B
李	中日	B		B
池山	ヤクルト	B	92ゴールデングラブ賞	B
金本	広島	B		C
緒方	広島	B	95、96、97盗塁王	B
谷繁	横浜	C	98ゴールデングラブ賞	C
関川	中日	C		C
仁志	巨人	C	96最優秀新人	C
高橋	巨人	C	98ゴールデングラブ賞	C
マルチネス	巨人	C		C
真中	ヤクルト	C		D
土橋	ヤクルト	C		C
馬場	ヤクルト	C	96ゴールデングラブ賞	D
坪井	阪神	C	新人最高打率	C
新庄	阪神	C	98ゴールデングラブ賞	C
矢野	阪神	C		C
今岡	阪神	D		C
福留	中日	—		D

最新データ作成方法

セ・リーグ野手編

スタミナ　長いシーズンを乗り切るパワー

1シーズン135試合。この長丁場で安定した成績を残すために必要なのがスタミナ。チームの主軸打者には特に要求されるパラメータだ。

選手のスタミナを計る目安として出場試合数を取り上げてみた。シーズンを通してスランプや故障がなく、ゲームに出続けた実績をスタミナとして考えようというわけだ。

まず気になるのはヤクルトだ。チームの要である古田ですら時折休みを挟んでいるが、捕手という故障の多いポジションだからこれは仕方あるまい。が、それ以外のポジションについては選手を使い分けているのが実状。主力の故障や若手の伸び悩みなどが原因でメンバーを固定できない悩みを抱えている。成績が選手起用に大きく左右されるチームといっていいだろう。

広島も、安心して使えるのは金本くらい。その他の主力選手は、前田は故障がち、江藤も不運なケガが多く、野村には衰えが見られる。これらに緒方、町田、浅井、瀬戸らが加わった打線そのものに破壊力はあるのだが、好調なままそろうことが少ないのが弱点である。木村ら元気な若手や外国人選手の使い方がカギとなりそうである。

巨人もフルシーズン・フルイニング戦えるのは松井のみといっていい。高橋も2年目で安定感が増してきた。ただこの2人は時折パタっと当たりが止まることがある。清原、仁志にはフルシーズンはきつく、清水は相手投手によってはスタメンからはずされるケースが多い。表外では元木や捕手勢にも不安アリ。新人の二岡も未知数だ。ただし石井、マルチネス、広沢、後藤、川相と選手層が厚いことが救いであり、巨人の強みである。

今季好調の中日も少し心配だ。関川は外野に馴れてきたようで好調をキープしているが、李は故障が多く、ゴメスや立浪もシーズン中のどこかでスランプに陥ることがある。新人の福留もフルシーズンとなると疑問だろう。ただしこちらも層が厚い。山崎、久慈のほかに渡辺、井上の成長もあり、代打陣も信頼感がある。これが強さの秘密だろう。

全チーム中で比較的安定しているのが横浜だ。フル出場を続ける駒田を筆頭に、ほとんどの選手が（たまの休みはあるが）シーズンを通じての活躍を見せる。特に昨季は石井を1番に固定できたのが大きかった。ただし選手層は厚くない。主力がケガやスランプに陥った時にどう乗り切るかが最大のポイントだ。

阪神は各選手が地道に力をつけてきたという印象。ただしフルシーズンを通して戦ったキャリアのある選手が少なく、野村監督になってさらに細かな選手起用が目立つ。層が厚いわけではなく、言葉は悪いが調子のいい選手を優先して使う「ゲリラ戦法」を取りたい。

野手

選手名	球団名	DP	試合数	チーム	昨季	評価
鈴木尚	横浜	B	65	66	131	B
ローズ	横浜	B	65	66	124	B
駒田	横浜	A	66	66	136	A
立浪	中日	B	58	66	134	B
ゴメス	中日	B	66	66	116	A
松井	巨人	A	64	64	135	A
清原	巨人	B	53	64	116	D
古田	ヤクルト	A	64	66	132	A
野村	広島	A	52	63	135	B
前田	広島	B	60	63	127	B
江藤	広島	B	57	63	132	B
和田	阪神	C	57	65	130	B
石井琢	横浜	B	64	66	135	A
李	中日	A	63	66	67	C
池山	ヤクルト	B	38	66	118	C
金本	広島	A	63	63	133	A
緒方	広島	B	60	63	107	B
谷繁	横浜	B	63	66	134	A
関川	中日	C	66	66	125	B
仁志	巨人	C	56	64	106	C
高橋	巨人	B	64	64	126	B
清水	巨人	C	64	64	129	C
真中	ヤクルト	D	64	66	133	C
土橋	ヤクルト	C	39	66	117	C
馬場	ヤクルト	D	23	66	71	D
坪井	阪神	C	65	65	123	B
新庄	阪神	A	62	65	132	A
矢野	阪神	C	65	65	133	B
今岡	阪神	C	62	65	133	B
福留	中日	—	66	66	—	C

安打を生むのは ミートするセンス

バットに当てなければヒットは生まれない。当てるのが上手いか、右へ左へ打ち分ける巧みさを持っているかどうかということは、そのまま打撃成績に反映される。

ベスプレでの『巧打』はバットに当てる巧さと定義されているため、これが高い選手はヒットが増え、空振り（三振）が減ることになる。全パラメータの中でもかなりわかりやすい部類に入るといえるだろう。

今季および昨季の打撃成績を見てみよう。昨シーズンの上位３名、鈴木尚、前田、坪井は今季それぞれ６位、７位、９位に甘んじているが、これは上にいる選手があまりにも調子がいいため。本人たちの数字は昨季と同程度であり、決して打てていないわけじゃない。

ローズの頑張りには恐れ入る。今季限りでの引退をほのめかした途端、打ちに打ちまくっている。もともとバッティングセンスには非凡なものがあり、日本に来て３割を切ったのは一度だけという安定感がスゴイ。

高橋の成長にも目を見張るばかりだ。スイングスピードの速さが武器で、鋭い打球で安打になるのが特徴。ただし三振も多く、何でもかんでも振りにいくという姿勢は昨シーズンのままに思える。

ほかにも昨季に比べて成長している選手は多い。特に関川、矢野の変身ぶりには驚かされる。関川は外野の守備に馴れたこと、矢野は野村監督から信頼されて使ってもらっていることが自信につながっているようだ。清水は年々左を苦にしなくなってきている。井上、木村らはレギュラーに定着するようになって確実性が出てきた。

新人では、やはり福留。ここのところセ・リーグは新人の豊作続きだが、今年の野手の筆頭格が彼。三振数はダントツに多いが、それを補って余りある鋭いバッティングを披露している。表外では二岡の評価が高い。６月にやや調子を落としたが、７月には爆発してすっかりチームになくてはならない選手になった。今年も新人王レースは面白そうだ。

町田、古田はチームが不振なぶん自分が頑張ろうという意志が強いのか、かつての調子を取り戻したというイメージだ。高橋智も新天地でふたたび花開こうとしている。新庄は野村監督と肌があったという感じで、数字じたいはまだまだ低いが本来の実力を発揮し始めている。

逆に物足りないのは外国人選手。横浜の２人以外はスタメン確保も難しいという選手が多く、安定感に乏しい。

また各選手とも昨季以上の成績をあげている（調子の落ちる夏前なので当然だが）中で、横浜勢の多くが昨季並か昨季以下。これが勝てない原因の１つとも思える。後半戦でエンジンがかかってはきたが……。

野手編

守備
肩
足
眼
実績
スタミナ
巧打
長打
信頼
対左
打撃指数

野手

順位	選手名	球団名	打率	犠打	三振	昨季打率	評価
1	ローズ	横浜	0.382	0	36	0.325	S
2	高橋	巨人	0.348	1	51	0.300	A
3	関川	中日	0.348	6	38	0.285	A
4	石井琢	横浜	0.336	1	38	0.314	C
5	矢野	阪神	0.335	3	44	0.211	B
6	鈴木尚	横浜	0.335	1	47	0.337	A
7	前田	広島	0.330	2	19	0.335	A
8	和田	阪神	0.330	6	20	0.272	A
9	坪井	阪神	0.322	1	36	0.327	A
10	古田	ヤクルト	0.320	2	19	0.275	A
11	清水	巨人	0.320	7	24	0.301	A
12	ポゾ	横浜	0.317	0	25	—	B
13	町田	広島	0.315	0	13	0.244	B
14	真中	ヤクルト	0.314	3	25	0.275	B
15	江藤	広島	0.313	0	42	0.253	C
16	駒田	横浜	0.306	0	45	0.281	C
17	松井	巨人	0.305	0	49	0.292	C
18	井上	中日	0.302	0	38	0.264	C
19	福留	中日	0.301	6	60	-	C
20	緒方	広島	0.299	1	29	0.326	C
21	仁志	巨人	0.299	5	35	0.274	C
22	野村	広島	0.299	1	21	0.282	C
23	高橋智	ヤクルト	0.298	1	55	0.182	D
24	木村	広島	0.297	9	21	0.244	D
25	谷繁	横浜	0.293	5	23	0.254	D
26	立浪	中日	0.292	2	21	0.272	C
27	新庄	阪神	0.282	1	32	0.222	D
28	檜山	阪神	0.282	3	21	0.226	D
29	ペタジーニ	ヤクルト	0.281	0	48	—	D
30	金本	広島	0.279	0	43	0.253	D

セ・リーグ野手編

長打　ゲームを一発で決める長距離砲の威力

弾き返された打球が、夜空へ、場外へ、バックスクリーンへと向かって鮮やかなアーチを描く。なんといっても野球の華はホームラン。

本塁打王を争う顔ぶれを見ると、2つのタイプが存在することに気づく。1つは純粋な長距離打者、もう1つは、そこそこ飛距離もある中距離タイプだ。パラメータを決める際にも「当たればデカイ」と「当てるのが上手く飛距離もまあまあ」というタイプに分けると考えやすいのではないだろうか。

前者の筆頭は、やはり松井。昨年ようやく念願のタイトル（本塁打王と打点王の二冠）を獲得し、今シーズンも好調キープ。大リーグのサミー・ソーサに倣って今年から取り組み始めた「身体の中心にもう1本足がある感じで、コマのように回転して打つ」という新打法が功を奏しているようだ。飛距離も申し分なし。東京ドームの看板や3階席のお客さんの弁当を直撃するだけの威力を持っているし、広島市民球場や横浜スタジアムなら場外へ運ぶだけのパワーがある。他の選手よりワンランク（少なくとも0.5ランク）上の長打力を持っていると考えていいだろう。

昨季以上のペースで本塁打を量産しているゴメスや、ペタジーニ、ジョンソン、スミスら外国人勢も長距離砲。打率面は物足りないが、当たれば跳ぶという助っ人外人特有のパワーは素直に評価したい。表には登場していないがマルチネスもこのタイプだろう。

日本人選手では金本、山崎、新庄、清原、池山、大豊が当てはまる。いずれも選球眼に不安があったり内角攻めに苦労したりでアベレージは上がらないが、ツボにはまった時の打球の飛距離には惚れ惚れさせられる。

いっぽう中距離タイプの特徴は、本塁打と同時にアベレージも稼ぐこと。バットに当てるのが上手いぶん、安打の延長としてホームランも出るというイメージだ。その中でも飛距離に長けているのが巨人の高橋と、横浜を引っ張るローズ。どちらも昨年までは純中距離打者というイメージが強かったが、今シーズンは飛距離も格段にアップした。この2人はさまざまな能力がバランスよく秀でているという印象がある。

鈴木尚、前田、古田といったリーグを代表する巧打者も明らかに中距離タイプ。駒田や江藤は長距離型から徐々に中距離型へとシフトしてきたという印象だ。また緒方は96年に23本を放っているように、意外とパワーはある。が、足を生かすために中距離型へと変貌を遂げつつあるといった感じか。

特筆すべきは福留、二岡の両新人。彼らも中距離タイプだが長打力もなかなかで、混戦で力を発揮する勝負強さも備えているように思える。要注目の選手たちである。

野手

順位	選手名	球団名	長打率	本塁打	昨季本塁打	評価
1	松井	巨人	0.644	23	34	S
2	ローズ	横浜	0.691	21	19	A
3	高橋	巨人	0.643	20	19	A
3	ペタジーニ	ヤクルト	0.583	20	—	A
3	ゴメス	中日	0.580	20	26	A
6	緒方	広島	0.584	17	15	B
7	金本	広島	0.524	15	21	A
8	ジョンソン	阪神	0.505	14	—	A
9	江藤	広島	0.587	13	28	A
9	高橋智	ヤクルト	0.550	13	0	A
11	スミス	ヤクルト	0.500	12	—	B
11	山崎	中日	0.476	12	27	A
13	鈴木尚	横浜	0.522	11	16	B
14	前田	広島	0.504	10	24	B
14	新庄	阪神	0.495	10	6	B
14	清原	巨人	0.463	10	23	B
17	二岡	巨人	0.445	9	—	B
18	ポゾ	横浜	0.475	8	—	C
18	古田	ヤクルト	0.474	8	9	B
18	ブロワーズ	阪神	0.406	8	—	B
18	池山	ヤクルト	0.403	8	18	B
22	大豊	阪神	0.655	6	21	A
22	町田	広島	0.587	6	4	C
22	福留	中日	0.447	6	—	C
25	石井	巨人	0.514	5	4	B
25	駒田	横浜	0.424	5	9	C
25	波留	横浜	0.392	5	2	D
25	李	中日	0.379	5	13	C
25	中村	中日	0.358	5	10	C
30	井上（中日）ら5人			4		

最新データ作成方法
セ・リーグ野手編

信頼 チャンスで打つ それこそが主軸

得点圏に走者を置いた時に、どれだけ打てるか。クリーンアップにとっては重要な能力だが、代打あるいは下位打線に勝負強い打者がいるのも相手にとってはイヤなものだ。

単純に順位を見るのではなく、通常打率との差を見ていったほうがいいかも知れない。

堂々のトップは高橋。通常打率との差も大きく併殺も少ない。勝負強いというより「天性のスター」といったほうがいいか。試合を決める打点も多く、信頼度はけっこう高い。同じ巨人では元木が面白い。普段は並以下の打率で併殺も多いのだが、いざ得点圏に走者がいるとなると人間が変わる。表外では石井の集中力も定評のあるところだ。

福留&井上の勝負強さを見ると、中日の強さがよくわかる。要するにどこからでも点を取れる打線なのだ。表外の渡辺や神野が代打としていい働きをしているのも見逃せない。また相手投手がクリーンアップを打ち取ってホッとした瞬間にガツンとくる山崎の働きも心強い。元木と並んで理想的な6番打者だ。

広島では緒方と前田の成績がいい。他の打者が不調であるぶん（この2人も万全の状態ではないが）チームを引っ張っていこうという自覚が強いのだろう。頼れるバッターだ。また若手代打陣もキャリアが少ない割には比較的調子がよく、レギュラー獲りに必死になっている雰囲気が伝わってくる。

横浜勢では谷繁と石井啄。特に谷繁の働きは立派で「自分で攻撃を終わらせない」という8番打者としての仕事をまっとうしている。阪神では坪井の働きが目立つが、その前後で点を取れないのがツライ。

逆にチャンスでの弱さということになると、2つのタイプがあるようだ。

1つは力んでしまうタイプ。一発長打のあるゴメスや松井、表外では江藤や金本が当てはまる。ただし犠牲フライ7本のゴメスや4本の松井など、最低限の仕事はこなすこともある。また併殺ゼロの松井、2個の金本、江藤のようにチャンスをつぶさないよう心がけてはいるようで、その点は救いか。

もう1つが苦手投手をぶつけられる打者。特にワンポイントリリーフを持ってこられるケースの多い主軸左打者は不利といえる。

これらのことを抜きにしても、古田、ペタジーニ、野村、松井、ゴメス、清水、和田（なんと10併殺）、表外では金本（.234）、江藤（.204）、李（.204）、宮本（.180）あたりの数字には大いに不満が残る。いずれもチームの主軸または次へつなぐ役割を持っている打者だけに、もうひと踏ん張りが欲しい。また昨季代打成功率リーグNo.1の横浜の代打陣が、やや調子を落としているように思えるのも気にかかるところだ。

※右表は7/7時点の成績

野手

順位	選手名	球団名	得点圏打率	打率	打点	犠飛	併殺打	評価
1	高橋	巨人	0.416	0.330	68	1	2	+1
2	福留	中日	0.391	0.307	28	2	2	+1
3	井上	中日	0.391	0.302	36	2	5	+1
4	谷繁	横浜	0.383	0.293	22	2	9	+1
5	緒方	広島	0.372	0.304	45	1	3	+1
6	坪井	阪神	0.369	0.318	29	2	3	+1
7	ローズ	横浜	0.365	0.378	78	2	9	+2
8	前田	広島	0.357	0.328	45	2	7	+1
9	元木	巨人	0.352	0.235	24	1	9	+1
10	仁志	巨人	0.350	0.301	22	2	4	+1
11	石井琢	横浜	0.348	0.329	34	2	2	+1
12	関川	中日	0.342	0.341	39	6	5	0
13	矢野	阪神	0.338	0.317	23	1	7	0
14	真中	ヤクルト	0.333	0.309	28	1	3	0
15	波留	横浜	0.330	0.287	38	0	4	0
16	鈴木尚	横浜	0.326	0.325	54	2	8	0
17	山崎	中日	0.305	0.242	48	1	8	+1
18	立浪	中日	0.297	0.295	31	2	6	0
19	ブロワーズ	阪神	0.292	0.237	37	0	3	+1
20	新庄	阪神	0.282	0.285	39	1	6	0
21	古田	ヤクルト	0.273	0.324	33	0	3	0
22	ペタジーニ	ヤクルト	0.262	0.304	45	0	9	-1
23	今岡	阪神	0.261	0.275	24	0	9	0
24	野村	広島	0.255	0.287	19	1	5	-1
25	松井	巨人	0.254	0.292	53	4	0	0
26	ゴメス	中日	0.253	0.282	61	7	7	0
27	清水	巨人	0.250	0.310	20	1	3	-1
28	駒田	横浜	0.250	0.297	31	3	8	-1
29	ジョンソン	阪神	0.241	0.263	45	4	7	0
30	和田	阪神	0.239	0.329	15	0	10	-2

セ・リーグ野手編

対左 左キラーを確保せよ

左のワンポイントリリーフ対策のために、ベンチには左キラーの代打を置いておきたい。もちろん右も左も苦にしないバッターをスタメンに揃えるのが理想ではあるが。

ここでは各球団の主力を中心に、右投手が相手の時と左投手が相手の時とで成績が大きく違う打者をピックアップして分析してみよう。右ページをご覧いただければわかるように、おおむね左打者は左投手を苦手としているが、だからといって右打者がみんな左投手を得意としているわけではないようだ。

まず左打者を見てみよう。左投手にかなりてこずっているのが久慈、井上、金本、檜山といったあたり。久慈はもともと守備の人、井上は今季に入って進歩が見られるが、金本と檜山はパワーで振り回すタイプで明らかに左投手によるインコース攻めが苦手だ。駒田はコンパクトに、清水や稲葉はシャープにバットを振ってミート技術はあるのだが、相手が左だと意識過剰になって体が開き気味になる。鈴木尚や坪井は左から2割8分をマークしていて十分とも思えるが、やはり若干開き気味になったり中途半端なスイングになったりして「苦にしない」とまではいい切れない。

松井は印象以上に左を打っている。これも得意とまではいえないが、相手が左投手の時のほうが、いわゆる“壁”を意識したバッティングとなって好結果を出しているようだ。ちなみに左を苦にしない左打者には浅井、表外では関川、高橋、前田などがいる。いずれも、きれいなフォーム＋来た球に素直に反応するタイプで、どんな投手に対しても同じように実力を発揮できているようだ。

右打者では、サウスポー独特の胸元にズバっと決まるストレートや膝元のスライダーを苦手とするバッター、あるいは左の一流投手(野口、山本昌、石井一など）が出てくるとまったくダメという打者が目につく。波留、ゴメス、中村、清原、宮本あたりがこういうタイプ。逆にインコースの速い球を強引に引っ張る村田や新庄、おっつけるのが上手いローズ、広沢、古田、土橋、和田などは左投手キラーとなっている。もっとも、野口は打てても石井一は打てない新庄、その石井一を打ち込んでいる左の金本と坪井など、一筋縄でいかないのが野球の面白いところだ。

チーム別に見ると、やはり横浜のバランスがいいように思える。広島もスキが少ない。ヤクルトも同様だが、横浜や広島と比べてバッティングそのものが悪いのが難点だ。逆に中日が左を苦手とするのが意外。また阪神は選手ごとのバラつきが大きい。巨人も数字以上に左投手を苦手としており、この2チームは相手が不調だと簡単に打ち崩すが、好調だと手も足も出ないというイメージ。大勝か大敗かというチームカラーがうかがえる。

野手

選手名	球団名	打席	昨季打率	対右投手	対左投手	左得意か?	評価
ローズ	横浜	R	0.325	0.309	0.358	○	+2
谷繁	横浜	R	0.254	0.236	0.298	○	+1
鈴木尚	横浜	L	0.337	0.367	0.288	×	-1
駒田	横浜	L	0.281	0.290	0.267	×	-1
波留	横浜	R	0.273	0.281	0.259	×	0
李	中日	R	0.283	0.295	0.227	×	0
ゴメス	中日	R	0.274	0.289	0.216	×	0
中村	中日	R	0.236	0.242	0.208	×	0
久慈	中日	L	0.249	0.261	0.200	×	-2
井上	中日	L	0.264	0.279	0.190	×	-2
広沢	巨人	R	0.301	0.276	0.338	○	+2
村田真	巨人	R	0.268	0.247	0.325	○	+2
松井	巨人	L	0.292	0.290	0.294	△	-1
清水	巨人	L	0.301	0.311	0.271	×	-1
清原	巨人	R	0.268	0.280	0.231	×	0
古田	ヤクルト	R	0.275	0.273	0.283	○	+1
土橋	ヤクルト	R	0.259	0.255	0.276	○	+1
副島	ヤクルト	L	0.266	0.269	0.243	×	-1
稲葉	ヤクルト	L	0.279	0.287	0.238	×	-2
宮本	ヤクルト	R	0.258	0.272	0.212	×	0
浅井	広島	L	0.271	0.260	0.370	○	0
木村	広島	B	0.244	0.202	0.333	○	+1
緒方	広島	R	0.326	0.338	0.293	×	0
金本	広島	L	0.253	0.274	0.215	×	-2
瀬戸	広島	R	0.233	0.257	0.177	×	0
和田	阪神	R	0.272	0.252	0.333	○	+2
八木	阪神	R	0.282	0.264	0.317	○	+2
坪井	阪神	L	0.327	0.340	0.284	×	-1
新庄	阪神	R	0.222	0.207	0.266	○	+1
檜山	阪神	L	0.226	0.239	0.193	×	-2

セ・リーグ野手編

打撃指数 独自の指数は調子のバロメータ

**ベスプレならではのユニークなパラメータ。
打者の調子の上下、すなわち安定感を左右する重要なものと認識せよ。**

ベスプレでの『打撃指数』は、主にバッティングの調子を示すパラメータだ。ヒットを打てば増え、凡退すれば減る。つまり打撃指数が低くなっている選手は不調、高くなっているなら好調を示していると考えていい。多くの選手は夏場になるとスタミナ切れを起こし、少しずつ打撃指数が落ちていく（ヒットが出ない)。また最初に設定する打撃指数はシーズン開幕当初の調子ともいえるだろう。

そこでここでは選手の“調子”というものを考えてみたい。たとえば松井。98年開幕当初は「身長より打率のほうが低い」と松井自身が自嘲したほどの不振だった。ところが暖かくなるにつれて全開モードに入り、最終的には打率292プラス本塁打王。今年も同様の傾向にあり、典型的なスロースターターだ。ほかではゴメスあたりが体調が上がるにしたがって成績も上げているようだ。

逆に開幕当初は好調だが、最終的な打率はやっぱり実力通りという選手は毎年のように見かける。近年ではヤクルト移籍後の小早川、昨年は度会や桧山がそうだった。今年でいえば矢野、町田、真中あたりが危ないが、矢野は野村監督のおかげで攻守ともに本格化したという可能性がある。町田、真中もチームが不審なぶんの頑張りと見て取れ、気持ちを切らさなければこのままシーズンを乗り切れるだけの力はもっているはずだ。

シーズンを通じての安定感ということになると、やはりリーディングを争う各打者ということになる。たとえば今季絶好調のローズだが、もともとスランプらしいスランプがなく、どんな状況でも冷静というイメージのある選手。この点では鈴木尚や前田、高橋らに比べると上であり、安心して4番を任せられる由縁だろう。和田や駒田のようなベテラン勢にも同じようなことがいえる。

新人や新加入の外国人は、２つのタイプに大別できる。前半好調だが投手にクセを覚えられて下降するタイプと、逆に最初は打てないが馴れるにしたがって成績を上げるタイプ。前者は一発型の外国人に多く、後者は昨年の高橋や坪井など、もともと素質のある若手に多い。調子という言葉とはやや意味合いが異なるが、これも打撃指数をやりくりして再現してみたいところだ。

再現しにくいのは、ある一時期だけ、または特定の球団相手にだけ素晴らしい活躍を見せるタイプ。巨人戦ではよく打つとか、横浜相手だと強いという打者は意外と多いものだ。また古田のようにシーズンによって大きく成績が変わるという選手も難しそうだ。

野手

順位	選手名	球団名	打率	打数	安打	昨季打率	評価
1	ローズ	横浜	0.382	259	99	0.325	340
2	高橋	巨人	0.348	244	85	0.300	320
3	関川	中日	0.348	253	88	0.285	310
4	石井琢	横浜	0.336	256	86	0.314	310
5	矢野	阪神	0.335	206	69	0.211	290
6	鈴木尚	横浜	0.335	272	91	0.337	330
7	前田	広島	0.330	230	76	0.335	330
8	和田	阪神	0.330	200	66	0.272	300
9	坪井	阪神	0.322	264	85	0.327	320
10	古田	ヤクルト	0.320	253	81	0.275	300
11	清水	巨人	0.320	250	80	0.301	305
12	ポゾ	横浜	0.317	183	58	—	290
13	町田	広島	0.315	92	29	0.244	280
14	真中	ヤクルト	0.314	242	76	0.275	280
15	江藤	広島	0.313	208	65	0.253	280
16	駒田	横浜	0.306	271	83	0.281	280
17	松井	巨人	0.305	239	73	0.292	290
18	井上	中日	0.302	215	65	0.264	280
19	福留	中日	0.301	219	66	—	280
20	緒方	広島	0.299	221	66	0.326	300
21	仁志	巨人	0.299	211	63	0.274	290
22	野村	広島	0.299	201	60	0.282	290
23	高橋智	ヤクルト	0.298	191	57	0.182	260
24	木村	広島	0.297	101	30	0.244	270
25	谷繁	横浜	0.293	222	65	0.254	270
26	立浪	中日	0.292	209	61	0.272	280
27	新庄	阪神	0.282	216	61	0.222	270
28	檜山	阪神	0.282	110	31	0.226	260
29	ペタジーニ	ヤクルト	0.281	228	64	—	260
30	金本	広島	0.279	229	64	0.253	270

COLUMN

全球団が極端な策に走ったら!?
守備と機動力のチームが強かった！

ベスプレの特徴はリアルすぎるほどリアルなことにあるが、時にはハメを外して、実際のプロ野球ではあり得ないような遊び方をしてみるのもいい。ここではデフォルトデータを基準として〝ゼ・リーグ各球団の特徴をハッキリと打ち出す〝遊び〟にトライしてみよう。

まずは横浜。港ヨコハマは国際都市だから、このチームには外国人選手を集めることにしよう。足りない分はリザーブ選手で埋め、捕手にはカタカナ登録のカツノリを採用。李にローズ、ゴメスにペタジーニなど、なかなかの打線だ。

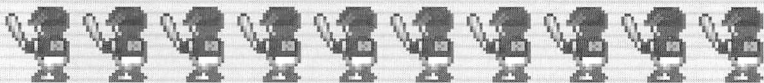
中日はナゴヤドームに移ってから守りを固めた。そこで守りのいい選手を集結。捕手の古田を中心に、駒田、立浪、馬場、宮本と鉄壁の布陣。コツコツ当てるバッティングも得意そうだ。

大砲好きの巨人にはホームランバッター（長打力AとB）を集め

る。松井、江藤、山崎、金本や高橋など1番から8番までクリーンアップという感じ。リザーブから小久保や垣内を獲得する荒技、捕手がいなくなったため大豊にマスクを被らせるというチグハグな補強もジャイアンツっぽくていい。

広島といえば機動力。そこで足の速い選手ばかり集めることにした。足Aには石井琢、緒方、飯田、足Bには野村、清水といった巧打者がいて、なかなか力もありそう。関川が捕手に返り咲いたが、一塁手がいないのは不安だ。

今季、監督に野村克也を迎えた阪神は、ノムさんに鍛え直してもらおうと捕手ばかりがズラリと並ぶ。谷繁、西山、村田……。しかしスタメンで使える捕手はひとり。結局は和田、八木、風岡など控え選手の出番が増えることに。

そんな阪神の姿を怪訝に思ったか、野村監督はヤクルト残留。チー

ムには他球団から弾き出された選手が集まることになった。中根、種田、浅井……。さすがに野村再生工場というメンバーである。

以上のチーム（投手と監督は初期データのまま）を戦わせてみたところ……、中日が圧勝。もともと投手陣がいいところへ古田が加わったのだから無理もない。2位が１７３盗塁の広島、3位が意外なことに横浜となり、ヤクルトが4位というのは、さすがに野村監督か。5位は２３３本塁打を放ちながら１０５０失点の巨人、6位にはチーム打率最低の阪神と東西の人気チームは下位に甘んじた。

結論。極端なチーム作りはいけません。補強するなら守備と機動力を重視すべき。守備を固めて失点を防ぐ効果（中日は唯一防御率2点台）と、機動力アップで得点を重ねる効果（広島は１０８６得点でトップ）は絶大だ。

ベストプレー
プロ野球

最新データ作成方法

セ・リーグ投手編

セ・リーグ投手編

渾身の速球
うなりをあげて

150km/hオーバーの豪速球はバッターにとってもっとも打ちにくいといわれる球。渾身の力で投げ込む１球。スピードガンの表示に場内がわきたつ。

右の表から、３つの事実にあらためて着目したい。まずベスプレでの『球速』は、その投手の最高球速ではないこと。これはマニュアルにも「直球の平均的なスピード」と記されている。イメージとしては、この数値より４キロくらいは速い球を投げることができると考えられるのではないだろうか。となると数値が146の投手なら実際には150キロ台を出せるという計算となる。

もう１点は、球の速い投手には抑えが多いという点。宣、リベラ、佐々木というリーグを代表するストッパーが上位に名を連ねており、他にも趙、西山、広島の横山など、クローザーとして使われてから能力を開花させた選手が多い。試合も終盤になって登場するということは、ボールに馴れた打者を相手にしなければならないということ。生半可なスピードでは打たれることは必至で、やはり球速が重視されるのは当然なのだ。また、これらの投手はフォークまたはスライダーも持ち球としており、速球と空振りをさせる変化球とのコンビネーションが生命線といえる。

そして３つめが、いまや中継ぎでも140キロは出せて当たり前という点。「球速や球威は十分だが安定感には欠ける。ならばまずは中継ぎで経験を積ませてから先発へ」というイメージが中継ぎにはあるが、まさにその通りの数値を示している。そんな中から五十嵐や落合のような中継ぎのスペシャリストが育っているのが現状なのだろう。

以上のことから先発投手にとっては、球速より打者を確実に打ち取っていく技術や変化球の多彩さと切れ、安定感が要求されるということになる。そんな先発陣の中で唯一トップにランクインした石井一は驚異的だ。97年の防御率1.91、98年の最多奪三振も納得のできるところ。これでコントロールさえあれば間違いなくセ界ナンバーワン投手である。

球速を考える時に注意しなければならない点が１つ。「実際より速く見える」という投手についてだ。左投げに多く、腕が遅れて出てくる、リリースも遅め、カーブとのコンビネーションなどが原因となって打者にそう感じさせるらしい。右の表ではメイ、表外では今中あたりが当てはまる。ただしこれらの投手は実際には140キロそこそこ。球速より切れや技術が優れている投手と考えるべきかもしれない。逆に斎藤隆、ガルベス、川崎といったシュートピッチャーは変化球と直球との速度差が少なく、あまり速いという印象はないが成績はいい。この手の投手は打者を打ち取る技術が秀でていると考えるべきだろう。

順位	選手名	球団名	DP	評価
1	宣	中日	150	▼
1	石井一	ヤクルト	150	
1	リベラ	阪神	150	
4	佐々木	横浜	148	
4	サムソン	中日	148	
4	趙	巨人	148	—
7	横山	横浜	146	
7	西山	巨人	146	▼
7	伊藤	ヤクルト	146	▼
7	横山	広島	146	
11	斎藤隆	横浜	144	
11	入来祐	巨人	144	
11	黒田	広島	144	
14	戸叶	横浜	142	▼
14	島田	横浜	142	
14	川上	中日	142	
14	門倉	中日	142	
14	山田洋	中日	142	—
14	大塔	中日	142	—
14	落合	中日	142	
14	ガルベス	巨人	142	
14	小野	巨人	142	
14	槙原	巨人	142	▼
14	佐々岡	広島	142	▲
14	紀藤	広島	142	
14	高橋健	広島	142	
14	小林幹	広島	142	
14	藪	阪神	142	
14	メイ	阪神	142	▲
30	川村(横浜)、桑田(巨人)、川崎(ヤクルトなど)13名			

最新データ作成方法
セ・リーグ投手編

切れ その切れ味にバットが空を切る

ストライクゾーンからボールへ。低めに決まる変化球が、最近の多くの投手の決め球だ。この変化球の切れが優れているほど、三振や凡打に仕留める確率は高くなる。

ここでは1イニングあたりいくつの三振を奪っているか（三振奪取率）を参考に、各チームの抑えの切札と、先発・中継ぎ陣（投球回数30回以上）に分けて考えてみよう。

まずは抑え。不調が伝えられながらも1.5という脅威の数値をマークしているのが大魔神・佐々木。ヒットが出たとしても単打止まりが多く、まともにバットの芯に当てるのは不可能に近いとも思える。佐々木がフォークを振らせるのに対し、宣は右打者の外角に決まるスライダーで勝負するぶん、ボールを見られることが多く、四球が増えて成績も悪くなるという印象だ。それでもこの数字は十分に威張れる。この2人以上に速球での力勝負を好むのがリベラ。それだけ打者に読まれやすくヒットを打たれるケースが昨年は目立ったが、今季は制球も良くなり、女房役の矢野の成長もあってかなり安定してきた。以上3人に比べて球威に劣る槙原はベテランらしい配球とコントロールで、制球に難のある小林幹は直球の威力でどちらも1以上をキープ。こうして見ると抑えの切札は「1イニングに1個以上は三振を取れる力が必要」ということがよくわかる。

先発陣では、石井一が堂々のトップ。右打者の胸元への直球、左打者から逃げていくスライダーともに抜群の威力を持っており、絶好調の時には手をつけられないほどだ。メイも左打者の外角への変化球の切れでは引けを取らず、上原の三振奪取率も新人離れした数字だ。紀藤は試合ごとに波があって中継ぎで出るケースが増えたが、好調時の投球は全盛期の迫力を取り戻したような感がある。

中継ぎ陣では左投手が多いが、これは本人の切れよりも「左投手を苦手とする打者が多いから」と解釈したほうがいいかもしれない。

抑え

順位	選手名	球団	奪三振率	投球回数	相手打数	奪三振	評価
1	佐々木	横浜	1.525	20 1/3	80	31	S
2	宣	中日	1.267	15	70	19	A
3	槙原	巨人	1.190	19 1/3	89	23	B
4	リベラ	阪神	1.036	18 1/3	71	19	B
5	小林幹	広島	1.011	29 2/3	139	30	B
6	高津	ヤクルト	0.612	16 1/3	69	10	C

先発・中継ぎ

順位	選手名	球団	奪三振率	投球回数	相手打数	奪三振	評価
1	石井一	ヤクルト	1.160	79 1/3	349	92	A
2	メイ	阪神	1.084	91 1/3	386	99	A
3	高橋建	広島	0.989	31 1/3	137	31	B
4	岩瀬	中日	0.943	35	150	33	B
5	横山	広島	0.927	59 1/3	255	55	B
6	紀藤	広島	0.919	41 1/3	175	38	B
7	上原	巨人	0.907	93 2/3	369	85	A
8	宮出	ヤクルト	0.897	35 2/3	152	32	—
9	矢野	横浜	0.864	44	202	38	—
10	福盛	横浜	0.818	66	287	54	B
11	三浦	横浜	0.784	66 1/3	282	52	B
12	玉木重	広島	0.763	38	171	29	B
13	川村	横浜	0.756	87 1/3	361	66	B
14	山内	広島	0.750	40	184	30	B
15	佐々岡	広島	0.744	87 1/3	365	65	B
16	山本	ヤクルト	0.738	40 2/3	168	30	B
17	川尻	阪神	0.734	62 2/3	279	46	C
18	桑田	巨人	0.720	83 1/3	356	60	B
19	門倉	中日	0.717	30 2/3	141	22	C
20	野口	中日	0.700	84 1/3	369	59	B
21	吉田豊	阪神	0.683	55 2/3	260	38	C
22	ハッカミー	ヤクルト	0.681	69	307	47	C
23	三沢	巨人	0.680	32 1/3	148	22	C
24	山本昌	中日	0.677	75 1/3	321	51	B
25	斎藤隆	横浜	0.675	93 1/3	378	63	B
26	福原	阪神	0.667	39	172	26	—
27	川上	中日	0.630	73	310	46	B
28	薮	阪神	0.596	94	378	56	C
29	入来祐	巨人	0.592	47 1/3	211	28	C
30	サムソン	中日	0.583	70 1/3	283	41	C

制　球 微妙なコントロールで打者を封じる

アウトコース一杯、あるいはインコースをえぐるようなストレート。抜群のコントロールがあれば、四球からピンチを招くことも減り、打者もついクサイ球に手を出すことになる。

1イニングあたりの四死球数を調べたのが右の表だ（投球回数15回以上の投手対象）。

先発組では斎藤隆、上原、佐々岡が素晴らしい。斎藤隆はスライダー、上原はストレート、佐々岡はカーブが、いい場面でいいところに決まるという印象だ。ただし上原に比べて斎藤隆と佐々岡は一発を浴びることも多い。それだけ球が真ん中へ寄っていると考えられるわけで、打ちづらいところへ投げ込むコントロールという意味では上原が上だ。

この3人に続くのが紀藤。だが今季は中継ぎに回されることが多く、防御率も高くない。1イニングあたりの投球数が少ないこと、三振も多いということを考え合わせると「まともにストライクゾーンに投げ込んでいき、それが上手く行く時は抑えられるが、そうでない時はノックアウト」というイメージだ。14位の川村も似たタイプで、ストレートがコース一杯に決まっている時にはいいが、甘いところへ入って一発を浴びるというケースが多いことで知られる投手である。

川上と武田の中日勢は、どちらも直球＋スライダーにフォークを交えるタイプ。これを丁寧に内外の低めへと投げ分けることで成功している。薮も同様だが、こちらは終盤になるとコントロールが乱れ、死球や暴投も多い。

ガルベス、野村、ミンチー、川崎は打たせて取るタイプだ。そのため奪三振は多くないが、打ってもショートゴロという微妙なコースへ上手く決められる。ただミンチーと川崎は少しボール側へずれることが多く、カウントを悪くしたりピンチを広げたりしているという感じだと思われる。この状況の極端な投手が桑田で、コース一杯の投球で見逃し三振も多いが四死球も多い（0.492）。これが今季不振の原因だろう。

中継ぎでは中日の落合と中山、阪神の伊藤、巨人の木村がいい。リリーフ陣が四球から自滅するとゲームは途端に崩れるが、彼らには安心して中抑えを任すことができそうだ。表外だが阪神の新人・部坂（0.383）も厳しいコースを突いており、目立たないながらゲーム作りに貢献している。高橋健は向かっていくタイプで被本塁打も多いのが不満だ。

抑え勢では、球威で勝負するタイプよりコントロールで切り抜ける高津と槙原の成績がいい。リベラ、佐々木もボンボン投げ込んで打者を追い込んでいくイメージが沸く数字だ。対して宣（0.533）と小林幹（0.573）は数字が悪い。まあ、より慎重に外角へ投げる宣、ワンバウンドになっても思い切りフォークを投げる小林幹の持ち味はよく出ているが。

順位	選手名	球団	四死球率	投球回数	与四死球合計	暴投	評価
1	高　津	ヤクルト	0.184	16 1/3	3	0	A
2	上　原	巨　人	0.203	93 2/3	19	1	A
3	斎藤隆	横　浜	0.204	93 1/3	19	0	A
4	佐々岡	広　島	0.229	87 1/3	20	0	A
5	落　合	中　日	0.231	26	6	0	A
6	紀　藤	広　島	0.242	41 1/3	10	2	A
7	川　上	中　日	0.247	73	18	2	A
8	武　田	中　日	0.249	84 1/3	21	0	A
9	ガルベス	巨　人	0.252	95 1/3	24	1	A
10	槙　原	巨　人	0.259	19 1/3	5	3	A
11	薮	阪　神	0.266	94	25	3	B
12	伊　藤	阪　神	0.268	37 1/3	10	0	B
13	リベラ	阪　神	0.273	18 1/3	5	0	B
14	川　村	横　浜	0.286	87 1/3	25	0	B
15	野　村	横　浜	0.287	31 1/3	9	1	A
15	高橋建	広　島	0.287	31 1/3	9	3	B
17	佐々木	横　浜	0.295	20 1/3	6	3	B
17	中　山	中　日	0.295	20 1/3	6	2	—
19	木　村	巨　人	0.296	23 2/3	7	2	—
20	高　木	ヤクルト	0.303	66	20	0	B
21	ミンチー	広　島	0.311	64 1/3	20	1	B
22	山本昌	中　日	0.332	75 1/3	25	0	B
23	川　崎	ヤクルト	0.342	76	26	3	B
24	岩　瀬	中　日	0.343	35	12	1	B
25	柏　田	巨　人	0.346	17 1/3	6	1	—
26	横　山	広　島	0.354	59 1/3	21	2	B
27	野　口	中　日	0.356	84 1/3	30	2	B
28	横　山	横　浜	0.361	27 2/3	10	1	B
29	広　田	ヤクルト	0.363	30 1/3	11	1	C
30	山　本	ヤクルト	0.369	40 2/3	15	1	C

最新データ作成方法

セ・リーグ投手編

大崩れなく投げ切る能力

先発ローテーション投手に必要なのは、シーズンを通じて、あるいは9イニングを通じて崩れることなく投げ切る安定感である。抑えにも確実に相手を封じる信頼感が欲しい。

安定感のある投手は成績も安定するはずだ。そこでここでは防御率および被出塁率（[被安打＋与四死球]÷相手打数）などから、各チームの主力投手について見ていこう。

今季は思うように勝ち星を伸ばせないでいる横浜。斎藤隆と川村は期待通りだが、昨季13勝の野村、12勝の三浦の出遅れが誤算。代わって先発を任されることの増えた福盛も、まだ成長途上。ひじに爆弾を抱え、以前ほどの信頼感はない佐々木だが、それでも超一流の抑えであることは確か。なんとか先発ローテーションを立て直したいところだ。

これに対して中日の投手陣には安定感がある。特にダイエーから獲得した武田の働きが大きく、野口と川上は昨季ほどではないが、それでも先発としては合格点だ。これで山本昌がリズムを取り戻し、もし今中が本調子を取り戻せば恐いものなしだろう。宣も佐々木ほどではないが信頼が厚い。

巨人は上原に尽きる。スタミナに難があって終盤に点を取られるが、安定感は随一。逆にゲームごとの差が大きいのがガルベスと桑田。投球テンポのいいガルベスは打線の援護が期待できるが、四球の多い桑田が投げる時は打線も湿り気味という傾向にあり、それが勝ち星の差となっている。中継ぎ、抑えの安定感のなさも巨人の弱点である。

ヤクルトは石井一とハッカミーに安定感がなく、田畑や伊藤の不調、それに続くはずの宮出や山部の力不足が問題。川崎と高木は数字的にはまあまあだが、打線と噛み合っていないのが痛い。後ろに控える広田、山本、高津らの出来は悪くないだけに、田畑と伊藤だけでなく、岡林あたりの復活にも期待したい。

広島は本来、素質のある選手がそろった投手王国のはず。だが佐々岡の孤軍奮闘ばかりが目立つ。山内は年々悪くなり、澤崎や黒田も戦力として機能していない。小林幹も昨年以下で、成長を感じさせるのは横山だけだ。ここに名前をあげた投手が万全でシーズンを迎えたら、文句なく優勝候補なのだが。

阪神では、薮は相変わらず打線に恵まれず、メイや川尻も不安定。吉田豊も誤算で中込や湯船も本調子にない。ただ、福原、山崎、杉山、竹内、部坂あたりが成長をうかがわせ、伊藤、遠山、リベラと続くリリーフ陣も安定している。野村監督が目標を2年後に置いていたら、かなり恐いチームとなるだろう。

抑え

順位	選手名	球団	防御率	セーブポイント	非SP率	評価
1	リベラ	阪神	0.98	11	0.476	A
2	佐々木	横浜	1.33	18	0.100	A
3	高津	ヤクルト	3.31	13	0.188	B
4	槙原	巨人	3.72	15	0.348	C
5	宣	中日	4.80	11	0.313	B
6	小林幹	広島	6.07	9	0.471	C

先発

順位	選手名	球団	防御率	被出塁率	評価
1	上原	巨人	1.92	0.252	A
2	武田	中日	2.56	0.282	A
3	桑田	巨人	3.24	0.320	B
4	薮	阪神	3.35	0.294	B
5	斎藤隆	横浜	3.38	0.272	B
6	川村	横浜	3.40	0.296	B
7	川崎	ヤクルト	3.43	0.316	C
8	山本昌	中日	3.58	0.318	B
9	川上	中日	3.70	0.300	B
10	佐々岡	広島	3.71	0.296	B
11	野口	中日	3.74	0.331	B
12	横山	広島	3.79	0.325	B
13	高木	ヤクルト	3.95	0.330	C
14	ガルベス	巨人	4.15	0.300	C
15	メイ	阪神	4.24	0.308	C
16	石井一	ヤクルト	4.99	0.338	C
17	田畑	ヤクルト	5.14	0.366	D
18	吉田豊	阪神	5.17	0.381	C
19	ミンチー	広島	5.18	0.329	D
20	斎藤雅	巨人	5.30	0.318	C
21	野村	横浜	5.46	0.403	C
22	三浦	横浜	5.56	0.340	C
23	山内	広島	5.85	0.364	D
24	川尻	阪神	5.89	0.366	C

セ・リーグ投手編

球質　バットをへし折る重い球の持ち主は

重い球は芯に当たっても飛ばず、軽い球は簡単にホームランにされてしまう。一発長打を食わないためには、投じる球の“質”こそが重要なのだ。

1イニングあたりのホームラン数を基礎データとして、各投手の球質について考えてみよう。ただし投球回数が少ないと不利となるため、各球団の先発の柱＋主要中継ぎと考えられる投球回数30回以上の投手、および絶対に本塁打を打たれることが許されない抑えとを対象としてみた。

抑え勢では速球派3人が被本塁打ゼロ。さすがの数字である。これに対して不調の小林幹、打たせて取る高津、球が時折甘めに入る槙原らは不満。1試合1イニング投げるとして5～6試合には一発を食らっている計算となり、これでは1点リードの試合に安心して投入できないように思える。

中継ぎ陣では広田、岩瀬、山崎、伊藤、山本、福原らの数字が素晴らしい。いずれも中抑え的に使われることが多い投手で、高津、宣、リベラへとつなぐ役割をしっかり果たしているといえる。上位にランクインしていない横浜、巨人、広島は、確かに今季、投手陣が崩れているというイメージ。原因は中継ぎの一発病にあるともいえそうだ。

先発では高木と上原だ。今季すっかり投手の軸となった感のある高木は、先発としても左の抑えとしても通用しそうな雰囲気。新人ながら各部門でトップクラスの成績を残している上原は、球の重さも立証されたことになり、本当にスキのない投手であるといえる。

他では狭い球場ながら数字のいい薮や紀藤、佐々岡あたりが評価できる。桑田は数字ほど球が重いという印象はなく、野口も重いというよりバットの芯をはずすタイプだ。

ちなみにワーストを並べると、戸叶、入来祐、高橋建、山内、三沢、三浦、斎藤隆など、ポンポンと放り込んでくるイメージのある投手の名前が多い。

抑え

順位	選手名	球団	被本塁打率	投球回数	被本塁打	評価
1	佐々木	横浜	0.000	20 1/3	0	A
2	リベラ	阪神	0.000	18 1/3	0	A
3	宣	中日	0.000	15	0	A
4	小林幹	広島	0.135	29 2/3	4	C
5	高津	ヤクルト	0.184	16 1/3	3	C
6	槙原	巨人	0.207	19 1/3	4	D

投手編

先発・中継ぎ

順位	選手名	球団	被本塁打率	投球回数	被本塁打	評価
1	広田	ヤクルト	0.000	30 1/3	0	B
2	岩瀬	中日	0.029	35	1	B
3	山崎	阪神	0.031	32 2/3	1	—
4	伊藤	阪神	0.054	37 1/3	2	B
5	高木	ヤクルト	0.061	66	4	A
6	上原	巨人	0.064	93 2/3	6	A
7	桑田	巨人	0.072	83 1/3	6	C
8	山本	ヤクルト	0.074	40 2/3	3	B
9	福原	阪神	0.077	39	3	—
10	野口	中日	0.083	84 1/3	7	B
11	ホセ	巨人	0.085	35 1/3	3	—
12	薮	阪神	0.085	94	8	B
13	紀藤	広島	0.097	41 1/3	4	B
14	サムソン	中日	0.100	70 1/3	7	B
15	佐々岡	広島	0.103	87 1/3	9	B
16	玉木重	広島	0.105	38	4	C
17	山本昌	中日	0.106	75 1/3	8	C
18	ミンチー	広島	0.109	64 1/3	7	C
19	川上	中日	0.110	73	8	C
20	宮出	ヤクルト	0.112	35 2/3	4	—
20	斎藤雅	巨人	0.112	35 2/3	4	C
22	矢野	横浜	0.114	44	5	—
23	横山	広島	0.118	59 1/3	7	C
24	川崎	ヤクルト	0.118	76	9	C
25	吉田豊	阪神	0.126	55 2/3	7	C
26	ガルベス	巨人	0.126	95 1/3	12	C
27	野村	横浜	0.128	31 1/3	4	C
28	竹内	阪神	0.132	30 1/3	4	C
29	福盛	横浜	0.136	66	9	C
30	川村	横浜	0.137	87 1/3	12	D

技術 打たせて取る それも美学

力任せに三振を奪うのではなく、打者の打ち気をそらし、タイミングをはずして凡打に仕留める能力も投手には求められる。そんな投球技術に長けたピッチャーは誰だ。

一死一塁の場面では、ダブルプレイを狙いたいところ。打者を打ち取る技術に優れた投手なら、思惑通りショートゴロを打たせることができるはずだ。しかし、打たせるつもりがヒットになるというケースも多いだろう。そこでここでは、打たれた球が安打になる率＝打球安打率と、打者を凡打に仕留める確率＝凡打率を、各球団の主力投手について見ていくことにしよう。

打たれた球が安打にならない投手のトップはリベラ。ただし技術というより球が重く勢いもあってヒットになりにくいということだろう。にしても、この数字は立派。ランナーを背負った時の投球に課題があるといわれてはいるが、こと対打者に限っては、奪三振率も高く防御率も優秀で、ほとんどスキのない投手といえる。ファンが考えている以上に優秀なピッチャーといえそうだ。

２位の斎藤雅はまだ投球回数が少なくデータの信頼性は低いが、もともとシンカーでゴロを打たせるのは上手いタイプ。凡打率も高く、技術力はかなり高い。９位の高津もサイドスロー＋シンカーを特徴とする。佐々木などと異なり、打たせて取ってゲームセット、という流れを得意としている。

３位以下には、微妙に曲がる“真っスラ”を武器とする武田、コントロールのいいスライダーが外角一杯に決まる上原、変化球に切れのある斎藤隆、ＳＦＦもある桑田、そして薮と、ズラリとスライダー投手が並んでいる。これらの投手は内角・外角に丁寧に投げ分けることを身上とし、セカンドゴロが多くて守りやすいというイメージがある。

逆にガルベス、表には含めなかったが打球安打率0.298、凡打率0.551のヤクルト川崎はシュートあるいはチェンジアップでショートゴロを打たせるタイプだ。

メイ、紀藤、石井一といった奪三振タイプの数値は悪い。いいコースに球威のある球が決まっているうちはいいが、甘いところに入ると簡単にヒットを打たれてしまう。また軟投派の代表であるはずのミンチーの数字にも、今季の不調が現れているといえそうだ。

トップのリベラ、シンカーのある高津に比べ、他の４球団のストッパーの数字は少しばかり不満だ。三振が取れる時はいいが、バットに当てられたら意外とヒットになってしまう佐々木、昨季ほどの迫力のない小林幹と宣、いまだ不安定な槙原と、いずれも打たれすぎ。この４投手については「バットにかすらせない」くらいの意識でマウンドに登らなければ、痛い目にあいそうだ。

投手編

球速
切れ
制球
安定
球質
技術
スタミナ
回復

順位	選手名	球団	相手打数	奪三振	被安打	与四死球合計	打球安打率	凡打率	評価
1	リベラ	阪神	71	19	11	5	0.234	0.507	C
2	斎藤雅	巨人	148	10	33	14	0.266	0.615	B
3	武田	中日	341	47	75	21	0.275	0.581	B
4	上原	巨人	369	85	74	19	0.279	0.518	B
5	斎藤隆	横浜	378	63	84	19	0.284	0.561	B
6	桑田	巨人	356	60	73	41	0.286	0.511	B
7	薮	阪神	378	56	86	25	0.290	0.558	B
8	ガルベス	巨人	400	55	96	24	0.299	0.563	C
9	高津	ヤクルト	69	10	17	3	0.304	0.565	B
10	川村	横浜	361	66	82	25	0.304	0.521	B
11	川上	中日	310	46	75	18	0.305	0.552	B
12	ミンチー	広島	280	29	72	20	0.312	0.568	B
13	佐々岡	広島	365	65	88	20	0.314	0.526	B
14	山本昌	中日	321	51	77	25	0.314	0.523	B
15	高木	ヤクルト	282	33	73	20	0.319	0.553	C
16	吉田豊	阪神	260	38	58	41	0.320	0.473	C
17	ハッカミー	ヤクルト	307	47	75	28	0.323	0.511	C
18	佐々木	横浜	80	31	14	6	0.326	0.363	C
19	田畑	ヤクルト	224	27	56	26	0.327	0.513	C
20	メイ	阪神	386	99	82	37	0.328	0.435	C
21	野口	中日	369	59	92	30	0.329	0.509	C
22	三浦	横浜	282	52	71	25	0.346	0.475	C
23	紀藤	広島	175	38	44	10	0.346	0.474	C
24	福盛	横浜	287	54	73	26	0.353	0.467	C
25	石井一	ヤクルト	349	92	81	37	0.368	0.398	D
26	川尻	阪神	279	46	78	24	0.373	0.470	C
27	山内	広島	184	30	52	15	0.374	0.473	C
28	小林幹	広島	139	30	35	17	0.380	0.410	C
29	宣	中日	70	19	17	8	0.395	0.371	D
30	槙原	巨人	89	23	25	5	0.410	0.404	C

セ・リーグ投手編

スタミナ 投げ抜くことが投手の仕事

先発、中継ぎ、リリーフエースという分業制が確立した現在であっても、真っさらなマウンドに立つ先発投手は、あくまでも“投げ抜く”ことを第一義に考えるべきである。

「佐々木へつなげ」を合言葉とする継投策で昨季のペナントを制した横浜のように、近年のプロ野球では中継ぎの重要性が高まってきている。が、先発投手はあくまでも最後まで投げ抜くことを目標としてマウンドに立つともいう。監督にとっても、安心して9イニングを任せられるエースがいれば、戦いもグッと楽になるはずである。

各球団の先発陣について、1試合あたりの投球回数を調べたのが右の表。さすがに上位には各球団のエース格が並んでいる。もちろん、これらの投手が「長く投げる」理由はそれぞれだ。川崎やガルベス、武田あたりは打たせて取ることが上手く、少ない投球数でスイスイ投げ切ってしまう。石井一は投球数が多い割に終盤まで球威が衰えず、本当にスタミナ豊富というイメージ。完投数が多い割に1試合あたりの投球回数が少ない横山は、調子に波があって早めにノックアウトされるケースが多いということだろう。

最後まで投げ切るのが当然、という顔で投げているのが上原、薮、佐々岡だ。これが真のエースというものだろう。雑草魂の持ち主といわれる上原、バックの援護がなくとも唇を真一文字に結んで投げ通す薮、先発復帰2年目ですっかり自信を取り戻した佐々岡と、いずれもタイプやキャリアこそ違えど、確実にチームの投手陣の核と呼べる存在だ。斎藤隆も昨年以降、エースとしての自覚にあふれたピッチングを展開している。

数字的にいえば、1試合あたりの投球回数が7イニングを越える投手であれば、かなり信頼して投げさせることができるといえる。また中継ぎ3～4人で2イニング、抑えのエースで1イニングと計算すれば、最低でも先発には6回まで投げて欲しい。

ストッパーたちは1試合1イニング前後。特に、ひじに難のある佐々木、ランナーがいると不安なリベラはイニングの頭からが原則となる。宣はやや調子が悪いこともあって打者1～2人というケースが増えているようだ。先発経験のある小林幹、高津、槙原は、状況にもよるが2イニングくらいなら大丈夫だろう。ただ、1試合あたりの投球回数がピッタリ1になるのがチームとしては理想のはずだ(中継ぎが乱れて8回途中からの登板となれば1より大きくなる。本人がサヨナラ打などを打たれると1より小さくなる)。

抑え

順位	選手名	球団	試合数	救援	投球回数	1試合あたり	評価
1	小林幹	広島	19	17	29 2/3	1.56	C
2	高津	ヤクルト	16	16	16 1/3	1.02	D
3	佐々木	横浜	20	20	20 1/3	1.02	E
4	宣	中日	16	16	15	0.94	E
5	リベラ	阪神	21	21	18 1/3	0.87	E
6	槙原	巨人	23	23	19 1/3	0.84	C

先発

順位	選手名	球団	試合数	完投	投球回数	1試合あたり	評価
1	上原	巨人	12	4	93 2/3	7.81	B
2	川崎	ヤクルト	10	4	76	7.60	A
3	ガルベス	巨人	13	6	95 1/3	7.33	A
4	薮	阪神	13	4	94	7.23	A
5	斎藤隆	横浜	13	4	93 1/3	7.18	B
6	武田	中日	12	3	84 1/3	7.03	B
7	川村	横浜	13	0	87 1/3	6.72	B
7	佐々岡	広島	13	6	87 1/3	6.72	A
9	石井一	ヤクルト	12	2	79 1/3	6.61	A
10	野口	中日	13	2	84 1/3	6.49	B
11	桑田	巨人	13	2	83 1/3	6.41	B
12	山本昌	中日	12	1	75 1/3	6.28	B
13	メイ	阪神	15	0	91 1/3	6.09	B
14	斎藤雅	巨人	6	0	35 2/3	5.94	C
15	高木	ヤクルト	12	3	66	5.50	E
16	ミンチー	広島	12	0	64 1/3	5.36	B
17	山内	広島	8	0	40	5.00	C
18	川上	中日	15	1	73	4.87	C
19	川尻	阪神	13	1	62 2/3	4.82	C
20	横山	広島	13	3	59 1/3	4.56	B
21	野村	横浜	7	0	31 1/3	4.48	C
22	田畑	ヤクルト	11	1	49	4.45	C
23	三浦	横浜	15	0	66 1/3	4.42	C
24	吉田豊	阪神	14	0	55 2/3	3.98	D

連投能力が問われる時代

優勝するチームには、今日も登板、明日も登板と大車輪の活躍をする投手がいるものだ。昨日の疲れを今日に残さない、そんなタフな中継ぎが欲しいものである。

今日投げた疲れが明日までにどれだけ回復するか。これは中継ぎ・抑えにとって重要なポイントである。また先発投手にとっても、次の登板までに十分に回復できるかどうかが、１年を通じて活躍するためのカギとなる。そこでこの項目では、各チームから先発ローテーションの柱２名、もっとも登板機会の多い投手（中継ぎ）２名、リリーフエース１名をピックアップして検証してみよう。

項目として重視したいのは、どの程度の頻度で登板しているのかという点。そこでチーム試合数÷試合数＝登場率という数値を算出してみた。この数値が低いほど、たびたび試合に登板しているということだ。上位に並ぶのは、さすがに中継ぎ勢。ほぼ２試合～３試合に一度の割合で登板しているわけだ。

阪神の伊藤と遠山は、いかにも野村監督の好みそうなタイプで、リベラへとつなぐのに欠かせない存在。この両名にもまして新人の福原も中継ぎとして登場率2.32、７勝２セーブをマークしており、彼ら３名こそタイガース前半戦の快進撃の原動力に他ならない。

岩瀬、正津、表外の落合も中日の首位折り返しに貢献した。特に岩瀬は新人ながら星野獲得の信頼を得て、中抑えの地位を確立しつつある。目立たないが貴重な戦力だ。

投手のやりくりに苦しむヤクルトの中にあって、山本、広田の頑張りは目につく。どちらも安定感があり、石井一が完投する以外はこの２人から高津へとつなぐ勝ちパターンを作っていきたいところだ。

上記３チームに比べて中継ぎに苦労しているのが横浜、巨人、広島。横浜は阿波野と島田の働きはマズマズだが、いかんせん五十嵐の不在が痛い。後半戦に向けて佐々木の故障も気がかりだ。元来が投手を順番通りにつなぐチームであり、１～２人のリタイアが大きな不安材料となってしまうのだ。巨人は中継ぎ全体が崩壊しているという印象を与えた。柏田は左のワンポイントとして奮闘しているが、ひとりだけではどうにもならない。広島も投手陣全体が手薄な状況だ。

ただしこれらの３チームにも明るい材料はある。いずれも「投手陣が揃わないので使わざるを得ない」ことから始まったが、横浜は福盛、巨人は木村、広島は小林敦に使えるメドが立ってきた。

先発陣は中５日で投げると登場率５～６となる。その中で５以下をマークしたメイ、佐々岡、桑田、薮は立派。先発の駒が不足しているチームにあって、きっちりと登板し続けているのが偉い。

順位	選手名	球団	試合数	チーム試合数	登場率	投球回数	投球数	1イニング投球数	評価
1	伊藤	阪神	32	65	2.031	37 1/3	545	14.598	28
2	柏田	巨人	31	64	2.065	17 1/3	278	16.038	—
3	岩瀬	中日	31	66	2.129	35	592	16.914	26
4	遠山	阪神	29	65	2.241	22	362	16.455	—
5	正津	中日	27	66	2.444	20 2/3	379	18.339	28
6	山本	ヤクルト	26	66	2.538	40 2/3	661	16.254	26
6	広田	ヤクルト	26	66	2.538	30 1/3	433	14.275	26
8	阿波野	横浜	25	66	2.640	23 1/3	409	17.529	26
9	高橋建	広島	23	63	2.739	31 1/3	522	16.660	26
10	槙原	巨人	23	64	2.783	19 1/3	339	17.534	24
11	小林敦	広島	22	63	2.864	22 2/3	400	17.647	—
12	島田	横浜	22	66	3.000	25	469	18.760	28
13	リベラ	阪神	21	65	3.095	18 1/3	292	15.927	24
14	木村	巨人	20	64	3.200	23 2/3	377	15.930	—
15	佐々木	横浜	20	66	3.300	20 1/3	310	15.246	26
16	小林幹	広島	19	63	3.316	29 2/3	572	19.281	28
17	宣	中日	16	66	4.125	15	304	20.267	24
17	高津	ヤクルト	16	66	4.125	16 1/3	275	16.837	26
19	メイ	阪神	15	65	4.333	91 1/3	1573	17.223	24
20	佐々岡	広島	13	63	4.846	87 1/3	1309	14.989	24
21	桑田	巨人	13	64	4.923	83 1/3	1378	16.536	24
22	薮	阪神	13	65	5.000	94	1382	14.702	24
23	野口	中日	13	66	5.077	84 1/3	1453	17.229	24
23	川村	横浜	13	66	5.077	87 1/3	1337	15.309	24
23	斎藤隆	横浜	13	66	5.077	93 1/3	1440	15.429	24
23	ハッカミー	ヤクルト	13	66	5.077	69	1114	16.145	24
27	上原	巨人	12	64	5.333	93 2/3	1470	15.694	24
28	山本昌	中日	12	66	5.500	75 1/3	1235	16.394	24
28	石井一	ヤクルト	12	66	5.500	79 1/3	1404	17.697	24
30	山内	広島	8	63	7.875	40	693	17.325	22

COLUMN

セパの違いも考慮してチーム作りに取り組みたい

ご存じの通り、日本のプロ野球はセ・リーグとパ・リーグに分けられている。昔は「人気のセ、実力のパ」などといわれたが、最近はイチローの活躍や松坂効果などがあってパの入場人員、テレビ中継の頻度、マスコミに取り上げられる機会が増えてきた。また99年のオールスター戦はセの3連勝。昔のイメージ通りでは語れなくなってきているようだ。それでもセパの違いというのは歴然と存在するし、ベスプレでのチーム作りにも影響するのではないだろうか。

たとえばホームグラウンド。セはドーム球場（東京とナゴヤ）が2球団だけなのに対し、パは4球団（東京、西武、大阪、福岡）。一般的にドーム球場の外野は広くフェンスも高いため、ホームランは出にくい反面、外野の間を抜ける打球は多くなる。99年8月9日現在（セ271試合、パ274試合）、本塁打はセが580本でパは511本、二塁打や三塁打の数はパが多くなっている。またドーム球場に多い人工芝は足腰への負担が大きいとされ、疲れがたまりやすい。ドームでプレイする野手は、十分なスタミナがないと夏場を乗り切るのが苦になるのだ。

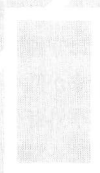
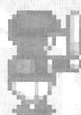
セパの最大の違いは、何といっても指名打者制の有無だろう。1番から9番まで野手が並ぶパでは、自然と投手の成績は悪くなる。ただし投手の打順を気にしなくてもいいため細かな継投が可能だ（ベスプレのCOM監督の中継ぎ起用については106ページを参照）。実際、仰木監督あたりだと6人くらいの継投はザラ。8人注ぎ込む試合もある。逆にセでは「次の回に投手に打順が回るため、このイニングは投げ切って欲しい」という思惑から長めに引っ張るケースがよく見られる。また投手の分業制が確立した現在でも、セには先発完投に対する志向が根強く残っている雰囲気があるし、それだけのスタミナを持っている投手も多い（昨季のセパの防御率トップ5投手を見ると、セは完投数合計26、パは19。9番打者は無視できるから完投しやすいのは確かだが）。自然と投手の1試合あたりの投球回数はパより大きくなりがちだ。

つまりパで重要となるのは野手のスタミナあるいは選手層、走力、外野守備、長打より巧打、投手では中継ぎの充実度であり、セでは長打と先発のスタミナ、いかに一発による失点を防ぐかということになる。西武が走って守れてスタミナもある若手を揃え、ドームに移った中日が守備や巧打力を重視したことはもちろん、巨人が先発完投型投手と長打力のある選手にこだわることも、あながち間違いとはいえないのではないだろうか。

ベストプレー
プロ野球

最新データ作成方法

パ・リーグ野手編

パ・リーグ野手編

投手と野手の微妙な関係

投手が頑張ってもバックが足を引っ張っては仕方ない。そればかりか、エラーが投手のリズムを崩すことすらある。鉄壁の守りがあってこそ、投手力も生きるのだ。

パ・リーグは若手とベテランが入り乱れてポジション争いをしているチームが多いため、守備位置が一定しない選手も少なくない。そのため、この「守備」の項目、そして次項の「肩」については、守備位置が印象とは違う選手がいるだろうが、ご容赦頂きたい。

さて、まず捕手では最多の的山でも捕逸4。これ自体悪くない数字だし、変化球投手の多い近鉄なら責められるものではない。特筆すべきは伊東の捕逸0。中嶋の加入で一時に比べると影が薄くなりつつあるが、昨年も捕逸は1つだけ。まだまだベテラン健在だ。

続いて主な野手を一試合あたりの失策数＝失策率で見ていくと、内野手では守備位置的にエラーのし辛い一塁手の失策率が低くなっている。0.07を超える吉岡は昨季外野を守ったこともあり、小笠原も本格的に一塁に定着したのは今季から。慣れの問題と考えていいだろう。他の内野手では、0.03の鈴木、0.034の堀は立派。特に堀は、元々内野手だったとはいえ、昨年は外野中心だったことを考えれば見事だ。逆にオリックスの田口、大島は守備位置が一定しないのが失策率の高さに繋がっていると考えられる。また、パを代表する遊撃手の松井、田中の失策率は意外に高い。確かに松井はポロポロやってるシーンをよく見かけるし、田中にしてもオールスターで勝利目前に大暴投、その結果逆転負けを喫したことがある。美技も多い一方で、凡ミスも少なくない選手なのだ。

外野では、どうしてもイチローの美技にばかり目が奪われるが、他の選手も立派な数字を残している。パの外野は俊足揃い。足が速いということは、ヒット性の当たりをアウトに出来るばかりではなく、余裕を持って落下点に入れる分、失策も少なくなるのだ。

捕手

選手名	球団名	DP	試合	捕逸	評価
伊　東	西　武	S	46	0	S
野　口	日本ハム	C	67	3	C
三　輪	オリックス	B	43	2	B
城　島	ダイエー	C	71	2	B
的　山	近　鉄	B	64	4	B
清　水	ロッテ	C	53	1	C

野手

選手名	球団名	主守備	試合	失策	失策率	評価
福浦	ロッテ	一	52	2	0.038	C
高木大	西武	一	44	2	0.045	B
藤井	オリックス	一	55	3	0.055	C
松中	ダイエー	一	69	4	0.058	C
小笠原	日本ハム	一	68	5	0.074	D
吉岡	近鉄	一	63	5	0.079	D
金子	日本ハム	二	68	4	0.059	B
柳田	ダイエー	二	68	5	0.074	B
田口	オリックス	二	65	8	0.123	C
鈴木	西武	三	66	2	0.030	B
堀	ロッテ	三	58	2	0.034	C
片岡	日本ハム	三	54	4	0.074	B
中村	近鉄	三	67	6	0.090	C
大島	オリックス	三	45	6	0.133	C
浜名	ダイエー	遊	69	4	0.058	B
小坂	ロッテ	遊	56	4	0.071	A
松井	西武	遊	68	9	0.132	B
田中	日本ハム	遊	66	11	0.167	C
柴原	ダイエー	外	71	0	—	B
フランクリン	日本ハム	外	68	0	—	B
イチロー	オリックス	外	67	0	—	S
大村	近鉄	外	67	0	—	A
礒部	近鉄	外	65	0	—	B
小関	西武	外	64	0	—	B
諸積	ロッテ	外	57	0	—	B
大友	西武	外	66	1	0.015	B
平井	ロッテ	外	48	1	0.021	B
秋山	ダイエー	外	63	2	0.032	B
ローズ	近鉄	外	64	3	0.047	B
谷	オリックス	外	66	4	0.061	B

ひとつ先
狙う走者を刺す強肩

俊足選手が多いパ・リーグは、野手の肩と走者の足の勝負が見物のひとつ。本塁ベース上のクロスプレーは、観客の少ないスタンドも沸き立つ一瞬だ。

肩の強さが要求されるポジションといえば、まず捕手、そして外野手だ。また、内野安打を防ぐためには、三遊間の肩もかなり重要になる。ここではそれぞれのポジションについて、昨年の盗塁阻止率、捕殺数を見てみよう。ただし、堀のように今年コンバートされている選手は参考程度にして頂きたい。

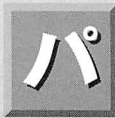
捕手では、吉鶴とレギュラーを争う清水がトップ。阻止率.441はセの古田と全く同じ。打力はともかく、肩の強さだけは文句なしだ。その清水に迫るのが野口。移籍早々に田口や小笠原を押しのけただけのことはある。伊東はリードが上手い反面、肩がウィークポイントになっているのは惜しい。

内野はポジションや投手の球種などによって守備機会に差が出る上、守備位置が一定しない選手も多く、ちょっと直接の比較は難しい。また、小坂や松井は足が速く守備範囲が広い分、捕殺数も当然多くなってくる。ただ、その小坂や松井も含めて、さすがに上位陣に「肩が弱い」という選手はいない。そもそも肩が弱ければ三遊間は任せられないし、指名打者がある分、パ・リーグは特にその傾向が強いと言えるだろう。

外野はやはりイチロー。「イチローだから」と、無理な進塁を避けるケースも少なくない中での12捕殺なのだから素晴らしいとしか言いようがない。そのイチローも含め、オリックスの外野陣は安定している。また、近鉄も大村、ローズに、捕手出身の磯部なら文句なし。日本ハムでは井出の捕殺数が意外に少ないが、注目は上田。昨年は途中出場が多い中での6捕殺。フル出場できれば、同じ甲子園投手のイチローと互角以上の捕殺も可能だろう。残る西武、ダイエー、ロッテは、肩よりも足で守っている印象が強いチームだ。

捕手

選手名	球団	盗塁企	盗塁刺	阻止率	DP	評価
清　水	ロッテ	34	15	0.441	B	A
野　口	日本ハム	57	24	0.421	B	A
的　山	近　鉄	68	28	0.412	B	A
城　島	ダイエー	82	29	0.354	B	B
三　輪	オリックス	53	18	0.340	C	C
伊　東	西　武	85	28	0.329	C	C

野手

選手名	球団	定位置	試合数	捕殺数	DP	評価
小　坂	ロッテ	遊	123	417	B	B
松　井	西　武	遊	135	400	A	A
井　口	ダイエー	遊	134	382	B	B
武　藤	近　鉄	遊	103	319	B	B
片　岡	日本ハム	三	132	280	B	B
中　村	近　鉄	三	128	238	B	B
鈴　木	西　武	三	134	234	C	C
小　川	オリックス	遊	86	201	C	C
初　芝	ロッテ	三	120	196	C	C
田　中	日本ハム	遊	56	141	C	C
柳　田	ダイエー	三	67	95	C	C
大　島	オリックス	三	38	78	C	C
イチロー	オリックス	外	135	12	S	S
大　村	近　鉄	外	132	10	A	A
田　口	オリックス	外	105	10	A	A
ローズ	近　鉄	外	133	9	A	A
平　井	ロッテ	外	113	8	B	B
秋　山	ダイエー	外	114	7	B	B
小　関	西　武	外	103	7	B	B
上　田	日本ハム	外	114	6	B	A
村　松	ダイエー	外	115	6	C	B
大　友	西　武	外	128	6	B	B
堀	ロッテ	外	112	5	B	B
谷	オリックス	外	129	5	B	B
柴　原	ダイエー	外	111	3	B	B
諸　積	ロッテ	外	88	2	B	B
井　出	日本ハム	外	121	2	A	B
西　浦	日本ハム	外	102	2	C	C
清　水	西　武	外	80	1	B	B
磯　部	近　鉄	外	71	1	B	B

パ・リーグ野手編

足 機動力は長打に匹敵する破壊力

送りバンドがバンドヒットに、あるいは浅い外野フライが犠牲フライに。足のある選手が揃えば、チャンスを広げるどころか、得点力すら大幅にアップする。

足の速さは長打力に匹敵する武器になる。ランナー二塁でシングルヒットが出た場合、ランナー三塁で浅い外野フライが上がった場合。どちらも本塁突入には躊躇するところだが、ランナーの足が速ければ、確実に得点に結びつく。スラッガーがいなくても、足の速い選手が揃っていれば、戦いを有利に進めることが出来るのだ。

その代表的な例が西武だろう。右の盗塁数ランキングでも、なんと9人が西武の選手だ。もちろん投手のクセやモーションを盗むのが下手な選手もいるし、打順などから走れない選手もいる。つまり、単純にチーム盗塁数が多ければ俊足揃いとは言えないのだが、それを割り引いても9人はスゴい。清原が抜けようが、外国人選手で「外れ」を引こうが、常に優勝争いに絡んでくるのは、選手の足に負うところが大きいのだ。中でも目立つのは、やはり松井。足がある上に一発長打もあるとなれば、これほど怖い選手はいない。

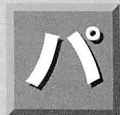
西武に続くのは日本ハム。昨年後半から湿りがちとはいえ、「ビッグバン打線」を考えるとちょっと意外だ。ただ、チームトップの西浦は二軍落ち。奈良原、本西はほとんど代走専門、さらに上田も最近はめっきり守備要員と、さすがに「ビッグバン」の主軸は登場しない。西武のように足でかきまわしてくる、というイメージはないチームだ。そんな中では、スタメンに定着しつつある石本が今後の注目株。平凡な内野ゴロでも間一髪のタイミングに持ち込むほどの足は魅力だ。

3番手は近鉄。こちらも日本ハム同様、打線も強力なチームだが、全体的な印象は西武に近い。1、2番や下位はもちろん、状況によってはローズまで走れるのだから、ほとんど誰が出塁しても盗塁の可能性があると言っていいだろう。一応、ここまでが「走れる」チームというイメージだ。

ダイエーは、足のある選手の出塁率が物足りない分、盗塁数は伸び悩み気味。期待ほどの成績を残せていない井口や、レギュラーを外れてしまった村松あたりがもっと打てれば、もっと走れるチームになるはずだ。

チームの方針からか、メンバーの割に盗塁数が少ないのがオリックス。打順的にイチローが走りづらいのは仕方ないにしても、ちょっと寂しい。ただ、昨年1盗塁だった谷が今季はよく走っているのには注目だ。

最後にロッテ。小坂一人で頑張っているとしか言いようがない。長打力に優れているわけでもなく、足もないとなると、小宮山の勝率が伸びないのも仕方ないのだろうか。

野手

順位	選手名	球団名	盗塁	打席	DP	評価
1	松井	西武	18	B	A	A
2	小坂	ロッテ	16	L	A	A
3	小関	西武	11	L	A	A
3	柴原	ダイエー	11	L	A	A
5	井口	ダイエー	10	R	B	B
6	大友	西武	9	L	B	B
6	谷	オリックス	9	R	C	B
8	イチロー	オリックス	8	L	A	A
9	西浦	日本ハム	7	R	B	B
10	高須	近鉄	6	R	—	—
10	吉田	近鉄	6	R	B	B
12	石本	日本ハム	5	B	—	—
12	垣内	西武	5	R	—	B
12	田口	オリックス	5	R	B	B
12	奈良原	日本ハム	5	R	A	B
12	浜名	ダイエー	5	L	B	B
12	本西	日本ハム	5	R	C	B
12	諸積	ロッテ	5	L	B	B
19	上田	日本ハム	4	L	C	C
19	金子	日本ハム	4	R	B	B
19	高木大	西武	4	L	B	B
19	原井	西武	4	R	—	B
19	古屋	西武	4	R	—	—
19	的山	近鉄	4	R	C	C
25	河田、ブロッサー（以上西武）、野口（日本ハム）、塩崎（オリックス）、村松柳田（以上ダイエー）、大村、吉岡、ローズ（以上近鉄）、ブレイディー（ロッテ）が各3個					

最新データ作成方法

パ・リーグ野手編

選球眼は出塁率を大きく左右する

技巧派投手に対抗するには「眼」が重要。ボール球を見逃し、厳しいストライクはカットする。粘れば失投もくるだろうし、四球での出塁にも繋がるのだ。

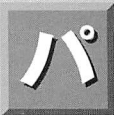
選球眼が悪ければ、ボール球を振って追い込まれ、さらにボール球で三振を喫する。投手からすれば、これほど打ち取りやすいバッターはいない。逆に選球眼が良ければ、ファールで粘った末に四球を選べるし、球数を多く投げさせれば失投だってやってくる。その失投を確実に叩けるのだから、出塁率も稼げるわけだ。

ここでは100打席以上の打者を対象に、三振率から選球眼を分析してみたい。右の表を見ると、ホームランバッターがズラッと上位に…、と言いたいところだが、単純にそうとも言えない。確かに、一発長打を持っている選手が多いことは多い。ただ、実際にホームランの数が多いかというと、本塁打数が2桁に乗っているのは田中、ボーリック、垣内だけ。よく「三振かホームランか」などと言われるが、そんな選手はどちらかと言えば例外の部類。芯を外してもスタンドに放り込むような、とてつもないパワーヒッターだけだろう。三振が多いということは、基本的にはバットに当てるのも下手ということ。なんとかバットに当たっても芯には滅多に当たらないのだから、ホームランが出るわけがないのである。上位19人までが打率3割以下、2割5分前後の選手がほとんどだ。

また、セ・リーグでは、キャリアが浅く、プロの球に慣れていない選手が上位に結構いたのに対し、パ・リーグでは数少なく、大塚と、敢えて加えれば日高くらいのもの。三振率トップの井口は3年目、もう「慣れていない」とは言えない年だ。三振率の上位をまとめると、ホームランバッターになりきれない、あるいは以前ほどの力がないのにホームランを狙っているような「ブンブン型」強打者が中心、ということになる。

逆に、表にはない下位陣を見ていくと、やはり球をよく見て「コツコツ」と当てていくタイプが多い。三振率の低い順に並べると、.055の柳田から、高木浩、磯部、谷、大友と続く。いずれも長打率が低い「コツコツ型」だ。そして、その次が.077のイチロー。昨年に比べて三振が多めとはいっても、厳しいコースの球を確実に捕える技術は健在。それもシングルヒットではなく、長打にしてしまうのだから、とんでもない打者だ。

また、三振率が低くてホームランが二桁に乗っている打者は、イチローの他に.103のクラーク、.114の松中あたり。この3人はみな打率が.280以上。長打力も確実性もあって三振が少ない、理想的なバッターと言えるだろう。

野手

順位	選手名	球団名	打席数	三振	三振率	DP	評価
1	井口	ダイエー	212	64	0.302	E	E
2	ブロッサー	西武	115	32	0.278	—	E
3	ジンター	西武	127	35	0.276	—	—
4	田中	日本ハム	281	68	0.242	E	E
5	藤井	オリックス	186	45	0.242	D	E
6	ボーリック	ロッテ	199	44	0.221	—	D
7	垣内	西武	240	51	0.213	—	D
8	大塚	ロッテ	100	21	0.210	—	—
9	吉岡	近鉄	233	48	0.206	E	D
10	上田	日本ハム	103	21	0.204	D	D
11	秋山	ダイエー	246	50	0.203	D	D
12	吉永	ダイエー	204	41	0.201	C	C
13	野口	日本ハム	218	43	0.197	D	C
14	片岡	日本ハム	224	44	0.196	C	C
15	日高	オリックス	113	22	0.195	E	D
16	小久保	ダイエー	300	58	0.193	—	E
17	初芝	ロッテ	259	50	0.193	D	C
18	フランクリン	日本ハム	275	53	0.193	—	C
19	中村	近鉄	303	58	0.191	E	D
20	大村	ロッテ	139	26	0.187	C	D
21	ペレス	オリックス	160	29	0.181	—	C
22	ローズ	近鉄	276	50	0.181	D	C
23	的山	近鉄	223	40	0.179	E	D
24	酒井	ロッテ	145	26	0.179	D	C
25	オバンドー	日本ハム	102	18	0.176	—	—
26	堀	ロッテ	236	41	0.174	D	C
27	塩崎	オリックス	112	19	0.170	D	C
28	中嶋	西武	120	20	0.167	C	C
29	諸積	ロッテ	217	36	0.166	B	B
30	金子	日本ハム	232	38	0.164	C	C

最新データ作成方法

パ・リーグ野手編

厳しい場面では実績が自信となる

ここで負けたら後がない、そんな時にベテランの経験と実績がものを言う。例え経験の浅い若手がガチガチになっていても、ベテランは実力をフルに発揮するものだ。

各チームの主力選手について、実績のデフォルトパラメータと、過去の獲得タイトルについて調べたのが右の表だ。一見してわかるように、「B」以下の選手が大多数。これは、新旧交代が進み、活躍し始めたのはここ2～3年という選手が中心になっているチームが多いため。実績とは積み重ねるもの。レギュラー2～3年程度なら、相当の活躍がなければ「A」以上にはならないわけだ。

また、いわゆる「三冠」部門の獲得者が少ないのもわかる。最高打率は5年続けてイチロー、ホームラン王や打点王は「今は日本にいない」という状態だったりする。たとえ日本の球団に留まっていたとしても、ニールは不調でとても「主力」とは言い難く、ウィルソンは怪我で戦線離脱中だ。

さて、そんな中ではイチローの「S」は文句なし。あえてケチをつければ、他の選手がイチローに引っ張られて…、ということがないこと。まあ、これはイチロー自身だけの問題ではないし、「スゴすぎて」目標にし辛いという面もあるだろうか。田口あたりが守備だけではなく、バッティングであと1歩でもイチローに迫りたいところだろう。

デフォルト唯一の「A」、クラークは来日後2年連続で3割、90打点以上をマークしているのだからこの評価が妥当。今年は伸び悩んでいるのが気になるところだが。近鉄ではもう一方の外国人、ローズが「A」に近い選手。昨年こそ怪我の影響もあって.257の打率に終わったものの、本来は走攻守三拍子揃った優秀な助っ人である。ただ外国人選手というと、ちょっとした不振で解雇されがち。後のことを考えると若手の中心選手が欲しい。

西武の松井はもう「A」でもいいくらいの選手。今年もこれまで通りの働きをしており、大崩れは考えづらい。逆に鈴木の今季は打率が低迷。以前のように3割を確実に打てれば、チームの中心選手ににれる素材だけに、打撃の復活が待たれる。

日本ハムは、もうベテランの域に入る田中、片岡がよくチームを引っ張ってきた。どちらもイチローや外国人選手の厚い壁に阻まれて打撃タイトルになかなか手が届かないものの、十分な実績を持った選手だ。

ダイエーとロッテはどうもベテランの核となる選手に欠けている。ダイエーなら秋山なのだろうが、さすがに年齢的な衰えが隠せず、ロッテもフランコに頼っていた印象は否めない。工藤や小宮山あたりが核といえば核なのだろうが、チーム全体を引っ張るような野手が出てきて欲しいものだ。

野手

選手名	球団名	DP	近年の実績	評価
イチロー	オリックス	S	94、95、96MVP/5年連続首位打者	S
クラーク	近鉄	A	97、98ベストナイン	A
鈴木	西武	B	97ベストナイン	B
松井	西武	B	98MVP/97、98盗塁王	A
片岡	日本ハム	B	96、98ベストナイン	A
田中	日本ハム	B	95打点王/88、90、95、96ベストナイン	A
田口	オリックス	B	95、96、97ゴールデングラブ賞	B
藤井	オリックス	B	89、93ベストナイン	B
秋山	ダイエー	B	87本塁打王/90盗塁王	A
ローズ	近鉄	B	97ベストナイン	A
堀	ロッテ	B	―	B
大友	西武	C	98ゴールデングラブ賞	C
高木大	西武	C	97、98ゴールデングラブ賞	C
金子	日本ハム	C	96新人王	C
谷	オリックス	C	―	C
プリアム	オリックス	C	―	C
浜名	ダイエー	C	―	C
大村	近鉄	C	98ベストナイン	C
初芝	ロッテ	C	95打点王/95ベストナイン	B
福浦	ロッテ	C	―	C
諸積	ロッテ	C	―	C
小関	西武	D	98新人王	D
柴原	ダイエー	D	98ベストナイン	D
城島	ダイエー	D	―	C
中村	近鉄	D	96ベストナイン	D
吉岡	近鉄	D	―	D
小坂	ロッテ	D	97新人王/98盗塁王	C
小笠原	日本ハム	E	―	D
フランクリン	日本ハム	―	―	C
小久保	ダイエー	―	95本塁打王/97打点王	A

最新データ作成方法

パ・リーグ野手編

スタミナ

シーズンを通した活躍にはスタミナが必要不可欠

前半好調→後半バッタリとか、逆に「帳尻合わせ」の活躍ばかりする選手は、残る数字はともかくチームへの貢献度はイマイチ。シーズンを通して活躍することが重要だ。

怪我やバテによる成績不振は「お休み」を頂戴することになる。また、力量的にフルシーズン戦った経験が少ない選手も、やはりスタミナには不安が残る。出場試合数がスタミナの目安になるのはほぼ間違いない。そこでここでは、前項の「実績」で取りあげた各チームの主力を、出場試合数から分析する。

昨年の上位チームから見ていくと、西武は松井、鈴木といった中心選手がほぼフル出場。大友も一昨年からはまず毎試合登場しており、もうワンランクアップしてもいいくらいだろう。また、高木大は今年こそキャンプ中の故障が響いているが、本来はフル出場できるだけのスタミナの持ち主である。

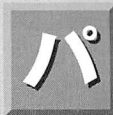
続いては日本ハム。片岡、田中は判断が難しいところだ。ともに責任感の強さから、怪我を押して出場することも多い選手で、単純に出場試合数＝スタミナとは言い難い面がある。他は未知数の若手が多く、このあたりが成績の安定しない一因だろうか。

オリックスは、言うまでもなくイチローが筆頭格。開幕から1ヶ月もすれば常にエンジン全開。走攻守が完璧な上にシーズンを通して安定した成績を残す、まさにスーパープレイヤーだ。そのイチローに加え、田口、谷という外野陣は安定している。3年目の谷は断定するのは早計かもしれないが、特に不安はなさそうに思える。問題は、どうにもメンバーが一定しない内野と捕手だ。

残る3球団、ダイエー、近鉄、ロッテはレギュラーが固定されていない印象が拭えない。そんな中では近鉄が一歩リードしているだろうか。表に登場しているメンバーでは、吉岡を除いた4選手、両外国人と大村、中村はまずスタミナに不安はない。そこに今年からは捕手に的山、外野は磯部が定着。この二人がフルシーズン活躍できれば、常に優勝を争えそうだ。

ダイエーは小久保が鍵。昨年を棒に振り、今年は試合にこそ出ているものの、打率は最悪。スタミナだけはありそうなのだが…。また、表には載せなかったが、昨年レギュラーを獲得した井口も今季は不振で脱落しているのは不満だ。逆に、城島が正捕手として急成長してきたあたりに光が見える。柴原は今年が真価を問われる年になりそうだ。

ロッテは小坂や堀など、1シーズン戦えそうな選手は多い。しかし、成績が伴わずに、結果としてフルシーズン、フルイニングには至らない、という形になりがち。スタミナ云々よりも、まずは個々が安定した能力を発揮できるようになることが課題だろう。

野手

選手名	球団名	DP	試合数	チーム	昨季	評価
イチロー	オリックス	A	67	67	135	A
クラーク	近鉄	C	67	67	135	B
鈴木	西武	B	66	68	135	B
松井	西武	A	68	68	135	A
片岡	日本ハム	A	54	68	133	B
田中	日本ハム	B	66	68	107	B
田口	オリックス	B	65	67	132	A
藤井	オリックス	C	55	67	126	C
秋山	ダイエー	C	63	71	115	C
ローズ	近鉄	B	64	67	134	A
堀	ロッテ	B	58	61	127	B
大友	西武	C	66	68	129	C
高木大	西武	C	44	68	134	C
金子	日本ハム	B	68	68	127	A
谷	オリックス	C	66	67	132	C
プリアム	オリックス	D	66	67	92	D
浜名	ダイエー	D	69	71	125	D
大村	近鉄	C	67	67	133	B
初芝	ロッテ	B	60	61	134	B
福浦	ロッテ	C	52	61	129	C
諸積	ロッテ	C	57	61	103	C
小関	西武	C	64	68	104	C
柴原	ダイエー	C	71	71	111	C
城島	ダイエー	B	71	71	122	A
中村	近鉄	B	67	67	132	A
吉岡	近鉄	C	63	67	81	C
小坂	ロッテ	B	56	61	124	B
小笠原	日本ハム	D	68	68	71	D
フランクリン	日本ハム	—	68	68	—	C
小久保	ダイエー	—	70	71	17	B

巧打　バットコントロールの巧さが打率を大幅にアップする

豪快なホームランは魅力的。ただ、玄人受けするのは、上手くバットをコントロールして、野手の間を抜く選手。三振が少なく、打率の高い選手達だ。

三振が少なく、野手の間を抜く技術を持った選手。選球眼とも大きく関連するのが巧打だ。ここでは打率と三振数を中心に巧打の能力を見ていきたい。例え打率が高くても三振数が多かったり、眼の項で三振率が高かったような選手は、巧打者というよりは、パワーで詰まった当たりもヒットにしている選手と考えていいだろう。

打率と三振の少なさといえば、まず真っ先に思い浮かぶのがイチロー。いまさらここで多くを説明するまでもないだろう。2位の小川、3位の酒井はちょっとレギュラーとは言い難い選手。昨年の打率を見ればわかるように、常に好成績というようなタイプではない。逆に言えば、毎年これだけの成績を残せれば、あっさりレギュラーを確保できることになる。

4位の大村は、昨年打率6位だった近鉄の大村ではなく、ロッテの大村巌。ただ、こちらの大村も昨年は.286をマークしており、レギュラーに定着できればそれなりの成績は残せそうな気がする。ただ、決して「巧打」タイプとは言えない選手だ。5位のローズも、巧打も見せることがあるものの、三振が多いのはちょっと不満。松井も足の速さから受ける印象とは違い、3年連続90三振前後というのは長距離砲並み。日本ハムの小笠原と片岡も、結構三振の多い打者。こうやって見ていくと、パの打率上位陣には、いわゆる「巧打者」は少ないと言える。

明らかに巧打者と言えるのは、柳田、小坂、そして意外ながら城島だ。柳田は「眼」の項で少し触れたように、100打席以上の打者の中で三振率が最も低い。また、後で登場することになるが、得点圏打率がトップでもある。得点圏にランナーがいる時は、大振りするよりは、野手の間を抜いていくのが大事になるだけに、この結果も当然だ。小坂は昨年は2年目のジンクスか、打率は.233と低迷したが、一昨年が.261。今年の好調も考えると、今後は足を活かしつつ、安定した成績が期待できそうだ。犠打が多いのも、巧打のパラメータが直結する。そして城島。ホームランバッターの印象が強いが、三振も少なく、臨機応変に対応できるタイプとみていいだろう。

ちなみに、昨年の打率上位では、平井、クラーク、柴原、大村（近）、初芝あたりが、今年は昨年の打率を大きく下回っている。毎年のように高アベレージを残すのは、非常に難しいこと。そう考えると、高打率、というだけではなく、常に首位打者になってしまうイチローの凄さが、より強く実感できる。

野手

順位	選手名	球団名	打率	犠打	三振	昨季打率	評価
1	イチロー	オリックス	0.358	0	23	0.358	S
2	小川	オリックス	0.333	2	22	0.238	A
3	酒井	ロッテ	0.323	6	26	0.246	B
4	大村	ロッテ	0.318	0	26	0.286	B
5	ローズ	近鉄	0.309	0	50	0.257	B
6	松井	西武	0.308	5	38	0.311	C
6	柳田	ダイエー	0.308	13	13	0.251	A
8	福浦	ロッテ	0.304	0	18	0.284	C
9	小坂	ロッテ	0.300	16	25	0.233	A
10	小笠原	日本ハム	0.300	0	40	0.302	B
11	城島	ダイエー	0.297	3	36	0.251	A
12	片岡	日本ハム	0.294	0	44	0.300	B
13	オバンドー	日本ハム	0.293	0	18	—	—
14	伊東	西武	0.293	6	17	0.243	C
15	ペレス	オリックス	0.292	1	29	—	C
16	ボーリック	ロッテ	0.287	0	44	—	C
17	諸積	ロッテ	0.286	5	36	0.279	B
18	松中	ダイエー	0.286	4	27	0.268	B
19	吉岡	近鉄	0.284	2	48	0.268	C
20	高木大	西武	0.281	0	18	0.276	C
21	クラーク	近鉄	0.281	0	30	0.320	C
22	本西	日本ハム	0.279	10	23	0.135	C
23	礒部	近鉄	0.279	8	14	0.291	B
24	初芝	ロッテ	0.279	0	50	0.296	C
25	吉永	ダイエー	0.278	0	41	0.249	D
26	大友	西武	0.277	17	17	0.269	B
27	谷	オリックス	0.274	3	19	0.284	C
28	小関	西武	0.274	17	35	0.283	B
29	的山	近鉄	0.273	12	40	0.230	C
30	金子	日本ハム	0.268	6	38	0.263	C

長打

ここ一番での本塁打 敵へのダメージは強烈だ

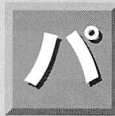
猛打賞と、5打数1安打1逆転満塁弾。新聞の見出しになりやすいのは当然後者だ。特にメジャーでは、ホームランバッターの人気は非常に高い。

広い球場が増えた昨今は、足の速い選手にも注目が集まるようになりつつある。しかし、あくまで足の速い選手「にも」。なんといっても人気になるのはホームランバッターだ。もちろん、ベンチサイドとして使いやすいのは、「ヒットの延長がホームラン」というタイプ。しかし「三振かホームラン」型、3打席連続で凡退しようとも、最後の最後にだめ押しホームランや逆転弾を放ってくれるような選手の方が、ファンはより大きな魅力を感じるものだ。

さて、今年の本塁打ランキングを見てみると、「三振かホームラン」型が揃っている。特に中村、フランクリン、小久保の3人。打率では30位あたりにいるような面々だ。ただ、中村や小久保の一発はファンを引きつける魅力はあるし、フランクリンも「ダミー・ソーサ」と言われた顔だけはでなく、飛距離もソーサの一枚落ちくらいのものはある。ボーリックもこのタイプに近い打者だ。過去を遡ってみても、パ・リーグにはこのタイプの打者が多く、怪我で戦列を離れている2年連続本塁打王・ウィルソンも同様。逆に、小柄で足の速さを活かす選手も増えており、中距離打者が極端に少なくなっている。各球団とも新しくて広い球場への移転が完了したため、特大アーチを打てる打者と、守りも含めた足のある選手への二極分化が進んだのだろう。

では、「ヒットの延長がホームラン」という打者はというと、これが探すのに苦労する。間違いなくこのタイプに属するのは、イチローと小笠原の両左打者だ。イチローの本塁打というと、うまくバットに乗せたライナー性の打球がスタンドに入ることが多い。小笠原にしても二塁打が多いことからわかるように、イチローと本来は同タイプだ。ただ、最近はちょっと大振りが目立ち、三振を喫することも結構ある。レギュラー定着1年目、もしかしたら、今後はタイプが変わってくる可能性もありそうだ。他に、このタイプで目新しいところでは、元全日本の4番打者・松中。三振も少なく、これから経験を積めばダイエーの中心を担う可能性も十分だ。

ここまで名前が登場していないローズとクラーク、近鉄の両外国人は判断が難しい。特に昨年はローズが、今年はクラークが不調なのが難しさに輪をかけている。全体的な数字を見ると、三振の多いのがローズ、打率が高いのはクラークだ。しかし、イメージはローズが巧打者で、クラークが強打者。ともに臨機応変型だが、それぞれの場面で両者の考え方が異なっている、というところだろうか。

野手

順位	選手名	球団名	長打率	本塁打	昨季本塁打	評価
1	ローズ	近鉄	0.663	22	22	A
2	ボーリック	ロッテ	0.626	16	—	A
2	クラーク	近鉄	0.529	16	31	A
2	中村	近鉄	0.455	16	32	A
5	フランクリン	日本ハム	0.509	15	—	A
5	小久保	ダイエー	0.435	15	2	A
7	初芝	ロッテ	0.558	14	25	A
8	イチロー	オリックス	0.600	13	13	B
9	小笠原	日本ハム	0.531	12	1	B
9	プリアム	オリックス	0.448	12	18	A
11	片岡	日本ハム	0.541	11	17	B
12	松中	ダイエー	0.510	10	3	B
12	吉永	ダイエー	0.491	10	13	A
12	田中	日本ハム	0.439	10	24	A
12	垣内	西武	0.423	10	1	B
16	城島	ダイエー	0.483	9	16	B
17	大村	ロッテ	0.589	8	6	B
18	的山	近鉄	0.470	7	4	C
18	藤井	オリックス	0.456	7	30	A
18	松井	西武	0.421	7	9	C
18	秋山	ダイエー	0.410	7	10	B
22	吉岡	近鉄	0.451	6	13	B
23	オバンドー	日本ハム	0.533	5	—	—
23	井出	日本ハム	0.521	5	6	C
23	井口	ダイエー	0.387	5	21	B
23	ジンター	西武	0.355	5	—	—
27	藤島	日本ハム	0.519	4	2	—
27	野口	日本ハム	0.386	4	10	D
29	ニエベス（ダイエー）ら、9人			3	—	

パ・リーグ野手編

大接戦では勝負強さが勝敗を分ける

どんなに打率が低くても、得点圏打率さえ高ければ、チームに大きく貢献できる。終盤のチャンスで、確実にタイムリーを打てるような打者は貴重な存在だ。

ホームランは要らないから1点だけでも…、多くの試合で見かけるシーンだ。もちろんホームランを打ってくれれば文句はないのだが、大振りして三振だとか平凡な内野フライに終わる選手も少なくない。「コツコツ型」の選手にはそんな心配はないが、パワーヒッターでもこの場合は「コツコツ型」になる必要がある。巧打にも共通するが、前進守備を取った野手の間を抜く技術がモノを言うのだ。

が、しかし。そんな簡単に変身できるものではないのは、右の表を見れば明らか。上位陣は、基本的に「コツコツ型」の選手が多くなっている。トップの柳田は、打率が高いだけならただのチャンスメーカーに過ぎない。しかし、得点圏打率が通常打率を大幅に上回っているのが大きなポイント。技術がある上に、プレッシャーにも強いことになる。ロッテの諸積あたりも似たタイプだろう。

2位の松井は結構ガンガン振ってくるタイプ。ただ、得点圏にランナーがいるようなシーンでは、考えたバッティングが出来ているのだろう。パンチ力もある上、西武は足の速い選手が多いので、犠飛も自然と多くなる。自身も俊足なため、併殺が少ないのも魅力だ。4位の城島も犠飛こそないが、場面に応じたバッティングが出来る選手。ただ、技術を駆使し損ねて併殺に終わることが多いのは、一流選手へ飛躍するための大きな課題だ。

他の上位陣では、とにかく近鉄の選手が多い。両外国人や中村のようにホームランを期待したい選手がいる一方で、高須、磯部、大村等、足と小技でかき回すタイプも揃っている。単に「かき回す」だけなら、西武でもよくあることだが、近鉄は各選手の得点圏打率が、軒並み通常打率を上回っているところが素晴らしい。チャンスさえ作れば得点になる確率が高いチームと言える。

逆に勝負弱い方はというと、まずイチローの名前を挙げたい。9位とはいえ、「イチローなのに3割」と考えると大いに不満。もっとも昨年は得点圏打率が通常打率以上だっただけに、今年前半の一時的な現象だろう。

得点圏打率の最も低いのは小坂(.192)。通常打率は3割近いし、三振率も.096と低いだけに、勝負弱さがより際だってしまう。これに続くのが秋山（.197)。率が低いだけならまだしも、本来足の速い選手が7併殺でチャンスを潰してしまっているのは頂けない。そして、下から3番目が.198の小久保。通常打率が低いので当然だが、その一方で打点50に犠飛も5。当たればデカい。

※右表は7/7時点の成績

野手

順位	選手名	球団名	得点圏打率	打率	打点	犠飛	併殺打	評価
1	柳田	ダイエー	0.392	0.299	23	1	4	+2
2	松井	西武	0.352	0.326	41	4	1	+1
3	高須	近鉄	0.352	0.260	26	1	3	—
4	城島	ダイエー	0.347	0.288	48	1	8	+1
5	大村	近鉄	0.338	0.257	26	0	4	+1
6	磯部	近鉄	0.333	0.268	19	1	6	+1
7	諸積	ロッテ	0.321	0.284	20	0	0	+1
8	ローズ	近鉄	0.318	0.308	53	1	4	+1
9	イチロー	オリックス	0.313	0.360	54	5	4	0
10	的山	近鉄	0.309	0.266	33	2	3	+1
11	フランクリン	日本ハム	0.304	0.240	41	4	9	+1
12	野口	日本ハム	0.297	0.265	30	1	6	+1
13	小笠原	日本ハム	0.296	0.309	44	2	4	0
14	小関	西武	0.293	0.278	20	1	4	0
15	クラーク	近鉄	0.288	0.278	49	5	12	0
16	プリアム	オリックス	0.284	0.286	47	0	8	0
17	松中	ダイエー	0.278	0.279	37	3	4	0
18	吉岡	近鉄	0.271	0.281	30	1	5	0
19	田口	オリックス	0.267	0.257	23	0	5	0
20	初芝	ロッテ	0.265	0.269	53	3	6	0
21	垣内	西武	0.258	0.251	35	1	2	0
22	谷	オリックス	0.242	0.268	25	1	9	0
23	金子	日本ハム	0.241	0.268	17	0	6	0
24	大友	西武	0.240	0.285	16	0	5	-1
25	田中	日本ハム	0.239	0.259	45	2	9	-1
26	中村	近鉄	0.234	0.247	50	1	10	0
27	鈴木	西武	0.232	0.231	29	3	6	0
28	浜名	ダイエー	0.231	0.265	19	1	3	-1
29	柴原	ダイエー	0.226	0.265	17	0	2	-1
30	堀	ロッテ	0.222	0.259	23	1	10	-1

パ・リーグ野手編

対　左　左対左が投手有利とは限らない

ピンチに左の代打が出てくると、左投手を出す監督は多い。それに対して、代打の代打で右を起用する監督もこれまた多い。しかし、左対左が得意な打者も少なくないのだ。

一般的に、サウスポーに左打者は弱いとされる。逆に、右投手に右が弱いと言う人はほとんどいない。左右が逆転しただけで、立場は同じ。本来、左打者が左投手に弱いというのは変なことだ。おそらくこれは「慣れ」の問題。人間は右利きが圧倒的に多いため、左打者がプロ入り以前に左投手と対戦することは少ない。そのため、どうしても打ちづらいのだろう。とするならば、慣れてしまえば問題はないはず。適応力の高い選手なら、左対左でも全く苦にしなくなるのだ。

右表は、主に各チームの中心選手のうち投手の左右で打率が大きく異なる選手、そして左右にこだわらない左打者をピックアップしたものだ（数字は昨年のもの）。セではおおむね左対左は投手有利のデータだが、パではかえって左投手を得意としている左打者が大勢いる。以下、対左投手の成績が話題になりやすい、左打者に絞って解説していきたい。

まず目立つのはイチローの対左.418という数字。左右どちらも苦にせず打ち返すイメージはあったが、左の方が明らかに強いというデータだ。確かに、左投手の投げ込んだひざ元の球を、うまく巻き込んで弾き返すシーンは多々見られる。昨年は、連続無三振記録を左の下柳に止められたが、これは偶然のことで、下柳との相性も悪くない。

また、対右と対左の差が1割以上ある吉永も珍しい存在。単に左打者だから、という理由で左投手をぶつけるのはもってのほか。これほどの差があると、左投手が投げている時に右を送り込んでもいいくらいだろう。中村も、吉永にかなり近いものがある。「左に弱いから」とレギュラーを外された上田も、昨年は対左の方が高打率というのも意外だ。

逆に、対左が苦手な左打者ももちろんいる。ただ、意外なのは小関、大友、大村、小坂と、足の速い選手が何人も名を連ねているところ。足が速ければセーフティバンドも決められるし、打ち損ねが内野安打になることもある。ましてや一塁に近い左打者だけに、その確率は高い。これらの選手は相当左が苦手と言って良さそうだ。ただ、左打者を全体的に見渡して感じるのは、どちらかといえば若手が左対左を苦手にしていること。これらの選手も、経験を積めば左投手を次第に克服できるようになる可能性も十分ある。

このように、パ・リーグは、単純に「左対左だから…」「足があるから…」というような考えは通用しない。選手それぞれの個性をしっかり把握してこそ、より試合が面白くなるというものだろう。

野手

選手名	球団名	打席	昨季打率	対右投手	対左投手	左得意か?	評価
松井	西武	B	0.311	0.300	0.337	○	+1
高木大	西武	L	0.276	0.271	0.286	○	0
鈴木	西武	L	0.275	0.281	0.262	×	-1
小関	西武	L	0.283	0.298	0.234	×	-2
大友	西武	L	0.269	0.280	0.229	×	-2
井出	日本ハム	R	0.216	0.202	0.302	○	+2
片岡	日本ハム	L	0.300	0.302	0.296	△	0
金子	日本ハム	R	0.263	0.259	0.292	○	+1
上田	日本ハム	L	0.242	0.238	0.280	○	0
野口	日本ハム	R	0.235	0.241	0.194	×	0
イチロー	オリックス	L	0.358	0.339	0.418	○	0
大島	オリックス	B	0.276	0.271	0.313	○	+1
田口	オリックス	R	0.272	0.274	0.261	×	0
谷	オリックス	R	0.284	0.288	0.250	×	0
藤井	オリックス	L	0.250	0.271	0.194	×	-2
吉永	ダイエー	L	0.249	0.231	0.345	○	0
柴原	ダイエー	L	0.314	0.307	0.342	○	0
秋山	ダイエー	R	0.260	0.255	0.288	○	+1
城島	ダイエー	R	0.251	0.248	0.266	○	+1
松中	ダイエー	L	0.268	0.279	0.200	×	-2
中村	近鉄	L	0.260	0.249	0.333	○	0
磯部	近鉄	L	0.291	0.289	0.310	○	0
大村	近鉄	L	0.310	0.317	0.282	×	-1
クラーク	近鉄	R	0.320	0.330	0.266	×	0
ローズ	近鉄	L	0.257	0.256	0.260	△	0
諸積	ロッテ	L	0.279	0.274	0.318	○	0
堀	ロッテ	R	0.241	0.239	0.250	○	0
福浦	ロッテ	L	0.284	0.293	0.247	×	-1
小坂	ロッテ	L	0.233	0.239	0.211	×	-1
清水	ロッテ	R	0.183	0.194	0.130	×	0

パ・リーグ野手編

打撃指数　打撃指数は打率の基準値にあらず

他の指数はゲーム中に変化しない「定数」なのに対し、打撃指数は設定を変えなくても勝手に上下する「変数」と呼ばれるもの。基準打率ではなく、打者の調子を表わす指数だ。

打撃指数、というと、フルシーズン戦った時の最終的な打率に近い数字のような印象を受ける。数字自体も打率×100をイメージさせるものだ。しかし、実際は、単純に調子の上下を表わす数値に過ぎない。打撃指数の初期値が高くても、他のパラメータが悪く凡打の山を築けば、打撃指数は当然下がる。打撃指数が下がれば調子は悪いことになり、さらに安打が出なくなるという悪循環に陥るのだ。あくまで「調子」を数値化したもの、それが打撃指数。その初期値は、開幕直後の調子を表わす指数と言えるだろう。

そうなると、右の表にある打率（100打席以上の打者が対象）は打撃指数に関係なさそうだが、決してそうではない。昨年の最終打率と、今年途中までの打率を比較することで、「前半型」か「後半型」か、あるいはシーズンを通して活躍できるタイプなのかがわかるのだ。打撃指数とスタミナや実績を組み合わせれば、シーズンを通した調子の変化を再現できるのである。

まずトップのイチローを見てみると、昨季打率と今年の打率がほぼ同じ。開幕当初は「どうしたイチロー」という感もあったが、あっという間に例年に戻った。少々打撃指数を低めにすることで、こんな感じは再現できそうだ。よく外国人に見られるシーズン末の帳尻合わせも、同じような手法が取れる。打撃指数に加え、スタミナや実績を調整するのがいいだろう。

続く小川と酒井は前半戦絶好調だ。ただ、年齢的にも「急成長」とは考えづらい。柳田あたりも、今後の活躍は微妙なところ。仮に、最終的には昨年並に収まるとするならば、打撃指数や巧打等を高く設定し、スタミナを低くすれば、こういうタイプになる。イメージとしては、昨年後半に大失速した日本ハムの各選手を思い浮かべればいいだろう。

ただ、昨年が悪くて今年の前半が好調だった選手を全て同じと考えてはいけない。ローズ、小坂、そして城島あたりは、本来なら今年くらいの成績は残せる選手。単に昨年が不振だっただけで、決して「前半型」ではないのである。

また、的山も「前半型」とは恐らく違うタイプ。これまで打撃はもうひとつだったものの、ライバル磯部が外野に転向した今季は、伸び伸びやっている印象がある。なんとなく、このまま2割7分前後はキープ出来そうな雰囲気だ。これに似ているのは、進境著しい若手選手。昨季打率が全く参考にならない選手を、うまく見分けることが必要だ。

野手

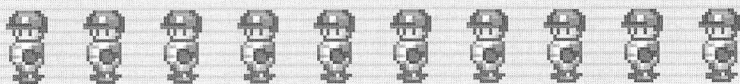
順位	選手名	球団名	打率	打数	安打	昨季打率	評価
1	イチロー	オリックス	0.3576	260	93	0.358	350
2	小　川	オリックス	0.3333	147	49	0.238	300
3	酒　井	ロッテ	0.3228	127	41	0.246	300
4	大　村	ロッテ	0.3178	129	41	0.286	310
5	ローズ	近　鉄	0.3086	243	75	0.257	300
6	柳　田	ダイエー	0.3076	208	64	0.251	290
6	松　井	西　武	0.3076	273	84	0.311	310
8	福　浦	ロッテ	0.3035	112	34	0.284	290
9	小　坂	ロッテ	0.3004	213	64	0.233	290
10	小笠原	日本ハム	0.3003	273	82	0.302	300
11	城　島	ダイエー	0.2972	259	77	0.251	290
12	片　岡	日本ハム	0.2938	194	57	0.300	290
13	オバンドー	日本ハム	0.2934	92	27	—	—
14	伊　東	西　武	0.2931	116	34	0.243	270
15	ペレス	オリックス	0.2916	144	42	—	270
16	ボーリック	ロッテ	0.2865	171	49	—	270
17	諸　積	ロッテ	0.2864	199	57	0.279	280
18	松　中	ダイエー	0.2864	206	59	0.268	280
19	吉　岡	近　鉄	0.2843	204	58	0.268	270
20	高木大	西　武	0.2814	135	38	0.276	280
21	クラーク	近　鉄	0.2813	263	74	0.320	280
22	本　西	日本ハム	0.2792	111	31	0.135	250
23	礒　部	近　鉄	0.2791	197	55	0.291	280
24	初　芝	ロッテ	0.2787	226	63	0.296	270
25	吉　永	ダイエー	0.2781	169	47	0.249	270
26	大　友	西　武	0.2772	202	56	0.269	270
27	谷	オリックス	0.2737	263	72	0.284	270
28	小　関	西　武	0.2736	201	55	0.283	270
29	的　山	近　鉄	0.2732	183	50	0.230	260
30	金　子	日本ハム	0.2682	205	55	0.263	260

COLUMN

西武VS他5球団オールスター その結果に攻略法を発見した！？

西武が強い、強すぎる。といっても、今シーズンの話しではなく、190ページにある「最新データ実力検証」のこと。細かい解説はそちらのページを読んで頂くとして、とにかく最新データで10シーズン戦わせると、そのうち9回は西武が優勝してしまうのだ。

しかしゲームの中とはいえ、これだけ強いと「なんとか負かしてやりたい」と思ってしまうもの。そこで他の5球団からトップクラスの選手だけを集めたオールスターチームを結成し、西武と10シーズン戦わせてみた。つまり、オールスターチーム以外の5球団を全て西武の選手と入れ替えたのだ。もちろん、オールスターチームの圧勝になるはずである。

結果は事前の予想通り1022勝318敗10引き分け、勝率7割6分3厘でオールスターチームの圧勝。いくら西武が強いとはい

え、さすがにこの勝負は無謀だった。しかし、そんな中でもオールスターチームが85勝、勝率6割3分4厘しか残せなかった年があったのには目を引かれた。ちなみに、この年の2位とのゲーム差は14ゲーム。2位の西武も、オールスターチーム以外の相手4球団が全て西武なのだから（ちょっとややこしいが）、これは大健闘と言えるだろう。

それぞれの選手の成績を見ていくと、打者は通常よりだいたい1分から3分ほど打率が低くなっている。例えばイチローで3割5分5厘（通常3割6分5厘）、ローズで2割9分2厘（同3割2分5厘）といったところ。投手力の充実した西武とばかり試合をしているのだから当然だ。

となれば、西武は得点力も高いだけに、投手の防御率も悪くなりそうなもの。ところがどっこい、

なんと防御率は各選手とも大幅に向上しているのだ。黒木2・48（通常3・12）、工藤2・34（同3・26）とトップクラスの投手で0・5〜1点。目立つところでは川越が2・95（同4・37）と、約1・5点も低くなっている。

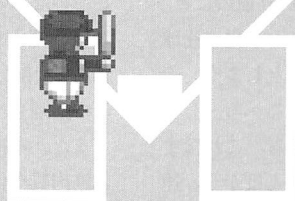
これは、いかに中継ぎが重要かを示していると言えるだろう。先発がピンチでマウンドを後にしても、中継ぎ陣が後続を断ち切れば、先発投手に自責点がつくことはない。オールスターチームは中継ぎも万全。そのため、先発投手の防御率も低くなるのだ。

投手というと先発や抑えばかりが注目される。しかしこの結果を見ると、中継ぎ陣にも、もっと高い評価を与えてもいいように思えてくる。是非スポーツ紙には、「ホールドポイント・ベスト10」のコーナーを作ってもらいたい。そして、もちろんベスプレにも。

ベストプレー
プロ野球

最新データ作成方法

パ・リーグ投手編

パ・リーグ投手編

力と力のぶつかり合い 野球の醍醐味、ここにあり

「技巧派」と言われることを嫌う投手は少なくない。渾身の力を込めた豪速球で打者を打ち取る醍醐味。投手である以上、誰もが最初に目指すのは「本格派」だ。

パ・リーグの速球王といえば、もちろん西武の松坂。しかし新人だけにベスプレではリザーブ扱いなのは仕方ないところ。ここではデフォルトでチームに登録されている選手の球速ランキングを見てもらいたい。

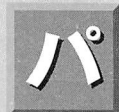
一見してわかるのが、上位のほとんどが基本的に抑えの役割を果たす投手であることだろう。今季は怪我や調子の影響で、右表の上位陣がそのまま抑えになっているわけではないのだが、森や大塚、河本といえばイメージは「抑えの豪速球投手」だ。

これはちょっと考えればあたり前のこと。仮に先発・中継ぎ陣が140キロ台中盤の速球を「ビシバシ」投げ込んでいたとしよう。そこに抑えで出てきた投手が「へろへろ〜」と130キロ台の直球を投げたとする。これはまさに「打ってください」と言わんばかり。速球に目が慣れた打者からすれば「ボールが止まって見える」というもの。よほど変化球にキレがあれば別だが、抑え投手には先発・中継ぎ陣を上回る速球が必要なのだ。

ただ、注意したいのは、ベスプレの球速は「直球の平均的なスピード」であること。抑えと先発の最も大きな違いといえば、投球回数。先発投手なら、適度なメリハリをつけないことには、とてもではないが100球も120球も投げられない。逆に抑えなら、打者数人、全力で打ち取ればいいのである。決して球が遅いから先発、というわけではないのだ。例えば最大で3イニング限定のオールスター。スタミナの心配がないだけに、普段の先発陣も全力投球になる。今年150キロ台を連発した松坂にしても、公式戦であれだけの球を連投しているわけではない。

そうなると、やはり目立つのは先発ながら4位となった西武の石井だ。快速球の持ち主だけあって、当初は中継ぎ・抑えにフル回転していたものの、今や西口と並ぶ西武のエース格。抑えも務まるスピードを持つ投手が、スタミナ配分を覚えて先発してくるのだから、この活躍も当然だろう。

また、本格派の投手というと、想像するのは筋肉質な体型。しかし、かなり細身に見える西口や金村あたりもなかなかの球速の持ち主。主に球速に影響するのは背中側の筋肉で、見た目はあまり関係ないらしい。

ちなみに細身の投手の代表格、オリックスの星野は130キロの設定だが、超スローカーブ直後の直球は、ネット裏で見ているとかなり速い。いくら直球が速くても、直球しかなければ打者の眼は慣れてくる。変化球とのコンビネーションが大事なのである。

順位	選手名	球団名	DP	評価
1	森	西武	148	
1	ウィリアムズ	ダイエー	148	▼
1	大塚	近鉄	148	▼
4	石井	西武	146	
4	デニー	西武	146	
4	シュールストロム	日本ハム	146	
4	木田	オリックス	146	—
4	河本	ロッテ	146	
9	下柳	日本ハム	144	▼
9	岡本	ダイエー	144	▼
9	真木	近鉄	144	
9	西川	近鉄	144	
9	酒井	近鉄	144	—
9	礒	ロッテ	144	
15	西口	西武	142	
15	横田	西武	142	
15	橋本	西武	142	
15	金村	日本ハム	142	
15	沼田	日本ハム	142	
15	小林	オリックス	142	
15	平井	オリックス	142	
15	西村	ダイエー	142	▼
15	倉野	ダイエー	142	▼
15	篠原	ダイエー	142	▲
15	高村	近鉄	142	
15	赤堀	近鉄	142	▼
15	黒木	ロッテ	142	▲
15	クロフォード	ロッテ	142	▼
29	潮崎（西武）、岩本（日本ハム）、工藤（ダイエー）など21名		140	

最新データ作成方法
パ・リーグ投手編

切　れ　奪三振ショーの陰には変化球の「切れ」がある

三振≠直球勝負。胸元に直球を投げた後のスライダー、高めの直球の後のフォークボール。直球を見せ球にした後の切れる変化球ほど、三振を取りやすい球はない。

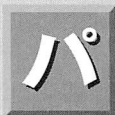
まず抑えからみていきたい。抑え投手＝「火消し役」は、ランナーを背負った場面で登場することも多い。内野ゴロでも最悪1点、そんな場面で要求されるのが変化球の「切れ」、つまり三振だ。三振奪取率上位のシュールストロムと西崎は対照的。前者の三振奪取は直球ばかり。切れを増したカーブとのスピード差が生きていたのだが、戦線離脱は残念だ。一方、病み上がりの西崎はというと直球も相変わらずだが、武器は鋭いスライダー。「切れ」でも三振を取るタイプだ。

逆に奪三振率下位の二人、ウォーレンとペドラザにしても立派に抑えの役割を果たしている。先に「抑え投手は火消し役」と書いたが、最近は火が点いていない場面で登場すことも少なくない。9回頭から1イニングをピシャリ。ランナーなしなら、打者を打ち取りさえすれば、その課程は関係ないのだ。

投球回数30回以上の先発・中継ぎでは、下柳が1.23でトップ。彼が登場するのはピンチの場面ばかりだが、そこでストレートとスライダーのコンビネーションで三振を取れるのは非常に大きい。2位の石毛は元巨人のストッパーだけあって、奪三振率が高いのも納得だ。逆に3位の小林雅は今年のドラフト1位で将来のストッパー候補。今年はウォーレンという抑えのエースがいるが、伸びのある直球とキレる変化球は抑えの資格十分だ。

4、5位は先発の工藤と黒木。どちらも速球で勝負するタイプだが、工藤にはカーブ、黒木にはフォークとスライダーがあり、直球、変化球双方で三振の取れる投手である。注目の松坂は0.8で第12位。少々不満な気もするが、最初から飛ばし過ぎると息切れが不安なのも確か。プロとしてのスタミナがついてくれば、奪三振率もグッと上がるはずだ。

抑え

順位	選手名	球団	奪三振率	投球回数	相手打数	奪三振	評価
1	シュールストロム	日本ハム	1.310	16	65	21	A
2	西　崎	西　武	1.000	16	66	16	A
3	ウィン	オリックス	0.616	37 1/3	157	23	C
4	バルデス	近　鉄	0.600	31 2/3	140	19	C
5	ペドラザ	ダイエー	0.533	30	107	16	-
6	ウォーレン	ロッテ	0.465	23 2/3	84	11	C

先発・中継ぎ

順位	選手名	球団	奪三振率	投球回数	相手打数	奪三振	評価
1	下柳	日本ハム	1.230	$33\frac{1}{3}$	146	41	A
2	石毛	近鉄	1.000	31	143	31	—
3	小林雅	ロッテ	0.967	$40\frac{1}{3}$	170	39	A
4	工藤	ダイエー	0.938	$101\frac{1}{3}$	392	95	A
5	黒木	ロッテ	0.904	$110\frac{2}{3}$	430	100	A
6	森	西武	0.872	$65\frac{1}{3}$	285	57	A
7	藤井	ダイエー	0.854	41	165	35	B
7	山田	ダイエー	0.854	41	183	35	—
9	岩本	日本ハム	0.851	101	447	86	A
10	小倉	オリックス	0.838	$51\frac{1}{3}$	210	43	—
11	香田	近鉄	0.809	$50\frac{2}{3}$	200	41	B
12	松坂	西武	0.800	90	366	72	A
13	若田部	ダイエー	0.778	$79\frac{2}{3}$	324	62	—
14	星野	オリックス	0.766	$78\frac{1}{3}$	334	60	B
15	潮崎	西武	0.761	$65\frac{2}{3}$	277	50	B
16	マットソン	近鉄	0.755	$51\frac{2}{3}$	239	39	B
17	関根	日本ハム	0.745	51	223	38	B
18	西口	西武	0.732	$84\frac{2}{3}$	353	62	B
19	永井	ダイエー	0.729	59	249	43	—
20	川越	オリックス	0.712	$91\frac{1}{3}$	387	65	B
21	武藤	ロッテ	0.711	45	201	32	B
22	小池	近鉄	0.706	68	279	48	B
23	後藤	ロッテ	0.699	$48\frac{2}{3}$	209	34	C
24	星野	西武	0.690	$37\frac{2}{3}$	159	26	C
25	小宮山	ロッテ	0.677	$103\frac{1}{3}$	418	70	B
26	黒木	日本ハム	0.656	32	149	21	C
27	建山	日本ハム	0.647	34	150	22	C
28	豊田	西武	0.624	$33\frac{2}{3}$	146	21	C
29	生駒	日本ハム	0.621	$56\frac{1}{3}$	233	35	—
30	金田	オリックス	0.614	101	422	62	C

最新データ作成方法
パ・リーグ投手編

ピンチを減らし自らを助ける大きな武器

抜群の制球力、そのイメージだけでも打者にとっては驚異となる。調子が悪くても、ボール球に手を出すバッター、ボール球でもつい「ストライク」とコール審判もいるものだ。

先発にしても、抑えにしても、四死球から崩れていくのは最悪のパターン。制球力さえ良ければ、四球でピンチを招くことも減る上、バッターの手の出ないところで三振を取ることすら出来る。どんなに球速があろうと、どんなに変化球の切れがあろうと、ノーコンではどうしようもない。投手にとってもっとも大切なもの、と言っても過言ではないのが制球力＝四死球の少なさだ。

1イニングあたりの四死球数を、投球回数15回以上の投手について調べたところ、パ・リーグでは中継ぎ・抑え投手が上位に顔を揃えた。まだ先発なら1イニング１つくらいの四死球は、どうにでも取り繕うことが可能だ。しかし中継ぎ・抑えとなると登板するのは終盤の大事な場面。自ら「火つけ役」になってしまっては話しにならないのだ。トップのウォーレンは、先程紹介した奪三振率では抑えの最下位。それでも好成績を残しているのは、四死球で自ら崩れることがないこと、そして制球力と球の重さで凡打の山を築いていることになる。4位のシュールストロム、5位のペドラザにしても抑えのエースだ。同じ抑えでも、ちょっとパッとしないバルデス、ウィンあたりは0.56以上。抑えの期待に応えられていない森も同様である。ただ、成功している西崎も0.563。四球を出しても崩れず、後続をきっちり絶っているのだ。

2位の高橋憲は中継ぎの左腕。確かに数字そのものは優秀だが、四球を出す以前にあっさり打たれているケースが多く、防御率は6点台。四死球を与えない制球力ではなく、ストライクゾーンを上手く使う制球力に問題がある。同じ中継ぎなら香田、橋本あたりの方が間違いなく優秀と言えるだろう。

先発陣では、さすが和製マダックス。小宮山が0.106でトップで、総合でも第2位。先発投手の2番手が工藤の0.247、その半分以下というのは驚きだ。そもそも0.106という数字自体、完投してやっと四死球を1つという程度。相手側としては打ち崩すしかないのだが、それも多彩な変化球で丹念にコースを突かれては難しい。ただ、終盤に突如崩れることがあるあたりが、もうひとつ勝率が伸びてこない原因だろうか。

先発で2位の工藤は小宮山より四死球率こそ高いものの、被安打が少ない分、勝率、防御率では小宮山を上回る。エース級で唯一ランクインしなかった岩本は0.465。いとも簡単に四球を出すことがあれば、ピンチになると抜群の制球力で見逃し三振を取るなど、はっきり言って掴み所のないエースだ。

投手編

球速
切れ
制球
安定
球質
技術
スタミナ
回復

順位	選手名	球団	四死球率	投球回数	与四死球合計	暴投	評価
1	ウォーレン	ロッテ	0.085	23 2/3	2	1	A
2	小宮山	ロッテ	0.106	103 1/3	11	3	S
3	高橋憲	日本ハム	0.118	17	2	1	C
4	シュールストロム	日本ハム	0.125	16	2	0	B
5	ペドラザ	ダイエー	0.133	30	4	0	—
6	藤井	ダイエー	0.146	41	6	0	A
7	香田	近鉄	0.158	50 2/3	8	1	A
8	橋本	西武	0.245	16 1/3	4	0	B
9	工藤	ダイエー	0.247	101 1/3	25	1	A
10	建山	日本ハム	0.265	34	9	0	B
11	豊田	西武	0.267	33 2/3	9	1	B
12	潮崎	西武	0.274	65 2/3	18	0	B
13	立石	日本ハム	0.284	24 2/3	7	0	B
14	若田部	ダイエー	0.289	79 2/3	23	1	—
15	石井	西武	0.291	89 1/3	26	0	B
16	黒木	ロッテ	0.298	110 2/3	33	2	B
17	金村	日本ハム	0.321	28	9	0	B
18	芝草	日本ハム	0.327	36 2/3	12	3	B
19	藤田	ロッテ	0.329	27 1/3	9	0	B
20	小倉	オリックス	0.331	51 1/3	17	0	—
21	近藤	ロッテ	0.333	21	7	0	C
22	石井	日本ハム	0.333	21	7	0	B
23	篠原	ダイエー	0.337	29 2/3	10	1	B
24	川越	オリックス	0.339	91 1/3	31	2	B
25	園川	ロッテ	0.346	26	9	0	C
26	佐久本	ダイエー	0.350	34 1/3	12	0	B
27	デニー	西武	0.356	19 2/3	7	0	C
28	星野	オリックス	0.370	78 1/3	29	2	B
29	関根	日本ハム	0.373	51	19	0	B
30	西口	西武	0.378	84 2/3	32	1	C

パ・リーグ投手編

安定　突然の乱調にはベンチも大慌て

エースが初回に大きく崩れたら…。信頼を持って送り出した抑えの切り札が打ち込まれたら…。常に自分の力を発揮してくれる投手がいれば、ベンチも安心だ。

「安定度」を数字で表わすのは難しいが、結論としては防御率などとなる。例えば3回4失点でKOされた後に完封しても防御率は6点台。それなら常に7回3失点の投手の方が使いやすいことは言うまでもない。そこで、ここでは防御率と被出塁率（[被安打＋与四死球]÷相手打数）などから、各チームの主力投手を分析したい。

まず昨年の覇者・西武から。ここはなんといっても松坂の加入が大きい。石井は順調に勝ち星を伸ばしているが、西口が絶好調時に比べるともうひとつ。この3本柱に続く投手もどうもパンチ力に欠けるだけに、松坂がいなければどうなっていたことだろうか。抑えの西崎はまず文句なし。何度も怪我で戦線離脱しているだけに連投が効かないが、デニーの存在もあるだけに、先発陣に4本目の柱が欲しいところだ。

昨年2位の日本ハムは投手陣が壊滅状態。最優秀防御率を獲得した金村に加え、抑えのシュールストロムも故障。さらに芝草が絶不調、関根も一時二軍落ち。新外国人ウィッテムもグロスの代役には程遠い。昨年並の活躍をしているのは岩本くらいで、生駒、建山、立石等の若手を育てる年となりそうだ。

オリックスは、昨年で11年連続二桁勝利が途絶えてしまった星野がやや復調気配を見せているのは好材料。中堅金田と新人川越も堅実だ。ただ、この3人に続く選手がおらず、FAで木田がメジャーへ移籍してしまったのも大きな痛手。ウィン、鈴木、小倉のうち誰かに抑えを任せられるといいのだが…。

ここまでの各球団と比べようもないのが首位ダイエーだ。工藤は今年も実績通り。永井、若田部、星野という先発陣が好調で、後には篠原とペドラザが控えているのだから文句なし。心配なのは後半のバテだけだろう。

近鉄は岡本、高村、小池等、コマだけは揃っているのだが、良くも悪くも…という程度。爆発する可能性があるとすればレフトウィッチか。バルデスに替わって大塚が抑えで復活すれば、先発陣の成績も上がりそうだ。

最後にロッテ。守護神ウォーレンが最後に控えている上、防御率は前半終了時でリーグトップ。特にエース小宮山登板時に打線の援護が欲しいところ。前半絶好調だった黒木は、オールスターで火だるまになった後遺症が少々心配である。

抑え

順位	選手名	球団	防御率	試合数	セーブポイント	非SP率	評価
1	ペドラザ	ダイエー	0.90	21	13	0.381	—
2	西崎	西武	1.13	16	11	0.313	A
3	ウォーレン	ロッテ	1.14	23	14	0.391	A
4	シュールストロム	日本ハム	1.69	14	9	0.357	A
5	ウィン	オリックス	2.17	20	6	0.700	C
6	バルデス	近鉄	3.98	26	10	0.615	C

先発

順位	選手名	球団	防御率	被出塁率	評価
1	黒木	ロッテ	1.95	0.265	A
2	工藤	ダイエー	2.31	0.245	A
3	金田	オリックス	2.67	0.299	B
4	松坂	西武	2.70	0.287	A
5	石井	西武	2.92	0.289	A
6	川越	オリックス	2.96	0.300	A
7	小池	近鉄	3.04	0.294	B
8	小宮山	ロッテ	3.22	0.268	B
9	若田部	ダイエー	3.28	0.290	—
10	星野	ダイエー	3.70	0.300	—
11	西口	西武	3.72	0.283	B
12	岩本	日本ハム	3.83	0.338	B
13	生駒	日本ハム	3.83	0.309	—
14	星野	オリックス	3.91	0.308	C
15	後藤	ロッテ	4.07	0.325	C
16	高村	近鉄	4.10	0.362	D
17	潮崎	西武	4.25	0.332	D
18	西村	ダイエー	4.34	0.317	C
19	小林	オリックス	4.55	0.356	C
20	武藤	ロッテ	4.60	0.343	D
21	ウィッテム	日本ハム	4.97	0.380	D
22	岡本	近鉄	5.21	0.368	D
23	マットソン	近鉄	5.57	0.402	D
24	関根	日本ハム	6.18	0.341	C

最新データ作成方法
パ・リーグ投手編

球質　芯に当てられても外野フライにする力強さ

「出会い頭の一発」とは良く聞く言葉だ。しかし、球が重ければ「1、2、3」で芯に当てられても、フェンスオーバーは免れる。本塁打が外野フライになる可能性も十分だ。

球が重いということは、ホームランを打たれにくいということ。当然、データは被本塁打数で、1イニングあたりの被本塁打本数を計算した。対象は投球回数30回以上の投手と、各チームの抑え各一人ずつだ。

抑えの各投手では、しっかりと実績を残しているペドラザ、ウォーレン、西崎、シュールストロムが被本塁打ゼロ。逆に抑えとしては物足りなかったウィン、バルデスが本塁打を浴びている。ただ、それでもウィンで20イニングにつき1本、バルデスでも10イニングで1本の計算なのだから、決して悪い数字ではない。さすが外国人選手、球自体は重いようだ。この二人は被安打率を調べても、他の抑え投手とは大差がない。決定的な違いは四死球率だ。ちなみに、今後抑えが予想される大塚は昨季が0.09、下柳は今季0.12。まずまず及第点といったところだろう。

先発・中継ぎでは、主に中継ぎの投手が上位にランクされている。どうしても先発投手は投球数が多いだけに、その中には「不用意な一球」が出てしまうもの。中継ぎなら短いイニングに全神経を集中させて投げられるのだから、被本塁打率は低くなってしかるべきだ。ただ、そんな中で注目したいのは小林雅。球が速い上に切れもあり、さらに被本塁打0となれば、まさに抑えに適任。抑えにするには防御率がちょっと高いのが気になるものの、経験を積めば十分やっていけるはず。ウォーレンとのダブルストッパーが確立すれば、ロッテはかなり強くなれそうだ。

先発では投球回数が少ないものの、武藤、豊田が優秀。先発ローテーションに定着してもこの数字が維持出来れば立派だ。黒木が上位にランクされているのも、あの気合い十分の投球を見ると納得できるものがある。

抑え

順位	選手名	球団	被本塁打率	投球回数	被本塁打	評価
1	ペドラザ	ダイエー	0.000	30	0	—
2	ウォーレン	ロッテ	0.000	23 2/3	0	A
3	西崎	西武	0.000	16	0	B
3	シュールストロム	日本ハム	0.000	16	0	A
5	ウィン	オリックス	0.054	37 1/3	2	B
6	バルデス	近鉄	0.095	31 2/3	3	B

先発・中継ぎ

順位	選手名	球団	被本塁打率	投球回数	被本塁打	評価
1	星野	西武	0.000	37 2/3	0	A
2	小林雅	ロッテ	0.000	40 1/3	0	A
3	佐久本	ダイエー	0.029	34 1/3	1	B
4	豊田	西武	0.030	33 2/3	1	B
5	香田	近鉄	0.039	50 2/3	2	B
6	武藤	ロッテ	0.044	45	2	B
7	黒木	ロッテ	0.045	110 2/3	5	A
8	川越	オリックス	0.055	91 1/3	5	A
9	小倉	オリックス	0.058	51 1/3	3	—
10	金田	オリックス	0.059	101	6	A
11	森	西武	0.061	65 1/3	4	A
12	石毛	近鉄	0.065	31	2	—
13	工藤	ダイエー	0.069	101 1/3	7	B
14	星野	ダイエー	0.071	56	4	—
15	星野	オリックス	0.077	78 1/3	6	C
16	小宮山	ロッテ	0.077	103 1/3	8	C
17	岩本	日本ハム	0.079	101	8	C
18	永井	ダイエー	0.085	59	5	—
19	生駒	日本ハム	0.089	56 1/3	5	—
20	石井	西武	0.090	89 1/3	8	B
21	木村	西武	0.093	32 1/3	3	C
22	岡本	近鉄	0.094	74 1/3	7	C
23	徳元	オリックス	0.095	31 2/3	3	—
24	藤井	ダイエー	0.098	41	4	C
25	松坂	西武	0.100	90	9	B
26	高村	近鉄	0.101	79	8	C
27	芝草	日本ハム	0.109	36 2/3	4	C
28	下柳	日本ハム	0.120	33 1/3	4	C
29	潮崎	西武	0.122	65 2/3	8	C
30	山原	日本ハム	0.122	32 2/3	4	—

パ・リーグ投手編

技術 派手な三振 地味な内野ゴロ

三振の山を築く投手だけが素晴らしいわけではない。見た目は地味でも、技術を駆使して次から次へと打者を内野ゴロに仕留めていくシーンは、なかなか味があっていいものだ。

試合の流れの中で、三振が欲しい場面と、ゲッツーが欲しい場面は必ず存在する。例えば同じピンチでも、一死二三塁と一死満塁では大きな違いだ。外野フライを打たれては1点は確実。ここで問題になるのは内野ゴロだ。一死二三塁では、ホームではタッチプレーになり、内野ゴロでも1点入る確率は結構高い。しかし一死満塁ならホームゲッツー、あるいは一塁ランナーと打者走者をアウトにする通常のゲッツーでピンチを切り抜けられる。一死二三塁は三振が欲しい場面、一死満塁ならゲッツーが欲しい場面ということになる。もちろん二者連続三振でもいいのだが、相手もプロだ。そう簡単にいくものではない。打たせて取る、それも投手の重要な仕事だ。ここでは、打たれた球が安打になる確率＝打球安打率と、打者を凡打に仕留める確率＝凡打率から、技巧派の投手を探ってみたい。右の表では投球回数15回以上の投手から、打球安打率の低い30人をピックアップしてみた。

打たせて取る、というとどうしてもベテラン先発投手を想像させられる。しかし、上位陣はほとんどが中継ぎや抑えの投手だ。トップはロッテの抑え投手・ウォーレン。力のある直球を持っているだけに、バットに当てられてもそう簡単にはヒットにさせない、というのが一番の理由だろうか。奪三振率は抑えとしてはかなり低く、バットをへし折るような力と、微妙に芯を外す技術で打者を打ち取っているのだ。似た傾向なのは、同じ抑えの3位ペドラザ。球が重くて奪三振率が低い、力で打たせて取るタイプだ。ただ、この二人はちょっと例外と考えるべきである。

2位の田之上は、直球とフォーク主体のピッチング。なんとなく三振を大量に取れそうな気がするが、野茂のような空振りを誘うフォークではなく、バットに当てさせて打ち取るフォークである。4位の金村は直球主体というほどではないが、打たせて取るフォークという意味では田之上と同様。さらに持ち味のスライダーも三振ではなく、芯を外して内野ゴロに打ち取るスライダーだ。6位に顔を見せているウィンも同様。スライダーで打たせて取る技巧派タイプである。そして9位の松坂。速球で詰まらせることもあるが、言うまでもなくスライダーは天下一品だ。

セ・リーグでもそうだったが、パ・リーグでも打たせて取るタイプは、力ではなく変化球で芯を外せる投手が多い。ただ、どうしても三振が欲しい場面があることも事実。そういう意味で、三振も内野ゴロも、どちらも狙える松坂はやはり怪物なのだろう。

順位	選手名	球団	相手打数	奪三振	被安打	与四死球合計	打球安打率	凡打率	評価
1	ウォーレン	ロッテ	84	11	12	2	0.169	0.702	S
2	田之上	ダイエー	73	5	10	12	0.179	0.630	—
3	ペドラザ	ダイエー	107	16	16	4	0.184	0.664	—
4	金村	日本ハム	102	21	14	9	0.194	0.569	A
5	近藤	ロッテ	82	14	13	7	0.213	0.585	B
6	ウィン	オリックス	157	23	25	23	0.225	0.548	B
7	星野	ダイエー	230	20	42	27	0.230	0.613	—
8	徳元	オリックス	132	18	22	19	0.232	0.553	—
9	松坂	西武	366	72	57	48	0.232	0.516	B
10	篠原	ダイエー	116	31	18	10	0.240	0.491	B
11	金田	オリックス	422	62	74	52	0.240	0.555	B
12	高橋功	オリックス	115	15	21	14	0.244	0.565	B
13	小池	近鉄	279	48	51	31	0.255	0.534	B
14	工藤	ダイエー	392	95	71	25	0.261	0.513	C
15	西口	西武	353	62	68	32	0.263	0.541	C
16	生駒	日本ハム	233	35	47	25	0.272	0.541	—
17	レフトウィッチ	近鉄	78	21	12	13	0.273	0.410	—
18	黒木	ロッテ	430	100	81	33	0.273	0.502	C
19	石井	西武	374	48	82	26	0.273	0.583	C
20	木村	西武	139	19	29	15	0.276	0.547	C
21	永井	ダイエー	249	43	50	26	0.278	0.522	—
22	バルデス	近鉄	140	19	29	18	0.282	0.529	C
23	鈴木	オリックス	104	14	20	19	0.282	0.490	C
24	藤井	ダイエー	165	35	35	6	0.282	0.539	C
25	山原	日本ハム	144	16	33	14	0.289	0.563	—
26	川越	オリックス	387	65	85	31	0.292	0.532	C
27	クロフォード	ロッテ	87	5	19	17	0.292	0.529	C
28	西崎	西武	66	16	12	9	0.293	0.439	C
29	高村	近鉄	351	41	76	51	0.293	0.521	C
30	杉本友	オリックス	68	6	15	11	0.294	0.529	—

最新データ作成方法
パ・リーグ投手編

スタミナ
投手のスタミナは貢献度に直結する

壊れかけたゲームをロングリリーフで救ってくれる投手、確実に9回を投げ切ってくれる投手。その役割こそ違え、「数多く投げる」ことはチームへの貢献度が非常に高い。

「数多く投げる」のが大事、といっても、これはもちろん投球数のことではない。いつも100球投げて5回KOでは意味がないのはわかるだろう。「数の多さ」の「数」は投球イニングだ。先発ならベストはもちろん完投だが、後の計算が立つ7回、8回まで投げてくれれば、まず文句はない。その先発が早々に崩れても、追加点を許さずに3イニングくらい平気で抑えてくれる中継ぎがいれば、反撃のチャンスは十分にある。そして抑え。9回1イニングをしっかり抑えるのも大事だが、8回に迎えたピンチを切り抜けた上で、9回も抑えてくれるようなら、非常に頼もしい存在になる。投手のスタミナ、それは投手自身の成績アップはもちろん、チームへの貢献度にも直結する非常に重要な要素だ。

まずは抑え勢。抑えとなると、自然と登場する場面は限られるので、どんなにスタミナがあっても試合数は少ない場合もある。明らかに、スタミナを試合数が反映しているのは西崎だけ。度々の怪我を意識してか、多くが1イニング限定、登板試合数もかなり制限して使われている。ウィンの1試合あたりの投球回数が多いのは、完全な「抑え」としての起用法ではないためだろう。注目はペドラザ。ほぼ完璧に抑えの役割を果たしていながら、1試合あたり1.43回。8回1死や2死からでも問題なく仕事をこなしている投手だ。

先発陣の中ではほぼ8回を投げ切っている黒木がトップ。この時点でロッテは消化試合数が他球団より6試合ほど少なかったのだが、登板試合数も他の投手と互角以上なのは信頼の証でもある。溢れんばかりの気合いで一気にラストまで突っ走る、そんな雰囲気だ。工藤、松坂、小宮山も、明らかに先発完投型。それぞれタイプは違うとはいえ、いかにも「エース級」と呼べる投手。黒木も含めたこの4人は、抑えもしっかりしているチーム。「エースだから完投」と、無理に引っ張りさえしなければ、間違いなく好成績を残してくれる投手だ。

逆に不安なのは1試合あたり6回を切る投手。先発の責任回数は5回といっても、中継ぎへの負担を考えればせめて6回は投げてほしいところ。スタミナ不足ではなく、単にKOが多いだけにしても、結局は不満であることに変わりはない。ただ、生駒や潮崎のように先発に定着していない投手はもちろん例外だ。

抑え

順位	選手名	球団	試合数	救援	投球回数	1試合あたり	評価
1	ウィン	オリックス	20	20	37 1/3	1.87	C
2	ペドラザ	ダイエー	21	21	30	1.43	—
3	バルデス	近鉄	26	26	31 2/3	1.22	C
4	シュールストロム	日本ハム	14	14	16	1.14	D
5	ウォーレン	ロッテ	23	23	23 2/3	1.03	D
6	西崎	西武	16	16	16	1.00	D

先発

順位	選手名	球団	試合数	完投	投球回数	1試合あたり	評価
1	黒木	ロッテ	14	5	110 2/3	7.90	A
2	工藤	ダイエー	13	4	101 1/3	7.79	A
3	松坂	西武	12	3	90	7.50	B
4	小宮山	ロッテ	14	3	103 1/3	7.38	A
5	金田	オリックス	14	3	101	7.21	A
6	岩本	日本ハム	14	4	101	7.21	A
7	石井	西武	13	2	89 1/3	6.87	A
8	小池	近鉄	10	0	68	6.80	B
9	川越	オリックス	14	3	91 1/3	6.52	B
10	西口	西武	13	4	84 2/3	6.51	A
11	武藤	ロッテ	7	1	45	6.43	B
12	星野	ダイエー	9	3	56	6.22	—
13	若田部	ダイエー	13	1	79 2/3	6.13	—
14	後藤	ロッテ	8	1	48 2/3	6.08	B
15	高村	近鉄	13	0	79	6.08	B
16	星野	オリックス	13	3	78 1/3	6.03	B
17	マットソン	近鉄	9	2	51 2/3	5.74	B
18	岡本	近鉄	13	1	74 1/3	5.72	B
19	ウィッテム	日本ハム	13	2	70 2/3	5.44	B
20	西村	ダイエー	11	0	58	5.27	B
21	関根	日本ハム	10	2	51	5.10	B
22	小林	オリックス	6	1	29 2/3	4.94	C
23	潮崎	西武	15	1	65 2/3	4.38	C
24	生駒	日本ハム	13	2	56 1/3	4.33	—

ここ一番！
連投、連投、また連投

信頼のおけるエースなら中4日で、ワンポイントの左投手ならできれば毎日でも使いたいもの。しかし酷使は後々大きなツケとなって帰ってくる。回復力の見極めが大切だ。

「数多く投げる」ことの重要性は、なにも 投球イニング数だけではない。「登板機会が多い」のも、「数の多さ」の意味には含まれるのだ。例えば、先発や抑えのエース、そして左のワンポイントなどは、出来るだけ多く登板させたいもの。しかし、権藤監督の現役時じゃないが、毎日のように登板していたらとても肩がもたない。中継ぎなら最低でも中1日、先発なら中5日は欲しいところだろう。しかし、中継ぎ、抑えはそんなことは言っていられない。間隔が4日も5日も開くことがある一方で、3連投、4連投をこなさなくてはいけない時もある。先発投手にしてもエース級なら、雨や日程の都合でローテーションの順番を一人追い越すようなことは日常茶飯事。オールスター前や優勝争いの最中には、先発直後に抑えで登場するようことすらあるのだ。そんな時に鍵になるのが投手の回復力。ここではチーム試合数÷登板数＝登場率から、各チームのエース級２名、登板数の多い中継ぎ２名、抑え１名についてみてみたい。

当然、登板機会が多いのは、中継ぎ陣。抑えは「リードしている場面」と限定されることが多いが、中継ぎは接戦だろうが、大差リードの場面だろうが、ありとあらゆる場面で登場するのだから、登板機会が増えるのも当たり前だ。また、左打者対策として投入される左投手が上位に揃っているのも予想通り。特に橋本、高橋憲、柴田の1試合あたりの投球数を計算すると10球以下。完全に打者一人を打ち取るためのワンポイントだ。

抑えで目を引くのが、1イニング投球数の少ないウォーレンとペドラザ。ともに打たせて取るタイプの抑えだ。三振を取るには最低でも3球、普通は4～5球というところだろう。しかし内野ゴロなら1球、2球で済むことも少なくない。登板数の多さは、単に回復力だけではなく、制球力や技術も問題になってくるのがよくわかる。逆にそういう意味で再び中継ぎに注目すると、投球数が多いにもかかわらず登場率が高い藤井、下柳、小林雅、香田あたりはまさに「鉄腕」投手だ。

先発勢ではロッテの黒木と小宮山が上位。ロッテは試合数が少ない＝雨で間隔が開いたので、エース級の登板率が高くなったと言えるだろう。ただ、1イニング投球数の差を見れば、省エネ小宮山よりも、黒木の回復力が高いことが十分に想像できる。

松坂は大事に使われている上に、登録抹消があった分、下位に留まっている。9回を確実に投げ切るスタミナと、ローテーション通りに投げる回復力の強化が今後の課題だ。

順位	選手名	球団	試合数	チーム試合数	登場率	投球回数	投球数	1イニング投球数	評価
1	藤田	ロッテ	30	61	2.033	27 1/3	420	15.366	26
2	橋本	西武	33	68	2.061	16 1/3	269	16.469	26
3	藤井	ダイエー	34	71	2.088	41	637	15.537	30
4	下柳	日本ハム	32	68	2.125	33 1/3	601	18.030	30
5	小林雅	ロッテ	28	61	2.179	40 1/3	681	16.884	28
6	香田	近鉄	30	67	2.233	50 2/3	751	14.822	30
7	高橋憲	日本ハム	28	68	2.429	17	256	15.059	26
8	柴田	近鉄	27	67	2.481	12 2/3	211	16.658	—
9	森	西武	27	68	2.519	65 1/3	1145	17.526	24
10	吉田	ダイエー	28	71	2.536	24	430	17.917	26
11	バルデス	近鉄	26	67	2.577	31 2/3	552	17.432	26
12	ウォーレン	ロッテ	23	61	2.652	23 2/3	280	11.831	26
13	水尾	オリックス	25	67	2.680	9 2/3	197	20.379	26
14	小倉	オリックス	23	67	2.913	51 1/3	818	15.935	—
15	ウィン	オリックス	20	67	3.350	37 1/3	642	17.196	26
16	ペドラザ	ダイエー	21	71	3.381	30	369	12.300	—
17	西崎	西武	16	68	4.250	16	293	18.313	22
18	黒木	ロッテ	14	61	4.357	110 2/3	1691	15.280	26
18	小宮山	ロッテ	14	61	4.357	103 1/3	1418	13.723	24
20	金田	オリックス	14	67	4.786	101	1681	16.644	24
20	川越	オリックス	14	67	4.786	91 1/3	1494	16.358	22
22	岩本	日本ハム	14	68	4.857	101	1784	17.663	24
22	シュールストロム	日本ハム	14	68	4.857	16	252	15.750	26
24	岡本	近鉄	13	67	5.154	74 1/3	1348	18.135	24
25	ウィッテム	日本ハム	13	68	5.231	70 2/3	1231	17.420	22
25	西口	西武	13	68	5.231	84 2/3	1425	16.831	24
27	工藤	ダイエー	13	71	5.462	101 1/3	1585	15.641	24
27	若田部	ダイエー	13	71	5.462	79 2/3	1229	15.427	—
29	松坂	西武	12	68	5.667	90	1543	17.144	22
30	小池	近鉄	10	67	6.700	68	1180	17.353	24

最新データ作成方法
セ・リーグ監督編

監督データ分析 采配次第で勝敗は左右される

各球団ごとに得意とする戦い方は異なる。選手層と監督の性格が相まって、チームカラー、勝利へのパターンが作り上げられていくのだ。

今季のセ・リーグは故障、出遅れ、期待はずれなどが原因となって戦力が整っていないチームが多い。当然、オーダーや継投にも工夫を凝らさざるを得ない。ただチームカラーは一朝一夕に変えられるものでもなく、どのチームも"らしさ"と"苦肉の策"とが併存する戦いを強いられているようだ。

そんな中で、ほぼ万全の戦力で戦えている唯一のチーム・中日がペナントをリードしている。関川、福留、ゴメスらが並ぶ打線は勝負強く、野口、山本昌に移籍組の武田や新人の岩瀬を加えた投手陣も充実。ナゴヤドームが本拠地になったのを機に取り組んだ「守れる&機動力」の野球、そして昨季の横浜を思わせる「つないで点を取る+つないで失点を防ぐ」というチームカラーが早くも完成しつつあるのが今季好調の要因だろう。

巨人と横浜は、打線は少なくとも昨季並を維持しているのだが、投手陣の崩壊があまりにも痛い。巨人は先発に峠を過ぎたベテランが多く、中継ぎ~抑えも苦しい陣容。横浜も先発の駒が揃わず、五十嵐の故障と佐々木の不調で得意の勝ちパターンに持ち込めないでいる。この2チームはエース格1～2人が頑張るか、あるいは「とにかく打つ」ことでしか勝てないのが現状だ。

新監督となった3チームではノムラ阪神が面白い。若松新監督のヤクルトはいまだ戦い方を模索している段階、根性主義で親分肌の達川監督が率いる広島は故障者続出で「やりたいことがやれない」状態であるのに対し、策士・野村監督は早くも独自性を出し始めている。細かな継投、機動力を使った攻撃、打順の組替え、調子のいいものの積極的な起用などなど、勢いだけで戦ってきた昨季までとは異なるノムライズムが実践されているのだ。

球団名	出場野手数	1試合あたり	1試合投手数	先発完投数	切り札登板数	盗塁	犠打
横　浜	16	10.5	3.4	5	20	30	20
中　日	21	11.5	3.5	9	16	45	45
巨　人	23	11.5	3.7	12	23	16	29
ヤクルト	24	11.2	3.2	10	16	38	44
広　島	27	11.1	3.7	11	19	37	31
阪　神	22	11.5	4.0	5	21	30	38

マシンガン打線で投手を援護

打線の特徴は昨季と同様だ。特徴はオーダーの固定。自慢のマシンガン打線は、あまりイジることなく、昨季までの実績を重視して組んでいる印象だ。バントと盗塁はそれほど多くない。走るのは石井啄と波留が中心で、送ってくるのもせいぜい波留くらい。その他のケースではガンガン打ってくる。どちらかといえばエンドランタイプといえそうだ。

投手陣に関してだが、斎藤隆が4完投しているようにエースの信頼度は昨季よりアップしているように思える。ただし、いくら本調子にないとはいえ基本は佐々木への継投であり、抑えの信頼度は12球団で一番といえるのではないだろうか。

監督データ（MANAGER DATA）

項目			
監督名	権藤		
タイプ	守備	□-■-□-□-□	攻撃
投手交替	完投	□-□-□-■-□	継投
選手起用	実績	□-■-□-□-□	調子
打順の組替え	少ない	□-■-□-□-□	多い
バント策	少ない	□-■-□-□-□	多い
エンドラン策	少ない	□-□-□-■-□	多い
盗塁策	少ない	□-□-■-□-□	多い
エースの信頼度	低い	□-□-■-□-□	高い
抑えの信頼度	低い	□-□-□-□-■	高い

昨季の監督データ

機動力＋継投コツコツ型野球

恐竜打線という言葉のイメージとは裏腹に、中日の本領は「つなぐ」こと。関川や福留など3割打者でもバントを試みるように、犠打で、あるいは李や関川の盗塁で得点圏に走者を進め、少ないチャンスをクリーンナップが確実にゲットするいう姿勢がうかがえる。起用する選手はほぼ固定されていて、福留以外は実績重視という感覚で、主力が元気なことから打順の組替えは少なくなっている。

エースの信頼度は高くない。というより投手も「つなぐ」ことが基本だ。だが宣の調子がイマイチだったこともあり、抑えの切札登板数は少なめ。代わって新人の岩瀬やリリーフに戻ったサムソンに頼る機会が増えた。

監督データ（MANAGER DATA）

項目			
監督名	星野		
タイプ	守備	□-□-□-■-□	攻撃
投手交替	完投	□-□-■-□-□	継投
選手起用	実績	□-□-□-■-□	調子
打順の組替え	少ない	□-□-□-■-□	多い
バント策	少ない	□-□-□-■-□	多い
エンドラン策	少ない	□-□-■-□-□	多い
盗塁策	少ない	□-□-□-■-□	多い
エースの信頼度	低い	□-□-■-□-□	高い
抑えの信頼度	低い	□-□-□-□-■	高い

昨季の監督データ

最新データ作成方法
セ・リーグ監督編

実績より調子 攻撃力を重視

村田の骨折や清原のリタイア、元木の不調、二岡の台頭、マルチネスの加入などがあり、3番松井以外はオーダーを組み替えるケースが多かった。調子のいい川相を二塁で使った例のように、実績重視より調子重視へとシフトしたような印象だ。ただし攻撃野球であることに変化はなく、バントも盗塁も極端に少なめ。エンドランより一発で得点するのがパターンで「とにかく打て！」という打線だ。

ガルベスまたは上原をエースと考えた場合、信頼度は高い。この2人は完投させるのが基本だ。中継ぎが不調だから、桑田や斎藤あたりにも完投させたいという意識がある。槙原の登板数は多いが、信頼度は高くない。

監督データ

MANAGER DATA

監督名	長嶋		
タイプ	守備	□-□-□-■-□	攻撃
投手交替	完投	□-■-□-□-□	継投
選手起用	実績	□-■-□-□-□	調子
打順の組替え	少ない	□-■-□-□-□	多い
バント策	少ない	□-□-■-□-□	多い
エンドラン策	少ない	□-□-□-■-□	多い
盗塁策	少ない	□-□-■-□-□	多い
エースの信頼度	低い	□-□-■-□-□	高い
抑えの信頼度	低い	□-□-■-□-□	高い

昨季の監督データ

投打にバランス求め 1点にこだわる

一軍出場した選手がかなりの数にのぼり、先発オーダーの組み替えもそれなりに多い。馴れないポジションを守らせたりなど選手起用に四苦八苦している印象である。代打策が目立ち、バント、盗塁も中日に次いで多い。野村監督当時よりさらに調子重視・攻守のバランス・機動力重視をアップさせ、1点にこだわっているようなイメージか。

川崎が4完投、石井一がスタミナ豊富であることから、先発に対する信頼度は上がったように思える。というより「なるべく長いイニングを引っ張りたい」という感じか。そこから山本、広田、高津と少ない投手数による継投というのが基本のようだ。

監督データ

MANAGER DATA

監督名	野村		
タイプ	守備	□-□-■-□-□	攻撃
投手交替	完投	□-■-□-□-□	継投
選手起用	実績	□-□-□-■-□	調子
打順の組替え	少ない	□-□-□-■-□	多い
バント策	少ない	□-□-□-■-□	多い
エンドラン策	少ない	□-□-■-□-□	多い
盗塁策	少ない	□-□-■-□-□	多い
エースの信頼度	低い	□-□-■-□-□	高い
抑えの信頼度	低い	□-■-□-□-□	高い

昨季の監督データ

若手の起用で苦心のオーダー

主力がほとんど故障を抱えており、フルシーズン戦える選手が皆無といっていい。そのため木村、東出、森笠、新井といった若手の起用も多く、なんとか突破口を見つけようとしている印象だ。また赤ヘルといえば盗塁というイメージがあるが、その通り、ほぼすべての選手が走ってくる。バントも多く、得点圏に走者を進めようとするのは中日と同じだが、主軸がそれを帰せないという感覚か。

投手の基本は継投策だが、佐々岡が6完投しているようにエース信頼度は絶大。ただし野手同様に故障者が多くて中継ぎ以降に対する信頼感が薄く、小林幹も昨季ほどの迫力がない。こちらも突破口が欲しいところだ。

監督データ

MANAGER DATA

項目			
監督名	三村		
タイプ	守備	□-□-□-■-□	攻撃
投手交替	完投	□-□-□-■-□	継投
選手起用	実績	□-■-□-□-□	調子
打順の組替え	少ない	□-□-■-□-□	多い
バント策	少ない	□-□-■-□-□	多い
エンドラン策	少ない	□-□-□-■-□	多い
盗塁策	少ない	□-□-□-■-□	多い
エースの信頼度	低い	□-□-□-■-□	高い
抑えの信頼度	低い	□-□-□-■-□	高い

昨季の監督データ

機動力と継投へ形を作る1年

野村監督が就任したことにより、さすがに昨季までとは雰囲気がガラリと変わった。打線の特徴は調子重視。というより相手にあわせてオーダーを変えるという感覚か。バントは数字以上に多く、盗塁もほとんどの選手が試みる。ジョンソンとブロワーズ以外は打順はあまり関係なく犠打or盗塁のサインが出されているようだ。

薮は4完投しているが、原則は継投。それもかなり細かく、先発から遠山、伊藤、葛西らをつなぎ、リベラで締める。ただリベラに関しては、登板数が多く成績もいい割には監督からの信頼度は高くないのが周知の事実。福原を切札とする方が野村監督っぽいか。

監督データ

MANAGER DATA

項目			
監督名	吉田		
タイプ	守備	□-□-■-□-□	攻撃
投手交替	完投	□-□-□-■-□	継投
選手起用	実績	□-■-□-□-□	調子
打順の組替え	少ない	□-■-□-□-□	多い
バント策	少ない	□-□-□-■-□	多い
エンドラン策	少ない	□-■-□-□-□	多い
盗塁策	少ない	□-■-□-□-□	多い
エースの信頼度	低い	□-□-■-□-□	高い
抑えの信頼度	低い	□-□-□-■-□	高い

昨季の監督データ

最新データ作成方法

パ・リーグ監督編

監督データ分析

監督の采配がチームの窮状を救う

試合中ならピンチの時、シーズンを通せば選手の調子が悪い時。そんなチームの窮状も、監督の采配次第ではあっさり乗り切ることが出来るものだ。

現在、パの各チームは投手にしても野手にしても軸になる選手が半分程度しかおらず「ベストオーダー」や「先発ローテーション」をきっちり組むのが難しい状況だ。そんな時、監督がどの選手を抜擢するか、選手を見る目が問われてくる。選手交代のタイミングや、先発と控え選手の選択、さらに一軍と二軍の選手入れ替えなど、試合中以外も含めた監督の采配が、例年以上に順位に大きく影響してくると言えるだろう。

中でも最も苦労しているのは、日本ハムの上田監督だ。昨年ビッグバン打線の中軸だったウィルソンが故障し、西浦が絶不調で二軍落ち。田中、片岡も万全の状態とは言い難い。投手も金村、シュールストロムが戦線離脱するなど完全崩壊してしまっている。

逆に、安心して試合を見ていられるのはダイエーの王監督だろうか。ペドラザという絶対的な守護神の加入と、昨年のドラフト組の急成長。さらに工藤に若田部と、投手陣の駒が揃った。西武も松坂の加入と西崎の抑え定着が大きい。西口もまずはエースとしての役割を果たしている。森がもう少し安定し、先発陣にあと一枚加わると万全だ。

逆に近鉄は投手の成績が今ひとつ。しかし、磯部が外野に完全転向し、的山が正捕手に定着したことで打線が安定してきた。昨年不調だったローズの完全復活も大きい。

オリックスは、外野は安定している反面、内野陣を固定出来ないのが弱み。絶対的な抑えがいないことも不安材料だ。ロッテも、常にスタメンで使えるような選手が少ないのが問題。チーム打率や得点は見劣らないが、パンチ力不足の印象がある。リードして終盤を迎えさえすれば、ウォーレンがいるだけにまず負けないのだが。

球団名	出場野手数	1試合あたり	1試合投手数	先発完投数	切り札登板数	盗塁	犠打
西武	27	12.9	3.2	10	16	77	68
日本ハム	24	12.5	3.5	13	14	44	40
オリックス	20	11.9	3.3	10	20	31	55
ダイエー	22	12.0	3.4	10	21	42	68
近鉄	24	11.2	3.6	3	26	31	68
ロッテ	22	12.9	3.2	10	23	34	61

目立つは松坂ばかりでも足を活かした野球は健在

松坂ばかりが取り上げられている印象がある西武。しかし昨シーズン末に抑えで復活した西崎が今季好調。連投が効かない分はデニーが補っており、ワンポイントの橋本も健在。西口も昨季並みの成績は残しているし、石井も確実に勝ち星を伸ばしているので、投手陣に大きな不安はない。左打者対策に橋本の登板が多いわりに、継投数は少なめだ。

打撃陣は、今季新たに獲得した外国人選手が散々だが、松井を軸とした足を活かした野球は健在でチーム盗塁数77は断トツ。いわゆる「黄金時代」とは完全に違うチームに生まれ変わっており、変に外国人を補強するよりは、この方が良さそうな印象だ。

監督データ（MANAGER DATA）

監督名	東尾		
タイプ	守備	□-□-□-■-□	攻撃
投手交替	完投	□-□-■-□-□	継投
選手起用	実績	□-□-□-■-□	調子
打順の組替え	少ない	□-□-□-■-□	多い
バント策	少ない	□-□-□-■-□	多い
エンドラン策	少ない	□-□-■-□-□	多い
盗塁策	少ない	□-□-□-□-■	多い
エースの信頼度	低い	□-□-□-■-□	高い
抑えの信頼度	低い	□-□-■-□-□	高い

昨季の監督データ

監督のタイプよりチーム事情が大問題

今年は、選手の故障や不振が相次いだため、監督のタイプがどうこう言うより、打順もローテーションも「動かさざるを得ない」状況だ。投手陣ではエース岩本がまずまずの活躍をしており、信頼度は引き続き高い。チーム完投数もリーグトップだ。問題は抑え。今季は昨年を大きく上回る安定感を見せていたシュールストロムが戦線離脱。下柳と黒木では、とても安心して任せられないだろう。

打線も基本的には「ビッグバン」なので、犠打は少ない。ただ、盗塁は昨年もリーグ2位。今年は足のある選手も出てきており、打線の不調と合わせて、今後さらに盗塁数が伸びる可能性はある。

監督データ（MANAGER DATA）

監督名	上田		
タイプ	守備	□-□-□-■-□	攻撃
投手交替	完投	□-■-□-□-□	継投
選手起用	実績	□-■-□-□-□	調子
打順の組替え	少ない	□-■-□-□-□	多い
バント策	少ない	□-■-□-□-□	多い
エンドラン策	少ない	□-□-□-■-□	多い
盗塁策	少ない	□-□-■-□-□	多い
エースの信頼度	低い	□-□-■-□-□	高い
抑えの信頼度	低い	□-□-■-□-□	高い

昨季の監督データ

パ・リーグ監督編

仰木マジックに
選手がどこまで応えるか

前ページで「外野は安定している反面、内野陣を固定出来ない」とした。が、実は外野も固定していないのが仰木監督。ピンチの際に相手打者によって外野、つまりイチローの守備位置を変えることはよく見られるし、代打などの関係から田口を外野から内野へ、というケースも少なくない。出場選手数はリーグ最低、選手の顔ぶれはあまり変えずに、守備位置や打順を動かすのが好きな監督だ。打撃は盗塁や犠打数からわかるように攻撃型。

投手についても、完投数こそ水準だが、抑えが確定していないのは仰木監督らしい。もちろんウィンの信頼性がもうひとつ、というのもあるのだが。

監督データ　MANAGER DATA

監督名	仰木		
タイプ	守備	□-□-□-■-□	攻撃
投手交替	完投	□-□-□-■-□	継投
選手起用	実績	□-□-□-■-□	調子
打順の組替え	少ない	□-□-□-■-□	多い
バント策	少ない	□-■-□-□-□	多い
エンドラン策	少ない	□-□-■-□-□	多い
盗塁策	少ない	□-■-□-□-□	多い
エースの信頼度	低い	□-■-□-□-□	高い
抑えの信頼度	低い	□-□-■-□-□	高い

昨季の監督データ

投手陣が充実し
継投の悩みは解消へ

昨年は投手起用にかなり苦悩し、その上今年は武田が移籍。さらに苦しいかと思いきや、全く逆の展開になった。昨年入団した若手が急成長。当初は山田の抑えに不安があったが、途中加入のペドラザが岡本の代役以上の働きをしているのも大きい。先発陣に完投能力があり、必要以上に中継ぎに負担をかけることもない。投手陣の信頼性は昨年と雲泥の差と言えるだろう。

野手では、極端な低打率に喘ぐ小久保を使い続けているのがかなり目立っている。それ以外はどの選手も一長一短、自然と打順の組み替えは多くなる。攻撃の作戦面では、足を使う方が若干多い程度。

監督データ　MANAGER DATA

監督名	王		
タイプ	守備	□-□-□-■-□	攻撃
投手交替	完投	□-□-□-■-□	継投
選手起用	実績	□-■-□-□-□	調子
打順の組替え	少ない	□-□-■-□-□	多い
バント策	少ない	□-□-■-□-□	多い
エンドラン策	少ない	□-□-■-□-□	多い
盗塁策	少ない	□-□-□-■-□	多い
エースの信頼度	低い	□-□-□-■-□	高い
抑えの信頼度	低い	□-□-■-□-□	高い

昨季の監督データ

いてまえ＋足は魅力 問題は投手力

いてまえ打線のイメージが強いが、その対極のような「ちょこまか」走る選手も揃っており犠打は多い。ただ、足がある選手にパワーもそこそこあったりするので、確実に送るか、思い切って強行するかの両極端という雰囲気。選手の足の速さだけを考えれば盗塁数自体はもっと伸びるはずである。

1試合投手数はリーグ最高の3.6。完投数がわずか3しかないように、先発陣が不甲斐ない。その上、中継ぎ、抑えも今ひとつピリっとしないのだから、監督の采配以前の問題と言えるだろう。大塚が完全に復活しても、そこまでいかに繋ぐかが問題になりそうだ。

監督データ（MANAGER DATA）

監督名	佐々木		
タイプ	守備	□-□-■-□-□	攻撃
投手交替	完投	□-□-■-□-□	継投
選手起用	実績	□-□-□-■-□	調子
打順の組替え	少ない	□-□-□-■-□	多い
バント策	少ない	□-□-□-■-□	多い
エンドラン策	少ない	□-■-□-□-□	多い
盗塁策	少ない	□-□-□-■-□	多い
エースの信頼度	低い	□-□-■-□-□	高い
抑えの信頼度	低い	□-□-□-■-□	高い

昨季の監督データ

ストッパーは文句なし レギュラーを固定できれば…

抑えはウォーレンで万全。先発では黒木は文句なしで小宮山もますますだが、それ以外が今ひとつだ。そこで鍵になるのは中継ぎ陣。あまり多くの投手をつぎ込まないのは山本新監督になっても変化はないが、新人の小林雅に負担が集中しているのは、将来を考えると不安。河本の完全復活を期待したい。

打者ではボーリックの離脱が痛い。また諸積、小坂、初芝以外は打順の入れ替わりが激しく、「レギュラー」と呼べる選手が少ないのも問題。低レベルの争いではないのが救いだが、結果として初芝の守備位置（指名打者も含む）が一定しなくなる。4番打者なら守備に余計な気を使わせたくないところだ。

監督データ（MANAGER DATA）

監督名	近藤		
タイプ	守備	□-□-■-□-□	攻撃
投手交替	完投	□-■-□-□-□	継投
選手起用	実績	□-■-□-□-□	調子
打順の組替え	少ない	□-□-□-■-□	多い
バント策	少ない	□-□-■-□-□	多い
エンドラン策	少ない	□-□-□-■-□	多い
盗塁策	少ない	□-□-□-■-□	多い
エースの信頼度	低い	□-□-■-□-□	高い
抑えの信頼度	低い	□-■-□-□-□	高い

昨季の監督データ

COLUMN

中継ぎ投手の使い方が勝敗を大きく左右する

ベスプレの楽しみ方はいろいろあるが、ほとんどの場合、自分の贔屓チームには自分自身が指示を出しているに違いない。投手の交代時期や代打、代走、守備堅めなど、とにかく頭を使わされる。

もちろん、それはそれでいいのだが、ここでちょっと考えてみたいのは相手チームの采配、特に中継ぎ投手の交代時期についてだ。通信も含めた人間対人間の対戦機能もあるとはいえ、コンピュータ相手に試合をすることも多いはず。当然、交代指示を出すのもコンピュータだ。ただ、どうもコンピュータ監督は、中継ぎの使い方がよろしくない。リリーフ陣が勝敗を大きく左右することは、112ページのコラムにある通り。これはコンピュータにとって致命的な弱点だ。ここでは西武の橋本を例に挙げて考えてみよう。

橋本といえば、代表的な左のワンポイント。129ページの表を見ると、33試合に登板して投球回数は16回1/3。1試合平均で約0.5イニング、打者1人か2人に投げてすぐ交代という投手である。ところが、監督がコンピュータだと、1試合平均で2イニング近く投げさせられてしまうのだ。これは中継ぎの1番手に設定した場合の数字で、中継ぎの4番手や抑えの1番目にすれば平均投球回数は少なくなる。ただ、それでは登板試合数自体も減ってしまい、「ワンポイント」らしい登板数の多さには繋がらない。つまり、ベスプレには「ワンポイント」という概念が存在しないことになる。

この傾向は、ワンポイント型の投手に限らず、中継ぎ全体に共通する。シーズンを通したデータを取ると、中継ぎに勝敗が多くつく傾向にあるのも、この「引っ張り過ぎ」が原因だろう。中継ぎ投手が逆転を食らえば、もちろん敗戦投手になる。逆にリードされている場面で登板した場合、相手の中継ぎが打ち込まれると、勝ち星が転がり込むのだ。

これを逆手に取れば、逆転勝ちを収めることも決して難しくはない。相手投手がロングリリーフをしている時に攻勢を仕掛けるのだ。ちょっとしたチャンスも逃してはいけない。ランナーが出たら代打、代走を積極的に使って一気に勝負を決めてしまおう。

また、コンピュータを反面教師にすれば、自ずと「正しい投手起用法」もみえてくる。回復が24の中継ぎなら、12球以内に抑えれば翌日もスタミナ指数200で登板が可能になる。ワンポイント用の投手なら、出来れば毎日使いたいはず。登板の際は打者1人、2人に限定して、少ない球数で次の投手に繋ぐことが勝利への近道だ。

ベストプレー
プロ野球

1999年前期
球団別最新データ

ここでは、1999年のオールスター前までのデータを元に、
球団別の最新データを作成してみた。
99年のデータで戦ってみたい、という方は、ぜひ、
このページのパラメータをゲームに入力して遊んでみてほしい。

※選手名の前の△は99年前半ほとんど出場していない選手、
×は全く出場していない選手を表す。

横浜ベイスターズ

1998年1位　79勝56敗　勝率.585／1999年前期3位　40勝41敗　勝率.493

自慢の継投策で連覇を目指せ

後半戦に突入するやいなや「佐々木、ひじを手術。今季は絶望か⁉」という衝撃的なニュースが飛び込んできた。横浜は昨季、念願のペナントを制し、その中心には１勝１敗45セーブ、防御率0.64という抜群の成績を残してＭＶＰにも選ばれた佐々木がいた。だが今季は打たれるシーンが目立ち、腕の異状を訴えていた。そして検査の結果、握力に影響するという尺骨神経にマヒが確認されたのだ。それでも「投げられる間は投げる」はずだったのだが、とうとうドクターストップがかかり、シーズン途中の手術となったわけだ。

不安を抱えながらも成績的にはさすがと思わせる数字を残していた佐々木。そのリタイアはあまりにも痛く、連覇に向けてのシナリオは大きく狂った。しかもベイスターズの懸念は佐々木ひとりにとどまらない。

たとえば先発は、斎藤隆と川村に続く３番手以降が問題。三浦は丁寧に投げているのはわかるし上昇の気配もうかがえるが、序盤は安定感に欠けた。左ひじに不安を抱える野村は早い回に点を許してしまい、一軍と二軍を行ったり来たり。戸叶も、もともと力はこんなものといえばそれまでだが、制球と一発に苦しんでいる。中継ぎ陣も38年ぶりの優勝へ向けての団結力があった昨季ほどではなく、またヒゲの大魔神こと五十嵐の出遅れなど、前半はやりくりに苦労させられた。

だが、壊滅というほどの窮地にはない。エース斎藤隆は変化球で打ち取る投球技術に磨きがかかり、３年目を迎えた川村は課題とされた軽い球質の改善とスタミナ強化に成功するなど、順調に成長している。また福盛という若手の台頭も見られた。福盛は95年、ベイスターズが12年ぶりに勝率５割以上をマークできるかという大事な最終戦でプロ入り初先発を任されたように、素質は期待されていた投手。97年には４勝をあげ、斎藤隆の故障による穴を埋めた。今季は一軍に定着し、特に序盤戦ではチーム初完投をマーク、一時は最多勝と大車輪の活躍。この投手がいなければ、横浜はもっとひどいことになっていたはずだ。できれば他にも何人か、若手を起用したいところである。

中継ぎもオールスターに出場した島田など（今後はストッパーとして起用されるか？）総合的な安定感はまずまずといえる。昨年以上に打線の援護を要するのは確かだが、粒は揃っているのだ。自慢の継投がズバリと決まれば、連覇は難しいことではないはずだ。

●監督データ

項目							
□監督名	権藤						
□タイプ	守備	○	○	○	○	●	攻撃
□投手交替	完投	○	○	○	○	●	継投
□選手起用	実績	●	○	○	○	○	調子
□打順の組替え	少ない	○	●	○	○	○	多い
□バント策	少ない	○	●	○	○	○	多い
□エンドラン策	少ない	○	○	○	●	○	多い
□盗塁策	少ない	○	○	○	●	○	多い
□エースの信頼度	低い	○	○	●	○	○	高い
□抑えの信頼度	低い	○	○	○	○	●	高い

先発が昨季より不安なぶん、得点力を上げるため攻撃的にならざるを得ない。投手交替を目一杯『継投』にするなど、極端なのが権藤監督の特徴。ただ選手起用は『実績』というより固定というイメージか。

●野手データ

No	選手名	打席	タイプ	守備力 捕	1	2	3	遊	外	肩	足	眼	実績	スタミナ	巧打	長打	信頼	対左	打撃指数
6	石井琢	L	S	—	—	—	B	B	—	A	A	B	B	A	C	D	+1	-1	310
7	波留	R	S	—	—	—	—	—	C	B	B	C	B	B	C	D	0	0	275
8	鈴木尚	L	P	—	—	—	—	—	B	C	C	B	A	B	A	B	0	-1	330
4	ローズ	R	S	—	—	B	D	—	—	C	D	B	A	B	S	A	+2	+2	340
3	駒田	L	P	-	B	—	—	—	—	C	D	C	A	A	C	C	-1	-1	280
9	佐伯	L	P	—	—	—	—	—	C	C	C	C	C	D	D	C	0	-1	270
5	進藤	R	P	—	—	D	A	C	—	C	D	C	D	C	D	C	-1	0	230
2	谷繁	R	P	B	—	—	—	—	—	A	D	C	C	A	D	C	+1	+1	270
—	中根	R	P	—	—	—	—	—	B	B	C	D	D	D	D	C	+1	+1	270
—	秋元	R	S	C	—	—	—	—	—	C	D	D	E	D	D	D	0	0	220
—	万永	R	S	—	—	C	C	C	—	C	B	C	E	C	C	E	0	0	260
—	ポゾ	R	P	—	—	C	C	—	—	C	C	C	D	C	B	C	0	0	290
—	井上	L	S	—	—	—	—	—	B	C	B	E	D	C	D	C	0	-2	260
—	畠山	R	P	—	D	—	—	—	C	C	D	D	C	D	C	C	0	0	275
—	△荒井	L	S	—	—	—	—	—	D	D	D	C	C	D	C	D	0	-2	270
—	×川端	R	P	—	—	C	C	—	C	C	D	C	D	C	C	E	0	0	250

横浜ベイスターズ

分厚い打線は昨季以上　投手陣の奮起に期待

家族サービス（？）のため今季限りで引退を表明したローズが大当たりを見せている。もともとチャンスに強いバッターであり、安定して3割を打てる巧打者ではあったが、今季は長打力も飛躍的にアップし、三冠を狙おうかという暴れよう。手をつけられないほどの大爆発である。

2年連続首位打者の鈴木尚は、すっかり自信をつけた。ローズのおかげで目立たないでいるが、その打撃技術は健在だ。トップバッターとしてはセでNo,1の石井啄も好調をキープしており、今季は鈴木尚以上の成績をマークしそうな勢い。谷繁への評価も高く、以前なら「セの捕手で古田の次は？」という問いに首を傾げていたが、いまなら文句なく谷繁といえる。リードだけでなくバッティングにも向上が見られる。

また横浜は、派手さはないが確実に仕事をしてくれる外国人選手を発掘してくることに定評があり、今季もポゾが前評判以上の働きを見せてくれている。佐伯や中根といった準レギュラー級選手の働きもまずまずだし、万永、畠山、荒井の代打陣も相変わらず（昨季の横浜は代打成功率がセ1位）。

反面、やや不安なのが元気者・波留の元気の空回りとベテラン駒田の衰え。とはいえそれらも打線の足を引っ張るというほどではない。若手の成長という面では不十分だが、前半戦は主軸に故障者や絶不調という選手も出ず、これだけ打線が分厚ければ十分だろう。少なくとも昨季並、印象としては昨季以上というのが今季のマシンガン打線である。

チームの総合的なイメージは打高投低だから、いかにして大量得点をあげ、投手を援護できるかという戦い方になる。走れる選手には積極的に走らせ、下手にバントなどせずに連打で塁を埋め、チャンスを作ってローズに渡す。そういう打線のつながりを実現できるかどうかがカギとなるだろう。

投手起用は継投策が基本。斎藤隆と川村のみ少し長めに引っ張ってもいいが、原則としては5～6回をメドに交替させ、ローテーションをキッチリと回転させたい。6～8回は細かな継投で乗り切ることになる。

一軍への合流が遅れた五十嵐は、とりあえずスタミナ指数を0にしておく。こうすれば開幕から10試合ほどは登板しない（COMまたはSKIPモード時。マニュアル操作でも登板させないようにしたい）。もちろん最後を締めるのは佐々木だ。今回は前半戦の成績を基本データとしているため、やや能力は落としてあるが大魔神はリリーフエースとしてオーダーに含めてある。“もし佐々木がフルシーズン戦えたら”という感覚でペナント連覇を目指そう。戦力としては十分。後は監督の采配次第（特に投手起用）である。

●投手データ

選手名	投法	タイプ	球速	切れ	制球	安定	球質	技術	スタミナ	回復	スタミナ指数
斎藤隆	R	B	144	B	A	B	C	B	B	24	200
川　村	R	A+	140	B	B	B	D	B	B	24	200
三　浦	R	C	138	B	C	C	D	C	C	24	200
野　村	L	A+	136	C	A	C	C	C	C	26	200
福　盛	R	C	140	B	C	C	C	C	C	24	200
戸　叶	R	B	140	C	D	D	D	C	C	26	200
横　山	R	A+	146	B	B	D	C	D	D	24	200
×河原	L	A	140	B	E	D	D	C	E	26	200
阿波野	L	A+	138	B	D	C	C	C	E	26	200
島　田	R	B	142	B	C	C	C	C	D	28	200
△五十嵐	R	C	140	C	B	B	B	C	D	26	0
佐々木	R	B+	148	S	B	A	A	C	E	26	200

こんな選手が欲しい！

野手は特に補強する必要はないだろう。強いてあげれば出番のない川端に代えて実績の少ない若手、左の代打などを試すといったところか。それより心配なのは投手陣。河原に代わる左を用意し、新人投手を中継ぎまたは先発で起用してみたい。

●野手

No	選手名	打席	タイプ	守備力 捕	1	2	3	遊	外	肩	足	眼	実績	スタミナ	巧打	長打	信頼	対左	打撃指数
	左の代打	L	P	ー	ー	C	ー	C	ー	C	D	C	E	D	D	D	0	-2	240
	高卒ルーキー	L	P	ー	ー	ー	C	ー	ー	B	C	D	E	D	D	C	0	-2	240

●投手

選手名	投法	タイプ	球速	切れ	制球	安定	球質	技術	スタミナ	回復	スタミナ指数
左ワンポイント	L	C	140	C	C	B	C	B	D	26	200
右投げ新人	R	A+	144	B	C	D	C	C	D	24	200

中日ドラゴンズ

1998年2位　75勝60敗　勝率.556／1999年前期1位　50勝33敗　勝率.602

戦力は万全　狙うは優勝あるのみ！

今季、開幕からの猛ダッシュで首位を独走するドラゴンズ。他チームとの大きな違いとしては、戦力がほぼ万全な形に整っていることがあげられる。

多くの場合、プロ野球では「この戦力でどうペナントを戦うか」がテーマとなる。投手が優秀なら１点を守り抜く野球になるだろうし、打線が強力なら打ち勝つゲームを増やそうと心がける。しかし中日は違った。まず目指すべき野球を設定し、そのために「どんな戦力が必要か」からスタートしたのだ。

キッカケはナゴヤドームの完成だった。フィールドの広いこの球場では、それまでのようにガンガン打って相手をねじ伏せる戦いではなく、守って走って競り勝つ試合を強いられるのは必至。そこで、大豊、矢野、パウエルを放出。代わって守備に定評のある久慈、一発はなくとも確実性のある関川、さらには“韓国のイチロー”といわれた（これはいいすぎだったと思うが）李を獲得するなど、主力メンバーの大幅刷新を図った（立浪と今中以外はすべてトレード要員ともいわれた）。関川のコンバートや一軍経験の少ない井上、渡辺などの起用、あるいは李の故障などといった不安要素・アクシデントはあったものの、こうして一気に機動力を高めることに成功したのである。

また投手陣は今中の故障があって手薄かに思われたが、野口が大成長を遂げ、門倉も奮投し、山本昌も最低限の仕事を果たした。さらに川上が新人王を獲得し、中継ぎから抑えにかけては落合、ルーキー正津、そして宣と揃って、いつの間にやら投手王国に。

昨季はまだ新生ドラゴンズの種を蒔く段階だったが、それでも２位。昨季の主力がそっくり残っているのだから強いのは無理もない。さらに新人の福留も少しずつプロの水に馴染んで本領を発揮し始めている。投手陣を見ても、ダイエーからＦＡで移籍の武田がもう１枚欲しかった先発として十分な働きを見せ、中継ぎは昨季までのメンバーに新人の岩瀬、自信を持って投げられるようになったサムソンなど、スキの見つからない布陣。冒頭で述べたように、戦力の整備という点ではセ・リーグで一番、いや12球団でトップといえる充実ぶりなのだ。

こうなれば、もう狙うのは優勝しかない。戦い方も「打者は１点を取りに行く。投手は継投で守り抜く」とハッキリしており、闘将星野監督の胴上げの日も近いはずだ。

●監督データ

□監督名	星野			
□タイプ	守備	○○○●○	攻撃
□投手交替	完投	○○○●○	継投
□選手起用	実績	○○○●○	調子
□打順の組替え	少ない	○○●○○	多い
□バント策	少ない	○○○●○	多い
□エンドラン策	少ない	○○●○○	多い
□盗塁策	少ない	○○○●○	多い
□エースの信頼度	低い	○●○○○	高い
□抑えの信頼度	低い	○○○●○	高い

基本的には昨季と大差ないが、より継投を重視するようになった。また少し不振気味だった宣に対する信頼度をやや下げてみた。打順については福留の活躍のおかげである程度は固定して戦えるはずだ。

●野手データ

No	選手名	打席	タイプ	守備力 捕	1	2	3	遊	外	肩	足	眼	実績	スタミナ	巧打	長打	信頼	対左	打撃指数
7	李	R	P	—	—	—	—	B	C	A	A	C	B	C	C	C	-1	0	270
6	福留	L	P	—	—	—	D	C	—	B	B	C	D	C	C	C	+1	-2	280
8	関川	L	S	E	—	—	—	—	B	C	B	B	C	B	A	D	0	0	310
5	ゴメス	R	P	—	D	—	C	—	—	A	D	C	B	A	D	A	0	0	280
4	立浪	L	S	—	—	A	—	—	C	C	C	B	A	B	C	D	0	-1	280
3	山崎	R	P	—	C	—	—	—	E	D	D	D	B	B	D	A	+1	0	250
9	井上	L	P	—	—	—	—	—	B	B	D	B	E	B	C	C	+1	-2	280
2	中村	R	P	B	—	—	—	—	—	A	C	C	C	B	D	C	0	0	245
—	久慈	L	S	—	—	B	—	B	—	B	B	C	C	B	C	E	-1	-2	240
—	神野	R	S	—	—	C	C	C	—	C	B	D	E	C	C	D	0	0	270
—	種田	R	P	—	—	C	C	C	—	B	C	C	C	D	C	D	0	+1	260
—	大西	R	S	—	—	—	—	—	A	C	B	C	D	D	D	E	0	0	240
—	愛甲	L	S	—	C	—	—	—	D	D	D	C	C	E	C	D	0	-1	270
—	山口	R	S	—	—	—	—	—	A	B	C	D	D	D	C	E	0	0	235
—	△益田	L	S	—	—	—	—	—	B	A	A	D	D	D	C	E	-1	-2	260
—	△筒井	R	P	—	D	—	C	—	D	C	C	D	E	D	C	D	0	0	250

中日ドラゴンズ

投打とも力は安定　わかりやすい戦い方で

打線の不安は少ない。あえて穴を探せば、一発があるのはゴメスと山崎だけ、その2人にしても高打率は期待できないこと、8番の中村が他の選手に比べて打力が劣ること、控えの捕手がいないこと。また李も、いまだにどこが底でどこが天井なのか判断しにくい。が、ゴメスも山崎もハナからそれを承知で使っているのだし、ツボにハマれば本塁打王を狙える素材とプラスに考えたい。中村はリード面での貢献が大きいし、ベスプレなら故障もないのだから控えがいなくてもよしとしよう。李についても、ベスプレならではの「足が速ければ有利」を最大限に生かして1番に据えれば問題ないはずだ。

以上の点は贅沢な悩みだ。実際には、ほぼ理想的なオーダーを組める。足のある李は、もちろんトップに置き、塁に出たら積極的に走らせる。いまの調子を維持できれば3割を期待できる福留を2番に置けば、チャンスメイクの機会はグッと増えるはずだ。3番関川は今季に入って巧打が格段に上がった。しぶとくタイムリー、最低でも進塁打を打ってくれるだろう。これをゴメスと立浪でホームへ帰す。ヒットはいらない。犠牲フライで十分だ。もし相手投手がクリーンアップとの勝負を避けてきたなら、ランナーがたまった時点で山崎の一発。井上も今季は勝負強さを発揮している。と、ゴメスや福留、山崎らの守備には多少の懸念はあるが、こと攻撃という点ではかなり確実性の高いオーダーとなる。ワンチャンスあれば確実に1点、上手くすれば2～3点は取ってくれるはずだ。

投手起用もはっきりしている。何より、能力の高い先発、しかも2ケタ勝ち星を期待できる投手が5人揃っているのが嬉しい。誰をエースとするかは意見のわかれるところだが、誰がエースであっても継投策が基本だ。中5日のローテーションを守り、1回の登板について100球前後、6回をめどに投げさせるといい。残りの4イニングは、正津、岩瀬、落合を軸とする中継ぎでしのぐことになる。それぞれパラメータは優秀だ。左右バランスよく揃っているので細かく継投できるのも、他球団と比べて有利な点だ。そして最後は宣で決まり。今季の迫力は昨季ほどではないが、それでもパラメータ的にはかなり優秀でリリーフエースとしてはトップクラスと断言できる。以上、実に合理的な投手起用が可能となるのである。

大勝を狙うのではなく、ひとつずつ白星を積み重ねることを心がければ、きっと答えは出るはずだ。COM、またはSKIPモードでプレイする場合、監督策をもっと大胆に変えてみてもいいだろう。いろいろと変更しつつ成績を確認していくうちに、もっとも安定した成績を残す戦い方が見えてくるはずだ。

●投手データ

選手名	投法	タイプ	球速	切れ	制球	安定	球質	技術	スタミナ	回復	スタミナ指数
野口	L	C	140	B	B	B	B	C	B	24	200
川上	R	B	142	B	A	B	C	B	C	26	200
武田	R	C	140	B	A	A	C	B	B	24	200
山本昌	L	C	138	B	B	B	C	B	B	24	200
門倉	R	A+	142	C	C	D	B	C	C	24	200
サムソン	L	B	148	C	C	C	B	C	C	26	200
前田	L	A+	136	C	D	C	C	C	D	24	200
△大塔	R	B+	142	C	C	B	B	C	D	24	200
正津	Rs	C	138	B	C	B	C	A	D	28	200
岩瀬	L	A+	142	B	B	A	B	C	D	26	200
落合	R	C	142	C	A	C	C	B	D	26	200
宣	R	B	148	A	C	B	A	D	E	24	200

こんな選手が欲しい！

控えの捕手はそれほど必要ないだろう。むしろ試合終盤に投手に打順が回った時の代打陣を厚くしておきたい。右打ちの内野手、エンドラン用の左、各1人を補強すればバランスが良さそうだ。投手ではピンチの場面で三振を取れるフォークピッチャーがいればベスト。

●野手

No	選手名	打席	タイプ	守備力 捕	1	2	3	遊	外	肩	足	眼	実績	スタミナ	巧打	長打	信頼	対左	打撃指数
	内野手	R	S	—	—	—	C	—	—	B	C	D	D	C	C	D	+1	0	280
	左の代打	L	P	—	—	—	—	—	B	C	C	C	D	D	C	E	0	-1	280

●投手

選手名	投法	タイプ	球速	切れ	制球	安定	球質	技術	スタミナ	回復	スタミナ指数
右の中継ぎ	R	B+	142	C	B	B	B	C	D	24	200

1999年前期

チーム別
最新データ

読売ジャイアンツ

1998年3位　73勝62敗　勝率.541／1999年前期2位　44勝37敗　勝率.543

至上命令のペナント奪取は　投手陣がカギ

常勝ジャイアンツにとって、ペナント奪取は至上命令だ。もし優勝を逃せば、恐らく長嶋政権は今季が最期。プロ野球界にとって貴重なキャラクターを失うことにもなる。

力はある。特に打線の破壊力は12球団で随一と呼べるだけのレベルだ。

たとえば昨季、念願の本塁打王（および打点王）を獲得した松井。それでも満足せず、より飛距離を伸ばすため打撃フォームの改造に取り組むなど「自分に求められているのはあくまでホームランとのこだわり」を持って挑み続けている。たとえば高橋。長嶋監督が天才と絶賛するだけの素質の持ち主で、試合を決める鋭い打球、強肩など、攻守に渡ってスターの雰囲気を発散させている。また今季は打球の飛距離がグンと伸び、ホームラン王争いにも参加している。

他にも、トップバッターとしての自覚が出てきた仁志、巧打者・清水、得点圏にランナーがいると眼の色が変わる元木、ここ一番に強い石井、西武時代の力をそのまま発揮しているマルチネス、即戦力ルーキーとの期待以上の働きを見せる二岡……と、クリーンアップが3つくらい組めるほどの層の厚さだ。

だが重量感のある打線は、そのまま弱点でもある。細かな野球ができないのだ。松井や高橋を含めて走れる選手は意外と多いし、バントを確実に決められる川相も健在。だが一発のある打者がズラリと並ぶため、どうしても「打て打て」になってしまうのである。

痛かったのは清原と村田真の故障だ。数字的には物足りない清原だが、それでも勝負強さは光っていた。村田真不在による投手陣への影響もかなり大きかったといえる。

その投手陣。先発には、いつキレるかわからないガルベス、好不調の差が大きい桑田、体力面に「？」マークのつく斎藤雅と不安のある顔ぶれが揃い、しかも駒不足。中継ぎは三沢、岡島、入来弟など、素質がありながら伸び悩む面々。加えて今季序盤は「投壊」としかいいようのない乱れ方だった。リリーフエース槙原も、全幅の信頼を置きにくい。

そんな中で、とてつもなく大きな収穫があった。新人・上原だ。その成績、雑草魂といわれる根性＋度胸を含めたピッチャーとしての素質とも、現在セNo,1の存在といえる。若きエースの活躍にベテラン先発陣が発憤し、中継ぎが態勢を立て直してくれれば、十分に優勝を狙える。いや、ジャイアンツには優勝しかないのである。

●監督データ

項目	
□監督名	長嶋
□タイプ	守備 ○○○●○ 攻撃
□投手交替	完投 ○●○○○ 継投
□選手起用	実績 ○○●○○ 調子
□打順の組替え	少ない ○○○●○ 多い
□バント策	少ない ○○●○○ 多い
□エンドラン策	少ない ○○●○○ 多い
□盗塁策	少ない ○●○○○ 多い
□エースの信頼度	低い ○○○●○ 高い
□抑えの信頼度	低い ○○●○○ 高い

中継ぎがやや頼りないので先発を出来るだけ引っ張ることになる。オーダーは実績と調子を考慮しつつ松井以外を頻繁に動かすという感覚。あまり動かず、選手の素質に任せるという戦い方といえるだろう。

●野手データ

No	選手名	打席	タイプ	守備力 捕	1	2	3	遊	外	肩	足	眼	実績	スタミナ	巧打	長打	信頼	対左	打撃指数
4	仁志	R	S	—	—	B	C	D	—	B	B	C	C	C	C	C	+1	0	290
7	清水	L	P	—	—	—	—	—	B	C	B	C	C	C	A	C	-1	-1	305
8	松井	L	P	—	—	—	—	—	B	A	C	C	A	A	C	S	0	-1	290
9	高橋	L	P	—	—	—	—	—	B	A	C	C	C	B	A	A	+1	0	320
3	石井	R	P	—	C	—	C	—	—	C	D	C	A	D	D	B	+1	0	265
5	元木	R	S	—	—	C	B	C	—	C	D	B	C	C	C	C	+1	0	275
6	二岡	R	S	—	—	—	—	B	—	B	B	C	D	C	C	B	-1	0	270
2	杉山	R	P	C	—	—	—	—	—	D	D	D	D	D	D	D	0	0	230
—	後藤	L	P	—	C	—	C	—	C	B	B	C	D	B	C	D	-1	-2	250
—	川相	R	P	—	—	C	—	B	—	C	D	B	B	C	B	E	0	0	260
—	村田真	R	P	C	—	—	—	—	—	C	D	D	C	D	D	D	0	+2	150
—	清原	R	P	—	B	—	—	—	—	C	D	D	A	D	D	B	+1	0	150
—	マルチネス	R	P	—	D	—	—	—	E	D	E	D	C	C	C	A	0	+1	150
—	永池	R	S	—	—	C	B	B	—	B	C	C	E	C	C	E	0	0	230
—	△広沢	R	S	—	D	—	E	—	D	C	D	E	A	C	D	B	0	+2	270
—	×堀田	R	P	—	—	—	—	—	B	C	B	D	E	C	C	D	0	0	250

読売ジャイアンツ

重量級打線で相手にあきらめさせる戦いを

とにかく打線が分厚い。誰かが調子を落としても代わりはいくらでもいる。試合ごとにスタメンを総取っかえしてもある程度の成績を残せるほど層は厚い。ただ、一応考えられるオーダーは2パターンだろう。

攻撃的に行くなら仁志、元木、松井、マルチネス、高橋、石井または清原、二岡の順。もう少し守備を重視するなら（それでも攻撃力はほとんど落ちないというのがスゴイ）、仁志、清水、松井、高橋、清原、川相という順になりそうだ。どちらにしろ、できるかぎり村田真にマスクをかぶらせたい。

ただ「四番清原」にこだわるのもいい。クリーンアップをＭＫＴで組んで優勝を飾ってこそ、真の長嶋野球といえるのではないだろうか（石井はここぞという時の代打、マルチネスは相手にとどめを刺す役割）。ともあれ、どういう打順で臨むかを悩めること、自分が理想とするオーダーをいろいろ試せることもジャイアンツの魅力といえるだろう。

なお前ページの野手データでは、死球の影響でしばらく戦列を離れた村田真、ケガのあった清原、途中から参戦のマルチネスの打撃指数を低めに設定してある。

問題はピッチングスタッフだ。まず先発だが、上原、ガルベス、桑田と、ここまではいい。だが４人目の斎藤は本来の調子にはほど遠く、５人目となると入来祐か岡島か三沢か、誰にせよ「良くて５イニングまで」という状況になる。できれば補強したいところだ。

上原、ガルベス、桑田についてはなるべく完投を狙わせたい。上原と桑田はゲームの終盤にまだ不安があるが、完封する能力は持っている。ガルベスは逆に立ち上がりが難点だが、３回を越えればそのままスイスイと行ってくれるはずだ。この３人でいかに貯金を増やせるかがカギとなるだろう。

上記３人以外が先発の場合、継投策に頼ることになるだろう。代え時というのは特にない。ヤバイと思ったら即交替だ。幸い、岡田や三沢あたりには調子さえ良ければピシャリと抑える力がある（逆にいえば崩れる時は崩れる)。とにかく調子のいい者に投げさせるようにし、星を１つずつ拾っていくことが大切。とはいえ、ある程度の失点は覚悟しなければならない。その失点を上回る得点をあげられるか、大量得点で相手の戦意を喪失させられるかがポイント。感覚的には10－６で打ち勝つ、という姿勢でプレイしたい。

COMまたはSKIPモードの場合、調子最優先の選手起用にしてみるのもいい。野手には打力のある選手が揃っているため、その中から調子のいい者を優先的に使っていくようにすれば好結果が出る確率は高くなるはず。控え選手をスタメンに起用してもチーム力の落ちない巨人ならではの作戦だ。

●投手データ

選手名	投法	タイプ	球速	切れ	制球	安定	球質	技術	スタミナ	回復	スタミナ指数
上　原	R	B	146	A	A	A	A	B	B	24	200
ガルベス	R	C	142	B	A	C	C	C	A	24	200
桑　田	R	C	140	B	C	B	C	B	B	24	200
斎藤雅	Rs	A+	138	B	B	C	C	B	C	22	200
三　沢	R	C	138	C	B	C	D	B	D	26	200
入来祐	R	B	144	C	D	D	D	C	C	26	200
岡　島	L	A	140	B	D	D	D	D	C	24	200
岡　田	R	C	138	B	B	C	B	C	D	26	200
河　野	L	A	136	C	D	D	C	C	D	26	200
△入来智	R	C	140	C	D	B	C	C	D	26	200
△西山	R	B+	144	B	C	C	B	D	D	26	200
槙　原	R	C	140	B	A	C	D	C	C	24	200

こんな選手が欲しい！

先発がもう１枚必要だ。西山を回してもいいが、外国人の獲得もありうる。また左のワンポイントリリーフも加えたい。野手では左の代打と走れる選手、村田不在の間の捕手が手薄か。広沢、堀田あたりに代えて若手の起用＋ベテラン捕手の獲得を。

●野手

No	選手名	打席	タイプ	守備力 捕	1	2	3	遊	外	肩	足	眼	実績	スタミナ	巧打	長打	信頼	対左	打撃指数
	捕手	R	P	C	―	―	―	―	―	D	D	D	C	D	D	D	-1	0	200
	左の代打	L	P	―	C	―	―	―	―	C	B	C	E	D	D	D	0	-2	250

●投手

選手名	投法	タイプ	球速	切れ	制球	安定	球質	技術	スタミナ	回復	スタミナ指数
右先発外国人	R	A	140	C	B	D	C	C	C	24	200
左ワンポイント	Ls	A	138	C	B	D	C	C	E	28	200

1999年前期

チーム別
最新データ

ヤクルトスワローズ

1998年4位　66勝69敗　勝率.489／1999年前期5位　37勝43敗　勝率.462

いかにして勝ちパターンを確立するか!?

野村監督が阪神へ移り、今季は生まれ変わった姿でペナントを目指すヤクルト。選手たちの気合いも十分で、開幕4連勝を飾ってそのまま波に乗るかに思われた。が、次第と黒星が先行するようになった。

原因は他球団と同様、戦力が十分に整わなかったこと。またチームとしての勝ちパターンを作るのに苦労しているようにも感じられる。

まず野手だが、飯田と土橋、稲葉らが故障などもあって序盤戦では満足に働けなかった。代わりとなる選手も、副島、度会、馬場など全体として小粒な印象が拭えない。頼みの綱は古田、そしてペタジーニということになる。

不思議と1年置きに成績が上下する古田は、今年は“上”の年。実際、打撃は好調だ。ペタジーニの長打力も相当なもので、7月には月間打率5割をマークした。また新天地での巻き返しを期す高橋智、もうひとりの新外国人スミスも「かろうじて合格」という程度だが、一発の魅力を秘めている。だが、これら各選手の前にランナーをためられないため、大量得点が期待できないのが実状。象徴的だったのが4月30日の横浜戦で、9回裏にペタジーニ、スミス、高橋智が3連続ホームランを放ちながら、試合は9－3の負け。どうも「負け試合のソロホームランが多い」というイメージなのだ。他球団に「古田とペタジーニにさえ気をつければOK」「この2人の前にランナーを出さなければ大丈夫」という印象を与えてしまっている。

ピッチャー陣全体としては、悪いというほどではない。特に中継ぎは廣田と山本の調子が相変わらず良く、慎重に継投した時の粘りはなかなかである。だが、いくら中継ぎが良くとも、試合を作るのは先発。依然として岡林や伊藤、田畑、山部らが完調にないことに加え、新外国人ハッカミーも期待通りとはいっていない。石井一、川崎、高木の3人に頼るしかないという状況だ。誰かひとりでも救世主的な存在が現れれば話は違ってくるのだろうが、二軍からの飛躍や変身などは、いまだ見られない。

結局、8点差を引っ繰り返したかと思えば完封負けを喫し、完封仕返したかと思えば打ち合いで負け……と、投打がチグハグのまま時が過ぎようとしている。が、悲観することはない。もともと「つなぐ」ことが得意なチームだから、投打のリズムが噛み合ってくれば上位を狙えるはず。そのためにも勝ちパターン作りは急務だ。

●監督データ

項目			
□監督名	★新監督★		
□タイプ	守　備	○○●○○	攻　撃
□投手交替	完　投	○○●○○	継　投
□選手起用	実　績	○○○●○	調　子
□打順の組替え	少ない	○○○●○	多　い
□バント策	少ない	○○○●○	多　い
□エンドラン策	少ない	○●○○○	多　い
□盗塁策	少ない	○○○●○	多　い
□エースの信頼度	低　い	○○○●○	高　い
□抑えの信頼度	低　い	○○○●○	高　い

選手をいろいろ試しながらチームとしてバランスの取れた戦い方を模索している段階。そのため、大きな特徴は感じられない。プレイヤー自身が「これがヤクルトの戦法だ」というものを作り上げていくことが求められる。

●野手データ

No	選手名	打席	タイプ	守備力 捕	1	2	3	遊	外	肩	足	眼	実績	スタミナ	巧打	長打	信頼	対左	打撃指数
8	飯　田	R	S	—	—	—	—	—	A	A	A	C	B	C	C	E	0	0	245
9	真　中	L	S	—	—	—	—	—	B	C	B	C	D	C	B	D	0	-1	280
4	土　橋	R	S	—	—	C	C	D	D	C	C	C	C	C	C	D	0	+1	265
2	古　田	R	S	A	—	—	—	—	—	A	C	B	A	A	A	B	0	+1	300
3	ペタジーニ	L	P	—	C	—	—	—	—	C	C	D	C	C	D	A	-1	-1	260
7	高橋智	R	P	—	—	—	—	—	C	C	D	E	C	C	D	A	0	0	260
5	池　山	R	P	—	—	—	B	C	—	B	C	D	B	C	D	B	0	0	250
6	宮　本	R	S	—	—	—	—	A	—	A	B	C	D	C	C	D	-1	0	260
—	スミス	R	P	—	—	—	—	—	B	C	C	E	C	C	D	B	0	0	260
—	辻	R	S	—	D	C	—	—	—	D	C	C	A	D	C	E	0	0	265
—	馬　場	R	S	—	—	C	A	—	—	C	D	D	D	D	C	E	0	0	240
—	稲　葉	L	P	—	D	—	—	—	C	C	C	C	C	C	C	C	0	-2	280
—	副　島	L	P	—	C	—	D	—	C	C	D	D	D	C	D	D	0	-1	250
—	小早川	L	P	—	D	—	—	—	—	D	D	D	B	D	D	C	0	-2	230
—	△度会	R	S	—	B	—	C	—	C	C	C	C	D	C	C	D	0	0	260
—	×カツノリ	R	P	D	—	—	—	—	—	B	D	E	E	C	D	D	0	0	230

ヤクルトスワローズ

少ない好機を生かして接戦を制する

競り負けないたくましさ。それがベスプレにおけるヤクルトに求められるものだろう。

まず打線だが、前述の通り大量得点は期待できない。ペタジーニや高橋智の長打力は魅力だし、古田、スミス、池山らも年間20本は打てる。が、それだけに頼っていると痛い目にあうのは必至。ここはやはり、確実に1点ずつ取りに行くという野球で臨みたい。

飯田+真中という足のある選手を何とか塁に出し、土橋と古田でキッチリ帰すという戦い方が無難だろう。エンドランや長打でビッグイニングを作ろうとはせず、より成功確率の高い盗塁（飯田や真中）やバントでランナーを得点圏に進めたいところだ。元来が「つなぐ」という意識が強いチームであり、またそれができる素材も揃っているので意外と上手くいくはずだ。そのうえでペタジーニ、高橋智、スミス、池山ら一発のある選手から調子のいい者を5～6番に並べれば、相手チームに嫌がられる打線になる。

こうして早めに先制点を奪い、リードしたまま中盤に入ることが大切。1点でも2点でもいい。最悪でも同点のまま5回までを乗り切りたい。幸いにも石井一、川崎、伊藤の先発3人の能力は高いし、守備力の高い古田（ただし今季はパスボールがやや多いことに加え、投手が大切な場面で打たれるのは古田にも責任ありとしてAに落とした）がマスクをかぶっている限り、それほど大きく乱れることはないだろう。

石井一と川崎には完投を狙わせてもいいが、せっかく中継ぎがいいのだから、継投を基本と考えたい。ここでも古田効果+中日並みに安定感のある中継ぎで、それほど打ち込まれることはあるまい。そして高津へとつなぐ。

また終盤に打順が投手へと回ったら、どんどん代打を送り込む。ここでも一発はいらない。チャンスを作り、そのチャンスを確実にモノにすることを第一に考えたい。またリードしているなら守備固めも忘れずに。そういう意味では代打専門の野手より、代打に出てそのまま守備にも入れるという選手が多い方が役に立ってくれるだろう。

トータルとしては、先制逃げ切り。それも失点を最少に防ぎ、チャンスには逃さず得点し、2－1とか3－2といった接戦を制していくという感覚で戦うことが求められるだろう。大勝は必要ない。

COMやSKIPモードでプレイするなら、選手起用をもっと守備的&調子重視、投手は継投型、バントや盗塁を積極的に試みるよう設定するといいかも知れない。またカツノリに代えて代打+守備要員を入れたり、先発と中継ぎの入れ替え、廣田のリリーフエースとしての起用など、大幅にいじって成績の変化を見るのも楽しそうだ。

●投手データ

選手名	投法	タイプ	球速	切れ	制球	安定	球質	技術	スタミナ	回復	スタミナ指数
石井一	L	B	150	A	D	C	C	D	A	24	200
川　崎	R	A+	140	C	B	C	C	B	A	22	200
ハッカミー	L	C	140	C	C	D	C	C	C	24	200
伊　藤	R	B	144	B	C	C	C	C	B	22	200
高　木	L	A	140	C	B	C	A	C	E	26	200
田　畑	R	D	138	C	D	D	D	C	C	22	200
△岡林	R	C	138	B	A	B	C	C	C	24	200
×北川	R	A	140	C	B	C	B	C	C	24	200
山　部	L	A	142	B	D	D	C	C	C	26	200
山　本	L	A+	142	B	C	B	B	C	D	26	200
廣　田	R	C	138	C	C	B	B	B	D	26	200
高　津	Rs	C	138	C	A	B	C	B	D	26	200

こんな選手が欲しい！

生命線は中継ぎ陣。今季ほとんど実動していない岡林らに代えて右の中継ぎを２枚入れたい。また野手では内野、外野各１人の代打十守備要員を入れる。控え捕手がいなくなるが古田ひとりで十分だろう。

●野手

No	選手名	打席	タイプ	守備力 捕	1	2	3	遊	外	肩	足	眼	実績	スタミナ	巧打	長打	信頼	対左	打撃指数
	左打ち内野手	L	S	―	―	C	C	―	―	C	B	C	D	C	C	C	0	-2	280
	右打ち外野手	R	S	―	―	―	―	―	A	C	B	C	D	C	C	D	0	0	280

●投手

選手名	投法	タイプ	球速	切れ	制球	安定	球質	技術	スタミナ	回復	スタミナ指数
右の中継ぎ１	R	A	140	B	D	D	D	C	C	26	200
右の中継ぎ２	R	A+	140	B	C	C	C	C	C	26	200

広島東洋カープ

1998年5位　60勝75敗　勝率.444／1999年前期6位　35勝46敗　勝率.432

投打とも潜在能力はトップクラス

かつて赤ヘル軍団と恐れられたチームが、ここ数年は波に乗り切れないもどかしさにあえいでいる。91年に優勝して以後は2位～4位を行き来し、昨年は5位。今季は一時は2位につけたものの、6月後半からは下位に低迷しており、最下位が定位置になりつつある。

原因はハッキリしている。投手が壊滅。いや、まったく人がいない状態なのだ。

思えば97年、澤崎、横山、黒田と出てくる投手すべてが一流の働きを見せ、また昨季も新人・小林幹が大活躍。本来なら今ごろは投手王国であるはずなのだが、これらの投手、2年目になるとパッタリ成長が止まってしまっているように感じられるのだ。澤崎と小林幹は苦しみながらも結果を出しつつあるが、どちらも信頼感はまだ高くない。黒田はプロ野球タイ記録となる1イニング4被本塁打、横山は肩の故障など、調子が上向いてきたと思った途端に壁に当たるという印象だ。それぞれ本来の素質は相当なもの。このうちの誰がいつ完封をしてしまっても驚けない。そんな“復活の日”をカープファンは待ち望んでいるはずである。

若手が不振のぶん、佐々岡、ミンチー、紀藤、山内といった中堅～ベテラン、外国人投手に頼らざるを得ないのが現状だ。このうち佐々岡はハーラー争いに加わるなど、久しぶりに先発投手の充実感を味わっているが、二番手以降および中継ぎ陣の安定感はイマイチ。その結果が横浜相手の20失点、球団ワーストタイとなる13連敗を呼ぶことになった。高橋健を先発に起用するなど試行錯誤（8月6日現在、一軍で登板した投手の数が25人とセではもっとも多い）を重ねているが、その成果が一刻も早く現れることに期待したい。

いっぽう野手の発掘と育成に関してはセでは一番だろう。緒方、前田、江藤、金本、野村……と主軸には生え抜きが並ぶ。移籍組の西山や木村もカープで飛躍した。今季も若手野手が育ちそうな気配がある。打線の威力は12球団でもトップクラスであり、広島伝統の機動力もあって相当に“使える”オーダーが組める。が、選手に故障が多いことが悩み。まともなら打率、本塁打、盗塁の各部門で上位を独占できるだけの陣容なのだが、全員好調のままで1シーズン戦えないことが最大のネックとなっている。

とにかく、素材と潜在能力は申し分なし。ケガのないベスプレなら決して優勝も夢ではないはずである。

監督データ

項目	評価
□監督名	★新監督★
□タイプ	守備 ○○○●○ 攻撃
□投手交替	完投 ○○○●○ 継投
□選手起用	実績 ○○●○○ 調子
□打順の組替え	少ない ○○○●○ 多い
□バント策	少ない ○○○●○ 多い
□エンドラン策	少ない ○○○●○ 多い
□盗塁策	少ない ○○○●○ 多い
□エースの信頼度	低い ○○○●○ 高い
□抑えの信頼度	低い ○○●○○ 高い

バント、エンドラン、盗塁と広島得意の攻撃的で機動力に富む野球を展開したい。町田、浅井ら控え勢や若手もどんどん登用。投手起用は佐々岡以外は継投策が基本だが、中継ぎが不調なだけに難しいことは確かだ。

野手データ

No	選手名	打席	タイプ	捕	1	2	3	遊	外	肩	足	眼	実績	スタミナ	巧打	長打	信頼	対左	打撃指数
8	緒方	R	P	ー	ー	ー	ー	ー	A	B	A	C	B	B	C	B	+1	0	300
4	ディアス	R	P	ー	ー	C	C	C	ー	C	C	C	C	C	C	D	0	0	260
9	前田	L	P	ー	ー	ー	ー	ー	B	A	C	B	A	B	A	B	+1	0	330
5	江藤	R	P	ー	ー	ー	C	ー	ー	C	C	C	A	B	C	A	-1	0	280
7	金本	L	P	ー	ー	ー	ー	ー	C	B	B	C	C	A	D	A	0	-2	270
3	野村	L	S	ー	C	ー	ー	D	ー	B	C	B	A	B	C	C	-1	0	290
6	木村	B	S	ー	ー	C	ー	D	C	B	A	D	E	C	D	D	0	+1	270
2	西山	R	S	B	ー	ー	ー	ー	ー	B	C	D	C	C	D	D	0	+1	265
ー	瀬戸	R	S	C	ー	ー	ー	ー	ー	B	D	C	D	C	C	E	0	0	280
ー	町田	R	P	ー	D	ー	ー	ー	D	C	D	C	C	C	B	C	+1	0	280
ー	浅井	L	S	ー	C	ー	ー	ー	D	C	C	C	C	C	D	C	0	0	240
ー	苫篠	B	S	ー	ー	C	ー	ー	ー	C	B	C	C	C	C	E	0	0	250
ー	兵動	R	P	ー	ー	C	C	C	-	B	C	E	E	C	D	D	0	0	230
ー	田村	R	S	C	ー	ー	ー	ー	ー	C	D	D	E	C	C	E	0	0	240
ー	△山田潤	R	P	ー	D	ー	ー	ー	ー	C	C	C	E	C	D	C	0	0	240
ー	△野々垣	R	S	ー	ー	C	C	C	ー	B	C	D	D	C	C	E	0	0	260

広島東洋カープ

重量＋機動力打線で細かな継投を援護

前ページでも述べたが、ベスプレにケガはない。また今シーズンの広島の主要メンバーは、風邪や軽いケガで数試合出場できなかったケースはあったものの、大きな故障がなかったのも幸いだ。つまり、かなり破壊力のある打線でフルシーズン戦えるわけである。セ・リーグでトップクラスの足を持つうえに長打力にも磨きのかかった緒方、本塁打王を狙えるパワーのある江藤と金本、そして「打撃センスはイチローより上」といわれる天才・前田と、半端じゃない顔ぶれが並ぶ。木村の一軍定着は機動力野球に拍車をかける要素となるはずだし、新外国人ディアスも小ぢんまりとはしているが“使える”雰囲気を持った広島らしい選手だ。また、リードなら西山、バッティングなら瀬戸と、タイプは違うがほぼ同等の力を持った捕手を調子に応じて使い分けることができるのも、他の球団に比べて有利と感じられる点だ。

代打にはパンチ力のある町田と浅井が控えている。苫篠や兵動あたりも混戦で意外な仕事をやってくれそうな雰囲気を持っている。もうひとり足の速い選手がいれば、そこそこの選手層にはなりそうだ。

問題は守備。外野はさほど心配することはないが、内野は要であるはずの野村が足に不安を抱えており、今季はファーストに入ることが増えている。それ以外の野手も動きが固かったり不用意な失策があったりして、余計な失点を招くことは覚悟しなくてはならない。もっとも、その失点を簡単に跳ね返せるだけのパワーこそ広島の持ち味だ。

投手は前述の通り厳しい陣容だが、佐々岡を軸としてローテーションを回し、大胆な継投、先発と中継ぎの細かな入れ替えなど、現実のカープ同様いろんなことを試して打開策を見出したい。守備Bの西山を中心にバッテリーを組ませれば、少しは乱調も防げるはずだ。大切な場面で三振を奪える決め球（主にフォーク）を持つ投手も多く、パラメータの見た目ほど悪いラインナップではない。

とはいえ、ある程度の失点は仕方ない。戦い方としては、6～7人の継投も辞さず、5点取られたら6点取り返す。そんな感じになるだろう。佐々岡や横山（今季序盤の活躍を考慮してオーダーに含めてある）、意外と先発の素養がありそうな高橋健あたりが登板する時は確実に勝ちをもぎとり、それ以外の時は負けゲームを作るのも仕方なし、というやり方もひとつの方法かも知れない。

COMやSKIPモードの場合も、主に投手陣の並びや中継ぎメンバーの入れ替えを試してみると同時に、まだ固まっていない監督策も調整してもっとも成績が良くなる組み合わせを見つけていただきたい。鯉が再浮上するカギは、選手ではなくアナタが握っている。

●投手データ

選手名	投法	タイプ	球速	切れ	制球	安定	球質	技術	スタミナ	回復	スタミナ指数
佐々岡	R	A+	144	B	A	B	B	B	A	24	200
ミンチー	R	D	138	C	B	D	C	B	B	24	200
紀藤	R	B+	142	B	A	C	B	C	C	22	200
山内	R	B+	138	B	B	D	C	C	C	22	200
横山	R	A+	146	B	B	B	C	D	B	22	200
高橋健	L	A	142	B	B	C	C	C	C	26	200
小林幹	R	B+	142	B	D	C	C	C	C	28	200
黒田	R	A	144	C	D	D	D	D	C	24	200
△山田喜	L	A	136	C	D	C	C	C	D	24	200
×富岡	L	A	138	C	D	D	B	D	D	24	200
玉木重	R	A	140	B	B	C	C	C	C	26	200
澤崎	R	A+	140	B	B	C	B	C	D	24	200

こんな選手が欲しい！

走れる二塁手または遊撃手がいれば、機動力はさらにアップする。ベスプレでは無理だが、代打に出てそのままマウンドへ向かうという選手がいても面白い。中継ぎは、今季少しでも状態の良さそうな投手、右と左をひとりずつ入れたいところだ。

●野手

No	選手名	打席	タイプ	守備力 捕	1	2	3	遊	外	肩	足	眼	実績	スタミナ	巧打	長打	信頼	対左	打撃指数
	俊足内野新人	L	S	—	—	C	—	—	—	B	A	D	E	C	D	D	0	-2	230
	外国人代打	B	S	—	—	—	—	—	E	B	D	C	E	C	D	C	0	0	220

●投手

選手名	投法	タイプ	球速	切れ	制球	安定	球質	技術	スタミナ	回復	スタミナ指数
左投げ若手	L	A+	140	C	D	D	C	C	C	26	200
右の中継ぎ	R	A+	140	C	D	B	C	B	D	26	200

阪神タイガース

1998年6位　52勝83敗　勝率.385／1999年前期4位　39勝45敗　勝率.464

大いなる可能性　それこそ野村阪神の魅力

今季前半の台風の目は、間違いなく阪神タイガースだった。智将・野村監督の招聘によって「虎が変わる」ことは誰もが予想したが、まさかここまでの頑張りを見せてくれるとは思いも寄らなかった。躍進の最大の要因は、やはり野村采配にあるといっていいだろう。

第一に、野村監督自身に確固たる野球スタイルがあるということが大きい。単にデータを重視するだけでなく、そのデータをどう活用するか、相手投手に誰をぶつけるか、強打者に対する投球はどんな組み立てで挑むのか、1試合の中でポイントとなる場面はどこなのか……。場面にあわせた選手起用や指導など、ノムライズムは実に細かな部分にまで及んでいる。またヤクルト時代に「野村再生工場」と呼ばれたように、選手の使い方やヤル気の引き出し方にも長じている。中日のように大幅にメンバーを入れ替えるという荒療治こそ採り入れなかったが、新庄を投手にチャレンジさせたり（新庄自身の身体バランスの矯正や気分転換といった効果のほか、話題作りで「お前たちは注目されているんだぞ」という意識をチームに植え込む狙いもあったと思うのだが、どうだろうか？）、大豊や吉田豊、坪井、今岡あたりに厳しく接したりなど、選手個々の性格をつかんで発憤させることで好結果を得ている。もともと能力のある選手は多かったが、それでも全体に昨季以上との印象を与える（実際に数字の上がっている選手は多い）のは、野村監督の手腕だろう。

ただし、まだ1年目。野村野球が完全にナインに浸透しているとはいえず、徐々に息切れも起こし始めている。もっとも今年は種を蒔く時期であり、来年、再来年と経験を積むごとにチーム全体が大きく成長する可能性はかなり高いように思える。

この傾向は、投手陣によりハッキリと出ている。8月6日現在、一軍で登板したピッチャーは23人と広島に次ぐ多さ。これは調子が悪い者を次々と入れ替えているのではなく、さまざまな選手の力量と可能性を推し量り、同時に経験を積ませているように思えるのだ。また「継投とはこういうものだ」という形を投手陣に覚え込ませる意図も感じられる。

正直、現時点での戦力は他球団に比べて劣ることは確かだ。だが未来への可能性という点では心ときめくものがある。今季終了後、来季終了後と、パラメータを見直すことがこんなにも楽しい球団は、ほかにない。進化への期待を抱かせるチームである。

●監督データ

□監督名	野　村
□タイプ	守　備 ○○○●○ 攻　撃
□投手交替	完　投 ○○○●○ 継　投
□選手起用	実　績 ○○●○○ 調　子
□打順の組替え	少ない ○○○●○ 多　い
□バント策	少ない ○○○●○ 多　い
□エンドラン策	少ない ○○○●○ 多　い
□盗塁策	少ない ○○○●○ 多　い
□エースの信頼度	低　い ○○○●○ 高　い
□抑えの信頼度	低　い ○○●○○ 高　い

いくら“野村流の戦い方”があるとはいえ、チームが違うのだからヤクルト時代とは同じではない。徹底した継投、打順組替え、バントや盗塁など、とにかくいろんなことを試しているという雰囲気が感じられる。

●野手データ

No	選手名	打席	タイプ	捕	1	2	3	遊	外	肩	足	眼	実績	スタミナ	巧打	長打	信頼	対左	打撃指数
9	坪　井	L	S	—	—	—	—	—	B	B	B	C	C	B	A	D	+1	-1	320
4	和　田	R	S	—	—	A	C	—	—	C	C	B	A	B	A	D	-1	+2	300
8	新　庄	R	P	—	—	—	—	—	A	S	B	C	C	A	D	B	0	+1	270
3	ジョンソン	L	P	—	B	—	—	—	D	C	D	D	C	B	D	A	0	-2	255
5	ブロワーズ	R	S	—	—	—	C	—	—	C	D	E	C	C	D	B	+1	+1	240
2	矢野輝	R	P	B	—	—	—	—	—	C	C	C	C	B	B	D	0	0	290
7	桧　山	L	P	—	—	—	—	—	B	C	C	D	C	C	D	B	0	-2	260
6	今　岡	R	S	—	—	C	D	C	—	B	B	C	C	B	B	D	0	0	280
—	星　野	L	S	—	—	C	C	C	—	B	C	C	D	C	C	D	+1	-2	260
—	大　豊	L	P	-	C	—	—	—	E	D	E	E	B	B	D	A	+1	-2	250
—	佐々木	L	P	—	—	—	—	—	C	B	C	D	A	D	C	C	0	-1	280
—	八　木	R	P	—	D	—	—	—	D	D	D	C	B	D	D	C	0	+2	240
—	濱　中	R	P	—	—	—	—	—	C	B	B	D	E	D	D	D	0	0	240
—	山　田	R	P	C	—	—	—	—	—	D	D	D	D	C	D	D	0	0	230
—	△平尾	R	P	—	—	C	C	C	—	B	B	D	E	C	C	D	0	0	230
—	△城	R	S	—	—	—	—	—	B	C	B	C	D	C	C	E	0	0	250

阪神タイガース

いろんな選手を試す　勝負はゲーム終盤だ

戦力は劣ると述べたが、他の5球団に対して決定的な差があるわけではない。全体的なスケールが落ちる、という感覚だ。

それでも成長した選手、再起をうかがわせる選手が多い。たとえば矢野輝は“生涯一捕手”の野村監督の手ほどきもあってか、リード面に多少の進歩がうかがえる。そんな心の充実ぶりが影響したか、バッティングも好調だ。セ・リーグの目玉である阪神の、さらに目玉と呼べる存在だろう。

新庄、檜山、大豊といった「振り回す」選手も、しぶとさと確実性を身につけ始めている。また今季は逆転やサヨナラ勝ちの試合が目立つ。敬遠の球をサヨナラ打した新庄、ジョンソンの代打逆転3ランなど、スキあらば勝利をうかがうという姿勢、点差が開いても何とかしてしまう底力は、昨季までのタイガースには見られなかったものだ。

とはいえ確実に3割を打てるバッターの少なさは痛いし、勝ちパターンのないこともシーズンを戦ううえでは不利。ここはやはり現実の阪神と同様（言葉は悪いが）ゲリラ戦法を試みることになりそうだ。

まずオーダーの固定にはとらわれない。固定して良さそうなのは1番坪井くらいのもので、2番以降は調子を見ながらどんどん代えていっていいはずだ（現に野村監督は投手だけでなくオーダーもいろいろと試している）。基本は坪井が出塁、和田が送って新庄と両外人で得点というパターンだろうが、積極的に盗塁を仕掛けたり、格の落ちる投手が出てきたら一発を狙える代打を次々に送ったりと、状況に応じた選手起用を心がけたい。

投手起用は、とにかく継投だ。先発ローテーションはとりあえず右表のようにしてみたが、このうち完投が期待できるのは薮とメイのみ。安定感を考慮すれば、それなりの勝ち星を計算できるのは薮ひとりだろう。また中継ぎも、右表のままでは心もとない。ただ今季活躍している投手と入れ替えれば、先発と違ってソコソコ充実してくる。中込か竹内も中継ぎに回して、先発は5人でローテーション、1登板につき100球までと決めて「勝ち星の大半は中継ぎ投手につける」ような感覚でどんどん投手を注ぎ込もう。一人一殺～1イニング以内の気持ちで細かくつなぎ、多少リードされていても勝負はゲーム終盤と腹をくくる。リベラを出せる展開に持っていければ、かなり勝率は上がるはずだ。

他のチームと違って、SKIPモードは楽だ。何しろ基本的な戦力がスモールサイズなのだから、思い切った策を試すことができる。薮の先発時以外は継投を徹底させる。オーダーは調子最優先にしてみるといいかも知れない。野手も投手も使えるだけ使って、泥臭く1点を取りに行くような野球を心がけたい。

●投手データ

選手名	投法	タイプ	球速	切れ	制球	安定	球質	技術	スタミナ	回復	スタミナ指数
薮	R	B+	142	C	B	B	B	B	A	24	200
メイ	L	B	144	A	C	C	C	C	B	24	200
川尻	Rs	C	136	C	C	C	C	C	C	24	200
吉田豊	L	A+	138	C	D	C	C	C	D	24	200
中込	R	A	140	C	C	D	C	D	C	22	200
竹内	R	A+	140	C	C	B	C	B	C	24	200
△湯舟	L	C	136	B	C	B	C	A	C	22	200
△弓長	L	D	134	C	C	D	B	C	E	24	200
葛西	Rs	A+	134	B	D	D	B	C	D	24	200
△舩木	R	B	138	B	C	C	B	C	C	24	200
伊藤	Rs	C	136	C	B	B	B	B	D	28	200
リベラ	R	B	150	B	B	A	A	C	E	24	200

こんな選手が欲しい！

野手では打力よりゲリラ戦法向きの機動力を補強したいから、足の速い選手が欲しい。投手は湯船、舩木、弓長に代えて球のキレや重さのある中継ぎを充実させたい。

●野手

No	選手名	打席	タイプ	守備力 捕	1	2	3	遊	外	肩	足	眼	実績	スタミナ	巧打	長打	信頼	対左	打撃指数
	左打ち二塁手	L	P	—	—	B	—	—	—	C	A	D	E	C	C	E	0	-2	250
	代走要員	R	S	—	—	—	—	—	C	B	A	D	E	D	D	E	0	0	230

●投手

選手名	投法	タイプ	球速	切れ	制球	安定	球質	技術	スタミナ	回復	スタミナ指数
右投げ新人	R	A	144	C	C	C	B	B	D	26	200
左ワンポイント	Ls	A	142	B	C	B	C	C	E	24	200
左の中抑え	L	A	138	B	C	B	B	C	E	26	200

西武ライオンズ

1998年1位　70勝61敗4分　勝率.534／1999年前期2位　43勝41敗　勝率.511

足で稼ぐ野球は「一発」よりも効果的

一昨年、昨年と2年連続でリーグ制覇を果たし、今や「第2期黄金時代」を迎えようとしている西武。しかし、以前の西武には「強い」というイメージがあったのだが、今の西武の選手達は、どうして上位を争えるのか不思議なほど小粒な印象だ。

これは、リーグを代表するような大砲がいないことが非常に大きいと言えるだろう。確かに、以前の西武も緻密な野球が売り物ではあったが、秋山や清原、デストラーデといった、一発を期待したくなる選手が少なくなかった。しかし、今は松井を中心とした「足」を使った野球。ファンに与えるインパクトが大きいのは、もちろんホームランで、決して盗塁数や二塁打数ではない。そのため、実際よりも「弱く」見えてしまうのだ。

また、外国人選手に「外れ」が多いのも、このイメージを増長させることになっている。今季もシアンフロッコ、ブロッサーが期待ほどの成績を残すことが出来ず、シーズン途中に慌てて代役を探すハメになっている。一応日本人では鈴木が主砲なのだが、低打率に喘いでいるし、垣内はスタメンに定着しているとは言い難い。これに続く選手が高木大、となると、やはり「大砲不足」である。

ただ、今の西武を考えると、変に足の遅いホームランバッターがいるよりは、この方がいいのではないだろうか。例え「似たような選手ばかりで、区別がつかない」と言われようとも、そんなことは問題ではない。もちろん、足が速いだけで打率が2割台前半ならただの代走要員だが、大友、小関、松井と続く1〜3番、さらに高木大あたりは足があって、なおかつ打率も高い。盗塁はもちろんのこと、エンドランもしやすいし、普通なら三塁ストップのところでホームに突入させることも出来る。「三振かホームランか」というバッターが何人も並ぶよりは、よっぽど効果的な攻撃が出来るというものだ。

そして松坂の加入で厚みを増した投手陣は、先発にもう一人欲しいとか贅沢な悩みがあるとはいえ、パの他球団と比べれば文句のないもの。西口、石井、松坂と、計算できる先発が3人。豊田もシーズン半ばからは好成績を残しており、連戦続きでもない限りは、ほとんどローテーションに「穴」と呼べるところはないと言えるだろう。チーム防御率自体は他球団と大差はないが、安定性という意味では一枚も二枚も上。軸のしっかりした投手陣と足を使った攻撃、それが今の西武だ。

●監督データ

項目	データ
□監督名	東尾
□タイプ	守備 ○○●○○ 攻撃
□投手交替	完投 ○●○○○ 継投
□選手起用	実績 ○○○●○ 調子
□打順の組替え	少ない ○○○●○ 多い
□バント策	少ない ○○●○○ 多い
□エンドラン策	少ない ○○○●○ 多い
□盗塁策	少ない ○○○●○ 多い
□エースの信頼度	低い ○○○●○ 高い
□抑えの信頼度	低い ○○○●○ 高い

実際の数字を考えると、バンド策をワンランク上げても良さそうだが、走れるチームだけに、あまりバンドを使うのはもったいない気もする。その分、盗塁策を最大にするのもいいだろう。

●野手データ

No	選手名	打席	タイプ	守備力 捕	1	2	3	遊	外	肩	足	眼	実績	スタミナ	巧打	長打	信頼	対左	打撃指数
8	大友	L	S	ー	ー	ー	ー	ー	B	B	B	A	C	C	B	E	-1	-2	270
9	小関	L	S	ー	ー	ー	ー	ー	B	B	A	C	D	C	B	E	0	-2	270
6	松井	B	S	ー	ー	ー	ー	B	ー	A	A	C	A	A	C	C	+1	+1	310
5	鈴木	L	P	ー	D	ー	B	ー	ー	C	D	C	B	B	D	C	0	-1	250
3	高木大	L	S	E	B	ー	E	ー	ー	C	B	C	C	C	C	C	+1	0	280
D	垣内	R	P	ー	D	ー	ー	ー	D	C	B	D	D	C	D	B	0	0	230
7	大塚	L	S	ー	ー	ー	ー	ー	B	B	B	D	C	D	D	E	0	-2	230
2	伊東	R	P	S	ー	ー	ー	ー	ー	C	D	C	B	E	C	C	0	0	270
4	高木浩	L	P	ー	ー	B	C	D	ー	C	C	A	C	D	C	E	-1	-1	230
ー	中嶋	R	P	B	ー	ー	ー	ー	ー	A	D	C	B	C	D	E	-1	0	200
ー	田辺	R	S	ー	ー	C	C	C	ー	C	C	D	C	D	D	D	0	0	220
ー	上田	B	S	ー	ー	B	B	C	ー	B	B	C	D	D	C	E	0	0	240
ー	原井	R	S	ー	ー	C	C	C	C	C	B	C	D	D	D	E	0	0	220
ー	清水	R	S	ー	ー	ー	ー	ー	B	B	B	C	D	D	C	E	0	0	200
ー	河田	L	P	ー	ー	ー	ー	ー	B	B	B	D	C	D	B	E	0	-2	260
ー	△平塚	R	S	ー	D	ー	ー	ー	D	C	D	C	C	D	D	C	-1	0	220

西武ライオンズ

松坂でいろいろと遊んでみたい

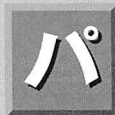
攻撃では足で相手を撹乱し、先発投手陣もバッチリ。となると、残る問題は中継ぎと抑えになる。抑えの大役を任されているのは、元日本ハムのエース・西崎。昨年は故障でほとんど出番はなかったものの、今季は松坂の後は西崎と決まったように登板して、しっかりと松坂に勝利をプレゼントし続けている。どうしても故障の心配がつきまとうだけに、登板間隔は開き気味だが、そこはデニーとのダブルストッパー体勢で問題はない。

中継ぎ陣は、左のワンポイント・橋本が今シーズンもフル回転。さらにダイエーから移籍してきた木村など、駒は豊富だ。強いて挙げれば、森、潮崎あたりが実力をフルに発揮できれば文句なしになるのだが、そうなったら恐らくどのチームも手に負えないようなトップ独走状態になりそうだ。

さて、実際の戦術だが、とにかく足を使うべき。走者が俊足なら盗塁を多用してもいいし、打者が俊足ならまずダブルプレーはないとみて、エンドランでもいいだろう。ランナーを二塁に進めさえすれば、ワンヒットでホームまで帰ってくる確率はかなり高い。ただ、ベスプレでは特に作戦を駆使しなくても、単純に足が速いというだけで相当有利。現実の野球でも内野安打が出やすいなど足は相当な武器になるが、ベスプレだと「普通シングルヒットだろ」というようなバウンドの高いレフト前ヒットが二塁打になるなど、足があることの有利さは実戦以上だ。投手交代だけに気を使って、攻撃は「見てるだけ」でもある程度の成績は残せるのではなかろうか。

逆に、他のチームを選択してプレーしていると、西武相手のゲームは相当苦労しそうだ。捕手伊東のリードもしっかりしており、なかなか打ちこむチャンスも少ない。ならば、その伊東の肩がそう強くないので、自分のチームも足を使っていくのも手だ。ということは、西武でプレーする側からすると、俊足のランナーを出した時が問題。「走者警戒」を利用してみるのもいいだろう。

投手陣は、西口、松坂、石井には完投能力が十分にある。実戦同様にワンポイントで橋本を使い、抑えの西崎、デニーに繋ぐのも悪くないが、いずれにしても、普通に戦ってさえいれば常に優勝を狙えるチームである。

ならば、いろいろと遊んでみたくなる。特に松坂。地味に遊ぶなら、ローテーション通り登板させずに、わざと「サンデー松坂」にするくらいだが、それではちょっと面白みに欠ける。やはり松坂なら期待したいのは奪三振だ。ピンチだけでなく、通常でも2ストライクからは「気合い」を入れて毎試合2桁奪三振を狙ってみたい。その結果、スタミナ切れで西崎に繋ぐことになっても、それはそれで現実味があるというものだ。

パ
最新データ

横浜
中日
巨人
ヤクルト
広島
阪神
西武
日本ハム
オリックス
ダイエー
近鉄
ロッテ

●投手データ

選手名	投法	タイプ	球速	切れ	制球	安定	球質	技術	スタミナ	回復	スタミナ指数
西口	R	A+	142	B	C	B	C	C	A	24	200
石井	R	B	146	C	B	A	B	C	A	22	200
松坂	R	A+	148	A	C	A	B	B	B	22	200
豊田	R	B+	140	C	B	C	B	C	C	22	200
潮崎	Rs	D	140	B	B	D	C	C	C	22	200
森	R	B+	148	A	D	C	A	C	C	24	200
橋本	L	A	142	B	B	B	C	C	E	26	200
星野	L	A	140	C	C	C	A	C	D	24	200
横田	R	B+	142	A	C	D	D	D	C	22	200
木村	R	A+	138	C	C	C	C	C	D	26	200
デニー	Rs	B	146	A	C	B	A	C	D	24	200
西崎	R	A+	142	A	C	A	B	C	D	22	200

こんな選手が欲しい！

前ページの野手から、平塚（シーズン途中に阪神から移籍）を外して新外国人を入れてみた。が「欲しい！」かというと微妙。チームが強いだけに、もう一人パラメータの低い外国人選手を足して、今季前半の苦労を味わってみる、という余裕があってもいいだろう。投手陣は潮崎を外して中継ぎを一人足すか足さないか、という程度。デフォルトメンバーで十分に戦えるチームだ。

●野手

No	選手名	打席	タイプ	守備力 捕	1	2	3	遊	外	肩	足	眼	実績	スタミナ	巧打	長打	信頼	対左	打撃指数
	新外国人野手	L	P	ー	ー	ー	ー	ー	C	C	C	E	C	D	D	A	0	-1	220

日本ハムファイターズ

1998年2位 67勝65敗3分 勝率.508／1999年前期6位 36勝48敗1分 勝率.428

投手陣は壊滅　「ビッグバン」も湿りがち

昨年前半は「ビッグバン打線」が大爆発、投手陣も十分な活躍をしており、優勝はまず間違いないと思われた。ところが、夏以降は打線が沈黙。同時に投手陣も岩本が肩に不調をきたすなどして、信じられないほどの失速ぶり。優勝どころかBクラス転落の危機すらあったのだから、「打線は水物」とか「勝負はゲタを履くまでわからない」という格言が実感されるシーズンだった。

とはいえ、今年は昨年の戦力を維持しており、再度優勝争いに絡むチャンスは十分にある、はずだった。が、結果はというと、現状ぶっちぎりの最下位。既に山根投手コーチが辞任、上田監督の退陣も決定的という厳しい状況だ。

まず投手陣では、開幕3連勝と絶好のスタートを切った金村が戦線離脱。続いて抑えのシュールストロムも故障。カーブの切れを増し、昨年を大幅に凌駕する防御率を残していただけに、これは痛かった。さらに芝草、関根と先発の柱だった投手がまったくの計算外で、ローテーションを外れるほど。グロスにかわる新外国人のウィッテムも、はっきり言ってグロスとは程遠い成績。抑えは黒木では心許ないし、下柳は中継ぎで毎試合投げて欲しいような投手、安定性の面からも決して抑えのタイプではない。昨年は「ビッグバン打線」ばかりが目立っていたが、実は投手陣もかなり頑張っていただけに、この投手陣の壊滅がチーム成績ダウンに大きな影響を与えてしまった。

ただ、不振なのは投手ばかりではない。「ビッグバン打線」も、昨年後半の不振をそのまま引きずっている印象だ。まずは、昨年急成長した西浦。今年は落合の退団で、4番定着が期待されながら、一軍と二軍を行ったり来たりするような状態に陥っている。そして2年連続本塁打王のウィルソンも故障で出場したのはわずか6試合だけだ。これを受けてシーズン途中で獲得した外国人がなかなかの成績を残しているのが、救いといえば救いではあるのだが…。さらにチームの中軸となる、片岡、田中が故障がちなのも痛いところ。他にも井出が故障で一時戦線を離脱、本来なら井出とポジションを争うはずの上田も一昨年に3割をマークした時ほどの勢いがない。昨年は小技が光った奈良原も、今年は出番が少なくなっている。とにかく、投手も野手も、昨年前半の力をまったく出せてないのが今年の日本ハムだ。

●監督データ

項目								
□監督名	上田							
□タイプ	守備	○	○	●	○	○	攻撃
□投手交替	完投	○	○	○	●	○	継投
□選手起用	実績	○	○	●	○	○	調子
□打順の組替え	少ない	○	○	●	○	○	多い
□バント策	少ない	●	○	○	○	○	多い
□エンドラン策	少ない	○	○	○	●	○	多い
□盗塁策	少ない	○	○	○	●	○	多い
□エースの信頼度	低い	○	○	○	●	○	高い
□抑えの信頼度	低い	●	○	○	○	○	高い

ビッグバン打線だけに、犠打はとにかく少ない。本来ならタイプは攻撃的、打順の組み替えも少ないのだが、今年のメンバーではこのあたりが妥当だ。抑えがシュールストロムなら信頼度は高い方だ。

●野手データ

No	選手名	打席	タイプ	守備力 捕	1	2	3	遊	外	肩	足	眼	実績	スタミナ	巧打	長打	信頼	対左	打撃指数
8	井出	R	S	ー	ー	ー	ー	ー	B	B	A	C	C	C	C	C	0	+2	240
3	小笠原	L	S	E	D	ー	ー	ー	D	C	B	C	D	D	B	B	0	0	300
5	片岡	L	S	ー	C	ー	B	ー	ー	B	D	C	A	B	B	B	0	0	290
6	田中	R	P	ー	C	ー	ー	C	ー	C	D	E	A	B	C	A	-1	+1	260
D	フランクリン	B	P	ー	ー	ー	ー	ー	B	C	C	C	C	C	D	A	1	0	250
7	西浦	R	P	ー	C	ー	ー	ー	C	C	B	C	D	C	D	B	0	+2	240
9	上田	L	S	ー	ー	ー	ー	ー	B	A	C	D	C	C	C	D	-1	0	240
2	野口	R	P	C	ー	ー	ー	ー	ー	A	C	C	D	C	D	D	+1	0	250
4	金子	R	P	ー	ー	B	C	C	ー	B	B	C	C	A	C	D	0	+1	260
ー	田口	R	P	C	ー	ー	ー	ー	ー	D	E	D	D	D	D	C	0	0	200
ー	奈良原	R	S	ー	ー	B	C	A	ー	C	B	C	C	C	B	E	+1	0	230
ー	本西	R	S	ー	ー	ー	ー	ー	B	C	B	C	C	D	C	E	0	+1	250
ー	橋上	R	P	ー	ー	ー	ー	ー	C	C	C	D	C	C	D	C	0	+2	240
ー	△秦	L	P	ー	ー	ー	ー	ー	D	D	D	C	B	D	D	C	0	-2	210
ー	△西	R	P	ー	D	D	D	ー	ー	C	C	C	D	D	C	C	0	0	230
ー	△ウィルソン	L	P	ー	ー	ー	ー	ー	E	D	D	E	A	D	D	A	+2	-2	260

日本ハムファイターズ

今年は来年以降に向けたチーム作りの年

前ページでは悪い材料ばかり挙げたが、将来に向けては明るい希望もある。その筆頭格が小笠原だ。昨年までは捕手登録で、時折外野を守ったりもしていたが、今年からは2番ファーストに定着。打率は3割を常にマークしており、片岡以降のクリーンナップに繋ぐ攻撃的2番打者の役割を十分に果たしている。最近やや三振が目立つのが気がかりではあるが、まだ一軍定着1年目。間違いなく将来の中軸候補で、今後の成長が楽しみな素材だ。他にも若手の野手が、中堅、ベテラン勢を押しのけてスタメンに名を連ねており、それぞれが期待以上の成績を残している。

投手陣でも、新人の建山がローテーションの一角に名を連ね、同じく新人の立石や、高卒で3年目の矢野など、若手にも多くのチャンスが与えられている。まだ投手の方は野手ほどの成績を残せていないものの、来年以降に期待がかかる。一軍で経験を積むことなど、滅多にない大きなチャンス。優勝争いに絡んでいないからこそ出場機会が巡ってきているようなものだけに、今年の経験を糧にして、来年以降の飛躍に期待したいところだ。

ただ、ベスプレ勝つとなると、これはなかなか大変だ。前述したように、今年の主力選手は成績がもうひとつ。デフォルトで登録されている選手にパラメータをつけていくと、そう簡単に勝てるチームではならない。先発陣は打ち込まれ、中継ぎももう一息、抑えの信頼性も足りない、さらに打線も「ビッグバン」というほどではないとなると、かなりの苦戦を強いられる。実際、今年は最下位なのだから当然の結果ではあるが、これではプレーしていて面白くないだろう。少なくともAクラス争いに加われるくらいではないと…、ということなら、金村、シュールストロムをメンバーに復帰させるのが第一。そして、一応控えに入れてあるウィルソンもスタメンにするといいだろう。3人とも今年は試合に全く出場していないわけではないので、「もしフルシーズン出場していれば」という楽しみ方があってもいいはずだ。

現メンバーで戦うとするならば、投手の交代時期が大きなポイントになる。打線に安定性はないが、一応は「ビッグバン」。打線が爆発した試合は、確実に勝つようにするのがポイントだ。先発をあまり引っ張り過ぎるのは問題で、一応「抑え」に入ってる下柳にロングリリーフをさせたり、中継ぎ投手を総動員してもいいだろう。優勝を目指すのは相当難しいので、とりあえず5割を目標に戦ってみたい。また、ちょっと日本ハムの柄ではないが、リードしている試合なら送りバンドを使って確実に得点を重ねるようにすれば、投手陣が打ち込まれても、ある程度はフォローが可能だろう。

●投手データ

選手名	投法	タイプ	球速	切れ	制球	安定	球質	技術	スタミナ	回復	スタミナ指数
岩本	R	A+	142	A	C	B	C	C	A	24	200
ウイッテム	R	D	140	C	C	D	C	C	B	22	200
関根	R	B+	138	B	B	C	D	C	B	22	200
建山	Rs	C	140	C	B	C	C	C	C	22	200
芝草	R	C	140	C	B	D	C	D	B	24	200
△今関	R	A+	138	C	C	D	C	C	C	22	200
高橋憲	Ls	A+	138	C	C	D	D	C	E	26	200
立石	Rs	B	142	C	B	C	C	C	D	24	200
矢野	R	B+	146	C	D	C	B	C	D	22	200
△石井	R	A+	138	C	B	D	C	B	D	24	200
黒木	R	B	146	C	C	C	B	C	D	26	200
下柳	Ls	A+	142	A	C	D	C	C	B	30	200

こんな選手が欲しい！

今季中盤以降のメンバーを考えると、新外国人選手は絶対に入れたい。あとは、若手を組み入れることになるが、野手はともかく投手はどこまで働けるか、難しいところだ。

●野手

No	選手名	打席	タイプ	捕	1	2	3	遊	外	肩	足	眼	実績	スタミナ	巧打	長打	信頼	対左	打撃指数
	俊足外野手	B	S	ー	ー	ー	ー	ー	B	C	A	C	E	D	C	D	0	0	300
	長身新外国人	R	S	ー	ー	ー	ー	ー	C	C	C	C	C	D	B	A	0	0	310
	左の若手野手	L	S	ー	C	ー	C	ー	C	C	C	B	E	D	B	D	0	-1	300

●投手

選手名	投法	タイプ	球速	切れ	制球	安定	球質	技術	スタミナ	回復	スタミナ指数
右の若手先発	R	A+	142	C	C	C	C	C	C	22	200
左の中継ぎ	Ls	C	140	C	D	C	C	C	D	24	200

1999年前期

チーム別
最新データ

オリックスブルーウェーブ

1998年3位　66勝66敗3分　勝率.500／1999年前期4位　40勝41敗1分　勝率.493

イチローに続く選手の出現を期待したい

最近は多くの日本人投手が大リーグで活躍しているが、まだ野手の大リーガーは出現していない。そんな中、最も メジャーに近い野手、といえばやはりイチローだろう。5年連続首位打者、95年には打点王、盗塁王になった他、最近は長打力も増してきており、攻撃面は文句なし。そして投手出身ながら、外野の守備はまさに絶品と言えるもの。肩も強い、足も速い、FAを待たずにぜひメジャーに挑戦して欲しい選手だ。

もちろん球団側もファンの声や、イチローのメジャー志向も知っている。ロッテの伊良部問題を出すまでもなく、球団イメージからすれば、すんなりメジャーに挑戦させてやりたいところだろう。しかし、イチローがいなくなると、まず観客動員数が大幅に落ちるのは目に見えているし、戦力ダウンも著しい。そう簡単に出せる状況ではないのだ。

その「戦力ダウン」だが、とにかくイチローばかりが目立ってしまっているのが今のオリックス。イチローに続く選手がいないのだ。本来その筆頭格になるのは田口、そして谷、大島あたりにも期待がかかるところである。もちろん、各選手とも決して悪い数字ではない。ただ「イチローが抜けたら」と考えると、物足りないのだ。また、外国人も今季はニールが不調、プリアムはそこそこ打っているとはいえ、外野守備に不安が残る。その結果として投手、野手も含めて大量に外国人選手を抱えることになっている。常に計算できる助っ人がいて、なおかつ日本人野手がさらに成長してくれれば、イチローの早期メジャー挑戦も現実的になるし、仮に怪我で抜けるようなことになっても、大幅な戦力ダウンにはならないはずだ。逆に、そこまでの戦力が揃えば、「たまに」ではなく「常に」優勝争いに絡めるチームになる。

先発投手は、ベテラン星野が昨年で11年連続2桁勝利が途絶え、今年もそこそこ勝っているものの印象は今ひとつ。そろそろ年齢が気になってきた。ただ、その分、新人の川越、中堅の金田、そしてベテランの加藤が頑張っており、他のチームと比べて全く見劣りはしない。特に川越はどこまで成長するのか、来年以降が非常に楽しみな存在である。その一方で、はっきりした抑え投手がいないのが悩みの種。次ページの表では、一応ウィンと鈴木を抑えにしているが、常に抑えを任せられているわけではない。中継ぎも含めて、リリーフ陣に新星が登場して欲しいところだ。

●監督データ

□監督名	仰木						
□タイプ	守備	○	○	●	○	○	攻撃
□投手交替	完投	○	●	○	○	○	継投
□選手起用	実績	○	○	○	●	○	調子
□打順の組替え	少ない	○	○	○	○	●	多い
□バント策	少ない	○	●	○	○	○	多い
□エンドラン策	少ない	○	○	●	○	○	多い
□盗塁策	少ない	○	●	○	○	○	多い
□エースの信頼度	低い	○	○	●	○	○	高い
□抑えの信頼度	低い	○	●	○	○	○	高い

使う選手をよく変える印象があるが一軍と二軍の入れ替えは少なく、二軍がないベスプレにはぴったり。中継ぎ、抑えが今ひとつな分、投手は完投寄り。タイプは攻撃+1でもいいかもしれない。

●野手データ

No	選手名	打席	タイプ	守備力 捕	1	2	3	遊	外	肩	足	眼	実績	スタミナ	巧打	長打	信頼	対左	打撃指数
4	田口	R	S	—	—	C	—	C	A	A	B	C	B	A	C	D	0	0	250
5	大島	B	S	—	—	B	C	C	—	C	B	B	C	B	B	D	+1	+1	260
9	イチロー	L	S	—	—	—	—	—	S	S	A	A	S	A	S	B	0	0	350
7	プリアム	R	P	—	—	—	—	—	C	C	D	C	C	D	D	A	0	0	270
D	ニール	L	P	—	D	—	—	—	—	D	D	E	B	C	D	A	0	0	240
8	谷	R	S	—	D	—	—	—	B	B	B	A	C	C	C	D	0	0	270
3	藤井	L	P	—	C	—	—	—	C	C	D	E	B	C	D	A	0	-2	250
6	小川	R	S	—	C	C	C	B	—	C	C	C	C	D	A	C	0	0	300
2	三輪	R	P	B	—	—	—	—	—	C	D	C	D	D	C	E	0	+1	230
—	日高	L	P	C	—	—	—	—	—	C	C	D	E	D	D	E	0	0	200
—	五十嵐	L	P	—	C	C	C	C	D	C	D	C	D	D	D	D	0	-2	200
—	福留	R	P	—	—	C	C	C	—	C	C	E	E	D	D	E	0	+1	200
—	塩崎	R	S	—	—	C	C	B	—	C	C	C	D	D	C	E	0	+2	200
—	佐竹	R	P	—	—	C	B	D	—	B	C	B	D	D	C	D	0	+1	200
—	△ペレス	R	P	—	—	—	—	—	C	B	C	C	C	D	C	B	0	0	270
—	×広永	L	P	—	—	—	—	—	D	D	E	E	C	D	D	C	0	-2	240

オリックスブルーウェーブ

打球が飛びそうなところにイチローを

スポーツ紙などで、オリックスの試合結果を見ると、とにかく守備位置の入れ替えが激しい。(二左二)とか(遊三)というようなのが、ずらずらと並んでいるのだ。それでもまだ新聞で見ているからいいようなものの、実際に球場でアナウンスを聞いてスコアボードを見ているだけでは、どの選手がどこへ移動したかなど、とても覚え切れたものではない。もちろん監督の性格もあるが、各選手がいろいろな守備位置を守れるからこそ、出来る作戦とも言えるだろう。

ゲームを進める上でも、選手の配置をいろいろと考えるのが楽しい。代走や代打で選手が変わった時はもちろんだが、守備固めで選手を入れ替えるのも必要だ。ただ、守備固めというと、単純に野手を交代させるだけ、というイメージがあるが、オリックスの場合はそうではない。ポイントになるのはイチローだ。外野に打球が飛んだ時、それを取るのがイチローなのかプリアムなのかでは大違いなのだ。

イチローというと、新聞の見出しになるのは打率に関することが多いが、実際の試合では守備力も相当目立っている。御存知の通り、投手出身で肩の強さは文句なし。返球を意識して助走をつけながらフライを捕球する技術も素晴らしい。もちろん、守備範囲も非常に広い。つまり、打球が飛びそうなところにイチローを配置すればいいのだ。今年はそれほどでもないようだが、昨年は実際の采配でもイチローをライトからセンターやレフトに移動させることがよく見られた。ベスプレでも、ピンチで右のプルヒッター＝引っ張りの打者が出てきたら、イチローをレフトに移動させるなど、こまめに守備位置を変更することで、失点を防げるケースもありそうだ。

攻撃面に関しても、仰木監督の性格を反映してか、打順やスタメンの変更が多い。内外野を兼任できる選手が多く、相手投手や選手の調子に応じて、メンバーを入れ替えて使うと、よりリアルさが増すだろう。

投手陣は、COMやSKPでプレーさせると、どうも先発陣の防御率が良くならない。これは中継ぎ、抑えがしっかりしていないため、ランナーを残した状態で交代した後、リリーフが点を取られるパターンが多いとも考えられる。先発はなかなか信頼できる選手が揃っており、あまりリリーフ陣には期待せず、先発投手に頑張ってもらう方向で指揮をとると良さそうだ。どうしても中継ぎに繋ぐ場合は、相手打者の対左、対右での成績などをよく考えて、交代のタイミングを間違えないようにしたいところだ。ただ、左の中継ぎは水尾だけなのが問題。先発が金田、星野といった左投手なら、そういう意味でも「あと一人、あと二人」と引っ張る利点は大きい。

●投手データ

選手名	投法	タイプ	球速	切れ	制球	安定	球質	技術	スタミナ	回復	スタミナ指数
川　越	R	A+	142	B	B	A	A	C	B	22	200
金　田	L	C	138	C	C	B	A	B	A	24	200
星　野	L	D	132	B	B	C	C	C	B	22	200
加　藤	R	D	140	C	B	B	C	B	B	22	200
高橋功	R	C	140	C	C	C	C	B	C	24	200
△小林	R	A+	142	C	D	C	B	C	C	24	200
平　井	R	B+	142	C	D	D	D	D	D	24	200
水　尾	L	A	138	B	D	B	C	C	E	26	200
×野田	R	B+	140	A	C	D	D	D	C	24	200
×豊田	Rs	D	136	C	D	C	C	C	D	24	200
鈴　木	Rs	A+	140	C	D	D	C	C	D	26	200
ウィン	R	B	140	C	C	C	B	B	C	26	200

こんな選手が欲しい！

デフォルトデータで埋めると、野手は外国人3人になる。ペレス、広永を代走・守備要員と入れ替えたい。投手も実動していない選手を外し、現実に近づけるならこの3人。

●野手

No	選手名	打席	タイプ	守備力 捕	1	2	3	遊	外	肩	足	眼	実績	スタミナ	巧打	長打	信頼	対左	打撃指数
	中堅守備要員	L	S	ー	ー	ー	ー	ー	C	C	B	E	E	D	C	D	0	-1	270
	若手守備要員	L	P	ー	ー	ー	ー	ー	B	B	C	E	E	D	D	E	0	-1	200

●投手

選手名	投法	タイプ	球速	切れ	制球	安定	球質	技術	スタミナ	回復	スタミナ指数
先発外国人	L	A+	140	C	C	C	D	C	C	24	200
中継ぎ新人	Rs	A+	140	C	C	C	C	B	D	24	200
右の抑え候補	R	C	140	B	B	C	B	C	D	24	200

1999年前期

チーム別
最新データ

福岡ダイエーホークス

1998年3位　67勝67敗1分　勝率.500／1999年前期1位　48勝36敗3分　勝率.571

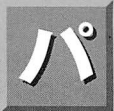
投手陣はほぼ総入れ替え

昨年はとにかく投手起用に苦悩していた王監督。勝つ試合はもちろん上手くいっていたのだが、負ける試合になると出す投手が次々と打ち込まれ、テレビには眉間に皺を寄せているシーンが度々映し出されたものだ。それに加えて、今年は武田がFAで中日に移籍。抑えの岡本もわずか1試合、2イニングしか登板できないという状況。さらに、昨年中継ぎで33試合に出場し、防御率1.29の成績を残した長冨も今季は大不振。おまけに、ローテーションの一角を担っていた西村がシーズン途中に戦線離脱。普通なら、とてもまともに戦える状況ではなく、最下位必至の状況だ。

次ページの表では、途中離脱の西村も含めて、なんとかベスプレに入っている選手で全員を埋めてみた。ただ、それぞれの内容を見ると、松は一軍登板0、倉野、吉武も今季の先発は2試合だけと、とても今季の戦力をそのまま反映しているとは言い難い。

が、そんな状況でどうして前半首位で折り返せたのか。それは、昨年まではとても「重要な戦力」とまでは言えなかった選手が活躍しているからに他ならない。中でも特に目立つのは篠原だ。ドラフト2位で入団した昨年も中継ぎで51試合に登板していたが、防御率は4.53と内容は今ひとつ。新人でこれだけ投げると普通は2年目が心配になる。ところが、今年はなんと防御率1点台で守護神に繋ぐ重要な役割を果たすまでになった。また、昨年から頭角を表わしつつあった藤井も、今年は昨年をさらに上回る活躍ぶりだ。

ただ、この2人のパラメータを上げるだけでは、全く勝負にならない。次ページの「こんな選手が欲しい！」でリストアップしたのは、セ・パ通じて最高となる6人。ゲームを進める上では、今季実動していない選手をどんどん外し、これらの選手を入れていくといいだろう。特に投手陣は元データのままでは手の施しようがないので、6人のうち、投手に5人を割り振っている。実際はそれでも足りず、さらに中継ぎ（入れるなら西村と交代になるが）をもう一人補充してもいいくらいだし、野手も控えの湯上谷や新里を外して、別の内野手や外野手のデータ作成して入れたいところだ。

とにかく、野手はともかく投手陣で昨年から引き続き「活躍」している選手というと、先発の工藤と中継ぎの吉田くらいのもの。今年のダイエーを再現するなら、データは「投手陣総取っ替え」状態でいいだろう。

監督データ

項目							
□監督名	王						
□タイプ	守備	○	●	○	○	○	攻撃
□投手交替	完投	○	○	○	●	○	継投
□選手起用	実績	○	●	○	○	○	調子
□打順の組替え	少ない	○	●	○	○	○	多い
□バント策	少ない	○	○	○	●	○	多い
□エンドラン策	少ない	○	○	●	○	○	多い
□盗塁策	少ない	○	○	○	●	○	多い
□エースの信頼度	低い	○	○	○	●	○	高い
□抑えの信頼度	低い	○	○	○	○	●	高い

不振の小久保を使いつづけているように、「4番」に対するこだわりがある。エース工藤は文句なし、抑えも抜群の好成績を残しており、投手への信頼度は高い。盗塁は標準か+1か微妙なところだ。

野手データ

No	選手名	打席	タイプ	守備力 捕	1	2	3	遊	外	肩	足	眼	実績	スタミナ	巧打	長打	信頼	対左	打撃指数
8	柴原	L	S	—	—	—	—	—	A	B	A	C	D	C	C	E	-1	0	260
6	浜名	L	S	—	—	B	C	B	—	C	B	B	C	D	B	E	-1	-2	260
D	吉永	L	P	E	D	—	—	—	—	D	E	C	B	D	D	A	-1	0	270
5	小久保	R	P	—	C	—	C	—	—	B	C	E	A	B	D	A	0	0	200
3	松中	L	P	—	C	—	—	—	D	C	C	B	D	C	B	B	0	-2	280
2	城島	R	P	B	D	—	—	—	—	B	C	C	C	A	A	B	+1	+1	290
9	秋山	R	P	—	—	—	—	—	B	B	B	D	A	C	D	B	-1	+1	260
7	大道	R	S	—	D	—	—	—	C	C	D	C	C	D	C	C	0	+1	270
4	柳田	R	S	—	D	B	B	—	—	C	C	A	D	D	A	E	+2	+1	290
—	井口	R	P	—	—	—	—	B	—	B	B	E	D	B	D	B	+1	+1	240
—	村松	L	S	—	—	—	—	—	B	B	A	C	C	C	C	E	0	-2	250
—	内之倉	R	P	C	D	—	—	—	—	D	D	D	E	C	D	C	0	+1	200
—	鳥越	R	S	—	—	C	B	B	C	B	B	D	D	D	C	D	0	0	230
—	湯上谷	R	S	—	—	B	B	C	—	C	C	C	C	D	C	E	-1	0	200
—	新里	R	S	—	—	C	C	—	—	B	B	D	E	D	C	E	0	0	220
—	×小川	L	S	—	D	C	C	—	C	C	C	D	C	D	C	C	0	-2	230

福岡ダイエーホークス

長打力を取るか　足を取るか

投手陣は昨年と大幅にメンバーが変わったダイエーだが、野手については「層が厚くなった」というのが適当だろうか。まず一番に挙がるのは4番小久保の復帰。脱税事件と怪我で、昨年はほとんど出場機会がなかったが、今年は不振とはいえほぼ4番で定着。もっと成績が挙がるといいのだが、核になる選手として、そこに「存在する」だけでもその意味は大きい。成績面から注目の存在は城島だ。一昨年の3割から、昨年は2割5分台に急降下したが、今年は再び3割前後を打つ活躍。捕手としてリードにも気を使う中での、この成績は立派としか言いようがない。この二人が、打線の軸となる。

ダイエーには他にも、長打力のある打者が揃っている。前記二人に加え、ベテラン吉永と若手の松中で主に組まれている3～6番の長打力は、昨年「ビッグバン打線」と呼ばれた日本ハムと比べても全く見劣らないものだ。さらに秋山も、そろそろ衰えが気になるとはいっても、まだまだホームランを狙えるバッター。昨年レギュラーで活躍した井口も、打率はともかく、持ち前のパンチ力は健在だ。これに外国人選手を加えると、ちょっと相手投手は息を抜く暇がないと言えるだろう。欲を言えば、小久保と井口の打率が、2～3分程度上がると文句なしの打線になる。

ただ、足のある選手を活かした野球にも魅力を感じる。一時期、足でかなり名前を売っていた村松を入れて、柴原、浜名、村松が揃うと「長打力重視」から「走力重視」のオーダーに一変する。秋山、井口も走れる足は十分にある。守備位置の関係から、うまくスタメンを組むのは難しいが、そこは監督の腕の見せ所。先発投手がどのくらいの失点になりそうなのか、相手投手からどれだけ長打が打てそうなのか。代走や代打、スタメンの入れ替えなど、ベスプレらしい「頭を使った野球」が要求されるチームと言えるだろう。前ページの表では4番に入っている小久保、そしてスタメンから外している井口をどうするかなど、打線は動かしがいがありそうだ。

投手陣は前述した通り、元のメンバーではちょっと戦えない。右の「こんな選手が欲しい！」に挙げた選手＋αとメンバーを入れ替えよう。先発の3番手以降がやや辛いかもしれないが、そこは藤井や篠原から抑えに繋げば特に問題はない。とにかく工藤は信頼出来るので、全試合完投か、せめて8回くらいまでは投げてもらう。そして他の投手の時にうまく中継ぎを使っていけば、それなりの防御率は残せることだろうし「中継ぎでスタミナ指数が200の選手がほとんどいない」というような状況にもならないはずだ。ベスプレではあまり使われない6人目の先発も、中継ぎで積極的に使っていきたい。

●投手データ

選手名	投法	タイプ	球速	切れ	制球	安定	球質	技術	スタミナ	回復	スタミナ指数
工　藤	L	A+	142	A	A	A	B	C	A	24	200
佐久本	L	A+	140	C	B	D	B	D	C	24	200
△倉野	R	B	140	C	D	D	D	C	D	24	200
△吉武	R	B+	140	D	B	D	B	C	D	24	200
西　村	R	A+	140	C	B	C	C	C	B	22	200
×　松	L	A+	142	C	C	C	C	C	C	24	200
吉　田	L	D	136	A	C	C	B	C	E	26	200
ヒデカズ	R	A	140	B	C	D	D	D	D	24	200
△長冨	R	C	138	C	D	D	C	B	D	24	200
△岡本	R	B	142	C	C	C	C	C	D	24	200
藤　井	R	A+	140	B	A	A	C	C	D	30	200
篠　原	L	A	144	A	B	A	B	B	D	26	200

こんな選手が欲しい！

●野手

No	選手名	打席	タイプ	守備力 捕	1	2	3	遊	外	肩	足	眼	実績	スタミナ	巧打	長打	信頼	対左	打撃指数
	新外国人野手	B	P	ー	ー	ー	ー	ー	D	C	D	E	C	D	D	A	0	0	270

●投手

選手名	投法	タイプ	球速	切れ	制球	安定	球質	技術	スタミナ	回復	スタミナ指数
右の先発1	R	A+	142	B	B	B	C	C	B	24	200
右の先発2	R	B+	142	B	C	B	C	C	B	22	200
右の先発3	Rs	C	138	C	C	B	C	B	B	22	200
移籍の中継ぎ	R	B+	144	B	B	D	D	C	D	24	200
外国人守護神	R	A	144	C	A	A	A	A	C	24	200

１９９９年前期
チーム別
最新データ

大阪近鉄バファローズ

1998年5位　66勝67敗2分　勝率.496／1999年前期5位　40勝42敗2分　勝率.487

投手陣の崩壊で低迷も、打線は活発

今年の近鉄の前期を振り返ると、投手陣が整備できなかった。その一言に尽きるだろう。なにしろ、開幕からリリーフエースの大塚、強力な中継ぎ酒井、盛田が故障で使えない。先発陣に完投能力がほとんどない投手陣で、この出遅れは致命的だった。さらに、先発転向で期待された赤堀が数試合投げただけでリタイヤし、高村が絶不調で、後半に入ると故障してしまった。ナックルを操るマットソンも昨年ほどの安定感がなく２軍落ち。まさに満身創痍で、先発までコマ不足に悩む結果となった。

先発には新人や実績のない若手を使ってしのいだりもしたが、それが通用するほどプロの世界は甘くない。ついに中継ぎエースの佐野を先発に回すことでなんとかローテーションを回せるようになるも、頼みの岡本、真木がピリッとせず、安定感があるのは小池ひとりという状況となる。いくら看板の「いてまえ打線」があっても、これでは勝てるわけがない。厳しい前半だった。

ただ、前半戦の収穫は香田とバルデスのリリーフ陣。特に香田は、絶妙のコントロールで幾度もロングリリーフをこなし、チームの窮地を何度も救った。バルデスも、大塚が復帰するまではどうにかストッパーとして仕事をした。この２人の頑張りで、なんとか終盤まで試合が壊れずにすんだといえるだろう。

なお、前半戦の最後になってやっと大塚が復帰したが、昨年ほどの球威はなく、球速は140kmがやっと。スライダーの切れも今ひとつ。後半が始まっても、まだまだ安心して任せられるまでには至っていない。

打線のほうは、98年より破壊力が増した。特に、中村、ローズ、クラークと続くクリーンナップの長打力はパ・リーグ一とさえいえるだろう。これに６番磯部のしぶといバッティング、７番に定着した一発のある吉岡、一時ホームランを量産して近鉄ファンをびっくりさせた的山、と続く。「いてまえ打線」と言われながら、昨年までは両外国人に頼りっぱなしの感が強かったが、今年は胸を張れる布陣である。

ただし、１番大村の不振は痛い。昨年前半はイチローを脅かすほどの打率を誇った選手が、今年は全く精彩を欠いている。また、２番も武藤、吉田、水口と固定できないでいるのが悩みの種だ。クリーンナップの前にランナーを出せないと、いてまえ打線の威力も半減する。このあたりが後半戦のカギになるか。

監督データ

項目	内容						
□監督名	佐々木						
□タイプ	守備	○	○	●	○	○	攻撃
□投手交替	完投	○	○	○	●	○	継投
□選手起用	実績	○	○	○	●	○	調子
□打順の組替え	少ない	○	○	●	○	○	多い
□バント策	少ない	○	○	○	●	○	多い
□エンドラン策	少ない	○	●	○	○	○	多い
□盗塁策	少ない	○	○	○	●	○	多い
□エースの信頼度	低い	○	●	○	○	○	高い
□抑えの信頼度	低い	○	○	●	○	○	高い

大塚が大きく出遅れたため、押さえの信頼度が下がった。また、エースの信頼度が下がり、投手交代も継投中心とならざるを得ない。それ以外は昨年と同じ。選手起用は調子を重視も、控えの層が薄く、変更は多くない。

野手データ

No	選手名	打席	タイプ	守備力 捕	1	2	3	遊	外	肩	足	眼	実績	スタミナ	巧打	長打	信頼	対左	打撃指数
8	大村	L	S	—	—	—	—	—	A	A	B	B	C	B	A	D	+1	-1	260
6	武藤	L	S	—	—	C	—	B	—	B	B	B	D	C	B	E	0	-2	250
5	中村	R	P	—	C	—	C	—	—	B	D	D	D	A	D	A	0	0	250
7	ローズ	L	S	—	—	—	—	—	B	A	B	C	A	A	B	A	+1	0	300
D	クラーク	R	S	—	D	—	—	—	—	C	D	B	A	B	C	A	0	0	280
3	吉岡	R	P	—	D	—	C	—	D	C	C	D	D	C	C	B	0	+1	270
9	礒部	L	S	D	—	—	—	—	B	B	C	A	D	C	B	C	+1	0	280
2	的山	R	S	B	—	—	—	—	—	A	C	D	D	C	C	C	+1	0	260
4	吉田	R	P	—	—	C	C	B	D	B	B	C	D	D	C	E	0	0	250
—	鈴木	R	P	—	—	—	—	—	D	C	C	C	C	C	D	D	+1	+1	220
—	安部	L	P	—	C	—	—	—	D	C	D	D	C	D	D	D	0	-2	220
—	古久保	R	P	B	—	—	—	—	—	D	D	D	D	D	C	D	0	0	200
—	水口	R	P	—	—	B	C	B	—	C	C	B	C	D	B	E	0	+1	200
—	村上	R	P	—	C	—	E	—	C	C	C	C	C	D	D	C	+1	+1	200
—	勝呂	R	S	—	—	—	B	B	—	B	C	D	C	D	C	E	0	0	200
—	×山本	L	P	—	—	—	—	—	—	E	D	C	B	E	D	D	+1	-1	270

大阪近鉄バファローズ

投手リレーでしのぎ、打線爆発を待つ

近鉄躍進のカギは、なんといっても投手力にある。戦力的に他チームより明らかに落ちるわけではなく、投手の起用方法次第では、十分に優勝も狙えるチームなのだ。

今年の投手陣では厳しいが、9月頃から盛田も復帰するようである。故障で今期は出番のない高村に替え盛田を入れ、盛田、大塚のダブルストッパーを採用しても面白いかもしれない。この際、先発は5人で回すしかないが、谷間には香田の昇格も楽しい構想である。

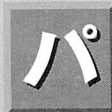
いずれにしても、この布陣では投手リレーが監督の手腕の見せ所である。先発をどこで見切るか、中継ぎで誰を使うか。香田をどんなタイミングで投入するか。左のワンポイントなどもはさみながら、最終的には、うまく大塚へつなぐリレーで相手打線を封じ込めたい。ただし、大塚の信頼性はまだ低い。最長でも1イニングしか使わないことだろう。

先発投手は、小池、佐野を中心に置かざるを得ないが、小池以外は完投を考えないことが大切。どこで崩れるかわからないと考えておいてもいいだろう。

打線は、基本的に固定の布陣となる。控えの選手層が薄いのである。左投手のときのみ、磯部に替えて鈴木、武藤に替えて吉田あたりか。ただ、鈴木の外野守備では心もとないから、リードしていれば早めに磯部に替える必要があろう。

盗塁やエンドランなどの小技ができるのは、1、2、9番打者のみ。あとは、ともかく振り回す豪快な野球が近鉄の持ち味だ。バント策は多いが、それも1、2番、8、9番に限られる。大味と言えば大味だが、近鉄ファンであれば、それこそが近鉄の魅力なのである。中村がバットを短く持って当てに行っている姿などは想像したくない。やはり、中村は三振など恐れずに全打席ホームランを狙ってほしいし、それでホームランを打つからこそ相手投手にも恐れられるというものだろう。

打線の核である4番ローズは、走攻守揃い、しかも飛距離のあるホームランを打てる非常に素晴らしい選手。後ろがクラークでなければかなり盗塁もできるのだが、そこまでは考えなくてもいいかもしれない。中村、ローズが出塁したら、クラーク、磯部、吉岡で返す。それこそが近鉄の現状であり、このあたりの打線で動くのは、むしろ監督としてやってはいけないことだろう。

SKIPモードでは、かなり苦しいと考えたほうがいい。投手リレーが命のチームなので、ワンポイントや「気合」の多用などでなんとか防がないと、一方的にやられる可能性もあるのだ。SKIPモードで勝つには、打線の爆発頼みか。打ち合いになったとき以外で勝てる確率は低い。いずれにしても、勝つためには監督データを工夫することだろう。

●投手データ

選手名	投法	タイプ	球速	切れ	制球	安定	球質	技術	スタミナ	回復	スタミナ指数
小池	L	A+	140	B	C	B	C	B	B	24	200
佐野	R	C	138	C	C	C	C	C	C	22	200
岡本	Rs	C	140	C	B	D	C	C	B	24	200
真木	L	A	144	C	D	D	C	C	C	24	200
高村	R	A+	142	C	D	D	C	C	B	24	200
△マットソン	R	D	136	B	D	D	C	C	B	22	200
香田	R	A+	138	B	A	B	B	C	D	30	200
西川	L	A	144	C	C	D	C	C	E	24	200
△赤堀	R	A+	140	B	C	C	A	B	C	22	200
×盛田	R	C	140	B	D	C	C	D	D	24	200
バルデス	R	B	146	C	C	C	B	C	C	26	200
大塚	R	B	144	B	C	A	B	C	E	26	200

こんな選手が欲しい！

野手は山本、安部といったところに衰えが目立つ。このあたりとスタメン内野手を交換するべきだ。あと、左の代打もほしいが…。投手は今期ほとんど出場のないマットソン、赤堀を替えるが、そうなるとかなり弱体化する。

●野手

No	選手名	打席	タイプ	守備力 捕	1	2	3	遊	外	肩	足	眼	実績	スタミナ	巧打	長打	信頼	対左	打撃指数
	スタメン内野手	R	S	—	—	B	—	C	—	C	B	C	E	D	C	E	0	0	260

●投手

選手名	投法	タイプ	球速	切れ	制球	安定	球質	技術	スタミナ	回復	スタミナ指数
先発外国人	R	A	138	B	D	B	C	C	B	22	200
左ワンポイント	Ls	A+	140	C	D	C	C	B	E	26	200
元ストッパー	R	B	144	B	D	B	B	C	D	24	200

千葉ロッテマリーンズ

1998年6位　61勝71敗3分　勝率.462／1999年前期3位　39勝38敗1分　勝率.506

ファンは日本一　チームも目指せ日本一

ロッテファン以外の人に「千葉ロッテについて知ってることは？」と聞くと、まず真っ先に出てくるのは、昨年喫した悪夢の18連敗のことだろう。他では伊良部の移籍問題や、広岡氏とバレンタイン元監督の問題、監督候補とまで言われていたキャプテン・フランコの解雇あたりだろうか。どうにも悪いニュースばかりである。おまけに、前・後期制が廃止されてからの16年でAクラスはたった3度と、はっきり言って弱い。常に勝つことを喜びと感じるような人では、とてもファンにはなれないチームだ。

が、それでも見捨てずに応援するファンというのは、それだけ思い入れも強いということ。ライトスタンドが常に総立ち状態の応援は、間違いなく12球団一である。例え興味がなくても、一度くらいマリンスタジアムに足を運ぶ価値は十分にある。JR京葉線・海浜幕張から徒歩15分、野球開催時には無料バスもある上、駐車場はなんと6600台収容だ。

と、ファンのことを褒めていても仕方ないので、チームを褒めよう。とにかく、今年は抑えのウォーレンが素晴らしい。本来、ロッテの抑えというと河本、成本あたりなのだが、近年は故障でフル回転できていない。その穴を埋めるどころか、それ以上とも言える活躍をしているのがウォーレンである。先発の二本柱、小宮山、黒木はパ・リーグを代表する先発投手、と言っても過言ではない。そして打線もそこそこは打ってくれるのだから、中継ぎ、抑えがしっかりしさえすれば、5位や6位を行ったり来たりするようなことはないはずなのだ。今年は前半を貯金1、3位で折り返すことが出来たのは、ウォーレンの存在がかなり大きいと言えるだろう。

あとは二本柱から、いかにウォーレンまで繋ぐかが問題になる。確かに黒木には完投するだけのスタミナは十分、小宮山にしても十分に完投能力を持っている投手だ。しかし、毎度のように8回まで投げてくれ、というのはなかなか無理な話。特に小宮山は、前半は良くても終盤に打ち崩されるケースも結構目立つ。信頼できる中継ぎがいれば、一人二人挟んでウォーレンへ、となるのだが、その役割を果たすべき河本、藤田がピリっとしないのが頂けない。本来、中継ぎ陣がしっかりしていれば、小宮山の勝率が毎年5割前後などということはないはずなのだ。逆に、河本の完全復活や成本の復帰があれば、日本一すら狙えるチームだ。

●監督データ

項目	★新監督★
□タイプ	守備 ○○●○○ 攻撃
□投手交替	完投 ○●○○○ 継投
□選手起用	実績 ○○○○● 調子
□打順の組替え	少ない ○○○○● 多い
□バント策	少ない ○○○●○ 多い
□エンドラン策	少ない ○○○●○ 多い
□盗塁策	少ない ○○●○○ 多い
□エースの信頼度	低い ○○●○○ 高い
□抑えの信頼度	低い ○○○○● 高い

□監督名

昨年との最大の違いは抑えの信頼度。ウォーレンは絶対的だ。選手起用は調子重視が明らか、打順の組み替えも非常に多い。黒木をエース格にするなら、エース信頼度を上げてもいいかもしれない。

●野手データ

No	選手名	打席	タイプ	守備力 捕	1	2	3	遊	外	肩	足	眼	実績	スタミナ	巧打	長打	信頼	対左	打撃指数
8	諸積	L	S	—	—	—	—	—	B	B	B	B	C	C	B	E	+1	0	280
6	小坂	L	S	—	—	—	—	A	—	B	A	B	C	B	A	E	-2	-1	290
7	堀	R	S	—	—	C	C	D	C	B	B	C	B	B	C	C	-1	0	260
5	初芝	R	P	—	D	—	C	—	—	C	D	C	B	B	C	A	0	+1	270
D	ボーリック	B	P	—	D	—	C	—	—	C	D	D	C	D	C	A	+1	0	270
3	福浦	L	P	—	C	—	—	—	E	C	D	C	C	C	C	C	0	-1	290
9	平井	L	P	—	—	—	—	—	B	B	C	C	B	C	C	D	-1	-2	250
2	清水	R	S	C	—	—	—	—	—	A	D	C	D	D	C	E	0	0	240
4	酒井	R	S	—	—	B	B	B	—	C	C	C	D	D	B	D	0	+1	300
—	大村	R	P	—	—	—	—	—	C	C	D	D	C	D	B	B	+1	+1	310
—	佐藤	R	P	—	D	—	—	—	C	C	D	C	C	C	C	D	+1	+1	230
—	吉鶴	R	P	C	—	—	—	—	—	D	D	C	D	D	D	E	0	+1	260
—	松本	L	S	—	—	B	C	D	—	C	C	B	D	D	C	D	0	0	220
—	山本	R	P	—	D	D	C	C	—	C	D	D	D	D	C	D	0	0	200
—	△立川	R	P	—	—	—	—	—	B	C	C	E	D	D	D	D	0	0	200
—	△ブレイディー	L	P	—	—	—	—	—	C	C	C	D	D	D	D	C	0	-2	260

千葉ロッテマリーンズ

ポイントになるのは投手の交代時期

中継ぎに問題がある分、先発投手にも悪影響が出ているのが今のロッテ。二本柱に武藤と後藤、あと一人、二人は先発投手が欲しいところだ。そこで名前が挙がりそうなのが、主に中継ぎをしているドラフト1位の新人・小林雅。その活躍ぶりを見ていると抑えでも良さそうだが、ウォーレンがいるだけに現状は先発の「もう1枚」が適任。そういう意味でも中継ぎ陣の踏ん張りを期待したい。

打線は、とにかくボーリックの状態が鍵になる。全試合出場さえ出来れば、かなりの活躍が望めるだけに、故障がちなのが残念。常に初芝、ボーリックと続く打線が組めれば、相手にはかなりのプレッシャーになるだろう。また、前ページでの表では平井をスタメンにしているが、一発のある大村を使うケースも多い。こうなると、イメージとは違い、結構破壊力のある打線だ。この平井、大村のケースだけではなく、他の選手も厳しいレギュラー争いを繰り広げている。主に下位打線での争いとはいえ、決して「ドングリの…」という状態ではないので、これがいい方向に働けば、万年Bクラスからあっさり脱出する可能性も十分にある。もちろん、全員の技術が向上するに越したことはないが、その中から一人でも二人でも、確実にレギュラーを取る選手、相手投手の左右にかかわらず使える選手が出てくるだけでも相当違うはずだ。

とはいえ、ベスプレ上だと、いくら左打者を対左投手で使いつづけても、決して成長はしてくれない。データを変更しなければ、いつまで経っても「対左-2」は「-2」のままである。当然、現実と同じように相手投手によって、スタメンの入れ替えや代打を多用すべきだ。幸いにして守備位置の変更がしやすいメンバー構成なので、「代打を出し過ぎて、二塁を守る選手がいなくなった」などということは、ほとんどあり得ない。ここぞというところでは、積極的に代打を使おう。実績やスタミナが低い選手が多いので、相手投手の左右だけではなく、調子をよく見て起用選手を決めることも重要になる。

投手陣については、いかに中継ぎを上手く使うかが勝敗を分けそうで、単に「バテたから交代」というのはプラスとは言い難い。黒木を降板させたら継投策が裏目に出た、などということも少なくないだろう。先発投手のスタミナや中継ぎの信頼度を考えて、リードした状態でウォーレンにバトンを渡せるようにしたいものだ。仮に、どうしても勝ちたいような試合で先発が早く崩れたら、中継ぎ投手に「気合い」を連発するのも悪くない。もし翌日の登板予定が黒木なら、中継ぎは一人残っていれば、ほぼ大丈夫。日程が1日開いている場合も同様だ。ただ「気合い」を入れてもダメなケースも多いのだが…。

●投手データ

選手名	投法	タイプ	球速	切れ	制球	安定	球質	技術	スタミナ	回復	スタミナ指数
小宮山	R	C	138	B	S	B	C	B	A	24	200
黒　木	R	A+	144	A	B	A	A	C	A	26	200
武　藤	R	C	140	B	C	D	B	C	B	22	200
後　藤	R	A	140	C	B	C	C	C	B	22	200
園　川	L	D	136	C	C	D	C	C	D	22	200
礒	R	B	144	B	D	C	D	C	C	22	200
小林雅	R	A+	144	A	C	B	A	C	D	28	200
藤　田	L	A	140	B	B	C	C	C	D	26	200
近　藤	R	A	138	C	C	B	C	B	D	24	200
△クロフォード	L	C	140	D	E	D	D	C	C	24	200
河　本	L	B	146	D	D	C	C	C	E	24	200
ウォーレン	R	B	144	C	A	A	A	S	D	26	200

こんな選手が欲しい！

本来ならクロフォードをそのまま先発に使いたいが、現実に近づけるなら右の中継ぎ投手と入れ替えるのが妥当。野手は元のメンバーに左打者が結構多く、代打にも守備要員にも使える右の外野手を補強したい。他の選手の調子次第ではスタメンでも悪くない。

●野手

No	選手名	打席	タイプ	捕	1	2	3	遊	外	肩	足	眼	実績	スタミナ	巧打	長打	信頼	対左	打撃指数
	外野先発候補	R	S	―	―	―	―	―	B	C	C	C	E	D	C	E	0	0	260
	俊足外野手	R	S	―	―	―	―	―	B	C	B	D	E	D	B	D	0	0	220

（守備力：捕・1・2・3・遊・外）

●投手

選手名	投法	タイプ	球速	切れ	制球	安定	球質	技術	スタミナ	回復	スタミナ指数
右の中継ぎ	R	A+	140	B	C	B	C	B	D	24	200

1999年前期

チーム別
最新データ

1999最新データ実力検証

セ・リーグ編

●チーム成績

順	チーム	試合	勝	敗	分	勝率	本塁打	盗塁	得点	失点
1	中日	1350	763	586	1	.566	1114	582	6085	5404
2	横浜	1350	720	629	1	.534	1291	554	6416	5980
3	巨人	1350	706	642	2	.524	1565	303	6429	6134
4	ヤクルト	1350	676	670	4	.502	1294	574	6052	5679
5	阪神	1350	609	740	1	.451	1104	406	5390	6023
6	広島	1350	571	778	1	.423	1537	706	6408	7560

●打撃成績（規定打席4185＝1350試合×3.1）

順	名前	球団	打率	試合	打数	安打	2	3	本	打点	犠打	四球	三振	盗塁	失策
1	ローズ	横	.338	1350	5171	1748	311	3	241	999	39	823	411	3	109
2	石井琢	横	.325	1350	5511	1791	317	28	82	563	57	672	785	310	112
3	鈴木尚	横	.322	1347	5428	1747	304	2	232	965	36	660	608	28	3
4	古田	ヤ	.319	1350	5267	1679	332	0	200	991	92	658	658	36	0
5	関川	中	.317	1332	5253	1667	285	15	64	640	188	675	680	156	10
6	高橋	巨	.317	1344	5310	1684	286	2	270	954	26	699	680	33	18
7	真中	ヤ	.309	1223	4688	1448	224	9	63	471	203	497	683	101	8
8	松井	巨	.307	1350	5331	1634	286	5	294	1036	31	676	842	28	7
9	前田	広	.306	1340	5237	1602	289	4	236	861	72	667	614	49	21
10	清水	巨	.299	1332	5458	1631	288	7	166	619	182	566	755	88	9
11	坪井	神	.297	1247	4892	1452	263	9	66	497	161	475	673	105	14
12	江藤	広	.296	1350	5271	1562	269	3	313	989	36	653	880	36	75
13	和田	神	.296	1350	5241	1552	301	3	77	547	299	601	617	41	67
14	野村	広	.291	1334	5305	1545	277	10	168	716	70	564	839	38	161
15	李	中	.291	1320	5347	1554	274	22	146	613	140	500	942	228	47
16	緒方	広	.289	1335	5334	1541	314	21	221	769	81	490	880	229	3
17	★左打ち内野手	ヤ	.285	1228	4512	1288	219	14	103	552	173	442	813	102	135
18	ゴメス	中	.283	1331	5027	1424	245	1	244	923	32	701	925	2	33
19	ポゾ	横	.283	1192	4392	1242	229	4	116	552	163	395	668	31	43
20	波留	横	.282	1222	4608	1301	253	11	76	487	114	449	807	93	15
21	井上	中	.281	1258	4482	1258	214	0	104	591	194	545	786	1	12
22	石井	巨	.279	1160	3891	1086	173	1	152	603	20	368	689	0	38
23	仁志	巨	.276	1265	4838	1336	259	6	124	549	163	492	852	52	89
24	立浪	中	.276	1350	4976	1371	314	4	63	571	231	627	865	40	60
25	金本	広	.275	1266	4298	1182	197	11	232	712	25	557	828	102	20
26	二岡	巨	.271	1335	5144	1395	305	12	162	664	47	510	1048	89	108
27	ペタジーニ	ヤ	.269	1277	4622	1245	231	3	234	789	17	537	987	28	12
28	山崎	中	.269	1339	5206	1401	249	0	217	949	31	571	1021	2	20
29	矢野輝	神	.268	1350	4784	1281	229	4	90	473	179	480	765	27	0
30	新庄	神	.266	1324	4991	1326	250	10	195	718	54	507	1029	103	5

投手力の中日を打の横浜と巨人が追う展開
ローズや石井啄、上原、宣らの活躍が目立つ

前ページまでに掲載した1999年最新データを用い、10シーズン戦わせてみた結果がこのページ。中日が6回優勝とさすがの強さを見せ、横浜と巨人が優勝2回ずつで追う展開。失点の少ないヤクルト、2位もあった阪神、機動力のある広島にもチャンスはあるはずだ。

打撃成績では横浜勢がトップ3を独占。ローズは2年目が大不振だったせいで数字がやや低いが、最高打率.383をマークするなど能力は抜群。広島の前田は首位打者を2回取ったが、その好調を持続できない。「故障を押して出場するも成績が上がらず」という前田らしさが出ているのが不思議だ。この2人、いくらパラメータが良くとも常に安定して成績を残せるわけではないというベスプレの奥の深さが出たいい例だろう。ちなみに規定打席に満たなかった選手には元木(3594打席/.285/本塁打84本)、福留(3786/.274/95本)などがいる。

投手成績では、防御率1位の上原、最多勝の斎藤隆、奪三振王の石井一がセ界トップ3。リリーフでは宣がチームの好調に乗って好成績を残した。

●投手成績（規定投球回数1350）

順	名前	球団	防御率	試合	完投	勝	敗	S	SP	回数	被安打	被本	与四	奪三振	責	勝率	奪三振率
1	上　原	巨	3.09	307	96	140	77	0	1	2181 2/3	1895	159	695	2102	750	.645	8.67
2	斎藤隆	横	3.35	334	58	142	89	0	1	2137	1874	183	676	1821	795	.615	7.67
3	石井一	ヤ	3.35	309	90	130	97	0	0	2032	1579	189	1092	2270	756	.573	10.05
4	藪	神	3.42	336	62	123	110	0	2	2077 2/3	1946	176	740	1563	790	.528	6.77
5	野　口	中	3.51	330	62	137	98	0	1	2099 2/3	1930	169	768	1380	818	.583	5.92
6	武　田	中	3.58	298	62	123	94	3	4	1868 1/3	1767	177	522	1286	743	.567	6.19
7	川　崎	ヤ	3.85	306	55	106	100	1	3	1805 2/3	1765	167	694	1170	773	.515	5.83
8	ガルベス	巨	3.86	314	66	129	83	2	3	1991 2/3	1886	192	632	1550	854	.608	7.00
9	メ　イ	神	3.94	314	39	103	107	0	1	1814 2/3	1672	183	856	1475	795	.490	7.32
10	佐々岡	広	4.00	332	66	122	104	0	1	2030	2147	157	645	1804	903	.540	8.00
11	伊　藤	ヤ	4.10	244	36	84	71	1	5	1443 2/3	1364	173	648	1125	658	.542	7.01
12	川上	中	4.27	326	56	115	122	0	1	2005	2083	241	708	1368	951	.485	6.14
13	川　村	横	4.31	337	42	106	111	0	0	1930	1934	208	699	1310	925	.488	6.11
14	山本昌	中	4.45	253	36	90	90	2	2	1471	1518	153	518	961	727	.500	5.88
15	桑　田	巨	4.79	291	47	99	110	1	3	1739	1870	187	825	1077	926	.474	5.57

●セーブポイント

順	名前	球団	防御率	試合	完投	勝	敗	S	SP	回数	被安打	被本	与四	奪三振	責	勝率	奪三振率
1	宣	中	2.57	473	0	24	26	356	380	493 2/3	386	26	188	501	141	.480	9.13
2	佐々木	横	3.06	523	0	38	41	329	367	568 1/3	486	41	172	602	193	.481	9.53
3	槙　原	巨	3.49	448	0	50	55	279	329	553 2/3	550	56	136	408	215	.476	6.63
4	リベラ	神	2.66	413	0	30	35	294	324	471	351	23	131	532	139	.462	10.17
5	高　津	ヤ	3.86	450	0	51	64	258	309	644 1/3	664	57	137	380	276	.443	5.31
6	澤　崎	広	4.19	453	0	53	59	248	301	564 1/3	639	63	149	447	263	.473	7.13

1999年前期

チーム別最新データ

1999最新データ実力検証

パ・リーグ編

●チーム成績

順	チーム	試合	勝	敗	分	勝率	本塁打	盗塁	得点	失点
1	西　武	1350	802	530	18	.602	983	1043	6905	5553
2	ダイエー	1350	697	635	18	.523	1202	607	6312	6101
3	ロッテ	1350	684	653	13	.512	1034	466	6124	5949
4	近　鉄	1350	683	654	13	.511	1143	579	6756	6539
5	オリックス	1350	606	732	12	.453	1201	533	6332	7004
6	日本ハム	1350	533	801	16	.400	1257	823	6399	7682

●打撃成績（規定打席4185＝1350試合×3.1）

順	名前	球団	打率	試合	打数	安打	2	3	本	打点	犠打	四球	三振	盗塁	失策
1	イチロー	オ	.365	1350	5000	1826	341	52	206	976	41	968	382	265	1
2	ローズ	近	.325	1350	5306	1727	336	18	240	1062	27	771	690	143	13
3	大　友	西	.323	1341	5180	1675	284	11	33	644	204	775	670	145	6
4	クラーク	近	.323	1349	5124	1656	328	5	244	1088	31	898	807	6	2
5	松　井	西	.323	1350	5409	1748	335	34	134	1049	87	617	736	283	94
6	小　坂	ロ	.317	1350	5314	1687	239	32	26	460	195	695	606	198	62
7	小笠原	日	.317	1257	5070	1605	312	8	160	801	36	520	705	152	19
8	諸　積	ロ	.310	1315	5070	1570	235	20	26	539	295	596	677	107	2
9	大　村	近	.309	1347	5398	1670	286	22	78	647	252	686	713	131	3
10	小　関	西	.303	1317	5231	1587	262	28	23	550	214	507	754	230	15
11	柳　田	ダ	.302	1326	5170	1559	284	9	13	617	32	831	585	47	84
12	高木大	西	.300	1333	5134	1541	304	15	122	855	183	543	805	136	9
13	★俊足外野手	日	.300	1125	4668	1400	207	26	59	440	23	435	767	220	9
14	城　島	ダ	.297	1350	5197	1541	327	3	202	892	221	540	624	38	0
15	柴　原	ダ	.296	1231	4393	1299	204	26	15	381	145	439	758	175	5
16	礒　部	近	.295	1338	4934	1454	299	11	103	739	290	769	740	43	28
17	片　岡	日	.292	1336	5303	1548	302	5	165	863	33	476	754	5	35
18	大　島	オ	.289	1350	5396	1557	265	17	63	605	147	611	795	75	78
19	吉　永	ダ	.288	1224	4504	1299	210	1	197	715	28	664	816	1	9
20	松　中	ダ	.288	1265	4607	1328	267	5	166	724	215	556	708	29	16
21	谷	オ	.287	1344	5282	1518	294	12	70	560	131	755	848	74	18
22	大　村	ロ	.287	1295	4828	1387	238	1	193	888	210	400	706	1	34
23	浜　名	ダ	.287	1177	4188	1201	196	10	12	426	226	535	647	119	75
24	堀	ロ	.285	1259	4632	1319	270	12	88	528	178	461	772	85	40
25	高木浩	西	.284	1145	3692	1048	195	5	18	359	138	576	623	28	68
26	初芝	ロ	.283	1349	5136	1453	270	0	243	957	28	759	880	2	38
27	★長身新外国人	日	.283	1291	4956	1402	286	6	196	829	27	722	705	48	15
28	武　藤	近	.279	1300	4650	1296	200	11	14	440	252	556	790	86	102
29	酒　井	ロ	.277	1315	4797	1328	291	7	70	574	239	454	692	34	79
30	福　浦	ロ	.271	1291	4537	1231	205	2	121	562	208	459	778	3	21

俊足揃いの西武が圧勝
注目の松坂は防御率第3位

チーム別成績では西武の圧勝となった。足の速い選手が有利なベスプレ、その中でも特に「足中心」の野球をしている西武だけに、この結果も当然だ。一方ボロボロなのは日本ハム。防御率ベスト15に岩本しか入っていないようでは、いくら本塁打が多くても簡単には勝てない。オリックスは予想外の不振。先発陣はしっかりしており、中継ぎ、抑えの問題だろう。

打撃成績のトップはイチロー。群を抜いた三振の少なさはイチローらしい。意外なのは松井の打点1049。前を打つ大友、小関が好成績な上、足が速く得点圏に進むことも多い。そこで松井の信頼+1が効いているのようだ。他では城島が守備Bながら失策（捕逸）0というのも目立つ。

投手では注目の松坂が防御率第3位と上々。ただ、奪三振率では黒木、工藤、石井よりも下。この3人に共通するのは技術「C」で、松坂は「B」。実際、スライダーで内野ゴロも多いが、奪三振ショーが見たければ、「C」に落とすのもいいかもしれない。抑えは順当な結果。監督の「抑え信頼度」は、登板数だけではなく、1試合あたりの投球回数にも影響を及ぼすようだ。

●投手成績（規定投球回数1350）

順	名前	球団	防御率	試合	完投	勝	敗	S	SP	回数	被安打	被本	与四	奪三振	責	勝率	奪三振率
1	黒　木	ロ	3.12	305	71	140	81	0	1	2089	1755	94	710	1799	724	0.633	7.75
2	工　藤	ダ	3.26	315	87	134	83	0	0	2113 ⅓	1933	125	672	1754	765	0.618	7.47
3	松　坂	西	3.32	243	74	126	58	1	1	1732 ⅔	1450	124	828	1398	639	0.685	7.26
4	石　井	西	3.37	269	79	138	64	0	0	1890 ⅓	1585	151	696	1824	707	0.683	8.68
5	小宮山	ロ	3.98	324	77	135	112	0	1	2105	2022	169	646	1353	931	0.547	5.78
6	西　口	西	4.20	304	94	125	95	0	0	2090 ⅓	2006	198	914	1357	976	0.568	5.84
7	小　池	近	4.24	325	64	127	102	0	2	2039 ⅔	2165	195	944	1177	962	0.555	5.19
8	金　田	オ	4.33	313	62	96	111	1	2	1916 ⅔	2082	142	761	1062	922	0.464	4.99
9	川　越	オ	4.37	286	61	108	101	0	0	1880 ⅓	2025	128	766	1301	913	0.517	6.23
10	★右の先発1	ダ	4.42	305	56	127	95	0	0	1865 ⅓	1937	157	738	1266	917	0.572	6.11
11	岡　本	近	4.65	240	41	87	72	1	2	1442	1631	130	601	794	745	0.547	4.96
12	加　藤	オ	4.77	226	45	74	96	0	0	1434	1656	133	560	887	760	0.435	5.57
13	岩　本	日	4.80	318	95	104	118	0	0	1983 ⅓	2064	188	907	1504	1057	0.468	6.82
14	武　藤	ロ	4.82	253	59	88	106	0	0	1627	1674	156	846	914	872	0.454	5.06
15	後　藤	ロ	4.93	230	34	82	102	0	0	1438	1608	150	617	814	788	0.446	5.09

●セーブポイント

順	名前	球団	防御率	試合	完投	勝	敗	S	SP	回数	被安打	被本	与四	奪三振	責	勝率	奪三振率
1	★外国人守護神	ダ	2.61	422	0	28	31	330	358	600	512	19	142	522	174	.475	7.83
1	ウォーレン	ロ	2.23	421	0	35	28	323	358	605 ⅔	491	20	140	560	150	.556	8.32
3	西　崎	西	3.26	424	0	35	39	310	345	615 ⅓	551	45	232	520	223	.473	7.61
4	大　塚	近	2.82	374	0	20	22	308	328	382 ⅓	323	19	108	340	120	.476	8.00
5	ウィン	オ	3.82	328	0	30	42	209	239	393 ⅓	437	27	126	292	167	.417	6.68
6	下　柳	日	3.49	223	0	26	35	130	156	294	297	23	109	234	114	.426	7.16

『ベストプレープロ野球データ作成講座1999～2000』

1999年9月17日　初版　第一刷　発行

STAFF

Publisher　坂本健
Project Manager　大野誠一
Producer　簣河原由朗／成田聖
Project Staff　森思朗／青木充／伊藤由香里
Sales Staff　新保勝則
Editor-in-Chief　市丸博司
Writer　市丸博司
谷川善久
浅田知広
Designer　ジュンアップル
堀明子（レイヤード）
DTP　堀明子（レイヤード）
生田剛（レイヤード）

Special Thanks　株式会社パリティビット
株式会社アスキー

発行所：株式会社メディアファクトリー
〒104-0061　東京都中央区銀座8-4-17

印刷・製本所：凸版印刷株式会社

データ提供　(社)日本野球機構　IBM BIS
参考文献　「1999　ベースボール・レコード・ブック」
ベースボール・マガジン社
「'99　オフィシャル　ベースボール　ガイド」
(社)日本野球機構／共同通信社
「江川卓スカウティングレポート'98」
「江川卓スカウティングレポート'99」
江川卓解説／ザ・マサダ

表紙写真　©アフロフォトエージェンシー

●定価はカバーに表示してあります。
ISBN4-88991-923-6 C0076 1999,
Printed in Japan

●乱丁本・落丁本はお取り替えいたします。

●ゲームの内容に関するご質問についてはお答えできませんのでご了承ください。

ISBN4-88991-923-6

C0076 ¥1700E

定価：本体1700円(税別)

メディアファクトリー

9784889919233

1920076017001

ベスプレはデータをいじらなきゃ面白くない！だから「デー作」

- 99年最新データで松坂が、上原が投げる！
- パラメータ別最新選手ランキング一挙掲載
- アスキー＆パリティビット公認・チーム別最新データ
- こんなにある！ベスプレの遊び方
- 薗部博之氏インタビュー「ベスプレ制作秘話」